遊戯王ＧＸ　†青い４人のアカデミア物語†

赫鎌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遊戯王ＧＸ　†青い４人のアカデミア物語†

【Ｎコード】
Ｎ２４０２Ｎ

【作者名】
赫鎌

【あらすじ】
遊戯王ＧＸの二次創作です。時間軸は原作の2年前から始まります。５Ｄ'ｓのカードは出ると思いますが、シンクロは極力出さない方針で行きます。
ケイ「舞台はデュエルアカデミア。俺はここへオベリスクブルー生として入ったんだが、あいつらと過ごす日々は中々充実している。だがその中で忍び寄る波乱の影……。面白い、俺の暴走を止めてみせろ！」
※キャラ崩壊注意！　あの人やあの人がたびたびおかしくなります

！【初投稿作品です！】

一／入学とすれ違い（前書き）

初投稿です。生温かい目で見守って下さい。
受験勉強の合間に書いているので更新は不定期となります。
あと注意事項を少々。

・若干（？）のキャラ崩壊が含まれています。ご注意下さい。
・文章が不安定です。乱丁落丁がある場合は御指摘下さい。
・作者の妄想が多分に含まれて居ます。汚染にはご注（ｒｙ
・シンクロ・オリカは出しません。エクストラデッキは融合デッキ扱いです。
・アニメ効果・補正が多々ある予定です。『天よりの宝札』がチートです。
・禁止制限は２００４年０３月０１日が時期的に合っていると思ったので（独断で）適応します。

以上を確認の上、問題ない方はＧｏして下さい。

一／入学とすれ違い

『二番！　受験番号二番はいないか！』

……うるさいな。

試験官の大声で、一気に夢の国から呼び起こされてしまった。

しかたなく、観客席から試験官のもとまでいく。

「ここにいますよ。受験番号二番、早乙女ケイです」

「うむ、ではこれからデュエルアカデミア入学実技試験を始める」

「はい、よろしくお願いします」

はあ、眠い。かったるい。でも、将来安心して過ごすにはここを出なければならない。

しかたない、さっさと終わらすか。

「「デュエル！！」」

試験官　ＬＩＦＥ　４０００

ケイ　ＬＩＦＥ　４０００

「私のターンからだ、ドロー」

試験官の先攻か。こういう場合って、普通受験生に先攻渡すものじゃないのか？

……まあ、後攻型だからいいけど。

「私は『ビッグ・シールド・ガードナー』（ＤＥＦ２６００）を守備表示で召喚する！」

でかい盾を持った黒人が現れた。

「さらに私はカードを一枚伏せ、ターンを終了する」

「俺のターンですね、ドロー」

さて、相手は守備系のデッキか。どうしたものかな。

……めんどいな。あの伏せカードが気になるけど、即効で終わらそう。

「俺は『人造人間７号』（ＡＴＫ５００）を攻撃表示で召喚します」

もちろんこのまま攻撃なんてしない。自殺行為にしかならないし。

駒はちゃんと揃えてからじゃないと不安なんだよ。

「魔法カード『機械複製術』を発動します。フィールド上の攻撃力５００以下の機械族モンスターを一体選択して、同名モンスターをデッキから二体まで特殊召喚できます。俺は、『人造人間７号』を二体特殊召喚します」

酸素マスクみたいなものを被った不審者が三体になった。

欲を言えば、もうちょっと欲しいけど仕方ない。

「ほう、一ターンでモンスターを三体召喚したか。しかもそのモンスターは直接攻撃の出来る種類。しかしそれでは私のライフを削りきることはできない！」

わかってるよ。

「装備魔法『団結の力』を発動。自分フィールド上の表側表示モンスター一体につき攻撃力が８００ポイントアップします。俺は最初の『人造人間７号』に装備します」

これで７号の攻撃力は５００に２４００が加わって２９００。合計は３９００。

……もう一押しするか。

「速攻魔法『サイクロン』を発動。フィールド上の魔法・罠カードを一枚破壊します。俺はその伏せカードを破壊します」

「し、しまった！」

伏せられていたのは『聖なるバリアー ミラーフォース ー』だった。

……危なかった。

「更に速攻魔法『リミッター解除』を発動。このターン自分フィールド上の機械族モンスターの攻撃力は倍になります」

ざわ……ざわ……。

ああ、ギャラリーがうるさい。

つまり７号達は一体が５８００、二体が１０００ということになり、なんとなくオーバーキル感がある。

ちなみに『リミッター解除』の効果でターン終了時に破壊されるけど、さほど問題は無い。

「バトルです。『団結の力』を装備した『人造人間７号』を加えた三体でプレイヤーにダイレクトアタック。『トライダイブボンバー』

！」

三体の7号が地面に潜っていった。
どうでもいいけど、三体とも7号ということになんか疑問を覚えるな。

「な、ど、どこから……！　ぐあぁぁ！」ＬＩＦＥ　４０００　↓　３０００　↓　２０００　↓　０

間もなくして、地面からアッパーカットを食らわした。
ああ……一ターンキルになってしまった……。まあいいや、早く終わったし。

「う……し、試験デュエル終了。おめでとう、君の勝利だ」

「ありがとうございます」

試験官へ向かって一礼し、そのまま会場を後にする。周りから好奇の視線が刺さったが、どうせすぐに忘れるだろう。
ああ、やっと終わった。早くホテルに戻ろう。寝たい。流石に徹夜明けは厳しすぎた。

Ｓｉｄｅ：？？？

「亮ー！」

む……喧しいのが戻ってきたな。

「吹雪か。その顔だと勝ったようだな」

「うん。それより、今のデュエル見たかい？」

今の、というと、一ターンキルのか。

「ああ。直接攻撃を駆使してのコンボは見事だった」

「だよねぇ。受験番号も僕らと一つ違いだし、オベリスクブルーかな」

「さあな。ただ……」

「ただ？」

「あの顔は、まだ本気じゃなかったな」

どちらかと言えば、寝起きで本調子で無い時、といった感じか。

「ははっ！　そりゃあ面白い！」

「ああ、全くだ」

俺も吹雪も無事試験を突破できた。藤原も出来たといってたな。

「早くこい翔。ここでは学ぶものに困らん」

一／入学とすれ違い（後書き）

ケイ「早速グダグダな文が頭角を表したな」

ううう……返す言葉も無い……

ケイ「それよりあいつらは誰だ。亮に吹雪に藤原だったか？」

それは次の話で……

ケイ「駄作者め」

理不尽な罵倒！？　どうしてこんな子に育ってしまったんだ……

ケイ「黙ってろ。それより次回はあいつらと合流する。一人賑やかな奴がいるが……ふむ、中々楽しめそうだな」

俺様街道を爆進するケイをどうぞよろしく！

「次回『遭遇と初日』。俺は止まらぬ、どこまでも暴走するだけだ！」

ニ／遭遇と初日　カイザーとダークネスと頭の残念な物質α（前書き）

夏休み中なので可能な限りアップしたいと思います。
ただ休みが明けたら更新速度はガクッと下がりますけど……。

ニ／遭遇と初日　カイザーとダークネスと頭の残念な物質α

「広すぎだろ」

俺はオベリスクブルー寮の個人部屋に来ている。
ここデュエルアカデミアでは、成績ごとに寮が分けられている。
成績優秀者と女子はオベリスクブルーへ。
成績優秀だが高等部からの編入はラーイエロー。
そして成績の悪いものはオシリスレッドへ入れられる。
他の寮の事は詳しくは知らないが、世話になるオベリスクブルー寮だけは調べておいた。
そして、最初の発言に戻る。

「３０インチテレビにキングサイズベッド。個人パソコンにソファーに備え付けトイレ……」

どこのホテルだよ。いや、ホテルでもここまで豪華な設備にはならない。げに恐ろしきは海馬コーポレーションの財力といったところか。

コンコン

ん？　誰か来たのか？

「はい。どちらさん？」

そこには切れ長の目をした、俺より頭半個高い濃緑の髪のオベリス

クブルー生がいた。

「君が早乙女ケイか」

「ああ、そうだが」

「俺は丸藤亮だ。ここの隣の部屋に入ることになったから、その挨拶だ」

随分丁寧だな。

「ああ、よろしく丸藤」

「なに、亮で構わない」

ほう、中々フレンドリーだな。

「そうか、ところで亮」

「む？」

「お前の後ろに張り付いている奴はなんなんだ？」

さっきから茶髪が出たり引っ込んだりを繰り返している。

それにしても気付かなかったのかこいつ。

「……吹雪、何をしている」

「チガウヨ？　別ニ亮ガ自分カラ人ニ関ワルノガ珍シクテツイテ来タンジャナイヨ？」

……。

「亮。この頭の残念な物質αはなんなんだ？」

「人間扱いすらされない！？」

「俺も知らないな」

「君もか！？」

この男、突っ込み属性か？

「コホン、えー改めてケイ、僕は天上院吹雪だ。気軽にブッキーと呼んでくれ！」

「ああ。よろしくな吹雪」

「スルーか！？」

やっぱり突っ込み属性のようだ。

「吹雪、お前は向かいだったな」

「うん。荷物もあらかた整理し終わったからね。暇だから女子寮まで行こうと」

「亮、ロープはあったかな？」

「冗談です」

犯罪者予備軍め。要注意人物として記憶しておこう。

「歓迎会まで時間があるな」

「んーそうだね。どうしようか」

大体夕食時に新歓がある。ということはあと四時間ほどか。

「寄ってくか？　遊び道具なら大量にある」

「そうだな、邪魔させて貰う」

「僕もお邪魔するよ」

「ツモだ。　一気通貫・清一色か？」

「……なんで初めての奴が九連宝燈なんてだせるんだ！」

「神は僕らを見放したのかあ！？」

「……君たち何やってんのさ」

現在俺たちは時間が空いたということで麻雀をやっている。

何故麻雀かというと、

『チェスはどうだ？』

『僕勝った事無いよ』

『オセロは？』
『何故か最後まで打つことなく終わるんだが』
『……碁は？』
『ルール知らない』
『将棋は！？　将棋ならどうだ！』
『そもそも三人でできないな』
という紆余曲折を経て、三人でもできる麻雀となった。
ちなみにこの時吹雪が、
『麻雀出来る奴なら一人知ってるよ』
という一言により、急遽藤原優介が参戦。現在四人で卓を囲んでいたのだが。

「なんでそんな綺麗に牌が揃うんだ！　ありえん！　ありえんぞ！」

「ビギナーズラックじゃないの？」

「優介……それで納得できないから悔しいんじゃないかあああー！」

「いや……なんとなく揃いそうだったから揃えただけなんだが」

ちなみに結果は、
一位：亮
二位：俺
三位：優介
四位：吹雪
となった。

「く……得意の東風戦で三万点差で負けるとは……」

「ケイはまだいいよ……僕なんてハコにされたんだからさ……」

「……君たち、もう行くよ」

「というか、何故デュエルしなかったんだ？」

言ってはいけない。言ってはいけないのだよ亮。
いつまで悲観していても仕方が無いので、いい加減立ち直ろう。
そしてそろそろ新歓の時間である。

「そういえば今年は女子と合同だって噂が」

「広い宇宙の一数あるひとつー♪」

立ち直り早いな。
先程まで鬱状態にあった姿は既に無く、新しい出会いを求めている男の顔がそこにはあった。
しかし優介。一つ聞きたい。
俺は吹雪がどんどん先へ行くのを尻目に問いかける。

「そんな話あったか？」

「嘘」

この後絶望のふちに立たされたような顔をした吹雪がいたようないなかったような。

ちなみに二分後には既にいなかった。抜け出したな。

ニ／遭遇と初日　カイザーとダークネスと頭の残念な物質α（後書き）

ケイ「また短いな」

大丈夫！　後から長くなるから！

ケイ「読者がついてこないだろ。そもそもこんな駄文に読者がいるのかすら怪しいが」

グサッ！　そ、それより！　なんで初日から麻雀してるんだよ！

ケイ「趣味だ！」

言い切った！？　デュエルしろよ！

ケイ「全く。さっさと次回予告をしろ駄作者が」

……どうしてこうなったんだろう……。

ケイ「知るか。さて次回だがようやく講義が始まる。午後は時間が余るからそれを使って何かをやりだすようだ」

次回『講義と探索』。次はあの原作キャラが登場です！

三／講義と探索　寮内の設備に関心のある生徒は結構少ない（前書き）

宣言通りちょっと長くなりました！　そして今回もデュエルはしません！

ケイ「こちら、石をどうぞ」

あ、やめっ、投げないで、ごめんなさい！
ってコラァケイ！　何石配ってんだ！

ケイ「遊戯王の話でデュエル無しとかアホか貴様。数話に一回というならまだしもその一回が逆ではないか」

うるへい！　あれ考えるのすっげえ頭使うの！

ケイ「他の作者を見習え！」

……いや、その、さ？　人には得手不得手というものが……

ケイ「その理屈でいくとこの小説は貴様にとって不得手ではないのか？　何故始めた？　なあ？」

う゛う゛う゛……ええい！　本編どうぞ！

ケイ「チッ……逃げ足だけは速い奴だ……」

三／講義と探索　寮内の設備に関心のある生徒は結構少ない

「さて、早速授業か」

ここはアカデミアの教室。内装は一般的な大学の講堂のように、段々畑風に席がある。

大抵の授業では使わないが、稀に黒板の代わりの大型モニターを使う授業もあるらしい。

あと、席は決まっていて、それぞれにネームプレートが貼られている。

俺、亮、吹雪、優介は上下での隣同士になっている。ちなみに俺から見て、亮が前、吹雪は隣、優介は吹雪の前となっている。

パンパン！

前のほうで手を鳴らしたような音がした。どうやら教諭がきたようだ。

「えー、私ーガ、今日の授業を受け待つことになりまシータ、クロノス・デ・メディチなノーネ」

金髪のおかっぱ、紫唇に、独特なイントネーションの言葉使い。

聞いたことがある。オベリスク鼠扉のアカデミア教頭、クロノス教諭。まさか……、

ここまで気持ち悪いとは。

「え～デハ、初日ということなノーデ、簡単に年間の授業予定を教えておくノーネ。ちゃんと予習しておくヨーニ」

「予習ね～……」

どうしたんだ吹雪。

「いや、なんか予習復習って聞くと鳥肌が……」

中学生かお前は。

「つい最近までそうだったからねぇ」

そういえば、俺たちブルーってことは全員中等部からってことか。

「そうだね。まあこの授業はデュエルのことだし、余り予習しなくても大丈夫かな……」

「足元を掬われないようにな」

「亮、それはどういうことかな？」

全く。

「あーーー、づがれだー！」

初日から何を言っていやがる。そして吹雪、何故ここにいる。
ここは確か俺の部屋だったはずだが。

「気にしない気にしない」

はぁ。なんだかなあ。

「あ、そーいえばさ、まだこの寮のことあんま知らないんだよね」

「そーいやそうだな」

初日から麻雀やっていたしな。
その言葉の後に、吹雪の目が輝いたことに気がついたときは、既に遅かった。

「というわけで、『ブルー寮探検隊』～！　ドンドンパフパフ～♪」

「可及的速やかに詳細を５０字以内にまとめて二人に説明しろ」

何故か吹雪の思いつきで始まったブルー寮探検。そしてその犠牲者が早くも二人現れた。ロープにグルグル巻き状態で。
ちなみにそれぞれの証言は、

『部屋で予習していたハズなんだが』

『パソコンで調べ物をしていたら……』

というもの。

オイコラ吹雪。拉致してんじゃねえ。

「はい、周りの意見は無視します！」

「ペンチはどこだ？」

「ごめんなさい！」

全く、初めから素直に説明しておけばいいものを。

とりあえず二人の拘束は解いておく。あ、畜生、無駄にきつい縛り方しやがって。

「（かくかくしかじか）……というわけなんだ」

「まあ確かに俺たちも知らないところあるからね」

「うむ、丁度いい機会だな」

思いのほか好印象。何故だ。

「はい！　では賛同も得られたところで、まずは一階から！」

テンションがやたらと高いな。絶対トラブルメーカー系だ。

そうしている内になんだかんだで一階へ到着した。

「まずはここだね。『ブルー寮大食堂』」（吹）

「改めて見るとでかいな」（亮）

「歓迎会はここでやったんだよね」（優）

「毎日バイキング形式だし、偏食の生徒が多いようだぞ」（俺）

でかいホール状の食堂が、ブルー自慢の大食堂である。
歓迎会など行事の際はテーブルを端にやり大人数が立食できるようになる。
個人的にはここのカレーは色々種類があって美味い。

「えー続きまして『専用デュエルステージ』！」

「アカデミア本校舎の中にもこれより大きいものがあったな」

「利用する生徒も多いらしくて、順番待ちになるときもあるらしいよ」

「ただ上級生がうるさいんだよな」

使っているとたまに上級生が来て後輩を軽く脅してくる。しかもエリート意識が強いオベリスクだけあって態度がでかい。
そしてもちろんオベリスクブルーのレリーフが掘ってある。寮内にあるんだから別に掘る必要はないのではなかろうか。

「そして『生徒の個人宿泊部屋』！！」

「今更確認するまでもないんじゃないか？」

「基本的にどの部屋もいっしょだしね」

「あの設備を用意する資金はどこからでてるんだ……？」

広さは大体１８畳くらい（当社設定）。

なお吹雪の情報によると女子寮も似たようなものらしい。

「大体こんなものかな？」

「あまり見るものも無かったな」

正直いつも見てるもんばっかだったな。

「別段目新しいものは……ん？」

「どうした藤原」

亮、また藤原なんて呼んで。いい加減下の名前で呼んでもいいと思うんだが。

それはさておき、優介がなにか見つけたようだ。

「いや……何かダンボールとかで隠れているんだけど」

そう言って指差すのは角にある突き当たり。ダンボールや木箱が積み上げられているが、なにやら扉のようなものが見える。

「あれだけ積み重なってるんだから、使われてないんじゃない？女子寮に繋がっているなら、話は別だけどね」

吹雪、お前ちょっと黙れ。

「ある～はれ～た日～のこと～まほーいじょーのゆーかいが～、と」

風呂にも入りある程度予習も終わった。後は寝るだけとなった今は夜中の１０時である。

喉が渇いたので一階のロビー横にある自販機に来ていた。

「寝る前にコーヒーは無いよな……む？」

ガタガタと物音がするほうへ顔を向けると、そこにはなにやら怪しい影があった。

ただ、その影の後姿には凄く見覚えがあったが。

「……」

ピ、ピピピ、ピピ

ＰＤＡ―（アカデミアから支給された携帯端末）をいじり、ある人物のアドレスに電話をかける。

ピピピピ！　ピピピピ！

「うわああ！？」

……ビンゴ。

見事に的中した。

「なにしてんだ優介」

「うお！？　な、なんだケイか……驚かさないでよ」

それは失敬。

しかしこの男、こんなダンボールしかないようなところで何をして……。

「……スネーキングミッションか？」

「いや違うから」

冷静な突っ込みが返って来た。なんだ違うのか。

「……この扉から、なにか不思議な匂いがしてくるんだよ」

犬かお前は。

「どれ」

不思議な、と言われて俺も嗅いでみる。するとどこか鼻をつくような、どこかで嗅いだことのあるような匂いがした。

「刺激臭……ぽい？」

「やっぱりそう思うかい？」

ああ。しかもそれに加えて、

「なんか湿っぽくないか？」

ドアの隙間の部分や床を見てみると、結露している部分があった。
現在の気温は暖かくは無いが、そこまで寒いというほどでもない。
ただ薄着で寝るには少し肌寒い、といったところか。
当然昼間との気温差もそこまであるわけでもなく、こんなところに結露が出来ているのはおかしい。
となれば、ここには湿気が溜まっているのか？

「開けてみよう……と言いたいところなんだけど、鍵がかかっているんだよ」

優介が二、三度ドアノブをガチャガチャと回す。しかし扉は開く気配は無く、強固に閉じたままだった。
しかもドアノブに鍵穴がない。これはどういうことだ？

「右の額縁の裏を見てみな」

言われた通りに、無造作に掛けられている絵の裏を見る。
すると何故かナンバー入力ボードが埃を被っていた。

「うーん、どうやら数字を入力してロックを外すタイプみたいだね」

そう、大抵このタイプのものは決まったロックナンバーを入力したら扉が開く仕組みのものが多い。

ただ問題なのは、その数字を知らない、といったところだ。

「お、この額縁の裏って外れるよ？」

「なに？」

大急ぎで吹雪から絵を奪い取り裏を叩いたり押したり引いたりしてみる。すると、「パコッ」という音とともに板が外れ、中から一枚のカードが出てきた。

「これは……『ゲート・キーパー』？」

星5、機械族闇属性の通常モンスターカードがなんでこんなところに入っていたんだ？　門番（ゲートキーパー）だからか？　さすがデュエルアカデミア。こんなところでもマジック&ウィザーズへのリスペクトを忘れないとは。

しかしこのカードはなんなんだ？　こんなとこに入っていたのだって、誰かが忘れたわけでもあるまい。

……となれば、答えは二つ。

「吹雪、優介。ロックナンバーは何桁だ？」

「えーと……八桁だね」

「数字で八桁だ」

なるほど、八桁の数字ね……。

これで確定した。答えはこれだったのか。

「二人とも、このカードを見てくれ」

そう言って二人に『ゲート・キーパー』のカードを見せる。案の定、二人は意味がわからないといった風貌だったが。

「暗証番号は八桁の数字。それに覆いかぶさるように掛けられていた絵の中にはこのカード。そしてこのカードには八桁の数が書かれている」

「！　そうか！」

「え、なに？」

優介はわかったようだな。そして吹雪、お前はもう少し頭を捻ることを覚えろ。

「そう、答えは『ゲート・キーパー』に書かれているこのカード識別番号を入力すると！」

おもむろにキーパネルに手をかけ、記されている識別番号『１９７３７３２０』を入力する。
俺の推理が正しければ当然扉は、

ピッピッピピピピッピピ

ウィィィン……ガシャン

「扉が……」

「開いた……」

「これが全ての真相……謎は全て解けた！」

ふ、自分の頭脳が恐ろしい……。

「……でも冷静に考えれば、別に謎でもなんでもないよね」

「優介、それいっちゃあロマンがないよ～」

二人は全力で無視しよう。

まあ謎が全て解けたわけだ。この先にあるものが優介の疑問に思っていた……。

ん？

「ん？」

違和感があるな。

優介が扉の前に居て、変な匂いがして、額縁の裏にロックキーがあって、吹雪が額縁の裏が外れるとか……。

「「なんで一お前（吹雪）がいるんだ！？」」

「勘さ！」

ピカーンと歯を光らせる吹雪。思わず頭を引っぱたいてしまったことは後悔していない。

三／講義と探索　寮内の設備に関心のある生徒は結構少ない（後書き）

ケイ「わかりやすい伏線だな。最早伏線と呼べるのかすら怪しいが」

うっさーい！　出番減らすぞ！

ケイ「構わん。俺はその間■■と甘い一時を過ごしている」

ネタバレ禁止ぃー！　それ言っちゃダメェー！！

ケイ「ふん。ネタバレされたくなければさっさと更新しろ。そしてデュエルシーンを書け」

う……だ、大丈夫さ！　次回はデュエルさせるから！

ケイ「……はあ。まあいい。次回はなんだ」

よぉくぞ聞いてくれましたあ！　ようやく始まる二回目のデュエル。そこには様々な罠が「仕掛けられているはずが無いがな」ちょっ。……まあいいや。

次回、『効能と衝動』。いざ、デュエル！

ケイ「駄作者を見捨てずにいてくれている方に、多大なる感謝を」

四／効能と衝動　まったりとしよう（前書き）

ケイ「緩いタイトルだな……」

まあ内容が内容だからね

ケイ「本当にデュエルするのか？」

もちろん！　完璧さ！

ケイ「しかしまあ……また長くなったもんだ」

デュエルが入るとどうもねえ……でも二話に分けたくない

ケイ「まあいい。では、本文へどうぞ」

※表示形式はカード名の後に書いてある『ＡＴＫ』『ＤＥＦ』で攻守を判別します。御了承下さい。

四／効能と衝動　まったりとしよう

「もー痛いじゃないか」

「喧しい。いるならいると声を掛けろ」

扉が開き、その先へと歩を進めている。通路はやけに生暖かく、至る所に水滴が張り付いていた。

「ブルー寮に、こんな道があったなんて……」

「寮監のクロノス先生からも何も言われなかったし、忘れられてたんだろうね」

埃の量や荷物の積み具合から察するに、ここ一年以上は使われていないことは明らか。もしかしたらそれ以上前からなのかもしれないが、それだけ長い時間使われていないのなら話に出されないのも納得がいく。

しばらく歩いていると、入口でみたのと同じドアが見えた。但し今度は様子が違う。

何故かそのドアは”既に開いていた”。

ドアの先は真っ白で、靄のように揺らいでいた。いや、この熱気や湿気を考えると、本当に靄のようだ。

その靄を三人で進み、やがて優介の感じていた匂いのもとが現れる。それはどこまでも白く濁っていて、しかし汚濁しているようには感じず、熱せられたそれからは独特の臭気と共に白い靄が立ち上っていた。

そう、これは――――、

「「「温泉？」」」

温泉だった。

目が靄に慣れて辺りが見渡せるようになり、一つの看板を見つけた。

そこにはこう書かれていた。

『デュエルアカデミアの秘湯・青眼の白湯（ブルーアイズ・ホワイトスパ）！　一度入れば虜になる快楽は、アナタのハートに爆裂疾風弾（バーストストリーム）☆

※この温泉は硫黄が多分に含まれており、『肩こり・腰痛・二日酔い・眼精疲労・ドロー力・勝負強さ』に効果があります』

……つまりなんだ、あの結露は温泉の湯気でできたもので、入口まであったのはドアが開きっぱなしであそこまで届いたからで、不思議な匂いは硫黄独特の刺激臭だったと……。

なんというか、まあ……。

「とりあえず、亮も誘って入らない？」

……それがいいな。

俺はその言葉で思考を放棄し、亮を呼ぶ為もとい着替えなどを用意するために寮へ戻るのだった。

「まさかこんな場所があったとはな」

ああ、全くだ。
独特の鼻を突く匂いも余所に、成分らしき弱アルカリ性の湯が肌を滑らかにしていく。
自然式の湯は常に新しく、源泉ならではの心地よさが全身に染み渡る。
さすがに湧き出し部分の付近は熱いが、今入っているところは丁度いい湯加減である。

「効能は怪しいが、湯は上質だな」

「いや～……五臓六腑に染み渡るよ～……これで女の子が居てくれたらねぇ」

「親父臭い。にしても、露天風呂ってのもたまにはいいね」

三人の評価も上々である。
……しかし気が緩くなるな。力が抜けていく……。
（※ケイが恍惚としているので以降音声のみでお楽しみ下さい）

「それにしても、何で誰も知らなかったんだろ？　こんなにいい所なのに」

「聞いた話だと熊が出たらしいね。尤も、一年以上前だけど」

「え、それって不味くない？　出ない？　出ないよね？」

「問題ない。出たところで鼻の頭を叩けば怯む」

「その間に逃げれば助かるだろうな」

「何君たち戦うつもりなの？　どこまでバトルジャンキーなの？」

「俺はどんな奴が相手だろうと、常にリスペクトする」

「喧嘩は怯んだほうが負けだ。そこに熊も人もない」

「やめときなって。怪我しても知らないぞ」

「冗談だ」

「半分はな」

「え？　残りの半分は？」

「ところで亮」

「スルー？　そこでスルーなの？」

「ここの効能に『ドロー力・勝負強さ』というものがあるんだが」

「気付いていたか。流石だな」

「いいよいいよ。僕には優介がいるもん。なあ優ｓ――」

「ごめん吹雪。俺にそっちの気はないから」

「ちがーう！　僕だって男に興味などない！」

「そろそろいい感じに温まってきた頃だ。一つ試してみないか？」

「いいだろう。俺もデッキ調整を済ませたばかりだ」

「ねえ優介。やっぱりこいつら戦闘狂（バトルジャンキー）だよ」

「ほっときな。一回デュエルすれば落ち着くだろ」

やはりまだ少し肌寒いな。秋だから仕方ないが。

さて、相手は筆記試験一番だと聞く。俺の力がどこまで通用するかな。

「全力でいくぞケイ。お前の本気を見せてみろ」

「望むところだ亮。俺の暴走を止めてみせろ！」

「「デュエル！！」」

亮　ＬＩＦＥ　４０００

ケイ　ＬＩＦＥ　４０００

「先攻はもらう。ドロー！　俺は『マジック・ストライカー』（ＡＴＫ６００）を召喚！　カードを二枚伏せてターンエンドだ！」

「俺のターン、ドロー！　俺は手札から『サイバー・ドラゴン』（ＡＴＫ２１００）を特殊召喚する！」

『ガアアァァ！』

「攻撃力２１００を特殊召喚だと！？」

「『サイバー・ドラゴン』は相手の場にモンスターが存在し、自分の場にモンスターが存在しない場合、手札から特殊召喚することができる。さらに『融合呪印生物－光』（ＡＴＫ１０００）を召喚。そして『融合呪印生物－光』の効果を発動！　このカードと『サイバー・ドラゴン』を墓地に送り、現れろ！　『サイバー・ツイン・ドラゴン』！！」

『『グオオォォ！！』』

双頭の機械竜が、堂々とその姿を現した。

……これはまずいな。

『マジック・ストライカー』の効果は相手の戦闘ダメージを一度だけ０にする効果。ただの攻撃力が高いだけのモンスターだったらこのターンは凌げただろう。しかし――。

「『サイバー・ツイン・ドラゴン』の攻撃！　『エヴォリューション・バースト』！！」

サイバー・ツインの口から熱線が照射され、寸分違わず俺のモンスターを打ち抜いた。

「『マジック・ストライカー』の効果を発動だ。この戦闘によるダメージを０にする」

しかし、サイバー・ツインの攻撃はこれだけではない。

「『サイバー・ツイン・ドラゴン』の効果発動！　このカードは二

度戦闘を行うことが出来る！　行けサイバー・ツイン！　プレイヤーにダイレクトアタック！　『ツイン・エヴォリューション・バースト』！！」

やっぱりか！

再び機械竜の口が二つ開き、熱線が二重の螺旋となって向かってくる。

「ぬぐおおぉ！！」ＬＩＦＥ４０００　↓　１２００

熱っ！　熱い！　ソリッドビジョンなのにリアルに熱さが伝わってくる！

「俺はカードを一枚伏せて、ターンエンドだ」

「ぐぅ……早速効いてきたんじゃないのか？」

「みたいだな。今日はいつもより引きがいい」

「ふむ、怖いな。俺も負けてられないか、ドロー！」

さて、現状の確認しよう。

亮の場にはサイバー・ツインが一体、さらに伏せカードが一枚。恐らくはモンスターを強化・支援するカードだと思う。

対するこちらはモンスター無し。伏せが二枚。さらにライフは１２００と大分きつい。

しかし、この手札ならまだ持ち返せる！

「俺は『逆巻く炎の精霊』（ＡＴＫ１００）を召喚する！」

『キャッホーイ！』

魔女の三角帽子を被った幼い魔女？　精霊？　が現れた。

「そのカードは入学試験では出なかったな」

「当然だな。あの程度の相手ならあの手で十分対処できる」

無論、目の前のお前はそうはいかない。全力で行かせてもらおう。

「さらに俺は装備魔法『進化する人類』を炎の精霊に装備！　自分のライフが相手より少ない場合、装備モンスターの元々の攻撃力は２４００になる！（ＡＴＫ１００　↓　２４００）」

装備した瞬間、炎の精霊の体に変化が起きた。といっても別に角が生えたりそういったことは無い。成長したのだ、幼女魔女から立派な大人魔女に。

「炎の精霊は相手プレイヤーに直接攻撃することが出来る。『逆巻く炎の精霊』の攻撃！　『エレメンタルファイア』！！」

『ハアアァァ！！』

「ぬうぅっ！」ＬＩＦＥ４０００　↓　１６００

精霊の持つ杖の先から、膨大な炎が亮を襲った。しかしこれは本当にソリッドビジョンなのか？　本物の炎のようにしか見えないぞ？

「『逆巻く炎の精霊』は直接攻撃に成功したとき、攻撃力が１０００ポイントアップする―（２４００　↓　３４００）。　ターンエ

ンドだ」

「いやー凄いね。亮のライフを削っちゃったよ」

「ライフアドバンテージはまだ亮にあるけど、モンスターはケイの方が有利か」

「いやいやわからないよ？　ここから巻き返すのが亮だからね。僕も何度逆転されたことか……」

Ｓｉｄｅ：亮

「俺のターン、ドロー！」

『逆巻く炎の精霊』……なるほど、確かに厄介だ。
元々の攻撃力こそ高くないが、直接攻撃が成功するたびに攻撃力の上がるその効果。数あるロックカードの穴をもすり抜けることが出来るだろう。しかも装備カードを破壊されたとしても攻撃力は上がったまま。見事なコンボ、いやシナジーと言えよう。
しかし、いかなる組み合わせにも必ず穴は存在する。俺の手札にはその穴となるカードが存在している。だが奴も筆記試験二位でオベリスクブルーに入った猛者。この程度の弱点には既に気付いているだろう。
ならば、俺はその先を行く！

「俺は手札から魔法カード『手札断札』を発動！　互いのプレイヤーは手札を二枚捨て、デッキからカードを二枚ドローする。俺はカードを二枚伏せ、ターン終了だ」

これで俺の伏せカードは三枚。迂闊には攻撃できないはずだが……奴は必ずくる。

「俺のターン、ドロー！　俺は『逆巻く炎の精霊』でプレイヤーに直接攻撃をする！　これで終いだ！　『エレメンタルファイア』！！」

やはりな。しかし、いや当然か。

「失念したなケイ」

「なに？」

「今のフィールドの並びを見てみろ」

当然の如く怪訝な顔をする。無理も無い。普通デュエルしているときは、余りカードの置き位置には関心を示さないものだ。しかし、今回ばかりはそれが仇となったな。

「今フィールド上にはお前の『進化する人類』、『逆巻く炎の精霊』、俺の『サイバー・ツイン・ドラゴン』、伏せカードが一列に並んでいる」

「……！　ああ、今理解したよ。デュエルモンスターズには基本的にどこにカードを置こうと有利・不利になることは無い。だが、一部のカードはこの置き位置によって絶大な効力を得る」

「そうだ。そして俺は今、このカードを使う！　罠発動、『爆導索』！！　このカードがセットされた自分・相手フィールド上の縦列全

てにカードが存在する場合にのみ発動可能。それらのカードを全て破壊する！！」

サイバー・ツインに無数の爆竹のようなものが巻かれ、そして一気に爆発した。

……すまない、サイバー・ツイン。

「……まったくやられたな。普通使わないだろそんなカード」

「なに、お前の裏をかくにはこれ位突飛な発想が無いと無理だろう？」

「買いかぶり過ぎだ。まあ、それでも俺の暴走は止まらないがな！　罠発動、『リミット・リバース』！　墓地から攻撃力１０００以下のモンスターを攻撃表示で特殊召喚する！　俺は、『マジック・ストライカー』を特殊召喚し、そのままダイレクトアタック！　『マジック・ハンマー』！！」

「無駄だ！　罠発動！　『強制終了』！　このカード以外の自分フィールド上のカード一枚を墓地に送り、このターンのバトルを終了させる！　さらにチェーンして罠カード『無謀な欲張り』を発動！　カードを二枚ドローして、ドローフェイズを二回スキップする！」

見えない障壁により『マジック・ストライカー』の攻撃は阻まれ、戻っていった。

「ちっ、通ると思ったんだがな。俺はこのままターンエンドだ」

「俺のターン！　俺は手札から『強欲な壺』を発動。カードを二枚ドローする」

……！　このカードは！

「……ケイ、俺の手札は四枚。このターン全てを使い決めさせてもらう。俺は魔法カード『死者蘇生』を発動！　墓地に存在する『プロト・サイバー・ドラゴン』を特殊召喚する！」

『ガアアァァ！！』

「……さっきの『手札断札』で墓地に捨てたのか。用意周到なこった」

「そしてこの瞬間！　手札から速攻魔法『地獄の暴走召喚』を発動！　相手フィールド上にモンスターが存在し、自分が攻撃力１５００以下のモンスターの特殊召喚に成功したときに発動可能！　相手はモンスターを一体選びそのモンスターを同名カードを、自分は特殊召喚したモンスターと同名のカードを手札・デッキ・墓地から全て特殊召喚する！」

「俺は『マジック・ストライカー』をデッキから二体特殊召喚するぜ」

「俺はデッキ・墓地から『サイバー・ドラゴン』を三体特殊召喚する！」

「なに！？　そいつは『プロト・サイバー・ドラゴン』だろう？　なんで『サイバー・ドラゴン』が召喚されるんだ！」

「『プロト・サイバー・ドラゴン』はフィールド上に存在する時、カード名は『サイバー・ドラゴン』として扱われる。そして俺は魔

法カード『パワー・ボンド』を発動！　フィールド上の『サイバー・ドラゴン』二体を墓地に送り、再び姿を現せ！　『サイバー・ツイン・ドラゴン』！！」

再び鈍色の機械竜が、俺のフィールドへ姿を現した。しかし、今回は一度目と違い、それ以上の迫力がある。

「『パワー・ボンド』の効果で融合召喚したモンスターは攻撃力が二倍される。よって『サイバー・ツイン・ドラゴン』の攻撃力は５６００！！　行け俺のサイバーたちよ！　敵の全モンスターを攻撃！　『エヴォリューション・フルバーストオォ』！！」

「させるかあああ！　罠発動！　『サンダー・ブレイク』！　手札を一枚捨て、『サイバー・ツイン・ドラゴン』を破壊する！！」

「言ったはずだ！　このターン、全てを使い決めさせてもらうと！　速攻魔法『融合解除』発動！　サイバー・ツインの融合を解き、『サイバー・ドラゴン』を二体特殊召喚する！　これが本当の最後だ！　『エヴォリューション・バアアァァストオオォォ！！！』」

『マジック・ストライカー』が次々と破壊されていく。そして三体目を破壊したところでケイのフィールドはがら空きになり――、

「ぐあああああ！！！」ＬＩＦＥ１２００　→　０

「……俺の勝ちだ。ケイ」

「……すまない、少々興奮しすぎた」

デュエルの後、衝撃に吹っ飛ばされて泥まみれになってしまった俺は再び温泉へ入っている。ちなみに三人も一緒にいる。

「勝てると思ったんだがな。まさか『爆導索』を使ってる奴がいるなんて思ってなかった」

「初代決闘王の武藤遊戯も最弱のモンスター『クリボー』を使ってたと聞く。そこまで不思議ではないだろう」

「まあそうだが……」

どうも納得いかない。あのカードは最初から伏せられていたはずだし、使うつもりならその列にサイバー・ツインを置く必要は無かったようにも感じられる。

「俺がサイバー・ツインを置いていたのは、ただのプレイングミスだ。俺もまだ未熟ということだな」

「……お前、読心術でも持ってるのか？」

「いや、なんとなくそんなことを考えているだろうと思ったからだ」

……こういった読みの鋭さが、デュエルの強さに繋がるのだろうか。非常に謎だ。

まあ負けは負けだ。今日のところはゆっくりと湯に浸かって、明日からまた頑張ろう。
すると……。

「ンンン～!?　これはどういうことなノーネ?　どしてユー達がいるーノ?」

独特な喋り方のお陰で誰だかすぐにわかった。
シャンプーやら石鹸やらが入った桶を片手にタオルを肩にかけた、所謂『銭湯スタイル』で登場したクロノス教諭。ちなみに傍には定年間近のデュエルアカデミア最年長教諭の田中康彦教諭（通称：長老）が同様のスタイルで着いてきていた。

「く、クロノス教諭!?　どうしてこんな所へ……!?」

「そ、それは私のセリフなノーネ!　アカデミアでも一部の者しか知らない秘湯へそうしてユー達が、しかもこんな時間にいるでスーカ?」

優介が大分焦りながら状況の提示を求めているが、クロノス教諭は逆にこちらのことを問いただしてくる。
それにしても秘湯か。道理で誰も知らないはずだ。そして先生達が来たということは、この温泉のことを知っていたということか。
しかしまあ、そろそろ優介も手詰まりか。クロノス教諭は思いのほか鋭いところをついてくるものだから、そろそろ助け舟でも出してやろう。

「まあ待ってくださいよクロノス教諭。俺達はこの湯のことを校長が漏らしていたのたまたま聞いただけですよ」

「ヌ、鮫島校長がなノーネ？」

合わせろ吹雪。アイコンタクトで接触を図ってみるが、伝わるか。

「……そうですよ先生。この湯がデュエルに良いって言ってたものですから、ブルー生徒として強くなりたいと思いまして」

軽く頷いた後、上手い具合に話を捏造してくれた。ついでに『ブルー生徒』という部分も付け加えたことによって、クロノス教諭が強く反論できないようにもしてくれた。

恐らくこれでこっちは大丈夫だろう。後は長老こと田中教諭だが……正直よく知らないのでどうしようもない。さて、でおうするか……。

「ムムム……。し、しかしやはりこんな時間に生徒だけで来るなンーテ……」

「まあまあクロノス先生。多めに見てあげましょう」

む？　長老がクロノス教諭を諭し始めた。

「年老いてしまうと、どうも体が言うことをきかなくなります。多少腕白でも、若い時には体を動かしたほうが良い。それに彼らは強くなりたいと思い来たのです。ですから、今回は見逃して上げませんかね？」

……正直な話、長老がここまで説いてくれるのは誤算だった。しかし上手い具合に話が纏まってきたし、ここで一気に収集をつければ問題ないだろう。今度は亮にコンタクトを取り、言ってもらうよう仕向ける。この中では最も成績が良く、尚且つクロノス教諭からの

信頼も入学初日から厚い亮ならば難癖も付けられるまい。
まあ後味が悪いのは嫌なので、優介にも一仕事してもらおう。

「田中教諭、クロノス教諭。俺達が門限を破りここまで来てしまったのは事実です。お見逃し頂けるならば、今後しないことを誓いましょう」

「え？あ、あ～……ん、ンン！　では今後は門限を守り、節度ある生活を送るようニ。それで今回は帰ってよろしいノネ」

「あ、ありがとうございます。おやすみなさい」

優介の一言で締めくくり、脱衣所へと向かう。
……何とか脱出できたな。
この後各自部屋へと戻り、湯冷めしない内に床に着いた。もちろん、あの扉のことは誰にも言わず、誰も言わずに。

おまけ

「イヤ～田中先生も良い場所を知っておられるノ～ネ」

「ほっほっほ、長年アカデミアの教師をしていれば色んなことがわかりますよ。さあどうぞ一杯」

「あコリャどうも。……ン～！　露天風呂で飲むお銚子はまた格別でス～ノ！」

「そうでしょうそうでしょう。しかしクロノス先生も良い生徒を持たれましたね」

「ええ、あの子達ーハ、私の自慢の生徒でスーノ。成績優秀、実技も常に上位。まさに入るべくして入った、オベリスクブルーの精鋭でスーノ！」

「そうですか……。しかし、他の生徒はどうなんでしょうか。例えば、オシリスレッドの子とかは……」

「ン？　オシリスレッドの生徒は総じてドロップアウトボーイなノーネ。伸びる余地も無い、まさに彼らとは対照的でスーノ！」

「そうでしょうか……私はとてもそうは思えませんが……」

「田中先生は難しく考えすぎなノーネ！　先生も一杯いくノーネ、ササッ」

「ふむ……そうですね、では一杯頂きましょうか」

ガサガサッ

「ンンッ？　そこに誰かいまスーノ？」

「変ですねえ、この時間なら人はいないと思っていたんですが」

ガサガサッガササ

「ウキッ」

「……おや、猿ですね」

「猿なノーネ」

「温泉の匂いに誘われやって来たのでしょう。賑やかになりますね」

ウキッ
ウキッキ
ウキャキャッウキ

「……少し多すぎませンーノ？」

「……確かに多いですね」

「……こっち見てるノーネ」

「……見てますね」

「何か、近寄ってくるノーネ」

「お酒目当てでしょうな、つまり」

「……つまり？」

ウキッ！　ウキッ！　ウキッ！

「……襲い掛かってきますね」

ウキイイイィィィィ！！！！

「ノオオオゥ！！　ゴォルゴンゾーラチーズ！！？」

「撤退ーー！！」

彼らの夜は明けていった……。

四／効能と衝動　まったりとしよう（後書き）

ケイ「負けたか……」

しょうがないさ、カイザーだもん

ケイ「この時点ではまだ呼ばれていないがな」

そういえば最近サイバー・ドラゴンが制限完全解除されたから、ツヴァイも買って完全なサイバーデッキ作ろうと考えていたり

亮「サイバー流のデッキは扱いが難しい。心して使うんだな」

ぬおう!?　亮よなぜここに!?

ケイ「俺が呼んだ。ゲストだ」

亮「俺が使った方法は本来出来るものではなかった。しかし死者蘇生が再び制限復帰したお陰で使えるようになったんだ」

ぶっちゃけあれはＷｉｋｉ見る前に思いつきました。出来るかどうか確認に行ったけど。

ケイ「しかしあれは酷いな。下手すればサイバーエンドが二体並ぶことだって十分に考えられる」

怖いよねー。現実で友人が使うことのないよう願いたいものです

ケイ「では次回だ。ついに始まる月一試験。吹雪が言った一言で、

俺達の試験は大きな波乱となる」

亮「一番の波乱は恐らく奴だろう。あいつにとってこの試験は大きな意味を持つこととなる」

次回、『試験とレトルト』。ケイ、お前に一体何が！？

亮「……ケイになにかあるのか？」

五／試験とレトルト　用法・用量は正しく使え（前書き）

えー、今回キャラ崩壊があります。お気を付け下さい。
まあ崩壊って言っても主人公が、ですけどね。
多分今後よく崩壊すると思います。

五／試験とレトルト　用法・用量は正しく使え

「さて諸君。明日は決戦だ」

毎度おなじみとなってしまった俺の部屋。その真ん中でテーブルを挟み四人が向かい座っている。

そんな中で吹雪が、なにやら沈鬱な表情とともに喋り始めた。

「一月に一度だけあるこの日は、我々にとっても大きな意味を持っていると言えよう。なぜならばこの戦いに敗北すれば、そこに待ち構えているのは地獄のみ。我々はこれを避けるためにも協力し合わなければならない」

「……吹雪」

一通りの語りが終わり、次に俺が話し出す。

「お前の言いたいことはよくわかる。つまり、お前にとって明日はとても意味のあるものなのだな？」

「その通りだケイ」

この真剣な表情を見れば如何に本気なのかというのが、容易に見て取れる。

だからこそ俺は、吹雪、お前に聞きたい。

「――つまり勉強を教えろということか」

「教えてくださいお願いします！！」

弱シリアスな雰囲気から一転、吹雪を中心としたいつもの雰囲気が漂っていた。

「というより何故俺の部屋なんだ」

「だってここ色んな参考書とかあるし戦術書とか揃ってるし」

「持っていってやるから自分の部屋でやれ」

俺も忙しいんだが、そんなものはこいつには関係無いらしい。

「優介、亮。お前達からもなんとか言ってやってくれ」

「俺からは何とも言えないね。自業自得だと思って腹を括れ」

さすが優介。ばっさり言ってくれる。

「吹雪、これは一重にお前の責任だということを理解しろ」

「ええ？　それは僕の頭が悪いって事を言いたいのかい？」

「そうではない」

珍しく頭を抑える亮。どうやらそこまで頭を痛めることが今回は起こったらしい。

「お前は授業中なにをしていた」

「えーと……」

いや、授業中と言っても、こいつは割りと真面目にノートをとって――。

「ラブレターの返事を書いてた」

「吹雪。ちょっと拳で語らないか」

「ケイ落ち着いて」

止めるな優介。こいつには鉄拳制裁という学習方法が一番良く効くと思うんだ。真面目にノートをとっていると思えばそんなことをしていたのか。

「その考えには賛成だが、今の問題はそこではない。日頃まともに話を聞かない吹雪に、どうやってここ一ヶ月分の知識を詰め込ませるかが重要だ」

「話くらいちゃんと聞いてるさ」

「ラブレターの返事を書いているのにか？」

「愛の伝道師、ブリザードプリンス吹雪には最優先事項なのさ！」

「亮、ペンチいるか？」

「借り受けよう」

「心の底からごめんなさい！」

さて、話を進めてくれ。

「まずまともな方法をしていたら、間違いなく終わらない。これも一重に吹雪の所為だ」

「つまり多少壊れても詰め込める方法を見つけるしかないのか」

「ねえ君たち黒いよ？　まともに手早くするって考えはないの？」

「というか壊れてもって何！？　僕に何する気！？」

まあ冗談はさておき。

「結局これが一番早い。だから真面目にやれ」

「書いて覚える……これが一番早いのか……」

結局ひたすら書いて頭に詰め込むと言う案で話は落ち着いた。もちろん寝させない。所謂一夜漬けというものだが、やらないよりはマシである。

「グダグダ言うな。まずはここからだ」

こうして波乱の夜は始まった。もちろん俺の部屋で。

カリカリカリカリ……
ペラ……キュッキュッ……
カチカチ……カリカリカリ……
カリカリカリカリカリカリカリカリ……バキッ

「もういやだーーー！！」

「黙れそしてやれ」

「やれって、かれこれ六時間だよ！？　流石に無理ってもんさ！」

時計を見てみれば現在深夜二時。確かに俺達も疲れてきた頃合だ。
勉強を始めたのが八時。よくここまで集中できたものだと思いたい。

「確かにそろそろきついな。休憩にしよう」

「頭痛くなってきたよ……」

吹雪に勉強を教えながら、他の二人は自分の勉強をしている。勤勉
でなによりだ。このバカに十分の一でも分けてくれ。
かくいう俺も同時に勉強していたが、夜中というのは如何せん腹が

減る。

「ふむ……小腹も空いてきたな。軽く飯にしよう」

「食べ物置いてあるのかい？」

「ああ。色んな種類があるぞ」

言いながら、非常食を詰め込んだダンボール箱を取り出す。一応整理しておいて良かった。

しかし三人はこのダンボールの中身を見て驚愕する。

「……これは……レトルトカレーか？」

「ビーフにチキンに南蛮風……なにこれ、モウヤンのカレー？」

「しかも海馬コーポレーション印だ……真紅眼（レッドアイズ）の黒飯（ブラックカリー）って……」

これこそ俺が長年かけて集めたレトルトカレーコレクション。ちなみに家にもまだまだある。最近のものは長く保存されるものが多いが、今回は賞味期限が三年以内のものばかり持ってきた。多少勿体無い気もするが、食べないと捨てるだけだしな。

「各自選べ。米はないがパスタにしよう」

「パスタもあるんだ……」

「用意周到というか……」

「こっちにはオシリスビーフ、ラーチキン、オベリスクマイルド…

…これってバトルシティで限定販売されてたやつだ……」

何か言っているが聞こえない。もとい聞かない。
鍋は……二つあればいいか。とりあえずお湯沸かして、片方にレトルトまとめて入れればいいとして、パスタはアルデンテか？　いや夜食だし食べやすく柔らかいほうがいいか？

「鍋が二つもある……」

「といより見ろ……カセットコンロが普通にあるぞ」

「何？　どっかで野宿でもするの？」

いい感じに沸騰してきたな。そろそろ入れるか……。あ、皿出し忘れてた。取り出すのにトングも必要だな。

「本格的にキャンプセットが出てきたよ」

「もうどこでも生きていけるな」

「……なんでアカデミアに持ってきたの？」

そろそろいいか？　うむ、いい感じに茹で上がったな。カレーは……よし、完全に温まったな。じゃあ後は皿によそってカレーをかけて……で、他の三つも同じようにして、と。

「出来たぞー」

「待ってました！」

「ほう、手際がいいな」

「お手並み拝見といこうかな」

勉強道具を別の場所へ移し、テーブルに四種類のパスタを置く。ちなみに小皿を使って各自でとるシステムである。こうすることで全ての種類が食べられる。

「じゃあ食ったらやるぞ。頂きます」

「「「頂きます」」」

カレーパスタを食い終わり勉強を再開したはいいが再度集中力の切れた吹雪は実技試験のためのデッキ作りに没頭した。

俺も復習が完了したため同様にデッキ調整を開始。亮と優介は各自の部屋へと戻り残り少ない睡眠時間貪ることに成功したという。

そして残った吹雪は徹夜でデッキを完成させそのまま俺とテストデュエルを開始。

そして翌日の試験に遅刻しそうになってギリギリで着席。そのまま筆記試験を開始するも寝ていないため十分で全て埋め睡眠を開始した。

同じく俺も見直しをした後に睡眠。亮と優介は最後まで完璧に見直し終え無事筆記試験は終了。そして現在実技試験前の昼休みに至る。

「ケイ何やってるだい？」

「なに、ちょっとしたあらすじをな」

というわけで実技試験である。だからどうということも無いのだが、少々眠い。やはりあれだけの睡眠時間では眠気は覚めないらしい。

「俺購買行ってくる」

「俺も行こう。久しぶりにドローパンでも引くか」

「じゃあみんなで行こうよ。起きろ吹雪」

「ポチョムキン！？」

優介の拳骨により吹雪起床。結局四人で購買へ向かうことになった。

ここで少しアカデミアの購買について説明しておこう。

まず当然だがカードのパックが売っており、平時はこれを目当てに多くの生徒が殺到する。しかも三ヶ月に一回程の割合で新パックが登場するものだからその盛り上がりようは凄まじい。店員はトメさんとセイコさんの二人で、小数の割りに上手く機能している。ちなみに校長である鮫島校長はトメさんに惚れているのは全校生徒が知っていることである。

しかしカードパックのほかに、購買には名物がある。

「おお、やってるやってる」

「大した賑わいだな」

アカデミア購買名物、ドローパン。ワゴンに積まれている大量のパンを生徒が掴み取り、食べる。外からは中身が見えないので、何が入っているかは食べてみないとわからない。焼きそばパンやコロッケパンなどのオーソドックスなものもあれば、めざしパンや納豆パ

ンといった正直どうなんだと思わざるを得ない微妙なパンまで入っている。その種類はまさにカードの如く膨大で、未だ全種類出ていないとまで言われるほどである。ついでにパンの中にはカードが入っている。この間はブルーの女子生徒が『F・G・D（ファイブ・ゴッド・ドラゴン）』を当てたと聞いた。どうやら中々レア度の高いカードも入っているようである。しかし、確かに面白いシステムではあるが、アカデミア名物とまで言われる程に人気なのか。それは一重に、このパンの山の中にたった一つだけある”幻のパン”の存在がそうさせているのである。まあ、今回はまるっと関係ないが。

「さーて、やってみるかな」

「運試しといくか」

どうやら吹雪と亮が挑戦するようである。互いに思い思いの場所に手を突っ込んで――一瞬で引き上げた。
そしてその場で開け、食べた。

「ムグムグ……うへぇ、甘栗パンじゃないか……」

「全部食べろ……ふん、具無しパンか」

吹雪は嫌いなパンが当たり、亮は大好きなパンが当たったようだ。
……具無しパンって上手いのか？　それただのパンじゃないのか？
運を天に任せたドローもそこそこにコーヒーを見繕う。今は寝起きなので出来るだけきつい奴が欲しい。

「トメさん。寝起きに効くキッツイコーヒーはありますか？」

「おやケイちゃんかい？　眠いならこれだね」

そう言って取り出したのは、真っ黒な表面に赤い文様がプリントされた如何にも怪しい雰囲気を醸し出している缶コーヒー。
ラベルには『真紅眼（レッドアイズ）の産声（うぶごえ）』と銘打ってある。

「海馬コーポレーションが新しく作ったみたいでね、これを飲めば眠気も吹っ飛ぶ強力仕様って書いてあるよ！」

眠気も吹っ飛ぶ……か。ふん、丁度いい。
俺が手を伸ばそうとすると、急に周囲がざわつきだした。いや、元々賑わっていたのだが、今は活気というより慄きに近いざわつきがある。

『おい、あれって海馬コーポレーションが自主回収始めてるやつじゃねえか？』

『ああ。飲んだ奴は例外なくぶっ倒れて、起きたら三日三晩眠れなくなるっていう、あの……』

『トメさんまたあんな怪しいものまとめ買いして……』

『……飲むのか？　飲んじまうのか後輩よ！？』

――シン

最後の一言を締めに、周囲のギャラリーが一気に静まり返った。吹雪たち三人も例外ではない。
……なんということだ。中々に危険な代物だったのか。しかし俺の手は既に缶コーヒー（危）を掴もうかという一歩手前まで

出ている。ここで引っ込めてしまうのは簡単だ。しかし見ろトメさんのあの期待を込めた目を。中々買ってくれない売れ残り商品の買い手がやっと現れたんだ。期待しないほうが無理だ。しかしこれは飲むと危険な症状に陥るという。そんな危険なものを俺が――――

――見逃すと思うか！

「栄光というものは座して待つだけではやってこない」

一気に缶を掴む。同時に代金をカウンターに叩きつける。
固唾を呑んで静観していたギャラリーが騒がしくなる。

「そう栄光とは！　自らの手で！！」

プルタブに指を引っ掛け、一思いに開ける。
優介が止めようとしているが、そんなことは知ったことではない。
そして、

「掴むものなのだあぁぁぁ！！！」

ゴクッ、ゴクッ、ゴクッ
中身を確認する間もなく、一気に飲み干した。
そして、すぐにわかる違和感。思わずふらつき、カウンターに手をついてしまう。

「ケイ！　大丈夫か、ケイ！」

……亮、か。
お前の声、よく聞こえるぞ。とてもよく、鼓膜に響く。ああ、とても良い。素晴らしい気分だ。

「……ッフ、ククク、クククククク……」

「あ、あの～……ケイ？」

思わず笑いがこみ上げてくる。最高だ。こんな気分には未だかつてなったことがない。
そうだな、吹雪。お前も話しかけてくるということはわかっているんじゃないか？
今の俺は、例えるなら、そう！

「最っっっ高にハイっっってヤツだアアァーーーーーーーーー！！！！！！！！！！」

もう、誰にも俺は止められん！
誰か、誰か俺を止めてみせろオオ！！！！

その後実技開始後もケイのテンションは変わらず、見事試験で一タ

ーンキルを華麗に決めてしまうのであった。
なおこの缶コーヒーは後日吹雪がトメさんから箱ごと譲って貰い、ケイの部屋に隠したのであった。このことについてトメさんは「たとえ売れ残っていたって、必要としてくれている人はきっといるんだよ」と述べているとかなんとか。

五／試験とレトルト　用法・用量は正しく使え（後書き）

ケイ、狂乱す。の回でした。
さて、ケイが狂ってしまったし今回は別の人を呼んでいます。
優介「えーと、どうも藤原優介です」
この小説内では御覧の通り『優介』で殆ど統一されています。よってあまり馴染みのない呼び方に戸惑われる方もいると思われますが、ここではこういうものだと思ってください。
優介「ところで今回は何で俺？」
それはね、次回の主点キャラだからさ！
優介「俺主点？　話の流れからして試験のことか？」
詳しいことは言えないけどウチの藤原はかなり優遇されます。そりゃもう原作とは遥かにかけ離れます。具体的には……おっとこれ以上は。
優介「ネタバレギリギリかよ……」
いいジャマイカ。それはそうと最近ようやくサイバーデッキが完成してね。試運転したいんだけど相手がいないんだよね。
優介「勉強しろ受験生」
やる気が出ない。よって明日から本気出す。
優介「それやらない文句だし……」
気にすんな。それにしても何でみんな本命デッキと戦ってくれないんだろ。
優介「いや除外は普通に嫌われるでしょ」
やかましい。ＢＦだか魔轟神だかしらないけど、最近のデッキは異常に回るんだよ。それに除外だって立派な戦略だしライトロードに使えば裁きの龍も封じれてマジ鬼。……ああ心配しないで、本編じゃ使わないから。
優介「当たり前だろ。本編で使ったら殆どのデッキが機能しなくなるじゃないか」

まあマクロコスモスとかアニメ効果だと超使いづらいから出来ないけどね。

さてそろそろ次回予告へと移ろう。次回はなんとスーパー優介タイム、と思いきや意外な乱入者。お前、一体何してんだ!?

優介「次回、『天使と爆竜』。ケイが戻ってるといいなぁ……」

六／天使と爆竜　災厄の竜と救いの手（前書き）

今回は完全に藤原優介視点です。
やや気分を害する発現も混じっております。先に進む場合は理解の上、お気をつけ下さい。

あとリア友に「他の作者見習えよ。あんなに更新はええぞ」と言われました。
……デュエルの内容って考えるのは楽しいんですけど、書くとなると難しいんですよね。
「じゃあ何でこんなの書いてんだよ」って言われたらまあソレまでなんですけど。

相変わらずの遅筆ですが広い心で進んでください！！

＊誤字脱字報告もお待ちしています。

六／天使と爆竜　災厄の竜と救いの手

Ｓｉｄｅ：優介

ケイが相手に同情したくなるような１ターンキルを達成した後、亮と吹雪もそれぞれ実技試験をクリアした。あの二人なら最初から結果はわかっていたようなものだけど、思いのほか対戦相手が強くて苦戦を強いられていたらしい。それでもライフを全く削られずに勝ったのは流石としかいえない。

「亮、ケイはどうした？」

「睡眠薬を無理矢理飲ませて保健室に監禁してある」

いや監禁って……まああれじゃ仕方ないか。

ケイの暴動デュエルをダイジェストに表すとこんな感じになる。

『フン、調子に乗るなよ下級生が。一年先輩の実力を見せてやる！』

『ゴブリンエリート部隊』を召喚！　カードを一枚伏せてターン終了だ！』

『俺のターンドロー！　『レッグル』を召喚！』

『ハハハ、何だその雑魚モンスｔ『さらに『魔導師の力』を三枚装備！』っては？』

『『サイクロン』を発動して伏せカードを破壊！』

『な、なにい！？』

『『魔導師の力』を装備した『レッグル』（ＡＴＫ４８００）でダイレクトアタックだあぁぁ！！！』

『うわらばっ！？』

『粉砕！　玉砕！　大・喝・采ィ！！』

……本当に、見事な狂乱振りだった。先輩相手にあれはないだろ。
この試験が終わる頃には治っているといいなと思いながら、デュエルリングへと上る。ようやく俺の番か。

「いっけえ優介！　1ターンキル決めてやりたまへ！」

「無茶言うな！？」

そもそも俺のデッキはそれ目的に作られていないってのに。
俺のデッキは子供の頃のデッキと対して変わっちゃいない。……あの日から。

『それデーハ、シニョール藤原とぅ、シニョーラ竜剛院。互いに向かい合うノーネ』

俺の相手は竜剛院さん。聞くところによると、ドラゴン族主体のパワーデッキがウリらしいな。
俺がそんなことを考えていると、手を差し出された。

「藤原さんですね？　よろしくお願いします」

「ええ、よろしく」

そう言って、差し出された手を握り返す。しかし、そこに若干の違和感を覚えた。
僅かだが、手が震えている。
どうかしたのか、と聞く間もなく、竜剛院さんは手を離しセットポジションへ戻った。
……やればわかるか？

『エーそれデハ、両者向かい合ッテェー……デュエル、スタートナノーネ！』

「「デュエル！！」」

藤原　ＬＩＦＥ　４０００
竜剛院　ＬＩＦＥ　４０００

「先攻は貰います。ドロー！」

……？　彼女がドローした途端、急にギャラリーが騒がしくなってきた。

『おい、先攻を取ったぞアイツ』
『あ～あ、可哀想になぁ』
『全くだよね～もう負けじゃな～い？』

……いささか頭にくる会話だけど、今はデュエルに集中だ。

「私は『仮面竜（マスクド・ドラゴン）』（ＤＥＦ１１００）を召喚。カードを一枚セットして、ターン終了です」

「俺のターン、ドロー！」

くそ、手札がイマイチ悪い。……防戦しかないじゃないか。

「俺はモンスターをセット。更にカードを一枚伏せてターンエンドです」

「私のターン、ドロー！　ならば私は『ランサー・ドラゴニュート』

（ＡＴＫ１５００）を召喚！　場の『仮面竜』を攻撃表示に変更します（ＤＥＦ１１００　↓　ＡＴＫ１４００）」

まずい。『ランサー・ドラゴニュート』は貫通効果持ちだ。俺のモンスターじゃ耐え切れない。

……伏せた罠もまだ使うときじゃない。ここは受けるか……。

「行きなさい『ランサー・ドラゴニュート』！　伏せモンスターを攻撃！」

槍は裏側になっていた『スケルエンジェル』（ＤＥＦ４００）を突き抜け、衝撃がこちらまで伝わってきた。

「ぐぅ……『スケルエンジェル』のリバース効果発動！　デッキからカードを一枚ドローする！」ＬＩＦＥ　４０００　↓　２９００

「しかし私の攻撃はまだ残っています！　『仮面竜』で、プレイヤーにダイレクトアタックです！」

「ぐあああぁ！！」ＬＩＦＥ　２９００　↓　１５００

ぐぅ……い、一度のバトルでライフを半分以下にされてしまった……。パワーがウリなだけあって、その攻撃には容赦が無い。

「……私はカードを一枚セットして、ターン終了です」

今、一瞬迷わなかったか？　それも『どのカードにしよう』という類でなく、『これを使っていいのか』って顔だ。

その変化が分かったのか、またさっきの生徒達がうるさくしている。聞くに堪えないので、最早聞く耳すら持たないけど。

……このデュエル、早めに終わらせたほうが良さそうだな。

「俺のターン、ドロー！」

まあ、さっきのドローで逆転できるカードは来た。そしてたった今、パーツは揃った。そろそろ反撃させて貰おう。

「俺は手札から『天空の使者ゼラディアス』の効果を発動！　デッキから『天空の聖域』を手札に加え、更にそのまま発動します！」

フィールドがアカデミアのデュエルリングから、遥か雲の上のような場所になった。俺の後ろには聖域と名乗るに相応しい神殿が聳え立っている。

「『天空の聖域』……ということは、天使族デッキですか」

「ええ、多少変異型ではありますけどね。俺は手札から『ゼラの戦士』（ＡＴＫ１６００）を召喚！　更にこの『ゼラの戦士』を生贄にする！」

「『ゼラの戦士』を生贄……！　まさか！」

気付いたようだが、もう遅い。俺の布石は既に整っている！

「俺は手札から、『大天使ゼラート』（ＡＴＫ２８００）を特殊召喚する！」

フィールド上の『ゼラの戦士』が、薄い緑青の羽を携えた屈強な戦士へと変貌した。

その佇まいは、大天使と呼ぶに相応しい。

「ゼラートの攻撃力は２８００……だが、本当の力はそれだけではない」

「だね。まあ、優介の手札にそれがあれば、の問題だけどさ」

亮と吹雪が丁寧に解説してくれているようだけど、確かにこのモンスターの本当の力はその効果にある。

手札の光属性モンスターを墓地に捨てることで、相手モンスターを一掃する。それがこのカードの真価。けど、今手札に肝心のモンスターカードはない。

だけど、このまま攻撃する分には全く問題ない！

「『大天使ゼラート』で『ランサー・ドラゴニュート』に攻撃！『聖なる波動』！」

「う、あ、あああ！！」ＬＩＦＥ　４０００　↓　２７００

「よし！　ライフを削った！」

「手札にモンスターが無かったのは痛かったが、これで持ち直せる」

逆転の一手、とまではいかないけど、俺が優勢になったのは確かだ。

これで一気に押し込む！

『ちょっと～あの一年結構頑張ってない？』

『全く無駄な足掻きしてんなぁ。さっさと終わらせちまえよ』

『うんうん。さっさとあたし達の番にしてもらわないとね～』

……頭の痛くなる会話だ。誰ださっきから馬鹿な話方してるのは！

「優介―！　落ち着いて落ち着いてー！」

ありがとう吹雪。そしてちょっと黙っててくれ、イライラしてるから。

「……私はバトルフェイズ終了時に『スケープ・ゴート』を発動。効果で『羊トークン』（ＤＥＦ０）を四体特殊召喚します」

？　このタイミングでトークンを召喚？

『羊トークン』が召喚されたことで竜剛院さんのフィールドにはトークンが四体、『仮面竜』が一体。さらに伏せカードが一枚ある。対して俺のフィールドには『大天使ゼラート』が一体。『天空の聖域』が一枚に、最初からセットされている伏せカードが一枚ある。多少のことでは覆されないけど、念には念を入れておいた方がいいよな。

「俺はカードを二枚セットして、ターン終了です」

「私のターン、ドロー！　……わたしは……！」

まただ、今度ははっきりと躊躇っているのが見て取れる。

引いたカードはそのまま手札に加え、何かを発動させようとしているけど……何を躊躇っている？　何故躊躇う？

俺が不審な行動にイライラとしていると、例のギャラリーがまた騒ぎ出した。

『さっすがえげつねえな竜剛院！　ついにそのカードで止めか！』

『お前とデュエルした女子生徒泣いてたぜ！　もうお前とやりたくないってな！』

『誰もお前なんかとやりたくねえってよぉ！』
『さっさとサレンダーしてくんない？　目障りなのよアンタぁ！』

「……私は！　罠カード『竜の血族』を発動！　自分フィールド上のモンスターを全て、このターンのみドラゴン族にします！」

罵詈雑言に耐えながら、彼女はデュエルを続行した。
これで彼女のフィールドのモンスターは全てドラゴン族になった。
だけど、ドラゴン族の恩恵を受けるカードなんて、『竜の逆鱗』か『竜の鏡（ドラゴンズ・ミラー）』か……。
……『竜の鏡』？　……”融合”？　まさか！？

「私は……！」

また、手が止まる。
“あのモンスター”の召喚一歩前だというのに、彼女の躊躇する姿勢は著しく目立ってきた。
そこまでして出したくないないのか、もしくは出せないのか。
……どちらにせよ。

『おい遂に使いやがったぜアイツ！』
『マジデ～！？　相手の子可哀そー！』
『血も涙もねえ女だな！　そいつの所為で何人も泣いてるってのによお！！』

……いい加減うるさい。目障り、耳障りだ。
目の前の彼女もそうなのか、顔を俯かせて震えている。
さっきの奴等の罵倒から察するに、彼女の”あのモンスター”が原因らしいな。
その、圧倒的な攻撃力の前に自分の戦略を全て否定されていく様が

えげつない……恐らくはそういうことだろう。
ここ最近の実習でも何人か泣いている女子生徒を見たことがあった。
恐らくは彼女と戦った、その相手。
相手が意趣返しに上級生の彼氏かだれかに、彼女の悪評を言いふらした。それが結果的に、こういった風になって彼女のもとへ舞い込んできた。
……全て推測に過ぎないけど、あいつらの態度から見てまず間違いないだろう。根拠は無いけど確信は持てる。
……まあそこらへんは後で聞くなり調べるなりするから置いといて。
当面の問題はこのギャラリー。未だ暴言ばかり吐いている。

『お前みたいなのがいると迷惑なんだよ！　さっさと辞めちまえ！』

……うるさい。

『そうだ辞めちまえ！　この疫病神！』

黙れ。

『出てけ！　ここから出てけ！』

……うるさい、うるさい！

『『『出てけ！　出てけ！　出てけ！』』』

――――――

『「ウルセエエエエエエエエエエエエエエ！！！

ら腐っているな。

『テメエらみたいなカスを人間と認めた覚えはねえ！！　そもそも男が女を罵倒するのが上級生のやり方か！　どうせ竜剛院に負けた腹いせだろうが！　男の癖に【自主規制】ついてんのか【自主規制】野郎共ォ！！　まあついてたところで粗末なもんだろうがヨォ！！』

落ち着いてケイ！？　それ残るから、マイク通って全部記録にのこるから！！

それ以前にそのマイクはどこからひったくってきた！？

『竜ゥ剛ォ院ンン！！』

「ひああ！？　ははは い！？」

いきなりの名指しにビクッと体を跳ね上げる竜剛院さん。誰でもあんな半狂乱状態の人に叫ばれたら驚くだろう。

その呼んだ本人は、先ほどまでとは打って変わって静かに聞いた。

『……お前、そのデッキに信念あるか？』

「へ、ふえ？」

『魂込めてるかって……――――聞いてんだよォ！！』

「ははは、はいいい！！」

ああ……ケイ、やっぱりさっきのコーヒーの所為で……。

『優介エエ！！』

そんな俺の心配を余所に、ケイの独裁演説は続く。今度は俺の番だ。
かくいう俺も大分怒り心頭だ。丁度いいし、便乗させて貰うことにしよう。

「なんだあ！！」

『勝て！！』

簡潔で、わかりやすくていい。
なんにせよ、もう取り返しつかないなこりゃ。最悪停学かな。
だったら最後まで付き合ってやるよ。大馬鹿野郎め。

『じゃあ俺は行く！　そろそろ捕まりそうだからな！　アバヨ！！』

……そういい残し、ケイは去っていった。

「嵐のようだったね」

「文字通り大嵐だな」

……結構余裕だな二人とも。
後に残されたのは、あの空気に圧されて静まり返った会場。うるさかったギャラリーも今は静かにしている。もっとも、後でうるさくなりそうだけど。
……さて、俺の仕事も済ませるとするか。

「竜剛院さん」

「……え、は、はい」

「……どうして『F・G・D（ファイブ・ゴッド・ドラゴン）』を出すことを戸惑ったんですか」

そう、それが一番の謎。

場には五体のドラゴン族。これが意味するのは、ドラゴン族の五体融合。すなわち、最強の融合竜『F・G・D（ファイブ・ゴッド・ドラゴン）』。

ほかにも多少候補はあるけど、現状で最も確率の高いものはこれだ。

そして、これまでの反応を見るとまず、間違いない。

案の定彼女は俯いてしまった。セミロングの茶髪の間から、強く食いしばっている口元が窺える。

……さすがに、初対面の相手にはそうそう話してくれないか。

「最善の手を尽くすのは、デュエリストとして当然のことです。あなたはそれを実行したまで。どこに戸惑うものがあるのですか」

「！」

この言葉に強い反応を示し、彼女は反論する。

「だって……だって、仕方ないじゃない！　あれは、使っちゃいけないのよ！　みんなが考えた戦略を、全て壊してしまいそうで、全て否定しているようで……！　それに……これを使ったら、いなく、なっちゃう……みんな、私から、離れて、いきそうで……！！」

今にも泣きそうな声を押し殺して、彼女はまた俯いた。

……理由は概ね、俺の予想通りだったってわけか。

だけど俺は、先程同様怒りが募ってきた。

「ふざけてんじゃない！！」

「！」

だからこそ、俺は言う。

「臆病な心をカードのせいにするなんてふざけるな！　戦術を否定するなんて、相手を見くびるな！　仕方が無いなんて、甘えるな！　自分の持つ全力を出さないことこそ、相手に失礼極まりない行為なんだ！　それで人が離れていくのは当たり前だけど、全力を出した人には必ず評価してくれる人がいる！　それをわからないなら、貴女はまだ全力を出し切っていない証拠だ！」

「……全力、を……？」

彼女が、うわ言の様に呟いた。

「出せ！　貴女の全力を！　そんなに不安なら、俺がそいつを叩き潰す。出すんだ！　災厄の竜（ファイブゴッドドラゴン）を！！」

「！　……私は！」

眼の色が変わった。その瞳に、迷いは無い。

……くるか！

「手札から『融合』を発動！　場の『仮面竜』をドラゴン族になった『羊トークン』を融合素材に――」

途端、周りの空気が変わった。

突如フィールドに出現した次元の渦に五体の融合素材が吸い込まれていき、やがて激しい雷光を発した。

「降臨せよ！！　『F・G・D（ファイブゴッドドラゴン）』！！」

そこにいたのは一匹の竜。
火炎の首、流水の首、疾風の首、岩石の首、漆黒の首を持つ、”サイキョウ”のドラゴン。
五つの首を持つ、覇竜が姿を現した。

「これが……『『F・G・D（ファイブゴッドドラゴン）』……」

余りある威圧感の前に、思わず後退する。

「更に私は『ボマー・ドラゴン』（ＡＴＫ１０００）を召喚します」

さらに一体、爆弾を抱えた小さな竜が姿を現した。
元々大なり小なりといった差はあったのだろう。しかし今この場においては、その差は比べるのもおこがましい程であり、あえていうならばトンボと恐竜。それほどまでに災厄の竜は強大な存在であった。

「バトルです！　『ボマー・ドラゴン』で『大天使ゼラート』に攻撃！　『ダイナマイト・クラッシュ』！！」

小さな羽根を羽ばたかせ、大天使のもとへ向かう一匹の竜。
当然力の差は歴然であり、一瞬のうちに聖なる輝きのもと浄化された。
しかしその腕に抱かれた爆弾は光の中大天使の懐へ向かい、爆ぜた。

「まずいな……。『Ｆ・Ｇ・Ｄ』だけならば『天空の聖域』の効果でダメージを０にできたものの、先に『ボマー・ドラゴン』で破壊されたとなると、状況は一変する」

「しかも、『ボマー・ドラゴン』は自分へのダメージを０にして相手を道連れにする自爆モンスター。『Ｆ・Ｇ・Ｄ』の攻撃を確実に通す為には、いいカードだ」

俺に残されたのは、三枚の伏せカード。だが、状況を打開できるようなカードはない。

「ごめんなさい……。『Ｆ・Ｇ・Ｄ』の攻撃！　『ファイブ・エクストリーム・バースト』！！」

炎、水、風、土、闇属性のブレスが、それぞれ反発反応を起こしながら向かってくる。

決まれば、このデュエルは即座に終了である。

「優介ェエ！！」

「優介！！」

――――決まれば、であるが。

「……耐えたぞ、最強の一撃」ＬＩＦＥ　１５００　→　５５００　→　５００

「ど、どうして……耐えられるはずが……」

驚愕する竜剛院さんだが、俺はつとめて冷静に言う。

「当たる前にこれを使ったのさ」

そう言って指し示す先には『体力増強剤スーパーZ』の罠。

「そうか！　ギリギリ間に合ったから、ライフが残ったのか！」

「だがこれでもう後は無くなった。ライフも残り僅か。洗脳などのライフを払う類のカードは使えなくなった」

……内心俺はひやひやしていた。
一歩でも発動タイミングを間違えていたら、負けていた。
だが、賭けに俺は勝った。この勝負、勝たせてもらう！

「私は……一枚セットしてターン終了、です」

ついに回ってきた、おそらくは最後のターン。いや、俺が最後のターンにしてみせる。
その為にも、応えてくれよ、俺のデッキ。

『はい、マスター……』

「！？」

……今の声は？
声のした方向を探すと、そこにはデッキ。
……ああ、そういえば思えがいたな。悪かったな、忘れてて。
俺のデッキは数年前から何も変わっちゃいない。そう、”コイツ”がいるデッキだからな。

「俺のターン、ドロー！」

引いたカードは……俺の”相棒”。
お前さえいれば、百人力だな。

「俺は手札から『強欲な壺』を発動。カードを二枚ドローします」

新たに二枚引く。
……面白そうだし、折角だからと入れたのが、まさかこんな場面で役に立つなんてな。

「俺は『ウィクトーリア』（ＡＴＫ１８００）を攻撃表示で召喚する！」

「こう、攻撃表示!?　でも、攻撃力は『Ｆ・Ｇ・Ｄ』の方が……」
「更に効果発動！」」

「相手の墓地に眠るドラゴンを一体、自分フィールド上に呼び覚ます！　こい、『ボマー・ドラゴン』！！」

現れたのは大天使を打ち破った小さな竜。その手には爆弾を持ち、その眼は災厄の竜（ファイブゴッドドラゴン）を見据えている。

「上手い！　これならいくら攻撃力が高くても関係ない！」

「相手の手段を逆手に取った、見事な戦略だ！」

布石は揃った。となれば、残るはあの伏せカード。
俺の勘が正しければ、恐らく『リビングデッドの呼び声』。端から見れば後一歩足りないと思うだろう。
だが、俺は違う！

「これでラストバトルだ！　いけ『ボマー・ドラゴン』！！　『Ｆ・Ｇ・Ｄ』に自爆特攻！　『ダイナマイト・クラッシュ』！！」

その手に爆弾を持ち、ドラゴンは災厄へと特攻する。無論適うはずも無くすぐに五属性のブレスにより迎撃されてしまうがその遺志は健在であり、主の手を離れた爆弾はＦ・Ｇ・Ｄ（ファイブ・ゴッド・ドラゴン）へ直撃する。瞬間、巨大な爆発が起こり胴体ははじけ飛ぶ。支えを失った首は、重力に従い地へと落ちた。

「ファイブゴッドが……最強のドラゴンが……倒れた……？」

「……相手が無数にいるように、デッキが無数に存在するように、戦略もその場でいくつも生まれる。戦術を否定すること自体がありえないんですよ」

竜剛院さんは答えない。ただ、呆然とフィールドを見つめている。

「まだ……バトルは続いています。『ウィクトーリア』でダイレクトアタック！　『ドラゴニック・シャイニング』！！」

『ウィクトーリア』から波導がほとばしり、彼女へ向かっていく。だけど、俺にはわかる。彼女は、ここで使ってくる。

「……！　リバースカードオープン！　『リビングデッドの呼び声』！」

……やっぱりか。

けど、それも俺の計算通りだ。

「墓地から『ランサー・ドラゴニュート』（ＡＴＫ１５００）を攻

撃表示で特殊召喚します！」

攻撃は止まらず、ドラゴンへと向かう。だからこそ、俺はここで使う！

「この瞬間！　手札から『オネスト』の効果を発動する！」

羽の生えた天使が、『ウィクトーリア』を優しく包み込む。
その瞬間、波導の光が更に輝きを増した。

「『オネスト』のモンスター効果は、手札から捨てることで相手モンスターの攻撃力を自分のモンスターの攻撃力に加算する効果……」

「とういうことは、今の『ウィクトーリア』は攻撃力３３００！
優介の勝ちだ！」

まだだ！　まだ終わらせない！

「更にリバースカードオープン！　『光の召集』！！　手札を全て捨て、その枚数墓地から光属性モンスターを手札に加える！　俺の手札は一枚！　よってこのカードを墓地に送り、墓地の『オネスト』を回収する！」

これで本当のラストにしよう、頼むぞオネスト。

『はい、マスター……』

「『オネスト』を回収しただと！？」

「まだ『オネスト』の発動タイミングは残っている！　ということ

は！」

「再びオネストを発動！！　『ウィクトーリア』の攻撃力は更に１５００上がる！　いっけえ！　『ファイナル・ドラゴニック・シャイニング』！！！」

会場を、眩いばかりの光が覆いつくした。
一面白、白、白の世界。その中では『ランサー・ドラゴニュート』が光の粒子となって昇天しているのが見えた。

「最強なんてこの世に無いんです。いくら強大であろうと所詮はただのモンスター。それでもその竜があなたの邪魔をするというのなら何度でも救い出しましょう」

「……」ＬＩＦＥ　１４００　→　０

「し、勝者、シニョール藤原なノーネ！」

惜しみない拍手が、盛大に贈られてくる。でも、今はそんなことを気にしている場合じゃない。
デュエルが終わって座り込んでしまった彼女の元へ歩み寄る。少なくとも、ショックを受けている様子は無いけど、やはり散々言ってしまった手前、それなりの負い目はある。というかデュエルが終わって冷静になったからこそわかる、さっきまでの俺はどうかしていたに違いない。

「……大丈夫ですか」

「……」

返事は無い。しかし、僅かに震えているところを見ると、やっぱりショックだったのだろうか……。

「……ぅ……っ……？」

「え？」

今、なんて言ってたんだ？
もう一度耳を近付けて聞いてみる。

「本当に……救ってくれるの……？」

耳を、目を疑った。
目の前の彼女は、涙を溢しながら俺の言葉を待っている。
――そんな風にされたら、断れないじゃないか。

「もちろんです。俺が、何度でも救い出しましょう」

我ながらキザったらしいと思うが、何故かこの言葉がすんなりと出た。
すると彼女は突然、

「うわっ！？」

俺に抱きついてきた。
突然のことに頭はパニックに陥ったが、耳元ですすり泣く声が聞こえたことで、ようやく冷静になれた。
俺はそのまま少しの間、彼女のしたいようにさせていたけど、その中で何回か、こう言っているのを聞いた。

「私から、離れないで」と。

余談だがこれは全て実技試験の最中に起こったことなので、フィールド上で起こっていることになる。

つまりはギャラリーのほぼ全員から見られているということになり、その事実に気付いた藤原と竜剛院は大慌てで会場を後にしたとか。

ちなみに実技担当のクロノス教諭はこの時のことを「あれは邪魔できる雰囲気じゃ無かったノーネ……」と述べている。

六／天使と爆竜　災厄の竜と救いの手（後書き）

優介「あああああああああああ……」
落ち着け優介。どないしたんじゃ。
優介「どないしたじゃないよ！？　あんな大勢の前で女の子泣かせちゃったしケイは暴言吐きまくったし……」
まあ大丈夫でしょ。記録的には全部残るわけだし、向こうも悪いってのが十分わかるんだし。
優介「尚更困る！　記録に残ったら一生残るじゃないか！？」
そだね。まあ若気の至りだと思って諦めな★
優介「無理だよ……ああ、欝だ、もうやだ……世界が終わればいいのに……」
あらら、優介が若干ダークネス入っちゃった
優介「（ブツブツブツブツ……）……はぁ」
あ、お帰り
優介「もうどうにでもなれ……」
しゃきっとせんかい若人よ！　それじゃ次回予告いくよー
優介「はいはい……って何これ？」
……（サッ）
優介「何も書かれて無いメモ渡されても困るんだけどなぁ？」
……（ダラダラ……）
優介「決まってないのかい？　ん？」
……ではまた次回！
優介「コラア！　せめてニ、三話はストック溜めてから投稿しやがれ！」

七／後日と庭球　もっと熱くなれよ！（前書き）

ケイ「……ネタだな」
勿論。折角いいキャラなんだから使わないと。
ケイ「そして俺はそのとばっちりを喰らうのか……」
はいブツクサ言わない！　ただでさえ他の作者さんの作品と比べてデュエル回数少ないんだから、ちったあ頑張りな！
ケイ「というより、後日談だろ？　何故優介にさせないんだ」
前回やったし。いいじゃないか。
ケイ「……はあ。まあ、次いつあるか分からないしやるか」
では本編どうぞ！

七／後日と庭球　もっと熱くなれよ！

ピピッ　ピピピッ　ピッ　ピピピピッ
広い寮の一室に、機械音が嫌に響く。
この部屋にいる者は声を発さず、ただひたすらに手中の機械をいじっている。
やがてソレも終わったのか音も止み、部屋の主はその画面を凝視する。

「……こんな感じ、かな」

「いや、そこはもう少し顔文字も入れたほうが良いんじゃないか？」

「え、そう？」

「後もうちょっと相手の事も書いておいた方が良いと思うよ」

「う、うん……」

ピピピピッ　ピピッ　ピピピッ
カチッ　ピロン

「送信した？」

「うん。……って何でいるんだ！？」

「「え、今更？」」

家主藤原は自室にてメールを作成していたはずだ。そう、自室にて。それがどうして男三人がいる空間に早変わりしてしまったのだろうか。

「というかケイ！　君はまだ謹慎中じゃなかったのか！？」

「俺が大人しくしているとでも？」

「威張って言うことじゃない！」

ケイは先の一件（実技試験）のお陰で三日間の寮の自室謹慎を喰らっていた。そしてさらに反省文数枚に『新しいコンボと応用例』を各種族分それぞれ十枚以上書いてくるようにと言われている。とてもではないが、普通ならば三日間必死に書いたとしても中々終わる量ではない。

なお試験の結果だが、ケイと亮は満点で、優介はケアレスミスによりマイナス二点、吹雪は学年五位だった。

「課題が全部片付いたのでな、暇になったんだ」

「早っ！？　何その高スペック！？」

「件の缶コーヒーの所為で眠れなかったというのもある」

「まさかの恩恵！？」

『真紅眼の産声』はそれほどまでに強力だったらしい。それにしてもこの男、デタラメである。

「いや～それにしてもまさか優介に彼女が出来たなんてねぇ～」

「しかも相手はあの人ときたもんだ」

「なっ！？　ち、違う！　俺は別に竜剛院さんとはそういう仲じゃ」

「おやぁ？　僕は別に竜剛院さんとは言ってなかったけどね～？」

ちなみに試験トップ５の内四人はこいつらだが、残り一人は彼女である。

「認めろ優介。既にネタは上がっているぞ」

「か、かかか帰れーー！！」

「いやー青春してるねえ！　胸キュンポイント１０ポイントだ！」

今日もブルー寮は平和であった。

余談だが、ここにいない亮は自主鍛錬のため購買でドローパンを引いている。決して昨日食べた具なしパンが凄く美味くてもう一度食べたいから、という理由ではない。断じて無い。

「……賄いパンか」

ちなみに戦果は具なしパンの他に購買の賄いパンだった。意外に美味くてびっくりしたのは内緒らしい。

「なあ優介」

「なに？」

「デュエルにおいて、テニスとは必要か？」

「さあ」

本日の体育の授業はシングルテニス。目の前では亮と吹雪が黄色い球を一心不乱に追いかけていた。回転（スピン）をかけたり角を狙うギミック派の亮に対して、力強い球でひたすら返す直球派の吹雪。決着は中々つかずにいた。

どう考えても、デュエルに何一つ繋がらない

「ダブルスとかならまだ解るんだが」

「タッグの意識を高めるとか？　そもそもタッグデュエルなんて授業でもやらないな」

「……ますます解らん」

「体動かせってことでしょ」

いつの間にかスコアは４０－０。亮の圧勝で終わった。というか、勝手に吹雪の球がネットで自滅しただけだが。

「もう、無理……」

「流石に、疲れたな……」

二人して備え付けのベンチに座り込む。それだけ白熱したというこ

とだろう。

「中々見応えがあったぞ。吹雪が転げまわるところとかな」

「無様なだけじゃない！？」

「もう少しでツ○メ返しも打てるんじゃないか？」

「無理だな。そこまで極めていない」

「僕はツ○スト○ーブ打ってみたいな」

「なんの話だよ……」

雑談もそこそこに、俺たちはカードの話へと入る。

「ケイのデッキはパワーが足りないね。もっと攻撃力の高いモンスターは入れないの？」

「ポリシーに反するんだよ」

俺のデッキはとにかく攻撃力の低いモンスターを使う。何故かと言われれば、一重に流行の所為としか言いようが無い。というより、流行を叩きのめすのが俺だ。

「最近の下級モンスターとくれば、やたらと攻撃力の高いモンスターが多い。『ジェネシック・ワーウルフ』然り、『ブラッド・ヴォルス』然りだな」

「『ゴブリン突撃部隊』とかは？」

「デメリットがある分マシだ」

「ん～、僕のデッキとは真逆だね」

「吹雪と、か？」

そういえば、よく知らない。優介のデッキは見せてもらったが、吹雪のデッキは未だ欠片も見ていない。

「うん。高威力でガンガン押す系だけど、それをさらに強化する感じかな？　恋の駆け引きも、自分からガンガン行かないとね！」

コイツに関してはほっとこう。

「自分から……」

「どうした藤原」

「な、なんでも無いよ！」

……青春だな。

「とにかく、俺のデッキは考えもしない高威力モンスターを使ってくる輩に対して、逆の土俵で叩き潰すタイプのデッキだ。強化こそしても、元から高いモンスターは入れん」

「ふ～ん。だから『逆巻く炎の精霊』や『因幡之白兎』か……」

「何だと思ってたんだ？」

「そういう趣味なのかと」

「さて吹雪、死合でもするか」

「字が違う！？」

「なにしてんのさ君達……」

嫌がる吹雪の首根っこを掴んで、無理矢理テニスコートに入ろうとすると、先客が居た。
程よい長さに切り揃えられた髪。爽やかに笑いかけ、キラリと光る白い歯がまぶしいそいつは、

「おお、なんと美しい！　是非僕のパートナーになって頂けませんか？」

何故かナンパしていた。

「あら嬉しい♪　でもごめんなさい、私はもう彼がいるのよ」

そして振られた。

「吹雪。あそこで振られている男は誰だ？」

「綾小路ミツル。オベリスクブルー所属の一年でテニス部。綾小路モーターズの御曹司でデュエルの腕は上の中。自惚れが強い上にナルシスト」

「要約すると馬鹿か」

その綾小路とやらは先輩らしきブルー女子に振られた後軽くｏｒｚな格好をしていたが、気を取り直したのかまた女子に声を掛けていた。

と、そこへ歩いてくる一人の女子生徒。そしてその顔に、俺たちは見覚えがあった。

「おや？　あの子は竜剛院さんじゃないかな？」

竜剛院真理（まり）。我らが藤原優介の月一試験の対戦相手にして優介の思い人。

だが俺の勘が囁っている。あいつは間違いなく、満更でもないと。

まあそんなことは置いておいて、その竜剛院に綾小路が目を付けてしまった。

……目がハートに見えたのは気のせいか？

「おお……美しい！　待ってくださいお嬢さん！」

「え？」

案の定声を掛けられた彼女は、不運にも捕まった。

「マドモアゼル、お名前は？」

「え……り、竜剛院、ですが……」

「竜剛院さん！　なんと力強く、そして気品ある名前だ！」

……うざい。

「もし俺がボールを打ってあいつに当たっても、それは事故だな？」

「ストップ。とりあえず落ち着いて」

軽い衝動に駆られていると、二人の会話はドンドン進んでいた。

「どうだい？　これから一緒にお茶でも」

「いえ……ですから」

「遠慮すること無いさ。ほんの数分で構わないからさ」

「あの……私は……」

……ああ、イライラする。

無理矢理誘綾小路もそうだが、はっきりしない竜剛院も悪い。

いやならばっさり言ってしまえばいいものを、中途半端に言い訳するものだから相手はさらにつけ上がっていく。

そして何より、邪魔だ。コートの真ん中で話しているんじゃない。

「ケイ。一発ガツンと言ってやってよ。実技試験の時みたいに」

「……まあ……そうだな」

反省しているわけじゃないが、後悔はしている。衆目の前であんな啖呵切ったんだからな。

あれに比べれば、今回は大したことじゃないだろう。だが何故だ。

俺の中の警報がレベル２位の危険度を示している。

ちなみに危険度は１から１２まであり、１は躓いてこける程度。１

2は「俺死ぬんじゃね？」レベルである。
今回は2なので「面倒なことになりそうだな」レベルが精々だ。
とりあえず、吹雪の言葉通りハッキリ言ってやることにした。

「オイ、綾小路とやら」

「そう言わずに……ん？　なんだい君は？」

「竜剛院を陥落は無理だぞ。先客がいるからな」

暗に「お前に入り込む余地はねえよ」と言ってやる。

「な、なんだってー！？」

「だから大人しく諦めろ。そして試合の邪魔だからどけ」

流石に自分のチャンスがないと知り、項垂れる。いいから早くどけ。
と、置いてけぼりだった竜剛院が話しかけてきた。

「あの……」

「ん？　何だ、この男のほうが良かったか？」

「いえ、そういうわけでは……」

またもハッキリしない言い方。これは確かに誤解するな……、それ
もコイツみたいな自惚れには効果絶大だ。

「あのな竜剛院……」

「決めたぞ！」

俺が問題を指摘しようとしたら、復活した綾小路がビシッ！　と指を突きつけてきた。

そして、思いもよらぬ、急転直下２７０。位的外れなことを言ってきた。

「君に、彼女とのフィアンセの座をかけたデュエルを申し込む！！」

……。

「ハア？」

多分、俺がアカデミアに入学して、初めて頭が真っ白になった瞬間である。

「あれ、ケイデュエルするの？」

「どうやったらテニスからデュエルになるんだ……？」

「やあ優介、亮。何か色々面白くなりそうだよ」

「あ、藤原さん……」

「え？　あ、り、竜剛院さん……こ、こんにちは」

「は、はい。こ、こんいちは……」

（（噛んだな））

俺達がデュエルの用意を進めていると、他の皆が集まってきた。
現在デュエル用にデッキの調整中なのだが、離れた所で同様に調整している綾小路から、並外れた怨念が漂っている。
……どうしてこうなった。

「ところで、貴方達は……」

「む、そうだな。デュエル開始まで、自己紹介でもしておくか」

「そうだね。時に竜剛院さん」

「え、はい」

吹雪が何かをやらかすようで、不意に指を一本立て空へ向けた。

「君の頭上には何が広がっている？」

「……天？」

「ン～～～！　ジョイン！」

『天』というワードに続くように唸り出し、決め台詞（？）とともにサムズアップした。

「……吹雪と言います。以後よろしく」

「……あ、はい。竜剛院真理です。よろしくお願いします」

恭しく頭を下げたのはいいが、一方の竜剛院はポカンとしていた。というより吹雪。お前部屋に閉じこもっている事が多いと思っていたら、そんなこと考えていたのか？　暇な奴だ。

まあ流石にそんな馬鹿げた挨拶は亮はしなかった。……若干見てみたい気もするが。

「早乙女！　こちらの準備は完了だ！」

おっと。もういいのか。

「こっちも終わったぞ」

「このデュエルの勝者こそ、彼女のフィアンセに相応しい！　僕は今からそれを証明してみせる！　いざ、デュエル！！」

だから勘違いだと……。いや、言っても無駄か。

仕方ない。やるからには勝たせてもらうか。

「俺の暴走について来られるか？　デュエル！！」

ケイ　ＬＩＦＥ　４０００

綾小路　ＬＩＦＥ　４０００

「先攻は貰う！　ドロー！　僕は魔法カード『サービスエース』を発動！　自分の手札のカードを一枚選択し、相手にそのカードの種類を当てさせる。さあ！　これは魔法・罠・モンスターのどれだ！」

知らねえよ。
とは言えない。適当に当たりをつけるか。

「じゃあ、罠」

「フフン。残念、モンスターだ！　『サービスエース』の効果により、１５００ポイントのダメージを受けて貰う」

「ぬ……」ＬＩＦＥ　４０００　→　２５００

選んだカードは『神聖なる球体（ホーリーシャイン・ボール）』。外れるとダメージを喰らうのか。
……というかあの通常モンスターを使う奴なんて、初めてみたぞ。

「この『神聖なる球体』は『サービスエース』の効果で除外される。更に僕はカードを一枚セットしてターンエンドだ！」

「綾小路が先制したか」

「モンスターを出さなかったってことは、相応の罠が仕掛けられてるってことかな？」

「俺のターン。ドロー」

さて、モンスターを出さないということは攻撃反応型罠か？　だったら始めは様子を見るか。

「俺は『レッグル』（ＡＴＫ３００）を召喚。さらに装備魔法『進化する人類』を装備する。この効果で『レッグル』の攻撃力は２４００となる（ＡＴＫ３００　→　２４００）」

「出たねえお得意の装備カード」

「手軽に攻撃力が上がるからな。直接攻撃が主流のケイのデッキだと、かなりの脅威になる」

「たしか、あのモンスターで試験受けてましたよね……？」

「……ケイ、容赦ないからなぁ」

そこ、外野煩い。

「『レッグル』でプレイヤーをダイレクトアタック！　『シザー・クラッシュ』！」

伏せカードなど眼中に無し、とばかりにプレイヤーに襲い掛かる。だが綾小路は少しも慌てることなく、見かけ上冷静に伏せカードを発動した。

「罠発動『レシーブエース』！　相手モンスター一体の攻撃を無効にして、相手に１５００ポイントのダメージを与える！」

レッグルの攻撃は突如出現した巨大なラケットに跳ね返された。

「ぐ……」ＬＩＦＥ　２５００　↓　１０００

「相手がダメージを受けたあと、僕はデッキの上から三枚を墓地に送る。彼女への愛を考えれば、これぐらい安いものだ！」

だから勘違いだ。

「何……？　彼女への愛って……」

優介。それはお前が知らなくていいことだ。少なくとも今現在では。

「……俺はカードを二枚セットして、ターンエンドだ」

「僕のターン、ドロー！　僕は『伝説のビッグサーバー』（ＡＴＫ３００）を召喚！　さらに装備魔法『デカラケ』を装備する！」

ごついテニスマンが現れたと思ったら、よく分からないでかいラケットを背負った。

……コイツのデッキ、間違いなく『テニスデッキ』だな。ボールとかサーバーとかあるし。

「ビジュアル的に無しじゃない？」

吹雪、それを言ってはいけない。彼も真剣（モンスター）なんだからな。

「『伝説のビッグサーバー』は直接攻撃をすることが出来る！　行けビッグサーバー！　『ツイ○トサーブ』！！」

お前はどこぞのオチビか！

……できればブー○ランス○ークも頼む。

「罠発動『ガード・ブロック』！　戦闘ダメージを０にして、カードを一枚ドローする」

「ちっ、防がれたか。まあいい、僕のモンスターには『デカラケ』が装備されている。これがある限り装備モンスターを狙った攻撃は毎ターン一度だけ向こうに出来る。次のターンこそ、確実に当てる

！」

……意気込んでるところ悪いが、その装備は……。

「綾小路」

「ん？　君は確か丸藤亮？」

「悪いが、その装備は無力だ」

亮も気付いていたか。当たり前だが。

「ふん。何をいっているんだ丸藤。この装備魔法がある限り……」

「ケイは基本的にモンスターを攻撃しない」

「……へ？」

そう。俺は直接攻撃を主とし、モンスターなんぞ二の次三の次である。

いくら戦闘破壊対策したところで、効果は得られないといえよう。

「つ、つまり……僕の『デカラケ』は……」

「全くの無駄。プレイングミスだ」

「ノオオオオ！！」

バッサリ言い放つ亮。容赦の欠片も無い。

さて、ターンエンドらしいし、ｏｒｚなあいつは放っておこう。

「俺のターン、ドロー。俺は『マジック・ストライカー』（ＡＴＫ６００）を召喚。そしてダイレクトアタック！　『マジックハンマー』！」

『トリャアアッ！！』

「ほべらっ！？」ＬＩＦＥ　４０００　→　３４００

でかいハンマーで容赦なく綾小路の頭をぶっ叩いた。衝撃はあるはずはないのだが、ノリのいい奴だ。

「そして『レッグル』（ＡＴＫ２４００）でダイレクトアタック！　『シザー・クラッシュ』！」

「あだだだだだだ！？」ＬＩＦＥ　３４００　→　１０００

ビッグサーバーを無視してプレイヤーへ向かったと思ったら、今度は頭に噛み付いた。アレは痛い。衝撃あるはずないけど。案外綾小路は良い奴かも知れない。ノリ的な意味で。

「ケイと綾小路のライフが並んだか……ここからが正念場だな」

「でも『レッグル』の攻撃力は、ライフが並んだことで元に戻りますね」

「カードを一枚伏せて、ターンエンド。……もう終わりにしないか？」

さっきから言っているが、このデュエルは竜剛院のフィアンセ（？）

を決めるものらしい。
はっきり言って興味ない。そもそも彼女は優介が好きなはずだ。俺はそれを応援する。
だが綾小路はそうもいかないらしく、胡乱な目をして立ち上がった。

「ふ、ふふ……はは。終わり？　終わりだと？　君はもう勝った気でいるのかい？」

アンデッドのようにふらつきながら話す綾小路は思いのほか不気味だった。
本人は気にしていないようで、尚も話し続ける。

「僕は諦めない！　彼女のフィアンセとなるのはこの僕だ！　その為にも、このデュエル！　負けるわけにはいかないんだあ！！」

「ん～青春だねえ」

「ねえ吹雪。さっきから言ってる「彼女のフィアンセ」って何のことなんだい？」

「竜剛院さんの婚約者を決めようって話」

「なんだって……？」

何だ！？　今度は優介から黒いオーラが出てきたぞ！？

「僕のターン！　ドロー！　……よし！」

綾小路、早くしてくれ。何故か分からないが俺の中の警報がレベル１０を指している！

「僕は手札から永続魔法『デュース』を発動！　互いのライフが１０００の時のみ、発動できる！　このカードがフィールド上に存在する限り互いのモンスターは一ターンに一体しか攻撃できない！」

この状況でなんて面倒なカードを出しやがったんだこいつは。

「さらにこのカードが発動している間、互いのプレイヤーはライフポイントが０になっても負けとならず、二回連続でダメージを受けたプレイヤーの勝ちとなる！　この効果はターンを挟んでも有効で、相手にダメージを与えられた時点で無効となる！」

本当に面倒なカードだな！　さっさとしやがれ！

「僕は『伝説のビッグサーバー』（ＡＴＫ３００）でダイレクトアタック！　『ドラ〇ブＢ』！！」

だからお前はどこぞの天才一年か！

今回は対抗のしようがなく、甘んじて喰らうことになった。

「ぐう……」ＬＩＦＥ　１０００　↓　７００

「さらに『伝説のビッグサーバー』が直接攻撃に成功したとき、デッキから『サービスエース』を一枚手札に加える！　そして僕はそのまま発動だ！　さあ早乙女、このカードはなんだ！」

……もうさ、我慢しなくていいよな？

何で俺がこんなわけのわからないデュエルを受けないといけないんだ……。

何で俺は優介から黒いオーラをぶつけられないといけないんだ……。

何で一緒に居た吹雪じゃないんだ……。
何で……。

「おーい、ケイー？」

「さ、早乙女？」

「……だ」

「え？」

「モンスタァだああ！　綾小路イィ！！」

「ギャイ！？　せ、正解だ。『サービスエース』の効果は無効になって、ターン終了する……」

「俺のターン！　ドロー！」

「……遂に切れたか」

「……まあ、あれだけ訳のわからない事並べられたらねえ……」

綾小路が見せたのは『メガ・サンダーボール』。……さっきからボールだなんだのカードばっかり入れやがって……。

「手札を一枚捨て、装備魔法『閃光の双剣－トライス』発動！　『マジック・ストライカー』に装備する！」

デュエルならデュエルらしく……。

「トライスの効果で攻撃力は５００下がるが、二回攻撃が可能となる！」

カードを使って戦うんだよ……。

「デュエルにまでテニス持ってきてんじゃねええ！！　『マジカル・ツイン・ソード』！！」

双剣を手にした『マジック・ストライカー』が、モンスターを無視して綾小路に迫る。

だけどなあ……それだけで済むと思うな！

「罠発動！　『ライジング・エナジー』！　手札を一枚捨て、『マジック・ストライカー』の攻撃力を１５００アップする！」

これにより『マジック・ストライカー』は攻撃力１６００の二回直接攻撃モンスターとなった。

当然伏せカードを用意していなかった綾小路に防ぐ術など無く、

「あぎゃあああああ！！？」ＬＩＦＥ　１０００　↓　－６００　↓　－２２００

『デュース』の効果により二回連続ダメージを受け敗北。ライフも０を突っ切ってマイナスとなり、俺は完全勝利を収めることとなった。

……さて、俺の腹の虫はまだ治まらないな。

どうしたものかと思っていた矢先、

「う、ううう……ウワアアーーー！！」

綾小路はテニスコートを抜け、どこかへ走り去っていった。
居なくなったことで思い出したのだが、俺は当初の目的を果たすことにした。

「吹雪」

「な、何？」

「構えろ。死合するぞ」

「やっぱり字が違う！？」

吹雪を相手に地獄の千本サーブを開始。日頃のストレスを一気に解消することにした。

「ケイ？　フィアンセの件でちょっと話があるんだけど？　あと吹雪もね？」

「さあ吹雪！　まだまだいくぞ！」

「ＯＫさケイ！　バンバンこい！」

聞こえない。俺には優介が地獄の底から湧き出るような声を出してＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩを望んでいることなど、何も聞こえない。
その後数十本サーブをしたところで、今日の授業は終わりとなった。
後日、筋肉痛で女子に介抱されている吹雪と、楽しげに竜剛院と話している優介が何人にも目撃されたのであった。

「……何をしているんだお前は」

「調子に乗りすぎただけだ……」

無論俺も筋肉痛で痛かったのだが、吹雪のように介抱されるのだけは嫌だったので自力で動いた。それに付き合う亮も、案外暇である。

「デュエルなんてーーー！　大っ嫌いだーーーー！！」

尚、数日後夕方のアカデミアでは海に向かって叫んでいる綾小路が目撃されたそうな。

理由を知る生徒から話を聞くと、「懲りずに竜剛院をナンパしたら、デュエルが格好悪かったって断られてた」とのことである。

七／後日と庭球　もっと熱くなれよ！（後書き）

アニメオリジナル分かりにく！
ケイ「殆どオリカに近いしな」
でも使わないわけにはいかないのだよ。綾小路君を出すにはどうしてもこのカード達が必要だからね。
ケイ「アイツは不憫だったな」
数日後また振られてるしね。所詮モブの運命なのさ。
ケイ「それはそうと、最近新しくゲームが出たな」
タッグフォース5ね。獣デッキが初期だったのは嬉しかった。これで吹雪のデッキが作れる！
ケイ「アニメからも分かる通り、獣、獣戦士が中心だからな」
でも彼の出番はもう少し先です。お楽しみに！
ケイ「しなくても構わんぞ。所詮作者の遊びが混じったデッキだからな」
ゴフッ。そ、そこまで言わなくても……。
ケイ「ふん。早く次回予告を始めろ駄作者が」
あ、不思議と嫌じゃな……っは！？
ケイ「……危ない扉を開く前に予告を始める。次回は優介の未来の嫁候補、竜剛院の話だ」
といっても彼女の過去とか、そういったことじゃないですよ。ちょっとした彼女の葛藤を書くくらいです。
ケイ「あと新キャラも出るらしい」
次回、『慕情と聞屋』。みなさん、最速を自称するあいつが出ますよ！
ケイ「皆さんと言えるほど見てくれているのか……？」

八／慕情と聞屋　新キャラですよ（前書き）

今回は大事なお知らせがあります。
ケイ「藪から棒になんだ」
はい。実は作者は高校３年生なんですが、これから受験です。
ケイ「大体分かったが言ってみろ」
これから暫く更新が無いと思われます！　申し訳ありません！
ケイ「一応本気で大事な時期なので、駄作者も頑張っています。駄目なりに」
合格したら更新再開します。ただ推薦が無理だったらセンター受けるのでいつになることか……。
ケイ「終わり次第書かせるので、暫しお待ち頂きたい。本当に申し訳ない」
今回の更新で一旦休載します。では本編へどうぞ！

八／慕情と閒屋　新キャラですよ

「いいですか皆さん？　デュエルにおいて、ポーカーフェイスは有効な手段です」

本日の授業の講師はラーイエロー寮監の樺山先生である。
実家はカレー屋を営んでいて、ことあるごとにカレーを授業に持ち込むことで有名な先生でもある。
ただ残念なことに、その存在は限りなく薄く、たまに校長からも忘れられるほど薄い。

「表情を読ませないことで、相手に自分の手の内をさらけ出さないようにするのです」

樺山先生が担当するのは主にデュエル理論。中々興味深い内容で面白いので、大半の生徒はまじめに聞いている。
一部例外もいるが、そういう生徒は樺山先生から特別指導が待っている。簡単に説明すると……、

「というわけで、皆さんにはポーカーフェイスを鍛えて貰うために、この特製劇辛カレーを食べて貰います。まずは天上院君から」

……まあ、こういうことになる。

「ぬぉわあああ！！　かっらあぁぁぁぁい！！」

「落ち着け吹雪。顔がピカソみたいだぞ」

「隙あり！」

パクッ

……！

「この辛さの中に潜む仄かな甘み。これは熟成されたパイナップルを隠し味として比率０．１ほど入れられている！　さらに表面に見えないほど細かく刻まれカレーと一体化したこの野菜はトマト！しかもそれとは対照的にふんだんに使われている唐辛子はただ辛さを追求するだけでなく喉越しから後味まで全て爽やかにしてくれる特別調合されたものか！」

「またキャラ変わった……」

「缶コーヒーの一件以来、自分から試しているようだ」

「……なんなんだ一体」

「……であり、敢えて一言で言わせて貰うならそう！　うーーーまーーーいーーぞーーー！！」

「「味皇様！？」」

「遂にここまで極めたか……」

※……しばらくお待ち下さい……

「ほっほっほ。天上院君はまだまだ、鍛練が足りませんね。しかし早乙女君はよくわかりましたね」

多少暴走したがようやく落ち着いた。しかし樺山先生、何事も無かったかのように進めるのは如何かと思います。
なお先生は吹雪が絶叫し、俺が精神錯乱まで起こしたカレーを食べながら、なんのアクションもなく授業している。

「さすが樺山先生だ。このカレーを食べても、顔色を全く変えない」

カレーは全員に配られているため、同様に食べながら亮も授業を受けている。
……お前もだよ。汗もアクションも何一つとしてしないんだからな。

「丸藤君のように激辛カレーを食べても顔色一つ変えないくらいのポーカーフェイスを身に付けられれば、相手に余計な情報を与えずに済みます。みなさん、頑張ってくださいね」

今日の授業はひたすらカレーに耐えることになった。
戦跡としては、
俺：あまりの美味さに感動
吹雪：辛さに絶叫
優介：辛さに悶絶
亮：完璧なポーカーフェイス
まあおおよそ予想通りの結果となった。

「さてカレーも食って腹いっぱいになったし、何をするか」

今俺は一人で校舎内をぶらついている。他三人は用事があるとかで別行動中である。
今日の講義も全て終わり、各自好きなようにうろついているが、その数は少ない。
元々アカデミアは一つの島全体がデュエルアカデミアとして成り立っていて、その中心に校舎があるだけでここが全てではない。
寮に戻るものもいれば森に探検にいく者もいるだろう。よって校舎にいる生徒はかなり少なくなっている。
といっても全体的に見れば百人近くはいるのでそこまで少なくはないのだが。

「……む？」

適当に廊下をぶらついていた俺の前に、珍しい顔がいた。
そいつは購買の前でウロウロしているのだが、今はいないが今後くるであろう通行人にとっては少々邪魔だろう。
……しかたない。

「何をしているんだ？」

「ひゃい！？」

なんとも可愛らしい声を上げて驚いたのは竜剛院。優介が現在進行形で気になっている相手である。

「購買に入らないのか？」

「え、あ、えと、その……」

言葉が尻すぼみになっていく。しかしこの反応は……。

購買の中を覗いてみれば、そこには他のオベリスクブルー生と一緒にカードを買っている優介の姿があった。
……つまりこれはあれか。優介がいたから声を掛けようと思ったがその隣に別の生徒がいたから声を掛けづらいと。そして隣の生徒がいなくなるのを待ってから話しかけようと悩んでいたところ、俺が声を掛けた、というところか。
……もどかしい。そして妬ましい。

「あ、あの！」

「ん？」

「ば、場所、変えませんか？」

（私何してるんだろ……）

思わずため息も出てしまう。
あの後場所を移動して校舎の裏まで来た私達は、適当に壁に寄りかかっていた。
そもそもどうして早乙女さんを連れてきてしまったんだろう。ただ藤原さんと話したかっただけで、こんなことするつもりはなかったのに。
でも、藤原さん……楽しそうに笑ってたなあ……。

「優介――藤原のことでも考えているのか？」

ドキッ

「大方さっき他の奴と話していたのを思い出していたんだろう？」

……大当たりです。

普段話している藤原さんはさっきのような笑顔じゃなくて、ちょっと緊張した面持ちだったと思う。

多分、それは私が他の生徒に疎まれていて、周りを気にしながら接しているからじゃないかと思っている。

本当の所はどうかわからない。でも、思い切って聞く勇気も出てこない。

「自分が迷惑をかけていないだろうか――なんて考えていそうな顔だな」

その声に、いつの間にか項垂れていた顔を上げたら、目の前に早乙女さんの顔があった。その目は真っ直ぐに私を見ていて、恥ずかしさの余り思わず顔をそらしてしまった。

……あの狂人っぷりから女子の間ではいい噂は無いけど、結構整った顔だ。直視なんてとても出来ない。

それにしてもどうしてこう、ピンポイントでわかるんだろう。

「……俺は回りくどい説明が苦手でな。全て結論からしか言えない」

……？　何を言っているの？

「藤原は――あいつはお前のことが好きだぞ？」

「！？」

ドクンッ

心臓が思いきり跳ねた気がした。

「……その反応を見ると、満更でも無いか？」

「わ、私は……」

私は？

私は何？　なんて言おうとしたの？

そんなこと思ってない？　別に好きでもない？

私は……。

「おおおっとぉーーー！？　何しているんですか君達はーー！？」

途端、何故かとても迷惑な気配を漂わせた声が響いた。

それは早乙女さんも同じようで、顔をしかめて声のした方を見て……いえ、睨み付けていた。

「壁側に女子生徒……その正面に不良生徒……なるほど、自体は全て把握しました。恐喝は犯罪ですよ！」

……えーと。

誰ですか？　この人は。

「誰だ」

警戒心全開で早乙女さんが聞いていた。まあ、この状況を見られていきなり恐喝の現場とか言われたらそうなりますね。

あと不良とも言われていた。確かに今は眉間にしわを寄せて怖く見えるけど。

「誰だ、聞かれれば答えましょう！　私こそアカデミア新聞部の期待の新星！　その耳は世界の隅でも聞き取れて、その足は世界の何処へも駆け抜ける！」

ああ、頭の可哀想な子なんだ。うん、優しくしてあげよう。

隣を見れば、早乙女さんも唖然としている。こんな人がいきなり騒ぎ出せば当然かもしれない。

「モットーは即座即断即決即答！　そして答えましょう私の名は風見ヶ丘絢と言います以後よしなに！」

「そうか、よろしくブンブン」

「誰が鴉天狗ですか！　それに文じゃなくて絢ですから！」

どうして互いにネタが解るんだろう。実は二人ともその手の道に入ってしまったんじゃ。

「ネットを彷徨っていたら『学校に良く喋る女子新聞部員がいたらブンブンと名付けろ』というコメントがあってな」

「そんなこと書いてあるサイトは信用しちゃいけません！　なんですかそれ、『あやや！』とでも言えばいいんですか！　言いますよ、言っちゃいますよ！？」

「勝手にしろ」

「まさかの無関心！？」

「あのー……」

どうしよう。話についていけない。

「ん？　ああ、話が大分逸れたな」

と、早乙女さんがようやく正気（？）に戻ってくれた。

「さて、議題はいつ優介に告白するか、ということだったか？」

「全然違いますからね！？　話が急に飛躍しすぎです！」

「おおっとこれは大スクープの予感がぁ！？」

「貴女は黙ってて下さい！」

全く話が進まない！　性格はあれだけどまともな人だと思っていたのに！

「冗談だ。とりあえずお前が優介を好きだというのは解った。問題はこれからどう発展させていくか」

「ちがっ……うとは言い切れない……」

どうしてこの人はイチイチ核心を衝いてくるんだろう。

私がそんな疑問を抱いていると風見ヶ丘さんが会話に入ってきた。

「話を聞くところ、竜剛院さんがその優介さんを好きで、尚且つ早乙女さんはそれを応援しているとみていいんですね？」

「まあ、大まかにはそうだな」

「ならば話は簡単です！」

風見ヶ丘さんは胸――うん、サイズは私が勝ってる――を自信満々に叩いた。

「この私風見ヶ丘絢が新聞部という特権を乱用寸前までこき使い、優介さんの個人情報を全て洗い出して差し上げましょう！　そりゃもう個人情報とかプライベートとかそういうものまで微に入り細に入り根掘り葉掘りその他諸々と！！」

ゴンッ！！

「やめろ犯罪者予備軍」

「ふ、普通女の子をグーで叩きますか……」

「と言うより藤原さんに迷惑がかかりそうなのでやめて下さい」

この人……結構面白いかもしれない。

「ところで、何故俺達に協力する。ついさっきまで部外者だったお前が」

「面白そうだから！」

「馬に蹴られて死ね」

「ひどっ！　さてはＳですね！？」

「そもそも私達まだそんな関係では無いんですけど……」

「まあ理由なんていいじゃないですか。私は困っている人が居たら助けろと教えられて育った自慢の一人娘なんですから」

「本音は？」

「最近書くことがマンネリ化してまして……」

「記事にする気満々じゃないですか！」

「協力させて貰えないならあること無いこと書きまくりますよ！」

「ゴシップなんぞ書いたら廃部に追い込んでやるぞ」

「やめて下さいよ、今部員私だけなんですから」

「一人!?　それ部じゃないでしょう!?」

「失礼な！　活動しているのは私だけですけど、実はもう一人いるんですよ！」

「どちらにせよ規定人数達してないじゃないですか！」

「事実なんて集団心理の前では無いも同じです！」

「そろそろ黙れ。話が進まん」

というわけで閑話休題。本題に戻ります。

「俺から見た感じ、間違いなくあいつは惚れている」

「そ、そうなんですか……？」

「だからいつアタックしてもほぼ必ずＯＫして貰えるはずだ。ただ、あいつは少しへたれだが」

「青春ですねえ。じゃあ私は」

「黙って静観してろ」

「あややや……」

あ、本当に使った。

「大丈夫ですよ。ちょっとその藤原さんに女性の影が無いか調べるだけですから」

「ならいいが」

「じゃ、じゃあ風見ヶ丘さん。一つ調べて欲しいことが……」

「何でしょうか！　何でも言って下さい、欠片も漏らさずに完璧に調べ上げてみせますから！」

風見ヶ丘さんの顔が凄く輝きだした。よっぽど暇だったらしい。

「は、はい……では、あの、藤原さんの好きな料理を……」

これは私が最近考えていたこと。見たところ、昼食は毎回学食か購

買のパンだったから、お弁当を作ってもっと親密になりたいなって……。

「はい、はい！　お任せ下さい！　彼のここ一ヶ月のメニューから割り出しましょう！　さらには彼の周囲の方にも聞き込みましょう！」

「そういえば俺も知らないな」

「あややや、意外と薄情なんですね」

ゴンッ！！

「余計だ」

「すみまひぇん……」

こんな調子で今回のよくわからない会合（？）は終わった。

次回があるかはわからないけど、たまにはいいかも知れないと思った。

八／慕情と闇屋　新キャラですよ（後書き）

ケイ「会話だらけだな」
会話文中心に挑戦してみた。
ケイ「それはさておき、新キャラか」
はい新キャラです。というわけでブンブンどうぞ！
絢「だから私は絢ですから！　幻想な世界最速じゃありませんよ！」
ケイ「モデルは見ての通りあの天狗だ。だが残念なことにバカだ」
絢「誰が？ですか！？　私に水デッキでも使えと！？　というか自己紹介させてください！」
ブンブン。以上。
絢「短っ！？　いやもっとあるでしょ！？　具体的には誰のヒロインになるとか、どんなデッキを使うとか！」
案はあるけどねー。でも出るのは大分先になるね。
ケイ「受験優先だしな」
絢「何でそんな忙しい時に書いてんだか……」
しかしおかしいな。当初の予定では絢はボケ担当のはずなのにここじゃツッコミしか入れてないぞ？
絢「貴方達のボケが酷すぎるからでしょ！？　ボケさせる暇を与えないくらい！」
ケイ「じゃあ何かボケてみろ」
絢「へ？　え、えーと……」
ボケれないじゃないか！
絢「いきなりできるか！」
ケイ「まあそんなことは置いといてだ」
絢「あ、はい。次回の更新はいつになるか分かりませんが、構想は大分固まっているようですね」
うむ。如何にケイを暴走させるかはいつも考えている。
「「……」」

ケイ「期待できないな」
絢「そうですね」
うるしゃい！　とにかく次回は１２月頃になると思います。というよりそこを目安に頑張ります！
ではまた会う日まで！

キャラクターのプロフィールとか　０３／０３更新（前書き）

何となくケイ達が分かりにくいとリア友に言われたので急遽作ってみた。
分かりにくかったり付け足して貰いたいことなど、ドンドン言って下さい。
話が進むにつれ、随時更新します。

キャラクターのプロフィールとか　０３／０３更新

早乙女ケイ
・オベリスクブルー一年生
・使用デッキ【弱者の意地】（ローレベル主軸のハイビート型デッキ）
・イメージは深い青髪にツリ目。亮たちと同じくらいの背丈。クールなのに熱い。
【備考】
趣味はレトルト集め。カードの情報収集。デッキいじり。
真紅眼（レッドアイズ）の産声を飲むと性格が豹変する。
デッキは一般的に雑魚と呼ばれるモンスターを使って組まれている。
いずれも攻撃力１０００以下。
今後の展開次第では別のデッキを使わせるかもしれない。
風見ヶ丘絢と相思相愛。けど互いに事実確認はしていない。
婚約指輪（？）を既に渡している。意外とプレイボーイ。
やっと１キルから卒業。テンションが高くなるとボケになる。

竜剛院真理
・オベリスクブルー女子の一年生
・使用デッキ【ドラゴンハート】（魔法罠を破壊してから、強力なドラゴンで特攻するタイプ）
・イメージは首くらいまである髪、いわゆるセミロングの茶髪。優介より頭一つ低い。Ｂカップ。
【備考】
優介の嫁候補。両想い。
元は虐められていたが実技試験をきっかけにそれも激減。少しずつ積極的に。

ＦＧＤを使うがあまり召喚しない。だが嫌っているわけではないらしい。
たまに妄想が暴走しちゃう子。優介といるときは甘甘だが、それ以外だと結構計算高い。

風見ヶ丘絢
・オベリスクブルー女子の二年生
・使用デッキ【ウィンドレディ】（ハーピィを使う風中心デッキ。羽箒も健在）
・イメージは……ブンブン。ブンブンがオベリスクブルーの制服着ている感じ。
【備考】
アカデミア非公認新聞部の部長。
当初の予定ではボケのはずが、何故かツッコミのポジションにいる謎な人。
早乙女ケイと相思相愛。けど事実確認はしていない。
結構乙女な思考回路。

［０３／０３更新分］
実は二年生（上記）。そしてデュエルが強いのに何故か知られていない伏線だらけの人。
優勝者インタビューの際に指輪が全校にばれた。どうなることやら。

［０３／０３新規記入］
薬田月夜（くすりだつくよ）
・オベリスクブルー女子の一年生
・使用デッキ【？？？】
・イメージは金髪ツインテ。ツンクール（絢にはクールデレ？）。

基本無表情で欲望に忠実。
【備考】
アカデミア非公認新聞部の一年部員。
絢を好(愛して)いている。無論性的に。
レズッ娘。ケイと絢の仲は応援するらしい。
姓名を逆にして、月夜を一文字にして読み方を工夫すると……？

←以下は原作キャラです

丸藤亮
・オベリスクブルー一年生
・使用デッキ【サイバー流】（殆どアニメと同じ＝公式チート）
【備考】
具なしパン大好き。あと相変わらず強い。
特に変更された点はなし。
ブラックデュエルディスク装着。カイザーに昇格。

天上院吹雪
・オベリスクブルー一年生
・使用デッキ【ビーストキング】（獣系のパワーデッキ。バルバロス無双）
【備考】
ブッキー。フブキング。ブリザード・プリンス。
様々な異名を持つが、今最もナウいは「愛の伝道師」。
割と変わるかもしれない。
司会に映える男ブッキー。嫉妬をものともしない男ブッキー。

［０３／０３更新分］
憑かれている。詳細は本文で。

藤原優介
・オベリスクブルー一年生
・使用デッキ【天空の戦士】（天使族のビートデッキ。オネストが中心で構成されている）
【備考】
多分一番魔改造される（されている）であろう影の主役。
具体的には彼女が出来ている点とか。妬ましい。
結構突っ込みに回ることが多い。

［０３／０３更新分］
自分で言った台詞に悶絶する。主に恥ずかしすぎて。

キャラクターのプロフィールとか　０３／０３更新（後書き）

感想・意見・訂正などお待ちしております。

九／鎌倉と暗躍　最後の一個は譲れない（前書き）

遅くなりました！　仮復活です！
ケイ「推薦落ちたから引きこもってた分伸びたな」
グホアッ！！だ、ダイレクトアタックだと……！！
ケイ「内容は期待していいのか？」
もちろん！　……とは言えないけど頑張った！
ケイ「見てやってください。本編どーぞ」

九／鎌倉と暗躍　最後の一個は譲れない

「雪の日に鎌倉なんて久しぶりだなぁ」

めでたく何事も無く冬休みを迎えた俺たちは『積もるだけ積もりました！』と言わんばかりの初雪に感動を覚えたのかどうかは定かではないが、とにかく何だか分からないテンションのまま鎌倉を作り上げた。

……うむ、暖かい。やはり自然な温もりはいいものだ。

ちなみにデュエルアカデミア入学後初の長期休暇が冬休みというのは、ここの入学方式にある。

デュエルアカデミアの新学期、新学年は秋から始まる。よって生徒の入学式も秋に執り行われるため、最初の長期休暇は冬休みということになる。ちなみに、それ以前から入れる制度として推薦入学などもあるのだが、俺達は全員秋からの新入生である。推薦で該当するのは、前デュエルした綾小路だ確かそうだったはずだ。そういう奴らは、他の生徒より少しだけ長く一年生を経験することになる。

「吹雪はこういうの好きだと思ったんだが、やらないのか？」

「昔はやったんだけどね～。明日香が大きくなってからは構ってくれなくて……」

「明日香？」

「うん、妹」

「妹いたんだ」

優介が七輪で餅を焼きながら相槌を打ってくる。ちなみに七輪は俺の自前、キャンプセットの一つである。
鎌倉といえば七輪で餅。これだけは譲れない。まあ焼いた後なら好きにして貰って構わないが。最初は絶対に餅だ。海苔巻いた磯辺餅で。
なお亮は七輪で暖を取りつつ本を読んでいる。表紙を見てみると『デュエル理論～上級者編～』とか書いてある。著者はツヴァイン・シュタインとか言うらしいが、生憎知らん。

「昔は『兄さん、兄さん』って後を追っかけ回してきたのに、最近は反抗期が混じっちゃって……はぁ……」

「ははは……災難だね……」

「いくつなんだ？」

「十三歳」

そりゃ混じるだろ。難しい年頃だしな。
……難しい年頃、か。

「ねえ優介。ケイが何か黄昏てるよ」

「思うところがあるんだろ？　そっとしておいてあげなよ」

昔は……さぁ、『お兄ちゃん、お兄ちゃん！』て後ろをついて回ってきたのに、最近じゃあ妙にしっかりして……。しかも前は俺にアドバイス貰いながらデッキ作ってたのに、最近じゃあ自分でカード選んで組んじゃうし……。あ、でも少しはアドバイスしてるけど…

…。でも殆どは自分で組んであるから下手なことは言えないし……。

「爪楊枝で餅を突きだしたよ……」

「しかも膨らんだところばかり……」

今回来る時だって表面上じゃ涼しい顔して来たけどよ、内心じゃあ「寂しい」とか「行かないで」とか言うのを期待してたんだぜ？　それなのに何て言ったと思う？　「私、お兄ちゃんが帰ってくるまでに絶対強くなってるからね！」だぜ？　強くなるのは構わねえよ？　むしろ大歓迎大感激だぞ？　でもそこはやっぱり引き止めてもらいたかったなぁ……。でもその後の「強くなったお兄ちゃん、私楽しみにしてるね！」って笑顔で言われた時は嬉しかったなぁ……。

「今度は七輪の網に楊枝を走らせ出した……」

「……そろそろ不味いかな……？」

会いたいなぁ……。でも今月の定期便はもう行っちゃったしなぁ……。次くるのは月末かぁ……。遠いなぁ……。

「ケイィ！　目を覚ませェ！！」

「ダメだ！　それだけはやっちゃいけない！！」

「……全く」

いっそ泳いで行くか……。でも卒業して会うって言ったばかりで今会って「お兄ちゃんの根性無し！」とか言われて嫌われたら俺マヂで死……ハッ！！

「お……俺は何を……」

「ああ良かった！　無事だったんだね！」

「流石に今のはやばかったよ……いきなり手を網の上に乗せようとするんだから」

「何を考えていたのか知らないが、多分大丈夫だ」

大丈夫……そうか、そうだよな。

「さあいい感じに焼けたよ。そろそろ摘まもうじゃないか」

「磯辺餅で頼む」

「はいはい」

未来のことばかり考えていると鬼に笑われる。だったら今を生きて、全力を出して暴走してやる。

「はい。磯部巻き」

……まあ、まずは腹ごしらえだな。

わいわいと騒がしくも楽しく過ごす俺達を、一匹の虫がじっと見ているのを、俺たちは終ぞ気がつかなかった。

「……ふむ。今のところ、目立った行動は無しか」

私は数あるモニターの一つを凝視していた。そこには楽しそうに餅を頬張る四人の男子生徒の姿が映っている。

エリート揃いのオベリスクブルーでも屈指の実力を持つ彼らは、この冬休み実家に帰らずに寮に残るという。多くの生徒が帰省する中、帰らないといのはそう珍しいことではない。事実、オベリスクブルーだけでなくオシリスレッド、ラーイエローでも残っている生徒はいる。

「……まあ、この際どうでもいいことですね」

そう、今問題なのは、この残っている彼らをどう”利用するか”ということ。

私は振り返って、人一人が入れるような透明なカプセルらしき容器を見た。その中ではオレンジ色に発光する気泡が大小様々な形で漂っていた。

「影丸理事長の残したデュエルエナジー吸収装置……。あの人はこれで昔の力を取り戻そうとしていたようだが……私は違います」

カプセルに近づくと、表面に映る私の顔が醜く歪む。いや、今の私の顔はこれと同じくらい酷く歪んでいるだろう。

これを使えば、私は私の野望に王手をかけることができる。そう思えば思うほど、カプセルに反射する私の顔は更に捻れていく。

「もっとも、その為には彼等に手伝って貰わなければならない訳ですが……おや？」

再びモニターに移る彼等に注目する。そこでは、残った一つの餅を巡って早乙女君と天上院君が争っている様子が映し出されていた。

『僕が先に触った！　したがってこの餅は僕のだ！』

『いいや俺の方がタッチの差で早かった！　俺のだ！』

『『ググググ……！』』

……。

なんと下らない争いだ。

『そこまで言うなら、デュエルで決着をつけようじゃないか！』

『上等だ！　表へ出ろ！』

……！　これは願っても無い展開だ。オベリスクブルーでも上位のこの二人が戦えば、間違いなく高密度のデュエルエナジーが手に入るはずだ。

ふふふ……精々私のために頑張ってくれたまえ。

「いくぞケイ！　僕は僕のため、負けるわけにはいかない！」

「何を言う！　俺も俺のため、全力爆走でお前を討つ！」

「「いざ、デュエル！！」」

「……いや、餅を半分にすればいいだけの話じゃないのか？」

「そりゃ言いっこ無しだよ、亮」

ケイ　ＬＩＦＥ　４０００
吹雪　ＬＩＦＥ　４０００

「先攻は僕が貰う！　ドロー！」

吹雪は先攻型のデッキか。さあ、どう出る！

「僕は『激昂のミノタウルス』（ＡＴＫ１７００）を召喚！　更に二枚を伏せてターンエンド！」

ミノタウルス……ということは、獣・獣戦士・鳥獣族系のデッキか。あの伏せカードが気になるが、ここは臆せず攻める！

「俺のターン、ドロー！　俺は『マジック・ストライカー』（ＡＴＫ６００）を召喚！　そしてそのまま吹雪にダイレクトアタックだ！『マジックハンマー！』」

『ソリャアアア！』

子供のような声とは裏腹に、でかいハンマーを持って襲い掛かる。しかし吹雪は余裕の笑みを浮かべて、動揺は欠片も見られない。

「甘いよケイ。今までの君のデュエルを見ているのに、ダイレクトアタックを警戒しないわけが無いじゃないか」

……！　何かくる！

「罠発動『攻撃誘導アーマー』！」

「なに！？」

見るもおぞましい不気味な鎧が、フィールドに出現した。これにはストライカーも驚き、思わず後ずさりしている。

「相手の攻撃宣言時モンスターを一体選択し、その攻撃を選択したモンスターへ向かわせる！」

あのカードは確か、ＫＣ《海馬コーポレーション》の海馬瀬人会長が第一回バトルシティで使っていたカード。くそ、市販されていたのか！

「僕が選択するのは勿論『激昂のミノタウルス』！　更に罠発動『幻獣の角』！　発動後装備カードとなり装備モンスターは攻撃力が８００アップ！　迎撃しろミノタウルス！」

『ぶるあああぁぁ！！』

「色々違くないかあ！？」

とりあえず昔見たベリーメロンは突っ込んでおくとして、あっさりと斧によって向かい討たれてしまった。

しかしストライカーの効果により、俺に戦闘ダメージは通らない。

「『幻獣の角』の効果発動！　装備モンスターが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、カードを一枚ドローする！」

相手を破壊しつつ手札を補充するか。なるほど、攻撃力の高い獣戦士族には打ってつけのカードだな。

「……俺はカードを二枚伏せて、ターンエンドだ」

さて困ったぞ。これで吹雪の場には攻撃力２５００の中級アタッカーが残ってしまっている訳だ。

……最近の奴ときたらやたらと初期攻撃力の高い輩ばかり使いやがって……。決闘者王国（デュエリストキングダム）では普通に『ルイーズ』や『ゴキボール』が使われていたっていうのに……。

「僕のターン、ドロー！　このまま決めさせてもらうよ！」

「ハッ。そう簡単に通すと思うか？」

「いいや思わない。だから僕は敢えてこのまま攻撃する！　『激昂のミノタウルス』でダイレクトアタック！　『う斧断砕（アックス・クラッシャー）アァ！！』」

再び襲い掛かるミノタウルス。若干斧が赤くなっていることには絶対に突っ込まない！　ストライカーをぶった切った時に付いた血だとは決して思っていない！

「残念だがやらせん！　罠発動『ガード・ブロック』！　そのダメージを０にしてカードを一枚ドローする！」

斧が振り下ろされるが、衝撃は無い。

「く、しぶとい……。なら僕はモンスターをセット。更に一枚伏せてターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！」

攻撃力２５００は、『進化する人類』でも届かない。そもそも、今互いのライフは同じで効果自体発動しない。

……だが、消す方法はある。それこそ、いくらでも！

「厄介なモンスターには消えてもらおう！　罠発動『おじゃまトリオ』！」

『うふ～ん』

『よろしくな～』

『こんちは～』

パンツ一丁の黄・緑・黒の、いかにも邪魔そうなモンスターが吹雪の場に現れた。

「お、おじゃまトリオ？」

困惑する吹雪。まあ、勝手に自分の場に現れたら、そりゃびっくりするだろうな。

だが、無意味に召喚しただけじゃないんだぜ？

「珍しいカード使ったね」

「ああ。『おじゃまトリオ』は名前通り相手プレイヤーにとって邪魔にしかならないトークンを生み出すカードだ」

鎌倉の中でくつろいでいた二人が解説し始めた。

「しかもあのトークンは破壊されたら３００のダメージを与える。生贄召喚にも使えず、まさに邪魔なだけだ」

「それにしても、おジャマ自体最近出たカードなのに、もう持っているのは流石だね」

さて、これで吹雪の場には五体のモンスターが並んだ。内三体はおジャマトークンだ。

マイナーなカードも知っている読者さんなら気付いているだろう。あのカードの発動条件が満たされていることを。……読者ってなんの話だ？

気を取り直して、相手の場を見据える。あのセットモンスターも気になるが、この際関係ない。

「効果によりお前の場に『おジャマトークン』（ＤＥＦ１０００）が三体召喚された。さて吹雪、ここで問題だ」

「ん？」

「相手の場にモンスターが五体いる。この時に有効な魔法カードを三枚上げよ」

「へ！？」

いきなりのクイズに戸惑っている。ここデュエルアカデミアじゃカードの問題に答えられないとやっていけないぞ吹雪！

「チッチッチッチ……」

「え、えちょっ！　えええと……『ブラック・ホール』、『サンダーボルト』……ええとぉ……」

「はい時間切れ」

「早い！？」

これでも結構長い方だぞ。

「正解はこれだ！　魔法発動『封魔一閃』！！」

これこそこの状況を打破する一枚！　デッキ組み換えで新しく入れてみたカードだ！

「へえ。あんなマイナーカード入れてたんだ」

「救われぬモノに救いの手を……とか言っていたな。なにかの小説を読んだ後にデッキをいじっていたぞ」

「なるほど。影響されただけか」

そこ、ギャラリー煩い！　カードの山の中に埋まっていたけどな、強いじゃないかこのカード！

ただ場が埋まることが余り無いってだけで使われないとか不憫すぎるだろ。

……そこら辺は後でじっくりと話すとして、今は吹雪を倒す！

「えーと、『封魔一閃』の効果は……」

覚えろアンポンタンが。

「相手フィールド上のモンスターカードゾーンが全て埋まっている時、相手モンスターを全て破壊する、だ」

「そうそう、それだよ……ええ！！」

ノリ突っ込みか……。成長したなブッキー（笑）よ。

「というわけで、まずはそのモンスター共をぶっ殺す！！　怪物殺（イマジンブレイカー）しアアァ！！」

「それ作品ちがあああ！！？」ＬＩＦＥ　４０００　↓　３７００　↓　３４００　↓　３１００

景気良く破壊されていくモンスターを尻目に、着実にダメージが累積される。

なにはともあれ、これで綺麗に片付いたな。さて、追撃といくか。

「『逆巻く炎の精霊』（ＡＴＫ１００）召喚！　更に『魔導師の力』を装備！　更に更に手札を一枚捨て、『閃光の双剣－トライス－』を装備！　これで攻撃力は６００になり、二回攻撃が可能だ！」

炎の精霊は直接攻撃の成功回数により攻撃力が上がる。つまり一ターンに二回ということは、一ターンで２０００の攻撃力アップを意味する。

「行くぞ……！　灰は灰に――塵は塵に――吸血殺しの紅十字！！　燃やし尽くせえええ！！」

「だからちがあああああ！！！？」ＬＩＦＥ　３１００　↓　２５００　↓　９００

摂氏３０００度の超高熱の双剣が吹雪へ襲い掛かり、衝撃と同時に爆ぜた。

その余波はこちらまで伝わり、如何に高威力なものかを物語っている。

「いー感じに暴走してきたね、亮」

「そうだな。しかしあいつが読んでいる……イン……インなんとかとやらは、そんなに面白いのか？」

「今二十巻越えたんだって。結構続いてるらしいよ？」

さて、打てる手は全て打った。お陰で手札が無くなってしまったが、攻撃力２６００がいれば何とかなるだろう。

「ターンエンド。さあ、お前のターンだ！」

「あちちち……。やってくれたね……」

不適に立ち上がる吹雪。しかしその目はまだ死んでいなかった。

……仕留める気でやったのにな。

「優勢だと思ったらいきなりの劣勢……。だからこそデュエルはやめられない！　僕のターン、ドロー！！」

引いたカードを見て、吹雪が笑った。何だ？　何を引いた？

「見せてやろう、ケイ。これが僕のエースモンスターだ！　召喚、『神獣王バルバロス』（ＡＴＫ１９００）！！」

現れたのは、赤い槍を持ち、金の鬣（たてがみ）を靡かせた獣人。
堂々とした立ち振る舞いは、王の威厳すらも感じさせる。

「バルバロスはレベル８のモンスター。本来は生贄が必要だけど、攻撃力を１９００にすることで生贄無しで召喚できる！　さらに僕はカードを一枚伏せ、速攻魔法『突進』を発動！　バルバロスの攻撃力を７００ポイントアップさせる！」

攻撃力２６００……。炎の精霊に並んだか……。
しかし、何故メインフェイズ２ではなく、今カードを伏せた？　プレイングミスか？
フェイズ２の方が確実に置けるというのに……。

「バトルだ！　いけバルバロス！　『トルネード・シェイパー』！！」

「迎え撃て！　『魔女狩り（イノケンティウス）の王！！』」

螺旋の風を纏った槍と、炎で出来た魔人がぶつかった。
暫しの拮抗の後、槍は魔人を貫通し少女を貫き、炎の魔人は雄雄しき獣人を焼き尽くした。
……これで互いのモンスターはいなくなった。加えて俺は魔法・罠もない。だが、吹雪もこのターンはもう召喚できない。

「分かるよケイ。君の考えが」

「……なに？」

「このターンはもう追撃は無いと思っているね？　ところがどっこいそうは問屋が卸さない！　僕はここで罠を発動する！」

罠……ということは予め伏せられていたもう一枚。今発動ということは戦闘破壊された時に発動する類のもの。

罠……戦闘破壊……カードのセット……。

そこではたと気がついた。バルバロスの能力を活用しつつ、この状況に最適な罠の存在に。

そしてその予想が正しければ、このターン……俺はやばい。

「気がついたようだね」

あれこれ対策法を練っていると、吹雪が話しかけてきた。

「ケイ。君は圧倒的な情報量を持っている。それこそ、僕なんかじゃ到底追いつけないほどのね。だからこそ気がついたんだろう？　この罠、『命の綱』の存在にね！！」

リバースされたカード、それは命の綱。

現状もっとも有効であり、考えうる限り最高のカード。

そしてようやく合点がいった。

伏せられたカード。不自然に残された一枚の手札。

全てはこの、一撃のための布石。

「手札を全て捨てて、たった今墓地に送られたモンスターを蘇らせる！　さあ、蘇れバルバロスよ！」

神の座に近い獣人が、先ほどとは比べ物にならない威圧感とともに再臨した。

「バルバロスはさっき妥協召喚した時と違い、今の攻撃力は３００だ！」

「……更に命の綱の効果はまだある、だろ？」

「そうさ。命の綱の第二の効果！　このカードで蘇生したモンスターの攻撃力は、８００ポイントアップする！」

最悪の状況が出来てしまった。
現在バルバロスの攻撃力は３８００。それに引き換え俺の場にはカードが一枚もない。
つまり……。

「さあ、さっきのダメージ利子をつけて返そうじゃないか！　ゆけバルバロス！」

ゆっくりと構えられた槍の先からは、紫電が迸っており、徐々に圧縮されていく。
やがて圧縮されきったそれは、少しずつ光を増し……って、まさかこれは！？

「解き放て！　『超電磁砲（レールガン）』！！！」

「ぬおおおおお！！！」ＬＩＦＥ　４０００　→　２００

極太の電気の束が、打ち出された。
……まさか。まさかだった。

「どうだいケイ。少しは驚いてくれたかな？」

ああ。驚いた。それも全力でだ。
考えられなかった事でもない。だだ、俺が予想出来なかっただけの話だ。
だが……吹雪……お前は……。

「お前は……スピンオフ派だったのか……！」

「「そこかよ！！」」

「暴走するとボケになるのか……」

吹雪と優介に揃って突っ込まれてしまった。
あと亮。誰がボケだ？　俺は立派に突っ込み側だろ？

「はあ……調子狂うよ……。僕はここでセットしてあった罠『強欲な瓶』を使わせてもらう。効果により一枚ドロー。そして伏せた魔法『死者転生』を発動。今引いた『野性解放』を捨て、墓地の『激昂のミノタウルス』を手札に加える」

バルバロスを召喚した結果、今ミノタウルスは召喚できない。
だが、次のターンモンスターを壁にしたところで、ミノタウルスを召喚され貫通攻撃。その瞬間勝負は決まるだろう。
……だが負けない。守るべきモノの為……！

「最後の一個を奪うため……負けられない！！」

（（そういえばそうだったな……））

ネタが濃すぎて、優介と亮はこのデュエルの始まった理由を忘れか

けていた。

「……ああ。僕も負けられない！！」

（（絶対忘れてたな））

「恐らくこれがラストターン……。ならば、この引きに懸ける！
ドロォー！！」

引いたカードは……。

「ついてるな……。俺は魔法『天よりの宝札』を発動！　互いのプレイヤーは、自分の手札が六枚になるようにドローする！」

「く……。ここでそれか……」

苦々しく呟く吹雪。この場面で手札が揃うことは決して油断できないことを意味するから当然だろう。

「手は整った。さあ、終わらせよう。我が名が最強である理由をここに証明する！！」

「「お前はどこに向かっているんだ！！」」

また吹雪と優介からツッコミが来た。
俺は何だかんだで苦労しながらも頑張っているス〇イルを応援する！

「俺は『機動砦のギア・ゴーレム』（ＴＫ８００）を召喚する」

「ギア・ゴーレムだと？　確かにあのモンスターも直接攻撃は出来

るが、８００のライフを払わなければならない。しかも攻撃表示とは……なにを考えている？」

亮の言う通り、このモンスターはライフを払わなければ直接攻撃が出来ない。しかも出来たとしても、今の吹雪のライフを削りきることは出来ない。なら何故出したか？　簡単だ。これで勝負を決めるからだ！

「吹雪。お前、最初に面白い罠を見せてくれたな」

「最初……？　『攻撃誘導アーマー』のことかい？」

あのカードは元々海馬社長……いや、今は会長だったか？　あの人しか持っていないレアカードだった。
今や普通に入手できるカードだが……これから使うのもそれと同じ類だ。

「ああ。だから俺も面白いカードを見せてやろう。手札から魔法発動！　俺が使うのは、『フォース』！」

「ふぉ、フォース！？　あの、かつて幻の超レアカードと謳われていた、あのフォースか！？」

目に見えて動揺する吹雪。このカードも元は幻とまで言われ入手困難だったカードの一枚。
だがバトルシティのお陰でデュエルモンスターズの知名度が上がり、カードもそれに伴い増産。故に俺でも入手できるほどにお手軽なカードとなった。

「『フォース』の効果発動！　相手モンスターの攻撃力を半分にし、

自分モンスターに半分にした数値分攻撃力を加算する！　故にバルバロスは再び１９００となり、ギア・ゴーレムの攻撃力は２７００となる！　そのままギア・ゴーレムで、バルバロスを攻撃だ！！」

「だ、だけど！　これでバルバロスを攻撃したところでライフは１０００残る！　更に『フォース』の効果はこのターンのみ。次の僕のターン、ミノタウルスで攻撃すれば僕の勝ちだ！」

甘い……甘すぎる！

「吹雪！　貴様の妄言など、きなこ練乳より甘い！　速攻魔法『リミッター解除』発動！　機械族の攻撃力は倍となり、ギア・ゴーレムの攻撃力は５４００！　―黒キ色ハ水ノ象徴。其ノ暴力ヲ以テ道ヲ開ケ《さあおきろクソッタレども。ぜんぶこわしてゲラゲラわらうぞ》！！　突撃せよおおお！！」

「いや魔術じゃねえええええええ！！！！？」ＬＩＦＥ　９００　→　０

俺の合図と共に体を高速回転させ、ゴーレムはその巨体をバルバロスへ撃ちつけた。

結果バルバロスは耐えられずに破壊され、勢いの止まらないゴーレムは吹雪目掛けて突撃。吹雪のライフは０となった。

「……さて、スルメでも焼こうか」

「……そうだな」

「……」

所々で入っていたスピンオフだ魔術だという話はよく分からないが、結果としては多大なデュエルエナジーを搾取することが出来た。

画面の中の彼らは楽しそうに餅を頬張ったり、スルメを噛んだりしている。先程までデュエルをしていた二人も、今では仲良く談笑中だ。

「……しかし」

まだ足りない。多大に搾取出来たと言っても、全体のほんの数パーセントにしか過ぎない。

これでは実行に移すまでに、何年もかかってしまう。しかし、私にはもう時間が残されていない。

だが、手はある。反感を買ってしまうだろうが、それも些細なこと。後数ヵ月後。冬休みが終わり、新入生がアカデミアに馴染みきった頃が最大のチャンス。

それまでに手を回しておかなければならない。まあ、私の立場ならば容易いことだ。

「ふふふ……。つかの間の安息です。今のうちに仲良くしていなさい。永遠（とわ）の別れとなる前にね」

九／鎌倉と暗躍　最後の一個は譲れない（後書き）

後書きは今回なしです！
１２時頃連続で特別クリスマス編をお届けします！
あと誤字とか確認してないので報告お願いします！

十／聖夜と急変　クリスマスイヴ特別編（前書き）

主観ですが大分長くなりました。
広大な心とゆとりある時間、ブラックコーヒー片手に御進みください。

十／聖夜と急変　クリスマスイヴ特別編

アカデミアにクリスマスイヴがやってきた！
帰省せず残った男の生徒教師達はこの記念すべき聖夜に是非女の子と過ごしたいが為、必死に東奔西走している。
そんな男共を見ながら、女子は女子でこの機会に彼氏を作ろうと目を光らせている。
勿論そんなことを吹聴しながら練り歩く者はいない。全て態度からわかってしまうのだ。
今日は必死な彼等のクリスマスを、少しだけ覗いてみよう。

「イヴか……」

雪化粧のされたアカデミア校舎を眺めながら、ケイは呟いた。
冬休みに入ってからというもの、碌なことが無く退屈した日々を送っていた。
そんな最中、突如として湧いたある感情。

「……騒ぎたいな」

「落ち着け」

そう。それは高揚感。
ケイはイベントがなにより好きだった。退屈な日々を紛らわすため、何かに夢中になるため、必ず何らかの行事には参加していた。
よってクリスマスというイベント、これは何か大きな騒ぎを起こすには十分すぎるほどの好条件だった。

「吹雪。わかっているのか、イヴだぞイヴ。これは最早アカデミア全体で宴会でも開いてパーッとやるのが世の真理というものだろ？」

「生憎と勝ち組の僕は既に予定が入っていてね。いやーもてる男は辛いものだよ！」

どうせ女子生徒とデートだろう、とケイは思った。

今や吹雪はアカデミア一のプレイボーイというのが、男女共通の認識である。もっとも男子からは嫉妬、女子からは憧憬の念ではあるが。

「というわけで宴会をやりましょう」

「……いえ、というわけも何も、全く話が見えないんですが……」

「なんで俺達まで……」

「あ、あはは……」

場所は変わって校長室。ケイは自身が騒ぎたいが為、どうせなら皆も巻き込んでしまえという果てしなく迷惑な考えの上で校長に直談判しに来ていた。勿論鮫島校長はなにがなにやらと言った風である。ついでに校舎内を軽くデート気分で歩いていた異端者Ｙ＆Ｒを拉致同然で引っ張ってきた。

「つまり聖夜に異性と過ごしたいと思いながらも中々手を伸ばすこ

との出来ない奥手な生徒達に切欠を与えてやりたい、ということです」

「うむ……。確かにこんな日に一人、もしくは同性同士で過ごすというのも味気ないですね。考えは素晴らしいものです」

私もトメさんと……、とやや校長がトリップしているが、掴みは上々のようだ。

「見えた。自分が騒ぎたいという下心が」

「固いことは言いっこ無しだ。それに優介と竜剛院も参加すれば堂々と二人で過ごせる。野郎の嫉妬の目も少しは和らぐと思うぞ？」

「それは、そうだろうけど……」

渋い顔の優介。対照的に竜剛院は嬉しそうに顔を赤らめている。

「優介さんと二人きり……仄かな明かりの灯る部屋で、見詰め合う二人……そして顔を近付けて……キャー！」

随分と幸せそうである。リア充爆発しろ。

「って！　お、俺と真理は別にそんな関係じゃ……！」

『『『ま・り・だ・と？』』』

ギギィ……と扉の開く音と共に、複数の男子生徒の声が響いた。

扉のほうを向くと、目の血走った赤青黄のカラフルな生徒達。その手には、各々が得意とする獲物がしっかりと握られていた。

『『『藤原優介。貴様は今そこの女子(おなご)を真理と呼んだか?』』』

一言一句のずれも無く唱和する。

「へ?　あ、いや!　今のは言葉のあやであって……!　というかみんな何でここに……!」

『聞いたか者共!　奴は女子(おなご)と名前で呼び合うほどの仲!　そんな異端者を放っておいていいのだろうか!?』

『『『否!　否!!　否!!!』』』

『よって彼の者に裁きを下す!　異論は無いな!?』

『『『異議無し!　異端者に裁きを!　血で血を洗う粛清を!!』』』

どこから『異端○問会!?』とか言っている気がするが、気のせいだろう。

そんなことを言っている内に優介を囲み始める生徒達。精神がラリっているのかどうかは知らないが、かなりやヴぁい顔になっている。と思いきや、全員黒いフードを被り始めた。額にはなぜかウィジャド眼が刺繍されている。

「ちょ、ちょっと待ッ!?」

『『『異端者に裁きを!　粛清を!』』』

弁明の余地無く優介連行。ケイの頭には『ドナドナ』が流れたとか

流れないとか。
優介を拉致したことに満足したのか、撤収しようとする生徒達。しかしケイが待ったをかける。

「ちょっと待ってくれないか？」

『む？　お前は早乙女ケイだな？　我々に何用だ？』

黄色の黒フードが反応した。他の連中は優介にどのような粛清をしようかと模索しているが。
ケイはこの集団がなぜこのような暴挙に出たのかを理解できていた。
だからこそ、優介が連れ去られた時も何も言わずに見守っていた。
だが、連れ去られた後で思った。この行動力は惜しいと。
優介には竜剛院の為にもいてもらわなければならない。
こいつらは女子と仲の良い優介に嫉妬している。
そしてケイは、騒ぎたい。
故に、これらを全て丸く治めるための一言を口にした。

「――――女子と甘い一時を過ごしたくは無いか？」

『『『詳しく聞かせろ』』』

ここにアカデミア主催クリスマスパーティーの開催が宣言された。

「いや～すっごい装飾だね～」

目の前では会場となるブルー寮大食堂が生徒達の手により飾り付けられ、絢爛な様相を見せていた。
あの騒動の後、トリップ状態から戻った校長と竜剛院を説得してパーティーの開催を約束させたケイは、竜剛院に女子生徒を集めて貰うよう言い送り届けた。なお優介は終ぞ戻ってこなかった。

「……よく説得できたな」

意外そうに亮が尋ねてきた。
実のところ、亮は今日を一緒に過ごす相手がいなかった。
実技学年トップ、頭脳明晰、スポーツ万能、容姿端麗と色々揃っているにも関わらず浮いた噂が無いのは、一重に自身の所為だと言わざるを得ない。
なんせこの男、恋愛に関しては『何処のギャルゲ主人公だよ』と疑いたくなるほど鈍いのである。況(いわん)やその内『今の俺には、デュエルが全てなんだ』と言いかねない。

「人海戦術……か？」

「何故疑問系なんだ……」

実質なし崩しに決まったのだから、何故なのかこちらが聞きたい。
全校で開催が放送された後、学園からのメールでパーティーの概要が送られてきた。
短時間だったにも関わらず細かいこともしっかり書いてあることから、案外校長もやりたかったのかもしれない。

「参加者の服装は自由、プレゼント持参、立食形式になるのでマナー良く……。結構派手なパーティーになりそうだね」

「ああ。説得に行った甲斐があるというもんだ」

「たまにはいいかもしれんな」

「……本当、たまにならね……」

話していたら、優介が戻ってきた。かなり疲れているように見えるが、何をしていたんだろうか。

「……連れ去られた後、耐久十連戦デュエル……。『さァ藤原くゥん？　一緒に聖夜を楽しもうぜェェェ？』とか言いながら襲い掛かってくるし散々だよ……」

本当に疲れたようでフラフラしている。ご苦労なことで。

「まあパーティーまで時間はある。ゆっくり休め」

「そう、させて……もらうかな……。時間になったら……起こしにきてくれよ……」

若干おぼつかない足取りだが、優介は自室へと帰っていった。

そして入れ違いに、別の人物が乱入する。

「あややや！　どうも皆さんお揃いで！」

風見ヶ丘絢、別名ブンブン（命名：早乙女ケイ）だった。手にはメモ用紙とペンを持ち、首からカメラを提げた姿は立派な聞屋である。

「……誰だ？」

「ブンブン。別名が風見ヶ丘絢だ」

「いや逆ですから！　本名風見ヶ丘絢で別名がブンブンですってしまったあああ！　認めてしまったあああ！！」

盛大に自爆。これでケイが呼ぶときはブンブンで固定だろう。

「フン、まだまだだな」

「ううん……。ま、まあそれは置いときましょう。そちらは丸藤亮さんに、天上院吹雪さんですね？」

「そうだけど、良く知ってるね？」

「新聞部の情報網を甘く見たらいかんぜよ！　って訳ですから！」

何処の竜馬だ。

「それで、俺達に何か用か？」

「おっとそうでした。このパーティーでは、メインイベントにデュエルトーナメントがあるんですよ！」

そういえばメールにあったな、と思い出す面々。

「そこで優勝候補と呼ばれる数人にインタビューをして回っていたところです！　という訳で最有力候補の丸藤亮さん、何か一言！」

懐からボイスレコーダーを取り出して構える絢。対する亮はやや困

った表情だ。

「一言……と言われてもな……。全力を尽くす、と言っておこう」

「あややや……。まあらしいと言えばらしいですねえ。では天上院吹雪さん何か一言！」

「ああ。今回僕は出ないんだ」

「おや？　それはまたどうして？」

吹雪の不参加表明を疑問に思う絢。確かにデュエルが強いのに出ないのは不思議だろう。

「詳しいことは言えないけど……、やっぱお楽しみってことで♪」

「ん～ミステリアスですねー！　また女性ファンが増えそうです！　では最後にケイさんどうぞ！」

「……俺は逆に聞きたいな」

ケイは参加不参加を言わず、ただ静かに問う。

「――カレーはあるのか？」

「「「やっぱりそれか！？」」」

三人同時に呆れる。その一方でケイは何故そんな反応か分からないのであった。

時間は進みいよいよ開始の時間となった。
使徒達はそれぞれの野望を胸に秘め、服装自由ということから各々を一張羅で着飾っている。
今日は無礼講と言うこともあり、女子生徒達は薄く化粧を施し大人の女性の魅力を出している者も多い。
男子生徒達も気合を入れてセットしていたり着飾っていたりする。
そんな中我等が四人組は一際目立って登場した。

「おお！　素晴らしい光景だよ！」

吹雪は青を基調としたスーツを身に纏い、胸ポケットには薔薇の花を覗かせていた。

「中々集まったな」

亮は白銀に近い白で染めたスーツ、更に上から薄いロングコートを羽織っていた。

「まだちょっと気だるさが抜けないなぁ……」

優介は薄い緑のスーツで、少し開いた胸元には十字架を象ったネックレスをしている。

「ちょっと眩しいな」

そしてケイは薄いワインレッドのスーツに、何故かスポーツサングラスを掛けて登場した。

何故全員スーツなのかと言うと、単に礼装がこれしかないからという理由である。
勿論こんな格好をして目立たないはずが無い。全員ばっちり目を付けられ、ターゲットとしてロックオンされている状態である。良い意味でも、悪い意味でも。

『あ、あー……。ごほん。えー皆さん。よく集まってくれましたね』

一番奥の壇上から、鮫島校長の挨拶が響く。

『今宵限りの宴です。皆さん、今日は無礼講で、心行くまで楽しんで下さいね。それでは飲み物を手にとって』

全員が飲み物を手に取る。流石にワインは未成年だらけで飲めないので、全員アルコール無しのシャンパン、シャンメリーである。

『では皆さん御一緒に。メリークリスマス！　乾杯！！』

『『『かんぱーい！！』』』

こうして宴は始まった。しかし誰も予想だにしなかっただろう。まさか吹雪が、あのようなことをするとは、この時は誰も知らなかった。

パーティーは思いのほか大好評だった。普段は女子と触れ合う時間を取ることの出来なかった男子生徒は、これ幸いと女子に突貫していったし、女子もまたお近づきになりたいと考えていた男子にアタックをかけていた。

しかし中でも一際目を惹くのが、あの二人である。

「ねえ吹雪君。今日の私どうかな？」

「うん、綺麗だよ。それに化粧もして、いつもより大人っぽいね」

「わかる？　ちょっと気合入れてみたの」

「吹雪様～。私も見てくださ～い」

「あーずるい！　抜け駆けしないでよね！」

まず何人もの女子を侍らせて談笑する吹雪。周りから嫉妬の視線が突き刺さっても気にしない精神力で楽しんでいた。

……数少ない女子生徒を何人も傍に置いていれば、そりゃ目立つわと言いたい。

「どう、ですか……？」

「うん……。凄く綺麗だよ……」

「あ、ありがとうございます。その、優介さんも……凄く、大人っぽくて……素敵、です……」

「あ、ああ……あ、ありがとう……」

そして顔を真っ赤にしながらも嬉しそうに笑うバカップルR&M。

余りの気恥ずかしさの為、誰もこの二人の傍に近づくことは出来ないでいる。さらに初々しさが相乗効果一（？）を為して嫉妬の視線も無い。まあ強力なものは吹雪の方に向かうのである意味当然だが。

ちなみに竜剛院の服装は黄色いドレス。くびれを出して、胸元を強調するように出来ている。
とにかく、この二人は広い会場ないでもかなり目立っていた。
一方残りの二人はというと……。

「カレーが無い……だと……！」

「立食にカレーは合わないと思うが……」

「それでも、カリーパン位はあってほしかった……」

「何処の英国貴族だ……？」

ひたすら食べていた。亮は度々声を掛けられることはあったが、ケイに話しかける女子は皆無であった。月一テストの時の奇行を思えば、これまた当然の結果と言えよう。しかも今は室内なのにサングラスをかけているから尚更である。
会場内には大きなクリスマスツリーが飾られており、その下には持ち寄ったプレゼントが積み上げられている。恐らくは後でプレゼント交換でもするつもりなのだろう。
しかしやはり目に付くものは料理である。花より団子とはよく言ったもので、談笑より飯という生徒も少なからずいた。普段の食事がメザシだというレッド生徒等は尚更である。

「やぁやぁ。楽しんでいますか？」

「む。ブンブンか」

「だから誰が鴉天狗ですか」

ケイが食べているとさっき振りに絢が話しかけてきた。
肩ほどまである黒髪はウェーブをかけられており、体のラインが出るような桃色のドレスを着ている。残念ながら、胸元は少し足りない。

「何か変なこと考えてませんでした？」

「いや。綺麗だなと思っただけだ」

「はぇ！？」

突然の言葉に顔が真っ赤になる絢。言ったケイ本人は涼しい顔である。

「サングラス越しじゃないと、眩しくて見えない程だ」

「な、な、な……！」

「まあ冗談は置いといてだ」

絢がずっこけた。

「冗談ですか！　どっからが冗談なんですか！？」

「落ち着け。プティン食うか？」

「賑やかだな」

それぞれが思うままに時間は過ぎていく。
そして、遂に運命の瞬間が来た。

『皆さん。パーティーを楽しんでいますか？』

突然、校長の声が響いた。全員が校長を注視する。

『ここで本日のメインイベントの一つ、アカデミアデュエル大会クリスマス杯（カップ）を始めたいと思います』

会場がざわめき始める。

トーナメントの登録は事前にしてあるとはいえ、今まで話していた異性の前でのデュエル。カッコいい所こそ見せたいが、無様なところは見せられない。

すると、突然会場の証明が落ちた。

同時に、溢れる白い煙。

会場内は、軽いパニックになった。

「一体なんでしょうね！？」

「どうしてお前はそんなに嬉しそうなんだ？」

騒然とする中、一つのスポットライトが一部を照らし出した。

そして浮かび上がる人物のシルエット。

それはよく知っているが、全く知らない影。

そして、影は叫んだ。

『レディ～～ス！　エーンド！　ジェントルマ～～ン！！　楽しんでいるかーい！？』

漆黒のスーツに身を包み、シルクハットの下には茶髪が窺える。

ケイは、その姿に見覚えがあった。

『これから始まるデュゥエルトゥーナメント！！　司会進行は私（わたくし）、天上院吹雪が務めさせていただきます！　どうぞよろしくー！』

盛大な拍手が沸き起こる。どこかで口笛も鳴らされる。

『盛大な拍手をあーりがとー！！　それじゃあ早速だけどルール説明だ！　デュエルして勝てば進んで負ければ終わり！　なんともシンプルなルールだぜ！！』

『吹雪様ー！』

『素敵よー！』

『サンキューベイベー！！』

この男、ノリノリである。

尚も司会は続く。

『参加者が全員戦い、優勝、準優勝、三位を決める！　入賞した人にはデュエルアカデミア本校校長ミスター鮫島よりビッグなクリスマスプレゼントが貰えるぜ！　三位はドローパン引換券が五枚、準優勝には新作カードを十パック！　いやー太っ腹だねえ！　そしてそして、気になる優勝者にはぁ――！』

ダララララとドラムロールが流れる。

キャリーで優勝賞品らしき物が運ばれ、吹雪が覆っている布に手をかけ、引き剥がす。

「――なんと！　本物の強者のみが持つことを許される、このブラ

ックデュエルディスクだあああーー！」

『『『ウオオオオオォォ！！』』』

会場は一気にヒートアップ。気温が瞬間的に四度は上昇した。

黒決闘盤（ブラックデュエルディスク）と言えば現在あの伝説の決闘王、武藤遊戯の親友でありライバルの城之内克也が所持していることでしか確認されていない、デュエリスト憧れの一品である。

『集え戦士よ！　今！　闘いのゴングは鳴らされたぜえええ！！』

『『『オオオオーーー！！』』』

「……あいつも大概壊れてるな」

ケイは一人、歓声の中そう呟いた。

『それじゃあ行くぜ！　最初の対戦カードは、これだあああ！！』

大きなディスプレイに、対戦者の名前がスクロールされていく。

そして映し出されたのは……。

【　風見ヶ丘絢　ＶＳ　早乙女ケイ　】

今まさに隣り合っている二人が、スポットライトに照らされた。

『おおっとお！？　まさか最初からカップルの対決かあ！？』

「吹雪。夜道には気をつけろよ？」

『危ないなオイ！？　それじゃあ早速向かい合ってくれ！』

吹雪の言葉とともに、料理の乗ったテーブルは壁際に寄せられていく。

全テーブルがどき、十分なスペースが出来上がった。

『両者準備は万端か！？』

「いつでも構わんぞ」「ばっちりです！」

既にギャラリーも観客状態になっている。

互いのデュエルディスクにライフポイントが表示された。

『いくぞ！　――ライフの貯蔵は十分か！？　ＬＥＴ'Ｓ　ＤＵＥＬ！！』

「「デュエル！！」」

絢　ＬＩＦＥ４０００

ケイ　ＬＩＦＥ４０００

ＳＩＤＥ：ケイ

「先攻は貰いますよ、ドロー！」

さて……なし崩しに始まったが、やるからには勝たせてもらおう。

しかしブンブンのデッキは全く分からないな。一体どんなカードを使ってくる？

「フッフッフゥ……最初っから全速前進ですよ！　私は『暴風小僧』（ＤＥＦ１６００）を召喚！　更にカードを五枚セットしてターンエンドです！」

『「なにいいいい！？」』

伏せカード五枚だと！？

今の展開で相手の手札はゼロ。何を考えている？

『これは予想外の展開だ！　最初から手札をフルで使うとは、一気に勝負がわからなくなってきたー！』

「俺のターン、ドロー！　ならば邪魔な伏せカードを破壊させてもらう！　魔法カード『大嵐』発動！」

『出たあ『大嵐』！！　風見ヶ丘選手、早くもピンチかあ！？』

通れば一気にボードアドバンテージは稼げる。……通れば、だが。

「そう簡単にいくと思わないで下さいね！　罠カード『ゴブリンのやりくり上手』発動！　更に続けて二枚発動します！　更に『威嚇する咆哮』発動！　更に更にサラミ！　『非常食』もおまけで発動！！　他の魔法・罠を全部墓地に送ります！！！」

『な、なんだあ！？　伏せカードが全部オープンだー！！　解説のクロノス先生。これはどういうことですか？』

クロノス教諭が解説なのか。

『エー、まずチェーンが発生したターメ、逆順処理をするノーネ。この場合『非常食』の効果で四枚墓地に送るターメ、４０００回復するノーネ。続いて『威嚇する咆哮』の効果でこのターン攻撃が出来なくなるノーネ。そして『ゴブリンのやりくり上手』は、墓地の同名カードの数プラス一枚を引いて、手札から一枚をデッキの一番下に戻す効果でスーガ、効果適応時に墓地にある数なノーデ、『非常食』で墓地に送ったこの場合ーハ、四枚引いて一枚戻す効果になるノーネ。しかも三枚ですカーラ、合計十二枚も引けるノーネ』

……なんということでしょう。何も無かった手札が、あっという間に匠（ゴブリン）の手により九枚に増えてしまいました。

何故手札レス状態からこんなことができるんだ。ついでにクロノス教諭が教師らしい事を言っているのには凄く違和感を覚える。

「ちゃんと言いましたよ？　最初から全速前進ですってね！」ＬＩＦＥ４０００　↓　８０００

く……この鬼引き娘が。『神引きする程度の能力』でも持っているに違いない。

……このターンは攻撃できない。あの北風小僧（かんたろう）すら倒せないとは泣けてくるな。『大嵐』も無駄に終わったし。

「俺は『機動砦のギア・ゴーレム』（ＤＥＦ２２００）を召喚。カードを二枚伏せて、ターン終了だ」

『早乙女選手、相手の出方を窺っています！　しゃきっとしないか！！』

煩い黙れ。

「私のターン、ドロー！　私は『暴風小僧』を生贄に――」

……くるか！

「フィールドを駆け巡りなさい！　出でよ『始祖神鳥シムルグ』（ＡＴＫ２９００）！！」

金の翼を持つ、全ての鳥の祖が降臨した。そして同時に、ギアゴーレムが手札に戻された。

『『暴風小僧』ーハ、風属性モンスター召喚の生贄なラーバ、一体で二体分ーノ生贄になりまスーノペペロンチーノ』

いや、最後のは必要なくないか？

「『始祖神鳥シムルグ』の効果！　風属性モンスターのみを生贄に使用した場合、相手フィールド上のカードを二枚まで手札に戻します！　ゴーレムと伏せカード一枚を手札に戻してください！」

く……本当になんなんだこの引きは！　モンスターは全滅、あるのは伏せカードが一枚。

しかもこれじゃシムルグの攻撃を防ぐことは出来ない。

「さあ行きなさいシムルグ！　『ジェネシス・ストーム』！！」

「ごふぁあぁぁ！！」ＬＩＦＥ４０００　→　１１００

『ああーっと早乙女選手！　いきなり２９００のダメージを喰らっ

たー！　これは手痛い！　先制攻撃を制したのは風見ヶ丘選手だー！！』

く……！　２９００のダメージは流石に痛い。だが、転んでもただでは起きない！

「罠発動『ダメージ・コンデンサー』！！　自分の受けたダメージ以下の攻撃力を持つモンスターをデッキから一体特殊召喚する！　こい『逆巻く炎の精霊』（ＡＴＫ１００）！」

『イエーッ！』

……最近炎の精霊が色んなアクションを取るんだが、これもソリッドビジョンのお陰か？　だったら本気で海馬コーポレーション就職を考えたい。

『早乙女選手、辛くもモンスターを残したー！　さあここからどう反撃するんだー！？』

「カードを二枚伏せて、ターンエンドです！」

「俺のターン、ドロー！　俺は『強欲な壺』を発動！　デッキからカードを二枚ドローする！」

『出たぞ困った時のにやけ面！　さあ何を引くんだあ！？』

頼むから何か来てくれよ……と。

引いたカードは……ＯＫ。ちょっと遊ぼうぜ？

「俺は……こいつを攻撃表示で召喚だ！　こい『ワイト』（ＡＴＫ

３００）！！」

『『『なにいいいいい！！？』』』

デュエルモンスターズ史上、最弱のバニラの登場に会場中が震撼した。

「ワイトを攻撃表示って何考えてるんですか！？　死にますよ、即死ですよ！？」

……泣くなワイト！　お前にはもう、流す涙すら残っていないだろ！　変わりに俺が泣こう！

「最弱じゃない！　どんな弱小モンスターだろうと、役に立たないカードなど在りはしないんだ！」

『いやいやケイ！　そうは言ってもワイトは専用のデッキでもないと殆ど機能しないぞ！　一体どうするっていうんだ！？』

吹雪。素に戻ってる。あと別に専用デッキじゃなくても、こいつの使い方はいくらでもあるんだよ。

「死者の強さに刮目せよ！　装備魔法『下克上の首飾り』発動！通常モンスターにのみ装備でき、装備モンスターが戦闘を行う時相手モンスターとのレベル差分攻撃力をアップさせる！　そしてその数値は、レベル差かける５００倍じゃああ！！」

『と、ということは、シムルグのレベルは８。対するワイトのレベルは１！　その差は７で、上昇値は……３５００だああ！』

見る見る内にやる気を取り戻したワイトは、その視線の先に巨大な始祖鳥を見据えている。なんというか、殺る気に満ち溢れているのが見て取れる。

「行けェワイトよ！　敵は本能寺《相手フィールド》にあり！　いざ、下克上おおおおおお！！！」

「きゃ、きゃあああああ！！」ＬＩＦＥ８０００　↓　７１００

よし、僅かだが削った。これならまだいける！

『早乙女選手、窮地脱出だ！』

「……ワイトに倒されるとか、ホント凹みますね」

恨めしげに睨むブンブン。しかし上目遣いに睨んでも、全く怖くないぞ？

「雑魚と罵った相手にエースモンスターを蹂躙される顔を見るのが好きなだけだ」

「臭味悪っ！？」

「驚いている暇はあるのか？　『逆巻く炎の精霊』でダイレクトアタック！　『マジカルファイヤー』！」

「ひゃっ！？」ＬＩＦＥ７１００　↓　７０００

まだ攻撃力１００なので、そこまで大きな炎は出ないな。

しかしブンブンが、意外にも女の子らしい悲鳴をするのには驚いたな。

「直接攻撃が成功したとき、精霊の攻撃力は１０００上がる。俺はカードを二枚セットして、ターン終了だ」

「この瞬間罠カード『リビングデッドの呼び声』発動！　『始祖神鳥シムルグ』を攻撃表示で蘇生させます！」

折角倒したのに、怪鳥が再び姿を現した。鬱陶しい。

「今鬱陶しいって思いましたね？」

「気のせいだ」

この学校は読心術能力者がたくさんいるな。

『シムルグ復活！　状況は風見ヶ丘選手の方が圧倒的に有利だ！』

「……まあいいです。私のターン、ドロー！　私は『ハーピィ・レディ１』（ＡＴＫ１３００）を召喚します！」

『「なあああにいいい！？」』

本日二回目の驚愕である。

「ふふふ……驚きました？　私の十八番はシムルグではなくハーピィなんですよ！　更に手札から魔法カード『万華鏡－華麗なる分身－』を発動！　デッキから、『ハーピィ・レディ３姉妹』（ＡＴＫ１９５０）を特殊召喚しますよ！　そして『ハーピィ・レディ１』

が場に存在する限り、風属性モンスターの攻撃力は３００ポイントアップします！」

……えー、ブンブンの場は全て風属性モンスター。つまり全体に適応され、シムルグは攻撃力３２００、ハーピィ１は１６００、三姉妹は２２００か……。

「合計７０００って舐めとんかああ！！」

「コレくらいやらないと勝てないでしょ！　ていうかコレでも防ぐんじゃないんですか！？」

当然だ！　誰が好き好んで一斉攻撃なんぞ……。

『『『『オーッホッホッホ！！』』』』

『お姉様――！』

『その足で！　鉤爪で踏んでください！』

『腕の羽根にモフモフされたい！』

『鞭でなじってください！』

……。

誰が好き好んで一斉攻撃なんぞ受けるか！

観客の声？　聞こえん、何も聞こえん！

「うわ……気持ち悪い……」

『風見ヶ丘さん。そういうことは、思っても言ってはいけないよ？』

つい本音が出てしまったようだ。

「き、気を取り直して、『ハーピィ・レディ１』で『逆巻く炎の精霊』を攻撃です！　『爪牙砕断（スクラッチ・クラッシュ）』！」

ハーピィ１が、鋭い鉤爪で精霊に襲い掛かる。その構図は、幼女と同性愛者（捕食者）に見えなくも無い。

……発音が違う？　気のせいだ。

だがハーピィ１よ。挨拶も無しに娘はやらん！

「罠カード『重力解除』発動！　全ての表側表示モンスターの表示形式を変更する！　現在は全て攻撃表示。よって全モンスターは守備表示になる！！」

精霊が拒絶反応を見せたため、すごすごを帰っていくハーピィ１。

残念だが、出直してこい！

「やっぱり防ぎますか……。私はカードを一枚セットして、ターンエンドです」

『守備表示とはいえ、風見ヶ丘選手の場には強力なモンスターが三体。次のターンで決めなければ（作者が）厳しいぞ！？』

何故だろう。厳しいという言葉の中に何か含まれている気がする。

まあ、このターンを乗り切ることだけを考えよう。

「俺のターン、ドロー！」

……おいおいちょっと待ってくれ。これじゃ俺の勝ちじゃないか。
引いたのは非常にやばいカード。冗談抜きで勝てるカードだ。
……まあ、一ターン待つか。

「ワイトよ！　再びシムルグに下克上じゃあああ！！」

レベル差7なので、再び３５００アップし３８００になる。

「させません！　罠カード『ドレインシールド』発動！　相手の攻撃モンスターの攻撃力文ライフを回復します！」ＬＩＦＥ７０００　↓　１０８００

『これは上手いぞ風見ヶ丘選手！　これでライフは１０８００！
圧倒的に不利なこの状況を、一体どう覆すんだー！？』

……おい、これじゃあ『このカード』を使わざるをえないじゃないか。
……いいよな使っても。手札二枚だめになるけど、まあしょうがないか。

「『逆巻く炎の精霊』で攻撃！　『マジカルファイヤーネクスト』！！」

「くううぅ！！」ＬＩＦＥ１０８００　↓　９７００

……受けたな？　防がなかったな？
ＯＫ発動させようじゃないか。

「これで精霊の攻撃力は２１００……。でも、次のターンで打ち破って見せますよ！」

意気込んでいるところ大変申し訳ないが。

「残念ながら次は無い。速攻魔法『狂戦士の魂（バーサーカー・ソウル）』発動！」

『『『ちょっとまてえええええええ！！！』』』

だが断る。

「モンスターが直接攻撃に成功したときに発動！　手札を全て捨て、デッキからドローする。そのカードがモンスターカードだった場合、墓地に送りもう一度直接攻撃を行う！　そしてそれを、モンスター以外が出るまで繰り返す！」

『なんということだあああああああ！！　あの伝説の決闘王、武藤遊戯ですら封印したと言われる悪魔のカード！！　まさかそれを使うなんてえ！！　まさに鬼畜外道！　お前の血は何色だああ！！』

煩い黙れ。

「で、でも、ケイさんのデッキは……」

「話は聞かん！　いくぞ！」

このターンで終わらせる！　一枚目だ！

「ドゥォロー！！」

引いたカードは……『巨大化』。魔法カード。

『……あの、もしもーし？』

……嬶だ死のう。

「魔法や罠の比率が高いからって、言おうと思ったんですけど……」

……おい。

「それを早く言え！」

「逆ギレじゃないですか！？」

会場中から鼓膜を破る程の爆笑の渦が巻き起こった。

もういい！　俺は知らん！

「もう何もできん！　ターンエンドだ！」

「……じゃあドロー。二枚目の万華鏡を発動しますね？　効果で三姉妹をもう一体召喚します。更に『ハーピィの羽箒』でそちらの魔法・罠を全て破壊します」

伏せられていたのは『体力増強剤スーパーZ』と『マジック・ジャマー』だ。まあ、手札が無いから使えないがな。ははは……。しかもワイトの攻撃力も３００固定になった。

「モンスターを攻撃表示に変更し、私は『ハーピィズペット竜（ドラゴン）』（ＡＴＫ２０００）を召喚します。シムルグがフィールド上に存在する限り、風属性モンスターの生贄は一体少なくなります。シムルグを生贄にペット竜を召喚。そして『ハーピィ・レディ』の数だけ

ペット竜の攻撃力は３００ポイントアップします。更にハーピィ１の効果で３００アップし３２００になります」

もう何も言うまい。ペット竜で３２００、ハーピィ１で１６００、三姉妹が２１５０で二体……。

合計が９１００……９０００オーバーか……最期にはしては派手だな。

「えと……行きますね？」

不安そうに聞くブンブン。……ああ、大丈夫さ。

「俺は……逃げも隠れもしない！　さあ、殺せえええ！！」

「モンスターで総攻撃！！」

ワイトは鋭い鉤爪でバラバラに粉砕され、精霊は三姉妹かけるニに美味しく頂かｒ……即座に破壊され、ペット竜は紅蓮の炎で俺を焼き尽くした。

「……燃えたぜ。真っ白な灰に……」ＬＩＦＥ１１００　↓　－２００　↓　－２５０　↓　－２４００　↓　－５６００　ＯＶＥＲ　ＫＩＬＬ★

『……しょ、勝者は風見ヶ丘絢選手だ！　さあ皆！　彼女に盛大な拍手をー！！』

会場中から、割れんばかりの拍手が響き渡った。

はあ……欝だ。

「えーと……大丈夫ですか？」

ブンブンが心配そうに近づいてきた。そりゃ心配になるだろう。最後は自爆に近いようなもんだったからな。

「大丈夫だ。問題ない……と思いたい」

「最後のセリフで台無しです」

とりあえず舞台から離れることにしよう。邪魔になるしな。

あの場から離れてから少し経ち、俺の気も大分落ち着いてきた。既に第二試合が始まっており、参加客は全員そっちに魅入っている。

「落ち着きました？」

「ああ。大丈夫だブンブン」

俺がそう応えると、何故か不満そうな顔をした。

「……どうした？」

「……そろそろブンブンって呼ぶの辞めてください」

どうやら、俺が未だにブンブンと呼ぶのが余程嫌らしい。

「そうは言ってもなぁ……」

「……ケイさん。私も名前で呼んでますし、ちゃんと名前で呼んでください！」

俺としても、ブンブンの愛称にそこまで拘っているわけではない。たまたまネットを彷徨っていたら見つけただけで、愛着など皆無に等しい。
ただ、簡単に変えるのも、屈したと思われてなんか嫌だ。

「考えておこう」

「意地悪」

なんとでも言え。

「……」

ただ呆然と、目の前の彼女の顔を見た。
新聞記者と言う割には落ち着きが無く、表情もコロコロと変わるおしゃべりな女。それが第一印象だ。
何かあるたび、見かけるたびにちょっかいを出してきて、その度返り討ちにしているだけの関係。ここに、他意はないはずだ。
それが今では、少しだけ綺麗に見えた。

「……また何か考えてますね？」

「綺麗だなと思ってた」

「っ！？　……も、もう騙されませんよ！」

赤くなった顔を隠そうと、急いでそっぽを向く。それでも、耳の裏

まで赤くなった顔は隠しきれていない。

『『サイバー・エンド・ドラゴン』の攻撃！　エターナル・エヴォリューション・バースト！！』

『きゃあああ！！』

『決まったああ！　第二試合の勝者は、丸藤選手だあ！！』

会話が切れた瞬間、タイミング良く勝者コールがされた。
少しだけ軽くなった体を動かし、観客に混じろうと歩く。

「ほら。いくぞ」

「わかってますよ」

まだ照れているのか、そっけない返事。だがそれも、今では可愛く思えるから不思議だ。
会場の空気のせいか、吹雪ほどではないが俺も少しおかしいらしい。

『それでは第三試合だ！　第三試合の対戦カードは、藤原優介　対　竜剛院真理！　なんとカップル対決だ！　これは見物だぞ！！』

『吹雪。月の無い夜には気をつけナ？』

『怖っ！　すんませんでした！』

その後は大した話をするでもなく、ただ試合を見ていた。時折、タクティクスについて討論したりもしたが、本当にそれだけだった。
ちなみに最終結果だが、優勝は最有力候補の亮、準優勝は優介、三

位には……誰か忘れたがイエローの生徒が入った。
そして今、ようやく優勝者への賞品贈呈が行われる。

『おめでとう。丸藤亮君』

「ありがとうございます。鮫島校長」

ブラックデュエルディスクを装着した亮はとても映えた。おそらくこれでファンが急増したと思う。カッコいいという理由で男女問わず。
さらに、クロノス教諭からも一言入る。

『シニョール丸藤。この度アナターハ、ヒジョーに優秀な成績を残シ、今までの成績も合わせヒジョーに優秀な結果を残しまシータ。我々教師一同―ハ、最優秀成績保持者であるアナターニ、アカデミア最強デュエリスト『カイザー』の名を委ねたいノーデス』

会場が、またざわめき始めた。
カイザーとは、アカデミアが出来た当初、最強の生徒に送られた称号。ただデュエルが強いだけでなく、普段の生活態度、テスト、カードに関する知識、人間性、運動能力などなど、その全てを好成績で修めた者にのみ与えられたと聞く。
その『カイザー』を、亮は受け取った。
今日ここに、アカデミア最強のデュエリスト、『帝王（カイザー）』が誕生した。

授与も終わり、簡単なプレゼント交換も終わった。プレゼントはそれぞれ、帰ってから開けるようにとのことだ。
そろそろお開きの時間だろう。時計を確認すれば既に日付が変わろ

うとしている。

『みなさん。今日は楽しんでいただけたでしょうか』

校長の言葉が、喧騒の中聞こえる。

『パーティーは今を以て終了となります。明日からはまたいつもの日常にもどりますが、今日のような楽しい日々を、友達を、思い出と共に作っていってください』

言葉が終わるや否や、溢れんばかりの拍手がおこった。

会釈をして壇を下りる校長。

そして、この時を以て、クリスマスパーティーはその幕を閉じた。

帰り道、俺はブンブンを送ることになった。

アカデミアは島であり、そうそう危険もないらしいが、やはり生徒の一人歩きは危険だという。よって男子生徒は女子生徒を送るようにとの通達である。

なお亮、吹雪は仲良くなった子数人とまとまって帰り、優介は言わずもがな、竜剛院を送っていくことになった。

「大分冷え込みますね」

会場はブルー男子の大食堂ということで、女子寮まで僅かだが距離がある。

そして今は冬休み。しかも夜なので、気温は既に氷点下に達している。

「雪も舞ってるな」

ロングコートのポケットに手を突っ込んだまま、そう呟いた。
あの格好のまま外に出るのは流石に不味い、と思い急いで部屋に取りに戻った。ついでにブンブンも似た格好だ。桃色のドレスの上に紺のコートを羽織っている。ただ身長差があるため、ややブカブカである。

「そういえば」

何かを思い出したようだ。

「ケイさん。プレゼント開けてみましたか？」

「いや、まだだな」

「じゃあちょっと開けてみましょうよ」

戻ってからって言われなかったか、と指摘したら、多少のフラインングはご愛嬌、との返事が来た。早く開けたくてソワソワする様相は、子供みたいで微笑ましいものがある。

「あ、口紅です」

先に開けた彼女の箱からは、新品の口紅が出てきた。どうやら女子生徒のものだったようだ。

「これ男子に当たった場合どうするんでしょうね……？」

「彼女にでも上あげるんじゃないか？」

それもそうですね、と納得する。

「ケイさん。早く開けてくださいよっ」

「急かすな」

手に収まるほど小さなリボン付きの箱。これがプレゼント交換で貰ったプレゼントだ。

丁寧に、ラッピングを解いていき、開けてみる。

すると、中からは小さな指輪が出てきた。

「指輪……？　おもちゃですかね？」

「さあな……。いや、かなり小ぶりだが、小さなエメラルドが付いてるな」

リング上に付けられた小さな台座に鎮座する、一カラットにも満たない小さなエメラルド。透き通った緑色が、夜の空を吸収している。

ふと、俺はちょっとした悪戯心に駆られ、彼女の左手をとった。

「あの、ケイさん？」

何か言っているようだが聞こえない。

俺は先程の指輪を、”左手の薬指”に嵌めた。

「……え？」

予想通り混乱している。だが俺は、あくまで惚けた振りをする。

「俺が持っていても仕方がない。やる」

「でも、あの、これ……」

「……何だ？　左手がどうかしたのか？」

「……もういいです」

諦めたようだ。

そんな風にじゃれあっていたら、いつの間にか女子寮の前についていた。

「着きましたね。ここまでで結構ですよ」

「ああ。じゃあな」

そう挨拶し、背中を向け入口へ向かっていく。

だが、俺はその時妙な感情に見舞われた。

――このまま帰してしまっていいのだろうか。

何を言っている。当たり前だろう。

――ならばこの感情はなんだ。

知らん。見当もつかない。

――彼女と一緒にいたいと思わないのか。

思わない。明日になればまた会えるだろう。

――本当は気付いているんだろう。

……。

――何故何も言わない。正直になれ。

……。

――行動に移せ。

……何を。

――早くしなければ入ってしまう。
帰るんだから当然だろう。
――手遅れになるぞ。
……そんなことは。
――無いと言いきれるのか？
……。
――行動に移せ。今だ。
……。

気がつけば、俺は走り出していた。
今扉に手を掛け、開こうとしている彼女がいる。
あの扉が開ききる、その前に。
俺は、彼女の肩に優しく触れた。
その手に気がつき、振り返る。
見えたのは形の良い綺麗な唇。あの口紅を塗れば、更に映えるだろう。
未だ意識の追いつかない彼女の頭を右腕で包み込み。

彼女との距離は、ゼロになる。

「……！」

彼女の顔が驚愕に染まる。しかし、抵抗は無い。
ただ驚いているだけかも知れない。ひょっとしたら、寒さで体が上手く動かないだけかもしれない。
それでも。
どの位の時間が経ったのだろう。感覚では一時間にも、ニ時間にも感じられた。もしかしたら、一秒もかかっていないのかもしれない。

やがて彼女から顔を離し、目を見据えて言った。

「おやすみ。絢」

背中を向け、俺は自室へと帰る。

道中、背中を振り返ることは一度としてなかった。

十／聖夜と急変　クリスマスイヴ特別編（後書き）

これ、二日徹夜して書いたんだぜ……。
というわけでもう限界です。これアップされてる頃は多分寝てます。
ケイ×絢ルート発生！？　……と思いきや

「おやすみ。絢」

この一文が書きたいがためにここまで伸びました。後悔はしてるけど反省はしていない。

そして相変わらず見直しせずに直行です。
誤字報告お願いします。

※２０１１／０２／０６　修正・加筆

十一／変化と混沌　祭り後の後の祭り（前書き）

再び仮復活！
亮「受験はどうした」
息抜き中。今日は亮に来て貰いました。
亮「……まあいい。ケイはどうしたんだ？」
本文をご覧あれ。それにしても難産だった……。
亮「どうした」
……この話書いてたら、停電して真っ白になった……。で、書き直してたら納得いかなくて総消し……。
亮「……苦労した（？）話、読んでやってくれ」

十一／変化と混沌　祭り後の後の祭り

クリスマスパーティーから数日。アカデミアはいつもの喧騒を取り戻しつつあった。

あのイベントの後急激にカップルが増えたという噂が流れ、『異端者を粛清じゃアアァ！』と言わんばかりにカラフルなフード集団が暴れまわったのもいい思い出である。なお被害は二桁に上ったという。

しかしながら何時までもお祭り騒ぎでいることはできず、次第に生徒達の熱も冷めていった。そしてそれに伴いあっという間に破局するカップルも現れ、再びフードを被る生徒が急増した。その大半はブルー男子だとか。

しかし、冬の寒さでも時の流れでも、冷めない熱というものはあるものである。

ブルー女子寮のある一室。

友人が声を掛ければ、生返事しか返らず。

何かあったのかと聞けば、何も無いと返される。

どうかしたのかと聞けば、どうもしないと返される。

やがて入る者もいなくなり、いるのは部屋の主一人のみ。

「……くしゅっ」

風見ヶ丘絢は、見事風邪を引いていた。

ＳＩＤＥ：竜剛院

クリスマスパーティーの夜から、風見ヶ丘さんの様子がおかしい。

優介さんに送られ寮に返った時、寮の扉を開けたまま放心しているのを見つけた。その時頭には雪が少なからず積もっており、暫くそうしていたということが分かった。

優介さんには先に帰ってもらい、私は彼女を連れて部屋へと戻ったのだが、それでもまだ目の焦点があっていないようだった。

風邪を引いてはいけない思い、部屋に備えられていたバスルームでシャワーを浴びるよう言ったら、驚くことに水で済ませたらしい。らしいというのは身体から湯気が立っていなかったから気付いた。

慌ててバスタブにお湯を張って、急いで入るよう促した。が、やはり上の空になっており、結局私も一緒に入ることになった。

身体を温めた後はどうしたのか、と聞いてみたりしたが、あまり要領の得ない答えばかりが返ってきた。

結局その日はそれ以上の追求は諦め、自室に戻って貰った。そして、次の日風邪になったという話を聞いた。

「……ということなんです」

「……なるほど」

今私は雄介さんたちとお昼を一緒に頂いている。他には先日帝王の称号を賜った丸藤さん、それと天上院さんが一緒だ。

一連の話を聞いた優介さんが言う。

「実は……ケイも此間から様子がおかしいんだ」

「早乙女さんも、ですか？」

なんだろう。二人の間で何かあったのだろうか。

考えていると、優介さんは更に続ける。

「分かりやすかったのはその次の日の朝、制服のボタンを掛け違えていたことだね。他にも授業の実技でプレイングミスを連発したり、ドローパンでカレーが引けなかったり。今朝なんて、水とタバスコを間違えて飲んでたのには本当に驚いた」

……確かに、それは変だと思わざるを得ませんね。

しかし、それは……。

「どうしてでしょう？」

「どうしてだろう？」

皆目見当がつかない。どうして二人同時におかしくなってしまったのだろうか。

「……二人とも。それは簡単なことさ」

今まで静観していた天上院さんが、割って入ってきた。

「簡単って？」

「それはだね……」

それは？

「ズバリ、恋だね！」

「午後の講義が終わったら、風見ヶ丘さんのお見舞いに行ってみない？」

「そうですね。きっと喜びますよ」

「はい待って！　そこでスルーしないで！？」

あっさりかわされた天上院さんが泣きついてきた。突っ込みは早乙女さんの管轄ですので、そちらでお願いしたい。

「……吹雪の戯言はともかく、二人に何かあったのは間違いない」

ついに丸藤さんも話に入ってきた。

「二人って言いますと、やっぱり早乙女さんと風見ヶ丘さんですか？　丸藤さん」

「亮でいい。詳しいことは、当事者に聞かなければわからないがな」

丸藤さん――亮さんはそう言うと、ＰＤＡをいじり始めた。

何をしているのかと聞いてみたら、呼び出しているとのこと。どうやら、本気で当事者に聞くつもりらしい。

暫くして、ようやく渦中の本人が来た。

「……珍しく亮からメールが着たと思えば一言『話がある』だけとか、せめて場所の指定とか書いてくれとか、優介と竜剛院は愛妻弁当食うなら二人だけの時とかにしてくれとか、吹雪はそのラブレター何枚目だとか、そもそも何故俺は呼ばれたんだとか言いたいことはあるが諸々置いておいて敢えて聞こう。帰っていいか？」

「却下だ」

「だろうな」

……いつもこんな会話をしているのだろうか、凄く気になった。
後ドサクサに紛れて愛妻弁当ってなんですか!?　た、ただのお弁当ですよ!?

「で、俺は何故呼ばれた」

「ああ。風見ヶ丘のことだが……」

呆れた様子の早乙女さんの顔が凍りついた。
そしてその反応を見逃すはずもなく、天上院さんが食いついた。

「さてはケイ。惚れたか!?」

「ラブレターに埋もれて圧死しろ」

「まだそこまで貰ってないな～」

軽口もそこそこに、更に聞く。

「早乙女さん。あの夜、何かあったんですか?」

「……あの夜、というと?」

「惚けちゃダメですよ。パーティーの後です!」

私がそう言うと、どこか困った顔になった。元々表情が薄い上、感情の揺れの割に顔に出ないため少し分かりにくい。

「……何も「ないっていうのは無しですよ」……」

先に手を潰しておかないと、こういうタイプの人は嘘が上手い。すぐに言い逃れてしまう。

「ユー、正直に言っちゃいなYO？」

「ここ最近のお前は変だ。何があった」

「ケイ。相談なら乗るよ？」

全員で問いだす。この様子に観念したのか、早乙女さんは溜息を一つ吐いてから座った。

「……言うのは構わないが、何故聞くんだ？」

「お前の様子がおかしいからだ。更には風見ヶ丘もだ」

丸藤さんの言葉に、早乙女さんは鼻で笑った。

「俺がおかしい？　俺ほど自然体の人間が他にいるか？」

「サングラスを二重に掛けている時点で自然体とは言えないな」

丸藤さんの言うとおり、早乙女さんはサングラスを器用に二重に掛けている。目の前が暗くて見えないんじゃないかとか、屋内で着ける必要はあるのかとか聞きたい。

「……決闘者（デュエリスト）たるもの、目だけでなく、直感に頼る事も必要だと思わないか？」

「思わなくないこともない。だが今日実習はなかったはずだ」

痛いところを突かれた、と言わんばかりに押し黙る。しかし、ここまで頑なに言いたくないこととは一体なんなのだろうか。

「……ＯＫ。観念しよう」

遂に白旗を揚げた。

「そうそう。始めからそうしていれば」

「吹雪。ちょっと黙ろうね？」

優介さんが天上院さんを窘める。ここからは完全に逃げ無しの話です。

「……実は」

早乙女さんが真相を話し始める。

「……別れ際に、キスした」

なるほど。だから放心して上の空に……え？

「唇にして『おやすみ。絢』って言って帰った」

……え？

「……は？」

「……はぁ」

「……これは……」

三人も似たような反応。しかし、そこから続く人はいない。

「……ケイ。ちょっといいかな？」

「……なんだ？」

最初に復活したのは、優介さんだった。

「えっと……キスして、去り際に『おやすみ』って言って、帰った……？」

「……あと、左手の薬指に、指輪を嵌めてやったのも原因かもしれん」

「あ、ああ……なるほど……つまり君は、左手の薬指に指輪を嵌めさせて、唇にキスをして、さっきのセリフを言って去っていった……と……」

「ああ」

「ああ……うん……。なるほど、ね……」

優介さんがうんうんと頷いている。ちゃんと一つ一つ噛み締めるように、じっくりと時間をかけて咀嚼している。

やがて合点がいったのか、早乙女さんに再び話しかけた。

「ねえ。ケイ」
「……なんだ？」
「君は――
――君はバカかあああ！！！！！！！！！！」
突然の怒号に、食堂にいた生徒全員が振り返った。しかし、「またあいつらか」と言わんばかりにいつもの調子に戻ったことから、よくあることらしい。
「優介。うるさい」
「うるさいじゃない！　絶対それが原因だろ！　もう１００％それだろ！」
「こいつは……本当にこいつは……」
「あはは……いや～青春してるねえ……」
動揺を隠し切れないのに、あくまで自然体を装う早乙女さんに対して、三者三様の反応をしている。
それにしても……早乙女さんって、結構大胆ですね……。
「……もういい。これ以上聞くと精神が耐えられない……」

「そうしておけ。後俺は帰る」

そう言って背中を見せる早乙女さん。しかし、私はどうしても聞きたい。

「早乙女さん」

「なんだ」

「……ボタン、掛け違えてます」

「……ああ」

どうやら気がつかなかったようだ。どうやら重症らしい。

黙々と掛け違いを直す様は、とてもシュールに見えた。

それしても、原因が早乙女さんだということはわかった。風見ヶ丘さんがおかしくなってしまったのはこの人の所為。その責任は、きちんと取って貰わないといけない。

だから。

「早乙女さん」

私は、一つ『お願い』をした。

ＳＩＤＥ：絢

「……もう、夕方ですか」

目を覚ましたら、既に窓の外は赤く染まっていた。
結局風邪の所為で数日間寝ていたわけだが、今はとても調子が良い。どうやら治ったようだ。
……あの夜のことを、不意に思い出してしまった。
パーティーの帰りに、互いに礼装で、雪の舞う夜、口づけを交わす……。名前で呼んでくれなかった男の子が、去り際に名前で別れを呟く……。

「……ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……」

どこの少女漫画ですかこれは！
あまりにも乙女チック過ぎる内容に、自分で突っ込んで勝手に悶絶する。しかもその結末が風邪を引くなんてオチが付いてしまっている分、尚更恥ずかしい。
暫しベッドの上で悶絶していた後、壁に掛けられたドレスが目に入った。
親戚の、気風の良いお姉さんが選んでくれたものだが、正直私は気に入ってはいなかった。
だってピンクですよ？　真理さんの黄色いドレスとかなら分かりますけど、ピンクなんて子供の着る色じゃないですか？　唯一の救いはフリルが付いていなかったこと位……って。

「……誰に言っているんでしょうね」

セルフ突っ込み。ボケも突っ込みも、する人間は今は自分だけ。
馬鹿馬鹿しさに、思わず手で顔を覆った。そして、不意に目に入る緑色の宝石。
一カラットにも及ばない程小さく、本当にお情け程度に付いているだけのエメラルド。
指輪の台座に嵌ったそれは、今も左手の薬指にある。

ピッタリではない。多少ブカブカな感じはする。普通に過ごす分には取れないが、取ろうと思えば取れる位の、微妙な大きさ。

……そう。取ろうと思えば取れる。でも私はここ数日間、取ろうとしなかった。何故かは、自分でも分からない。

もしかしたら心の奥底では、自分がこれを、こうしているのを望んでいるのかもしれない。

「……んな訳ねえ、って感じですね」

その考えを、すぐに否定する。いや、否定したかった。そもそも、私はこれといった取り得が、記者活動位しかない平凡な女。惹かれるような容姿も、好かれるような性格でもないはずだ。

最初にあの人に会ったのは、本当に単なるネタ探し。実技試験であれだけ大騒ぎした人が、一体どんな人だったのかを見てみたかったというのもある。

実力は申し分なし。多少抜けているところもあるが、技術自体は上級者の部類に入るだろう。

更に頭も良い。今までに調べ上げた情報によると、あの天上院吹雪さんに勉強を教えたらしい。つまりただ頭が良いだけでなく、教えることも出来ることから、理解力にも長けている。

騒動の所為で近づく生徒こそ少ないが、ルックスも悪くない。他の三人と一緒に居る事が多いので見劣りはするが、寧ろ良い部類に入る。

後は性格だが……、これが中々掴めない。

普段の様子を見ていると、天上院さんと一緒にふざけているお調子者にも思える。しかし丸藤さんと一緒にいると、落ち着いて大人びた雰囲気になる。そして件の実技試験。あの時の様子はどれとも違い、熱血漫画の登場人物のようなものになっていた。

しかし最後の一つを除いて、総じて表情に表れにくいという特徴がある。顔には出さない熱血漢、というのが私の総合評価だ。決し

て嫌われるような、厭らしい性格はしていない。

「……あれ、結構優良物件！？」

いや、そもそもそういう話ではなかったはずだ。

私が近づいたのはネタ探しの為。新聞部員一（非公認）の義務として近づいたまでのこと。それがどうしてあのような……あの、ような……『アノ』？

『おやすみ。絢』

あああぁぁあああぁぁあぁぁああ……っ！

悶絶、慟哭、葛藤。とにかくそういった類の言葉で表せられる程の板ばさみの状態になった。

また思い出してしまった。極力思い出さない様にと努力しても、どうしても出てきてしまうあの夜の出来事。

思い出さない様に悶絶して、そこから別のことを考え、また思い出してまた悶絶。だれか助けてと言いたい。

「……外が煩いですね」

そんな風に一人悶々としていると、なにやら外が騒がしくなってきた。私の部屋は三階で、寮の入口から右側に位置しているので、外の様子がよく見える。

散々悶えた病み上がりの身体を引きずり、窓から覗いて見る。すると、そこには意外な顔ぶれがあった。それも三人。

一人はウェーブのかかった髪を靡かして、いかにも委員長といった風体を魅せている、三年生の原星華（はらせいか）先輩。確か現三年女子では最も成績が良く、アカデミア倫理委員会からスカウトされているという話を書かせてもらった覚えがある。無断で書いたので、後でこっ

てり絞られたが。男勝りな正確も合わさって、かなり怖かった。
もう一人は茶髪を後ろで二つに縛った、海外デュエルアカデミアからの留学生のメイ・喜多姫さん。私と同い年でありながら三年生なのは、海外で飛び級したからだと聞いて記事に書かせてもらった。勿論お小言を頂いたが、その時の小言は「何故もっとインパクトをつけないんだ」だった。目立ちたがり屋らしい。
そして最後にもう一人。青味を帯びた黒髪を切り揃え、いつもの仏頂面で二人からの言葉を一身に受けているオベリスクブルー男子。手には荷物を持っているようにも見えるが、ここからではそこまで正確にはわからない。

「……なにやってんですか」

その男子生徒の名前は、早乙女ケイと言った。

SIDE：ケイ

「ちゃんと聞いているのか？」

ええ。聞いてますよ。
アカデミアの講義も終わり放課後となり、俺は現在女子寮前まで来ていた。
理由は簡単。竜剛院の一言である。

『早乙女さん。授業が終わったら、お見舞いに行ってあげて下さいね』

『……俺がか？』

『当たり前ですよ。当事者が行くのは当然です。当たり前と書いて当然です』

とまあ、そんな感じで行くことになった。そしてその途中目の前の二人に捕まり、今の状況が出来ている。

「だいたい、女子寮は男子禁制だ。いかなる理由があろうとも、近づくことは許されん」

見舞いも駄目なのか。だったらもう、この見舞いの品だけ渡してさっさと帰ってしまおうか。

さっきからこんな理屈ばかり聞かされている。いい加減疲れた。

「そもそも何故男子禁制になのかはだな……」

誰もそんなこと聞いていない。

ところでさっきから目の前の女子生徒――委員長っぽいから委員長でいいか――の隣でニコニコしながらつっ立っているこいつは誰だ？

俺がそう思ったのを察知したのか偶然なのか、その女が話し始めた。

「ねえ、星華さん。ちょっと思いついただけど」

「む……。何だメイ」

委員長は星華、笑顔の女はメイというらしい。

なおも話は続く。

「この子の理由も、彼女のお見舞いという事らしいですし、特例として見逃して上げてはどう？」

待て。いつ彼女と言った。そして俺は見舞いが目的だと言った覚えは無いが何故わかる。

「いや、しかしだな。たとえ見舞いでも不純異性交遊であることから……」

「硬いわねぇ。そんなことでは、将来良い人が出来ても苦労するわよ？」

「ぐ……。だが、しかし……」

歯切れの悪い返事になってきた。口勝負では星華は分が悪いらしい。

後当事者の俺を無視して話を進めないで頂きたい。

「そこまで意固地になるのなら、デュエルして決めたらどう？　万が一にでも貴女に勝てるような子ならば、変な気は起こさないんじゃない？」

「……それも、そうだな」

妥協したようだ。しかしその顔はまだ納得がいっていないようで、依然俺を睨みつけてくる。

「少年。そういうわけだ」

「……まあ、分かりました。後俺は少年ではなく早乙女です委員長」

「委員長ではない！　三年の原星華だ。手加減はしないぞ？」

……三年だったのか。道理で態度がえらく高圧的なわけだ。

だが折角三年生と闘える機会。手加減されては困る。

「上等です。全力で相手してくださいよ、先輩？」

「減らず口を……！」

「「デュエル！！」」

ケイ　ＬＩＦＥ４０００

原星華　ＬＩＦＥ４０００

「全力で行く約束だからな。先攻は私が貰う。ドロー！」

まずはデッキを見極めなければな。さて、どんな形か……。

「私はモンスターをセット。更にカードを一枚セットして、ターンエンドだ」

態々モンスターをセットした？　となれば、リバースモンスターか？

「俺のターン、ドロー」

手札の枚数からして、『メタモルポッド』のような手札交換系で

はないだろう。
　いつもなら問答無用で直接攻撃なんだが、今回は手が悪いな。その類のカードが殆どない。
　……ここは守備を固めておくか。

「俺は『機動砦のギア・ゴーレム』（ＤＥＦ２２００）を召喚。カードを一枚伏せ、ターンエンドです」

「フン。威勢が良かった割には、随分と消極的じゃないか？　私のターン、ドロー！　私はセットしていた『電池メン－ボタン型』（ＡＴＫ１００）を反転召喚！　このカードがリバースしたとき、デッキからレベル４以下の電池メンを一体特殊召喚する！　私はレベル３の『電池メン－単三型』（ＡＴＫ０）を特殊召喚する！」

　攻撃力０を攻撃表示だと？　三年が何の策も無しに来るはずが無い。となれば……何かくる。

「更に私は手札から速攻魔法『地獄の暴走召喚』を発動！　相手の場に表側表示モンスターが存在し、自分が攻撃力１５００以下のモンスターの特殊召喚に成功したとき発動できる。相手は自分のモンスターを一体選び、デッキ・手札・墓地から可能な限り特殊召喚し、私は特殊召喚に成功したモンスターを、同様に可能な限り特殊召喚する！　私はデッキから『電池メン－単三型』を二体特殊召喚する！」

「俺の場にはギア・ゴーレムのみ。よってギア・ゴーレムを二体デッキから特殊召喚します」

　これで壁は増えたが……敵も一気に四体に増えた。敵を増やしてまで単三型を増やすとなると、集まったときに効果を使えるモンス

ターか？

「『電池メン一単三型』の攻撃力は、自分フィールド上に表側攻撃表示で存在する同名モンスターの数の１０００倍だ！　よって三体の『電池メン一単三型』の攻撃力は、３０００となる！」

「に、ニターンで攻撃力３０００が三体だと！？」

ぐ……。なるほど、攻撃力０だったのは、こういうわけだったのか。

しかし壁は三体いる。一ターンは何とかなるだろう。

「ついでだ。罠カード『雷の裁き』を発動！　雷族モンスターの召喚、反転召喚、特殊召喚に成功したとき、相手フィールド上のカードを一枚破壊する！　私が選ぶのは、そのセットカードだ！」

極太の雷が、伏せカード目掛け落ちた。

伏せていたのは『グラビティ・バウンド一超重力の網一』。相手の場にはレベル４以上がいないので、破壊されても対して痛くは無い。

「……フン」

……？　なんだ、急に笑みを浮かべたぞ？

「貴様はこれだけだと思っているのか？　まだ私は通常召喚を行っていないのだぞ？」

……この言い方、何かでかいのが来るか？

「私は『電池メン一ボタン型』を生贄に捧げ、出でよ！　『充電池メン』（ＡＴＫ１８００）！」

やたらと顔の長い電池が現れた。こちらを威嚇するかのように、紫電をバチバチといわせている。

「『充電池メン』が召喚に成功したとき、デッキから『充電池メン』以外の電池メンを一体特殊召喚できる。私は『電池メン一単一型』（ＤＥＦ１９００）を特殊召喚する！」

今度はやけに太った電池。動く気がないのか、ふてぶてしく横たわっている。

不意に、単一型と目があった。

『……プッ』

……あ？　何だ今のは。笑いやがった？　映像の癖（ソリッド・ビジョン）にか？　最近の機械は本当によく出来てるな。炎の精霊といい、単一型といい。

「『充電池メン』の攻撃力は、自分の場の雷族モンスター一体につき３００ポイントアップする。私の場には五体いる。よって上昇値は１５００となり、『充電池メン』の攻撃力は３３００となる！」

っと、デブ電池なんか見ている場合じゃなかったな。

これで攻撃力３０００超えが四体か……。ちょっと厳しいか？

いや、この位なら……。

「全力で来いと言ったのは貴様だ。後悔するなよ？　単三型三体で、ギア・ゴーレム共を攻撃だ！　収束放電第三波（エナジー・コード？）！！」

限界まで圧縮され、青白くなった電流がギア・ゴーレム達を襲い爆発した。機械には適した電流・電圧が必要なんだが、基準値を大きく越えたようだな。

俺の場が空になった突如、上空に黒雲が漂い始めた。隙間のあるところでは、一筋の電流が零れているのがわかる。これが所謂幕放電という奴かと、的外れな推測を立てる。

「『充電池メン』でダイレクトアタック！　秩序を破る愚か者に正義の裁きを与えよ！　雷神の鉄槌（ミョルニル・サンダー）！！」

そこから落ちる極大の雷。それは寸分違わず俺に向かって落ちてくる。……俺に向かって？

――ツドォッ！　……ォォン。

「……星華、やりすぎじゃない？」

「あのような輩には、これ位が丁度良い」

稲妻が落ちたことにより、土埃が舞い視界が悪くなる。衝撃で、周囲に積もっていた雪は全て吹き飛んだようだ。

やがて土埃は晴れ、俺の姿を映し始めた。

――ゴォー……ーン

――ゴォー……ーン

不気味に鳴り響く鐘の音とともに、俺は姿を現した。

「……っぶねぇな」ＬＩＦＥ４０００　↓　４０００

「「なぁっ！？」」

おーおー、驚いてるな。まあそれもそうだろう。あれだけ派手な攻撃にも関わらず、相手が無傷なのが信じられないのだろう。

「『バトル・フェーダー』（ＤＥＦ０）の効果を発動した。相手の直接攻撃宣言時、手札からこのモンスターを特殊召喚することで、バトルフェイズを強制終了させる」

……手札にあって良かった。ほんっとうに良かった。冬休みに入ってからオークションで買ったカードだが、早速役に立ったな。……効果が効果なだけに、一万は痛かった。お陰で一枚しか入っていない。

「ッチ。命拾いしたな。私はこのままターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー」

それにしても。

「意外ですね」

「何だ急に」

電池メン、確かに強力だ。今回はかなり回っているが、殆どの攻撃の要は単三型。攻撃力が不安定すぎる。

「そのデッキは雷族がメインですね？　どうして攻撃力の安定する『雷電娘々《らいでんにゃんにゃん》』や、サーチに有益な『ＲＡＩ－ＭＥＩ』を使ったりしないんですか？」

この質問をした瞬間、星華先輩が固まった。その隣で、メイは「あちゃー」と顔に手をあてている。

……もしかして、地雷踏んだか？　雷族だけに。

……いや、これは無しだな。

「……ん……え……か」

ん？　何か呟いているようだが、良く聞き取れないな。

ところでメイとやらは、何故耳に手を当てているんだろうか。

「……んな……に……ん……えるか」

「何を……」

「あんな！　公俗に反しているカードを、使えるかあああ！！」

――キー……ーン

耳に、耳に響いた……。

「何で雷族のモンスターはあんなに厭らしい身体をしているんだ！？　あれでは……あれでは、使いたくても使えないではないか！」

とりあえず、落ちつ……。

「そもそもだ！　何故あのような俗世的なカードを世に放ったんだ

！　何故もっとモンスターらしいカードで無かったんだ！　あれでは……あれでは使える人間が限られるではないか！！」

……。

つまり使わないのは、イラストの所為だと……？

なおも叫びは続き、一段落がついたところで星華先輩も一息ついた。肩で息をしているが。

「ゼェ……ハァ……ゼェ……ハァ……」

「……苦労……されているんですね……」

「……そんな、哀れむような視線で見るな！　聞いてきたのは貴様だろう！」

果敢に睨んでくるが、息が荒いためあまり怖くない。

「続けていいですか？」

「……好きにしろ！」

独白のため放置されていたモンスター達の目は、心なしか白く見えた。一応謝っておこう。

さて、俺もそこまで余裕ないし、全力で抵抗させて貰うか。

まだ見ていなかったドローカードを見てみると……これはアレか。勝ってしまえということか。

「俺はライフを８００払い、手札から魔法『洗脳ーブレイン・コントロールー』を発動します」ＬＩＦＥ４０００　↓　３２００

「洗脳だと？　生憎だが私のモンスターは全てフィールドに依存するモンスターばかりだ。一体のコントロールを奪ったところで、どうにもならんぞ？」

正論だな。

単三型は三体いないとあの攻撃力は出ない。単一型は論外。充電池メンは自分の場だから、雷族のいないこちらの場ではたかだか２１００のモンスターになってしまう。

……まあ、それだけあれば十分だ。

「分かってますよ。『充電池メン』（ＡＴＫ３３００　→　２１００）のコントロールを奪います」

これで攻撃力は下がったが、大した問題ではない。

「俺は『充電池メン』を生贄に、このモンスターを召喚します」

充電池の足元に大きな穴が開き、そこから這い出た手により充電池は引きずり込まれてしまった。いうなれば、『デー〇ン・ハ〇ド』の様に。……カードの種類が違うな。

「くっ、私の『充電池メン』が……」

「贄となった魂よ。偉大な魔獣の血肉となり、神すらも慄く力を与えよ！　召喚！　『偉大魔獣（グレートまじゅう）ガーゼット』（ＡＴＫ？）！！」

皮膚は無く、筋肉が剥き出しになったかのような悪魔が、充電地メンの魂と引き換えに呼び寄せられた。

俺は最初に見た時、こう思った。

超魔ゾ〇ビ？　と。

「ガーゼットの攻撃力は、生贄となったモンスターのもともとの攻撃力の倍となる。攻撃力は墓地の時点での値となるため、『充電池メン』の攻撃力は１８００。よってガーゼットの攻撃力は３６００となる！」

「攻撃力３６００だと！？」

だが終わらない。まだ、俺は止めない。

「手札から装備魔法『デーモンの斧』を発動！　ガーゼットに装備し、攻撃力を１０００アップする！」

これで攻撃力４６００。モンスター一体の持つ攻撃力としては、十分すぎる数値だ。

「だ、だが私の場には攻撃力３０００の電池メンが三体いる！　更に単一型の効果で、こいつ以外の雷族モンスターは攻撃できない！」

しかも守備表示。貫通を持っていない限り、確かに安全だろう。

だが、そうは問屋が卸さない。仮令（たとえ）卸しても俺が卸させない。

「俺は魔法『ワンダー・クローバー』を発動！　手札のレベル４の植物族モンスターカード一枚を捨て、このターン自分のモンスター一体は二回攻撃が出来る！　俺は『棘の妖精』を捨て、ガーゼットは二回攻撃の権利を得る！」

レッグル用に入れておいた棘の妖精だが、こんな所で役に立つとはな。

これで二回攻撃し、確実にダメージは通せる。

「いくぞ！　ガーゼットの攻撃！　恐怖の大王（キング・オブ・フィアーズ）！！」

『愚愚愚愚……愚汚亞亞亞亞亞！！！』

言語にし難い悪魔の叫びが、問答無用に単一型に共振する。やがて震えは拡大し、やがて単一型は中から爆ぜた。

「もう一発だ！　単三型を攻撃！　虐殺輪廻（ナイトメア・ダンシング）！！」

「くぅっ！　む、迎え撃て！　収束放電第一波（エナジー・コード？）！！」

肥大化した豪腕を以て粉砕せんと襲い掛かる悪魔に対し、果敢に立ち向かう一本の勇者。だが、その差は余りにも大きすぎて、出現した一杯の杯によってその心意気は粉々になる。

現れたのは、黄金に輝く聖杯。しかし中身は決して清らかなものでは無かった。

「この瞬間、速攻魔法『禁じられた聖杯』を発動！　モンスター一体の効果を無効にし、攻撃力を４００ポイントアップする！　俺が選ぶのは『電池メン一単三型』だ！」

単三型の攻撃力は、効果により決定する。その元々の攻撃力は０。効果は無効にされ、聖杯の効果で攻撃力が４００アップする。よって最終的な数値は……。

「攻撃力……４００だとお！？」

「行けガーゼット！！　単三型に、攻撃だあああ！！」

振りかぶった豪腕は、容易く細い身体をへし折った。そして砕け散った破片は、プレイヤーへと襲い掛かった。

「き、きゃあああああ！！」ＬＩＦＥ４０００　↓　０

衝撃で暴風が巻き起こり、星華先輩は耐え切れずに尻餅をついてしまった。

だが、何とか勝てた。

「あらら……星華の負けね……」

ライフが０となり、映像（ソリッド・ビジョン）が消えていく。

いつまでも地べたに座らせておくわけにもいかないので、手を差し伸べてみた。

「……いらん」

その手を払い除けられてしまい、自力で立たれた。よくは知らないが、随分と男嫌いな性格のようだな。

「結果的に、早乙女君の勝ちのようねぇ。」

「……ああ」

まだ不満げな先輩だが、納得はしてくれたようだ。

「おい貴様」

「貴様ではなく早乙女です」

「……早乙女。今回だけは入るのを容認しよう。だが！　決して変な気を起こすんじゃないぞ！」

そんな気は元からありません、とは言えない。言ったら言ったで、厄介になりそうだ。

言いたいことはそれだけだ、といわんばかりに去っていく二人。去り際にメイと目が合ったが、どこか品定めをするような目だったのは気に食わない。

とにかく、これでようやく入れる。後は絢の部屋まで行くだけ……

……絢の部屋はどこだ？

「……貴方は何しているんですか」

俺が扉の前で聞きに戻ろうかと悩んでいると、中からここ最近で聞きなれた声がした。

そこを向いてみれば、思ったとおりの、いささか呆れた顔があった。

「……風邪はもういいのか？」

「お陰様ですっかり。それで、その風邪の原因さんはどうしてここに来ているんでしょうね？」

なるほど。軽口を叩けるなら、もう十分だろう。

「悪かったな。後悔も反省もしないが」

「……反省はともかく、後悔してくれていないのは良かったです」

「ん？」

どういう意味だ?
すると、絢はやや顔を赤らめて、

「だって……私の”初めてを奪った”んですからね?」

時が、凍った。
目の前の娘は、花の咲くような笑顔で、聞く人によれば爆弾発言とも取れる言葉を投下した。
そして現在の状況を改めて鑑みてみよう。
ここは女子寮。今は放課後。当然帰ってきている女子も少なからずいる。そんな女子生徒だらけの場所で、男女の会話で出る”初めて”。
つまり……。

『初めて……!?』

『まさか……あのパーティーでそのまま……!?』

『なるほど……。早乙女君鬼畜攻めの絢ちゃんが総受けか……。やはり私の計算に狂いは無かったわ!』

『私だ。異端者を一名発見した。……ああ。事実確認とともに、至急動ける団員を向かわせろ』

最後のは違うが、間違いなく勘違いされるされている。後、途中の奴。お前は黙ってろ。
そして目の前では、先程とは打って変わって「してやったり」と笑う絢。

……こいつ、謀ったか！

不意に、俺の肩に乗せられる手。……いや、握り潰さんとばかりに握力を込められた万力のような手が、しっかりと肩を掴む。

「……貴様。今の話について、じっくりと聞かせてもらおうか？」

その言葉を聞いた瞬間、俺は手を振りきり逃げ出した。それこそ、『黒蠍団撤収』も真っ青な逃げ方だった。

最後に見たのは、この光景を子供のように無邪気に笑う絢、俺を追う鬼の形相の委員長、何故かいる覆面集団だった。

『貴様アァ！！　忠告したそばから、何をしているんだあぁ！！』

『早乙女エ！　大人しくしやがれえ！』

『ウフフフ……。殺っちゃうヨォ？　胴体と首が泣き別れだヨゥ……？』

『異端者は粛清だ！　ヒャッハーッ！！』

この光景を見た生徒達は、皆揃ってこう言ったという。

これが混沌（カオス）か、と。

ＳＩＤＥ：絢

「あーー！　すっきりしましたねー！」

愉快痛快！　目の前で突如として始まったリアル鬼ごっこは、本当に面白かった。後で目撃者達に聞いて、記事に纏めよう、そうしよう。

それにしても、ケイさんのあの驚いた顔は見物だった。案外中身は純情みたいですね。

「……ん？」

良い気分のまま自室に戻ろうと踵を返す私。しかし、足元になにかが置いてあるのに気付いた。

それは紙袋。位置からして、ケイさんの忘れ物でしょうか？

一瞬どうしようかと悩んだが、私のお見舞いのつもりだったらしいし、開けても問題無いだろう。そう自分を納得させ、早速開けてみる。

「あ……」

出てきたのは籠に入った林檎……とドーナツ。林檎はまだわかる。でも何でドーナツがあるのだろう。

別にあって困るわけではない。寧ろ嬉しい。なぜならこれは私の大好物。しかもアカデミアの購買で限定販売されている物だ。

どうして入っていたのかは分からない。私の好物を知っていた？

……まさか。

色んな憶測を立てていると、林檎の陰に隠れていた一枚の紙が目に入った。

取って開いてみると、そこには短く数行だけ書かれていた。

『竜剛院から好物を聞いた。無理はするな。　早乙女ケイ』

手渡しのはずなのに名前が書かれているのは、恐らく私が寝ていたときの措置だろう。

好物のことは真理さんから聞いた……。なら納得がいく。しかし、その後に添えられた一文に、私は気をとられていた。

……まったく。あの夜もそうだが、どうしてこうなんだか。

何気なくされる仕草に一文。それだけで、何故か身体の奥から暖かいものが湧き上がってくる。

ちょっとした動作で、すぐにペースを乱される。あの人の世界に、惹かれていく。

あの夜の、あの行動。私には不可解なものが多すぎた。

どうして、したのか。どうして、私なのか。

自問自答を繰り返し、答えが出て、それを否定して。

でもやっぱり、何度繰り返しても出る答えは同じ。大アルカナの運命の輪に導かれるかのように、答えは決まっていた。

自惚れかも知れないし、ただの自意識過剰かもしれない。でも、私を気に掛けてくれているあの人に、私は言いたい。

好きになっても、いいですか？

十一／変化と混沌　祭り後の後の祭り（後書き）

※今回はやけに長いです。

亮「いつもと違うな」

はい。セリフ以外の各行の前を一マス開けてみました。普通の小説風に。後書きも少し変えてみます。見づらかったり今まで通りが良かったりの場合は、感想に書いてください。

【1．二人の進展について】

亮「それにしても、二人がそういう仲か……」

いやあ。前話でキスしちゃったわけだし、互いに意識しないのはおかしいと思って。

吹雪「うーん青春だねえ！」

何故出たブッキー。

吹雪「愛の伝道師、天上院吹雪に不可能はない！」

亮「但し出来ることもない」

吹雪「少し位あらぁ！？」

吹雪うるさい。

【2．謎の覆面集団】

亮「とりあえず、なんだあの集団は」

パーティー前に優介を拉致って行った輩です。嫉妬に溺れた集団です。異端〇問会とか言ってはいけない。

【3．またまた新キャラ登場】

吹雪「何気に新キャラ登場だね」

新キャラその1、原星華。この子に関しては、原作のアニメGX

見ている方なら分かるでしょう。倫理な所のあの人です。
亮「原、といえばＴＦにも一人いたな」
　はい。名前から分かるとおり原麗華の姉です。
吹雪「最初はそっちで考えてたんだよね」
　やっぱ委員長は良いキャラしてるし……。ただバーンデッキが差別視されているこの世界でどう立てようか悩んだ結果、ビートデッキの彼女が生まれました。
亮「あのデッキは？」
　委員長→規律に煩い→怒りっぽい（？）→雷落とすって感じで。後は彼女の感性で娘々（にゃんにゃん）やＲＡＩ－ＭＥＩを抜いた電池ビートになった。今後の出演は未定。
吹雪「もう一人はメイさんだっけ？」
　新キャラその2、メイ・喜多姫。ＴＦ５からの出演です。
亮「イメージとしては、高飛車なお嬢様か？」
　そだね。ゲームと口調違うかもしれないけど概ねそんな感じ。ただあのデッキは鬼畜。
吹雪「意味深な目で見てたね。フラグ？」
　さあ？　ただ言えることは、ハーレムなんぞ無い。
亮「その割には、作者的に甘い話ばかり書くな？」
　……それが謎なのだよ。筆が進むと、何故か甘くなってる。　今あるプロットでも……おっとこれ以上は言えない。
吹雪「恋の話なら、僕が大活躍だね！」
　それも言えない。というか分からない。その時の気分だし。

【４．ちょっと近況を】

　改めて禁止制限リストを見てたら、救助猫が禁止になってくれちゃってたよ。コ○ミさんにはまじ感謝だね。
吹雪「レスキューキャット？」
　そう！　奴のせいで１ターン目からゴヨウとかまじふざけんなだったんだけど、ようやっと禁止になってくれたぜ！　後は除外され

るときはシンクロ出来ないって裁定にしてくれれば文句なしなんだけどな。
亮「無理だな」
　うん。だからそこら辺はもう諦めてる。しかし『次元幽閉』を入れることだけは辞めない。スタダがなんぼのもんじゃい。
吹雪「ただの好き嫌いじゃん」
　シンクロ？　なにそれ、融合使え融合！　って人間ですから。

【５．次回予告です】
亮「……いい加減次回予告しろ。読者も飽きてきてるだろうからな」
　ぬおぅ！？　やべえ喋りすぎた！　亮、吹雪！　次回予告だ！
吹雪「やれやれ……えっと次は……休み明け？」
亮「冬休みも無難に終わり、新学期が始まる。冬休み中の努力が実を結びメキメキと頭角を表す俺達。そこに舞い込んできたある行事が問題を起こす」
　徐々に広まるアカデミアの闇。小さな闇が、大きな夜となって襲い掛かってくる！　次回、『新学期と選抜』　！　お楽しみに！
吹雪「更新はいつかはわからないけどね！」
亮「誤字・脱字報告もよろしく頼む」

※２０１１／０２／０６　修正

十二／新学期と選抜　吹雪サイド（前書き）

激動の受験地獄・完！
ケイ「結果発表が残ってるだろ」
発表まで時間がある！　その間に今までの分更新するのだ！
ケイ「……まあ、最悪落ちなければいいしな」
そうそう。後は座して待つのみってね。
ケイ「それはそうと、代表決定デュエルか」
今まで少なかったデュエル分を、思いっきり摂取します！
ケイ「本当に少なかったからな……」
具体的には、ラブコメしたりのんびりしたりラブコメしたり……。
てか原因お前だよお前！
ケイ「は？　ラブコメは優介の管轄だろう？」
あ、駄目だコイツ。自覚無しだ。
ケイ「……？」
まあ、いいや……。本編どうぞ……。

十二／新学期と選抜　吹雪サイド

「ノース校との友好デュエル？」

冬休みも明け、日常の喧騒を取り戻しつつある今日、そんな話を聞いた。

意外なことに、その話を持ってきたのは亮だった。

「ああ。毎年二学期が始まると行われるらしい。そのデュエルの代表は全校から選ばれ、しかも今年は全学年から一人ずつ出すらしい」

ノース校といえば、ここデュエルアカデミア本校の姉妹校にあたるらしいが、そこの立地条件は険しい山岳地帯にある。外からの進入は困難、中からの脱出も困難。そして何より、生徒の性格が悪いことでも有名である。

「それで、そんな話を持ってきて、何が言いたいんだ？」

「今年の代表選手はトーナメントで決めるらしい。生徒は自由参加だ。俺は出てみるつもりだが、ケイはどうする」

その言葉に、ちらりと亮の腕を見る。

漆黒の闇を思わせる、鋭く光るブラックデュエルディスク。あのトーナメントの優勝者である亮が出れば、それは最早決まったも同然ではなかろうか。

「悪いが「ちなみに参加賞は食券三食分らしい」出るに決まっているだろう」

食券三食分だと？　それはつまり、普段はちょっと手を出せないお高めのカレーが食えるということじゃないか。出ないわけにはいかないな。

「そうか。それじゃあ俺は参加登録をしてくるが、一緒に行くか？」

「ああ。だが亮」

「なんだ」

「――まず、飯にしないか？」

目の前には、覚めたカレーうどんが鎮座していた。

「すまない。気がつかなかった」

そして亮の前には鰤定食。添えつけの味噌汁は、やはり冷め切っていた。

この男、デュエルのことになると周りが見え無過ぎである。

『ア、ア……テステス……ンン、ビュッフェアラモードラタトゥーユ……』

マイクテストにそれは如何なものだろう。

デュエルアカデミア本校に於いて、一番でかい体育館に集められた俺達の前では、クロノス教諭がマイクを持って音声チェックをしていた。

参加しているのは見たところ全学年から六十四人ずつ。他にも観

戦する生徒もいるわけだから、総勢じつに二百人を超えている。

『シニョールシニョーラ、お待たせしたノーネ！　ただ今より、学園代表決定トーナメントを、開始するノーネ！！』

『『『ウオオオオオォォ！！』』』

大体育館にて、トーナメントの開催が宣言された。

今回のトーナメントは、学年最強を決めると言っても過言ではない。なにせ、殆どの腕に覚えのある生徒が参加するのだから、半端な力では勝ち残ることすらも難しい。だからこそ、向上心を持った生徒達は大いに盛り上がっているわけである。

「いや～盛り上がってるねえ」

「吹雪、君も参加したのかい？」

「まあね。大舞台なら僕がいないと始まらないじゃないか！」

なんとも調子のいい奴だ。吹雪と優介、この二人も参加登録を済ませてあるらしい。いずれは当たるであろうが、そこまで神経質になることもない。

『ドゥエーハ、今回のルールを説明するノーネ！　今回のトーナメントは、各学年毎にAからDまでのブロックに分かれてオーリ、その中の優勝者四人が準決勝、決勝を戦い優勝を決めるノーネ！　そして見事優勝した生徒の総勢三人は、栄えある友好デュエルの代表となりまスーノエルニーニョ！』

生徒達には、事前のどのブロックの何番かを記した紙が配られて

いる。

「みんな何番？」

「僕はＡの二番だね」

「Ｄの一だ」

「俺はＢの七番だな」

見事にバラバラである。

「優介はどうだ？」

「ああ。俺はこれとは別のトーナメントに出場する予定なんだ」

「別のトーナメント？」

何だそれは。聞いていないぞ。

『エそれデーハ、各自自分のブロックの所へ分かれるノーネ』

「それじゃ、俺はあっちだから」

あ、おい。

止める間もなく、優介は去っていってしまった。

「別のトーナメントって何だろうね？」

「さあな。だが、俺達がすることに変わりは無いだろう」

亮はそういうとさっさとDブロックの集団へ向かっていってしまった。
残るのは俺と吹雪だけ。仕方ない、さっさと移るか。

「じゃあ吹雪。後でな」

「うん。決勝で待ってるぜ！」

なんとベタな。サムズアップに、歯がキラリとしたのが軽くムカついた。

「さーて、僕はここだね」

アカデミアの校内には、デュエルリングが幾つもある。大きさこそ異なるが、僕のいるAブロックはオベリスクブルーの物を使用するらしい。
ここで今回のトーナメントの説明をしておこう。
一ブロックの参加者は十六人。シードは無しで、四勝すればブロック優勝である。
デュエル中の様子はモニターに映し出され、各ブロックの参加者も見れるようになっている。つまり、別ブロックの勝者がわかるということだ。一番大きなデュエルリングのある大体育館には、未参加生徒や校長等が見ており、今回のデュエルの結果次第で成績の昇降もありえる、との触れ込みだ。
……ところでこのトーナメントは学年別。つまり一学年で四つのステージを使うわけで、三学年で十二ステージ。多すぎじゃあ無いかな？

『エントリーナンバー一番と二番は前へ！』

おっと、どうやら始まるようだね。

僕は二番。つまり、初戦から戦うことになる。とやかく言われる前に、さっさと準備するかね。

ちなみにレフェリー、立会人を務めるのは……えーと、グラサン先生！　名前が思い出せないからこれでいいか。

『ではこれより、Ａブロック一番対二番の試合を始める。両者構え！』

リングに上がって向かい合った僕らは、互いにデュエルディスクを構える。ちなみに相手はラーイエローの生徒。負ける事は無いと思うけど、油断は出来ない。

「ブルーでも負けないぞ！」

「お手柔らかに」

元気がいいね。中々好感の持てる人だ。これが女の子だったらなぁ……。

『それでは……始め！』

「「デュエル！！」」

吹雪　ＬＩＦＥ４０００

イエロー　ＬＩＦＥ４０００

「先攻は僕が貰う、ドロー！」

……うーん、ちょっと厳しいスタートかな？　上級モンスター三枚もいらないって。

「僕は『激昂のミノタウルス』（ＡＴＫ１７００）を攻撃表示で召喚。カードを二枚伏せて、ターンエンドだ」

ま、最初はこれで様子見といこうかな。

「俺のターン、ドロー！　俺は、モンスターをセット！」

ふむふむ。裏側守備表示ということは、リバース効果かなにかを持ってことかな？

となるとモンスターは壁、ここは当然次に繋げるためのカードを……。

「俺はターン終了だ！」

ええええええ！？　いやいやいや、僕のモンスターは貫通持ちなのに、伏せカードなし！？　何がしたいんだ！？

……落ち着け、狼狽えるな僕！　きっと何か考えがあるんだ！

「僕のターン、ドロー！　……よし。僕は魔法カード『二重召喚』を発動！　効果により、僕はこのターンニ回通常召喚が出来る！」

なるべくミノタウルスは生贄にしたくないからね。貫通効果持ってるし。

「まず『隻眼のホワイトタイガー』（ＡＴＫ１３００）を召喚！

そしてもう一回の通常召喚で、『暗黒のマンティコア』（ＡＴＫ２３００）を召喚！　行けマンティコアよ、セットモンスターに攻撃だ！　ブラッディ・スクリーム！！」

『ＧＡＡＡＡＡＡＡＡＡ！！！』

マンティコアの咆哮が、セットモンスターを直撃……する直前、モンスターの姿がぶれた。

再び見てみると……あれ、ミノタウルス！？　しかもリバースされた『マジック・ランプ』が、僕の場に移ってる！？

「『マジック・ランプ』（ＤＥＦ１４００）の効果発動！　このモンスターが攻撃された場合、ダメージ計算前に戦闘対象を入れ替える！　俺は、お前のミノタウルスを選択だ！」

ということは……ミノタウルスとマンティコアがバトル！？　こりゃまずい！　ダメージ計算前じゃ罠は発動できないじゃないか！

マンティコアの咆哮は止まらず、ミノタウロスは呆気なく破壊。差分のダメージが僕のライフから引かれた。

「むぅ……。仕方ない、僕はターンエンドだ」ＬＩＦＥ４０００↓３４００

手札の上級モンスターを一枚消費できただけでもよしとするか。

「俺のターン、ドロー！　『マジック・ランプ』の効果を発動！手札から、『ランプの魔精・ラ・ジーン』（ＡＴＫ１８００）を特殊召喚する！　今手札には三枚ある！　よって全て召喚だ！」

ランプの注ぎ口から煙が出て、三つに分かれたと思ったら実体化

した！？　凄いな、本当に童話のランプの精みたいだ！
……なんとなく、『開け～ゴマ！』って言いたくなったのは秘密だ。

「そして俺は、『風霊使いウィン』（ＡＴＫ５００）を召喚！　そしてウィンと風属性の『マジック・ランプ』を墓地に送り、『憑依装着－ウィン』（ＡＴＫ１８５０）を特殊召喚だ！」

……なんっちゅー回転速度だい。手札があっと言う間に一枚だ。
もしかしてデッキ全部モンスターカードとか言わないよね？

「そして俺は魔法カード『ソウル・テイカー』を発動！　相手ライフを１０００回復し、場のモンスター一体を破壊する！　砕けろマンティコアめ！　魂奪取（ソウルスナッチ）！！」

僕のライフを回復？　――ってあああ！！　マンティコアああああ！！
これで僕の場はゼロ。総攻撃を喰らったらお終いじゃないか！

「ちょ、ちょっとま……」ＬＩＦＥ３４００　→　４４００

「いくぞ！　モンスターで、総攻撃だあああ！！」

人の話は聞いてええええ！
相手の総攻撃力は……１８００の、掛ける３の、１８５０で……
あーもうっ！　５０がめんどくさぁい！！

「罠発動『重力解除』！　全ての表側表示モンスターの表示形式を変更！　君の攻撃モンスターは、全て守備表示になる！」

全モンスターが、攻撃を中断して戻っていった。
……危なかった。ほんっとうに危なかった！　一回戦負けなんて、他の皆に格好がつかないよ！

「くっ、防がれたか……。ターン終了だ」

「この瞬間墓地の『暗黒のマンティコア』の効果発動！　手札か場の獣・獣戦士・鳥獣族モンスター一体を墓地に送る事で復活する！　手札の『神獣王バルバロス』を墓地に送り、蘇れマンティコアよ！！」

マンティコアは合成獣キメラと同一視される傾向がある。
それに従ってなのかは分からないけど、何故かバルバロスが合成獣に姿を変えた。
僕は聞きたい。合成元が一体しかいないのに、どうして合成されるんだ！？
……まあ、本当にどうでもいいことだよね。

「僕のターン、ドロー！」

さあて、ここからが正念場だぞ。手札には今引いた『強欲な壺』のみ。これで何か引けなきゃ、本当に困った事になる。
頼むぞ壺よ！　そのにやけ面で勝利を導いてくれ！

「『強欲な壺』を発動！　二枚ドロー！！」

……引いたのは……モンスター！

「いよっしキタ！　僕は『神機王ウル』（ＡＴＫ１６００）を攻撃表示で召喚だ！」

機械族のコイツは、本来僕のデッキに入るべきカードじゃない。殆どが獣か獣戦士だからね。でもこいつは中々重要なファクターを抑えている。

今はそれは使えないけど、この状況ならコイツは嬉しい誤算だ！

「いくぞ！　『神機王ウル』でラ・ジーンを攻撃だ！　閃光弾（フラッシュ・ショット）！！」

ウルが両腕に装着したショットガンで、ラ・ジーンを乱れ撃ちする！

守備力が１０００のラ・ジーンは当然反撃する事も出来ず、どてっ腹どころか全身に風穴を開けて四散した。

「くっ！　だがモンスターは守備表示！　俺のライフが削られる事は無い！」

「フフン。本当にそうかな？」

「何！」

どうやら相手はウルの効果を知らないようだ。そりゃ、コイツの与えるダメージが０になる効果なんて何の得もないからなあ。でも、ウルにはもう一つ効果があるんだよ？

「『神機王ウル』の効果発動！　このカードは全ての相手モンスターに攻撃できる！」

「な、なんだってー！？」

「はっはっはぁ！　ゆけ乱射マシーン（？）ウルよ！　フル・バア

アァァストオオォォ！！！！！」

ウルが、撃つ！　とにかく撃つ！
撃って撃って撃って撃って撃ちまくる！　敵を全滅させよと轟き叫ぶ！　……こりゃ違うか。
なにはともあれ、相手は全滅。一番守備力の高かったウィンでも１５００だから、１６００のウルには敵わない。

「そしてマンティコアで直接攻撃だ！　メガトン・パーンチ！！」

「げどらっ！？」ＬＩＦＥ４０００　↓　１７００

直接の衝撃は無いはずなのに、何故か吹っ飛ぶイエロー生。いやあノリが良いのか、海馬コーポレーションの技術が凄いのか……。
なんか海馬社長……いや、会長が高笑いしてるのが聞こえた気がした。

「僕はカードをセットして、ターンエンドだ」

「く、くそぅ……ドロー！　『魂を削る死霊』（ＤＥＦ２００）を守備表示で召喚して、ターン終了だ！」

未だに出てきた魔法・罠カードは『ソウル・テイカー』のみだ。
相当モンスターの比重が大きいみたいだけど、これほどの回転力は敬服に値するよ。
それでも、僕は勝ちにいくけどね。

「僕のターン、ドロー！」

さあて、仕上げに取り掛かるかな！

「罠発動『リビングデッドの呼び声』！　墓地からモンスター一体を攻撃表示で召喚する！　蘇生させるのは、『激昂のミノタウルス』だ！」

「くっ、だが死霊は戦闘では破壊されない！　次の俺のターンで、そいつ等を倒す！」

フフン。どうやら効果を知らないようだね。

「ミノタウルスがいる限り、獣・獣戦士・鳥獣族は貫通効果を持つのさ！　つまり守備でも無効！」

「な、なにい！？　それじゃ、これじゃあ……」

そう、全ては計算どおり！　……ごめん嘘！

「これで僕の勝ちだ！　行けマンティコア！　メガトン・パーーーンチ！！！」

大きく振りかぶった拳は、死霊を突き抜けプレイヤーへと襲い掛かった！

「ひい……こんな……な……なごべっ！！」ＬＩＦＥ１７００　→　０

世紀末的な断末魔を上げ、相手は倒れた。……まさか死兆星が見えてたりしないよね？

『勝者、エントリーナンバー二番！』

まあ結果は勝てたんだ。良しとしよう！
……それにしても出したかったなぁ、バルバロスの進化版。折角手に入ったのに……。
ま！　次の試合で出せばいいか！

『勝者、エントリーナンバー二番！』

全く不甲斐ない。所詮はラーイエローということか。
このデュエルトーナメントは流石に反対された。他校との親善試合は毎年一人と決まっていたから、そのような反応は仕方ないとも言えよう。
しかし「我が校の優秀さを知らしめるチャンスだ」と一言加えた途端、クロノス教諭を始めとしたオベリスクブルー贔屓の教師共が簡単に寝返った。まったく、単純な輩がこうも使いやすいとはな。
天上院吹雪の試合が終わったので、別のモニターに目を移してみる。

『サイバー・ドラゴンで攻撃！　エヴォリューション・バースト！！』

『う、うわあああ！！』

『勝者、エントリナンバー一番！』

Dブロックでは丸藤亮が勝ったか。そうだ、それで良い。私が考

える計画の実現の為には、より濃密度のデュエルをする君達に勝ち残って貰わなければならない。その為、既にトーナメント前に何人かの生徒を懐柔しておいた。後は彼等と当たるのを待つのみ。そうすれば、私の野望は実現への道を一気に駆け上るだろう。

再び、別のモニターにも目を移す。

『くっ……っそう！！』

『しょ、勝者！　エントリーナンバー三番！』

彼等のいずれもが出ていない唯一のブロック、Cブロックでは既に私の懐柔した生徒が猛威を奮っていた。

元々彼は悪質なデッキ使いだったため、周囲から酷く疎まれていた。そんな彼を言い包めるのはとても容易かった。

更には彼のデッキは私の与えたカードにより、悪質さが増し凶悪なデッキへと生まれ変わっている。あのデッキと闘うことになれば、素晴らしいエナジーが摂取できるだろう。

しかしここでは駄目だ。ここにはあの装置がない。このトーナメントが終わり、ノース校との親善試合が終わった時。その時が……。

『エントリーナンバー七番と八番は前へ！』

Bブロックは進みが早いのか、既に四戦目へと入ろうとしている。そこに映るのは、オベリスクブルー上位の早乙女ケイ、そして私の手ほどきを受けたレッド生徒。

あの生徒のデッキも私のカードによって凶悪なモノに変わっている。

……さあ、どう攻略する？

十二／新学期と選抜　吹雪サイド（後書き）

今回は優介に来てもらいました。
優介「こんにちは……いや、こんばんは、かな？　掲載時間的に」
細けえこたぁいいのです。

【1．代表決定デュエル】
今回はラーイエローのモブA君が相手でした。
優介「殆どがモンスターで固められたデッキだったね」
モンスターだけでどこまで回せるか試してみたけど、実際に書くといかに最近のカードの効果インフレが激しいかよく分かります。
優介「出たモンスターは、あの海馬社長も初期に使ったラ・ジーン。この世界では割と簡単に手に入るポピュラーなカードです」
他のカードも割と簡単に手に入るものばかり。レア度もここでは低いです。
優介「レアカードはそうそう持ってないって。亮とかは特別さ」
お前も持ってるじゃん。オネストとかいうチートカード。
優介「チート言うな」

【2．優介は何処へ？】
語れません。
優介「ちゃんとデュエルはしますよ？」

【3．他の二人は？】
次回から一話一キャラペースでデュエルさせていきます。ブロック予選だけでも合計で十二戦以上あるし。
優介「え゛。まさか、一戦一戦書くの……？　合計十二話！？」
ドアホ。そんなに書けるか！　過労死させる気か！？
優介「ま、まあそうだよね……」

【4．挿話の予定が！？】

優介「あるの！？」

なんじゃいその驚きようは。

優介「いや……そんな暇あるのかなと……」

どんな話にしようか迷ってる。但し甘い話は無し。

優介「何で？」

ラブいムード出しすぎなんだよお前等は！　一部には化け物扱いされとるぞ！　いっそ堕天させたろか！

優介「酷っ！？」

【5．次回予告ですよ】

さあ次回はケイのターン！　謎の敵の手ほどきを受けた相手に、苦戦を強いられてしまうのか！？

優介「次回、『狼男と破壊』。君ならやれる、負けるなケイ！」

デュエルスタンバイ♪　……やっぱ無しで！

十三／狼男と破壊　ケイサイド（前書き）

怒涛の連続更新んん！！

優介「まさかの二日連続か」

ストック出し切る気で行きます！

優介「受験シーズンだったのに、どこにそんな余裕があったんだか……」

そして優介！

優介「何？」

なんとユニーク一万突破だあああ！！

優介「……えーと、凄いの？」

わからん！

優介「わかんないのかよ！」

でも嬉しい事には変わりないので、近々挿話書きます！　では本編ドーゾ！

十三／狼男と破壊　ケイサイド

俺はくじ運が悪いらしく、こういったイベントでは後ろの番号を引いてしまう。おかげでデュエルが出来ず他の出場者のデュエルを見ているしかなかったわけだが……。

「……いくらなんでも、なあ」

あれは酷すぎる。そう思いながら見ていたのが、一回戦から三回戦だ。

手札を補充するために『強欲な壺』が入っていたとする。それはわかる。だが何故『壺盗み』なんて入れているんだろうか。ドローを封じるにしても、『精霊の鏡』だとか、もっと他にあっただろうに。

それだけじゃない。相手が『光の護封剣』を使ってもいないのに『ウェザー・レポート』を二枚摘んでいたり、『G・コザッキー』を使ったと思ったら何の抵抗も無く『コザッキー』を破壊されて自滅したり、とにかくお粗末なタクティクスに目を背けたくなった。

これをしたのがオシリスレッドとかならまだ良い。いや、本当は良くないんだが、日頃から予習復習をせずに授業も寝ているような輩が多いレッドならまだしも、高校からの編入生がいたりするラーイエローでもこのようなことが起きているのだから頭が痛い。

お前達は何を学んでいたんだ、と本気で問いたくなったのも一度や二度ではない。

こんなピンポイントメタカードばかり使った試合を見てきたからか、俺はデュエルが始まる前から衰弱していた。正直しんどい。

せめて、俺の相手だけでも、まともなデッキ構成であるよう願いたいものだ。

『エントリーナンバー七番と八番は前へ！』

さて、どうやら俺の番がきたようだ。
デュエルリングへと上がり、対戦相手を見てみる。
制服は赤。ということは、オシリスレッドが相手か。

『ではこれより、Ｂブロック七番対八番の対戦を始める。両者構え！』

レフェリーの教師の言葉に従い、互いにデュエルディスクを構える。
相手はやや緊張した面持ちだ。しかしレッド生徒は稀に思いもよらない手を繰り出してくる。侮れない試合になりそうだ。

『では……始め！』

「いくぞ、デュエル！」「でゅ、デュエル！」

ケイ　ＬＩＦＥ４０００
レッド　ＬＩＦＥ４０００

「先攻は貰う。ドロー！」

負けたら終わりのトーナメントだ。最初から全力で行かせてもらおう。

「俺は『逆巻く炎の精霊』（ＡＴＫ１００）を攻撃表示で召喚。更に『進化する人類』を装備させる」

今ライフ変動はない。このままでは攻撃力は１００のままだが、

これでいい。
　このトーナメントを勝ち抜くために、今日まで必死にデッキをいじってきた。そしてこれからその成果を試してみようじゃないか。

「カードを一枚伏せ、ターンエンドだ」

「ぼ、僕のターン、ドロー！　僕は、『ガーゴイル・パワード』（ＡＴＫ１６００）を攻撃表示で召喚！　炎の精霊に攻撃！　パワー・スクラッチ！」

　攻撃力１６００か。オシリスレッドにしては中々堅実な手を打ってくるな。実技は得意だが、筆記が苦手というタイプか？
　だが伏せカードを警戒せずに踏み込んでくるのは感心しないな。見せてやろう、これが俺の新たな手だ！

「罠発動『ドゥーブル・パッセ』！　相手の攻撃宣言時に発動し、その攻撃はプレイヤーへのダイレクトアタックとなる！」

　ガーゴイルの鉤爪が、鋭く引き裂く。

「ぐうっ！！」ＬＩＦＥ４０００　→　２４００

「じ、自分で直接ダメージを喰らった！？」

　っ……！　さすがに、１６００のダメージはきつい。
『ドゥーブル・パッセ』は、最近新しく発売したパックに入っていたカードだ。このカードは相手モンスターのダイレクトアタックを喰らう代わりに、とても良い働きをしてくれる。

「相手モンスターの攻撃の後、自分のモンスターは相手プレイヤー

にダイレクトアタックをする！　もっとも、『逆巻く炎の精霊』は元々直接攻撃型モンスターだけどな」

杖の先に小さく、仄かな火を灯した。それはゆっくり、ゆっくりと相手プレイヤーへと向かっていく。

「だ、だけど攻撃力はたったの１００！　１６００も喰らって与えるのがたったの１００じゃ、割に合わないじゃないか！」

本来なら、その考えは正しいだろう。だが悲しいかな。筆記が苦手なのが仇となったなレッドよ。

「『進化する人類』の効果適応だ。こちらのライフが相手より少ない場合、装備モンスターの元々の攻撃力は２４００となる！　よって炎の精霊が与えるダメージは２４００だ！」

小さく揺らめく炎は、ガーゴイルを無視しプレイヤーへと辿り着く。

その胸元に触れた瞬間、蝋燭ほどの火から燃え上がる火柱へと昇華した。

「う、あ、あああああ！！？」ＬＩＦＥ４０００　→　１６００

……一瞬、『今のはメラゾーマではない。メラだ』と言いたくなった自分を何とか抑え込んだ。あの台詞を言ってみたいと思ったのは、恐らく俺だけじゃないはずだ。

ちなみに他に言ってみたい台詞は、バ○ン様とフ○ーザとク○ーの名台詞だ。『速さが足りない！』は誰もが夢見た台詞だろう。少なくとも俺は夢見ている。

「くぅ……。な、なんて早くて、重いカウンターなんだ……」

相手が悔しそうに言ってくる。反応からして、この罠を入れたのは正解だろう。

やはり炎の精霊を生かすためには、『攻撃の無効化』と『攻撃回数の増加』が絶対条件だ。その意味では、『ドゥーブル・パッセ』は実に良い働きをしてくれた。

……『棘の妖精』と『ワンダー・クローバー』は抜いたままでいこう。元々『レッグル』の使用頻度は余り高くないし、なにより使いにくい。ガーゼットの二回攻撃が出来るのは魅力的だが、あの攻撃力なら攻撃回数は問題じゃない。

「ライフが逆転した事で再び『進化する人類』の効果適応。『逆巻く炎の精霊』の元々の攻撃力は１０００となり、自信の効果で１００ポイントアップする」

「ぼ、僕は永続魔法『凡骨の意地』を発動！　更にカードを二枚セットして、ターンエンドだ！」

ライフの逆転で、現在炎の精霊の攻撃力は２０００。直接攻撃すれば勝てるだろうが、この場面でさせてくれるほど相手もやわじゃないだろう。というより、この程度で倒れられても困る。俺の力がどこまで通用するか、改めて知っておきたいからな。

「俺のターン、ドロー！　『逆巻く炎の精霊』でダイレクトアタック！　フレイム・ボール！」

言った後で小さく「ウル・カーノ」と呟き、炎の精霊は杖の先から火の玉を生成する。

メロン大の大きな火球が、相手プレイヤーへと推進する。

「罠発動『和睦の使者』！　戦闘ダメージを0にする！」

火球は透明な壁によって阻まれ、ダメージを与える事が出来なかった。

……炎の精霊の効果は、ダメージを直接攻撃で与えた時に発動する。つまり直接攻撃しただけでは駄目なのがネックだな。

「……俺はモンスターをセット。更にカードを一枚伏せ、ターンエンドだ」

「僕のターン、ドロー！　この時『凡骨の意地』の効果発動！　ドローフェイズに引いたカードが通常モンスターだった場合、続けてドローする事ができる！　僕が引いたのは通常モンスター『ゼミアの神』！　よってもう一枚ドロー！」

通常モンスターを手札に肥やすのか？　狙いがあるとすれば……エクゾディアか？　だがあれはかなり高価なカードだ。かつてグールズに複製されていたコピーカードも出回っていた事から、本物が市場にでるのは非情に稀。コピーカードは全て処分されたという話を聞いたこともあるので、持っているのは本当に極僅かな人だけだ。お目にかかれるなら見てみたいが……違うだろうなぁ……。そんなにレアなカードを持っていたら、エリート意識の強いオベリスクブルーの男子生徒が黙っちゃいないだろうし……。あ、俺もブルーか。

「引いたのは通常モンスター『暗黒魔神　ナイトメア』！　よってもう一枚ドロー！」

……よく引くな。しかもかなり古いカードだ。

その後も通常モンスターは続き、追加で六枚ほど引いたところで

打ち止めとなった。
だが、相手はそれだけじゃ終わらなかった。

「ドローフェイズ終了の前に、罠発動『強欲な瓶』！　デッキからカードを一枚ドロー！　さらにドローフェイズ中のドローなので『凡骨の意地』の効果発動！　僕が引いたのは通常モンスター『邪剣男爵』！　よってドロー！」

『強欲な瓶』にこんな使い方があったのか。中々興味深いな。
相手は更に四枚引き、手札の合計は十三枚。多すぎだろうとは思うが、相手にしてみればまだ足りないようだ。
と、ここで驚くべき手を使ってきた。

「僕はカードを二枚伏せ、手札から魔法カード『手札抹殺』を発動！　互いのプレイヤーは手札を全て捨て、同じ枚数ドローする！　僕の手札は十枚！　全て捨て十枚ドロー！」

……いや、デッキなくならないか？　十枚ドローとか絶対足りなくなるだろう。
しかしそう思って相手のデッキを見てみたら、なんと目測三十枚以上はあった。こういうケースでカードが足りなくなるのを防ぐためだろうか、異常にデッキが多い。
しかし俺のデッキはそうはいかない。可能な限り回るように、デッキは少なくしてある。
今回捨てたのは二枚。『偉大魔獣　ガーゼット』と『機械複製術』だったが、どちらも今の状況では使えなかったので正直ありがたい。
新しく引いたのは……新しく入れてみたカード。これは面白いな。

「よし、準備は整った！　僕は先程伏せたカード、儀式魔法『合成魔術』を発動する！」

儀式魔法……。ということは、さっきからドローしまくっていたのは、必要なカードを揃えるための予備動作。本命は『手札抹殺』だろう。

それにしても『合成魔術』か。あまり聞かないが、何を召喚できたかな？

「僕は手札のレベル４の『ウィップテイル・ガーゴイル』とレベル４の『絵画に潜む者』を生贄に、『ライカン・スロープ』（ＡＴＫ２４００）を特殊召喚する！　降臨しろ、『ライカン・スロープ』！」

フィールド上に魔法陣が描かれ、その中央に二体のモンスターが飛び込み強大な光を放った数瞬後、全身からコードを張り巡らせた狼男が荒れ狂うように姿を現した。

『ギャウウゥゥ……、ワオオォオーーーン！！』

自らの存在を主張するかのように吼えるその姿は、どこか誇り高くすら見えた。

……『ライカン・スロープ』か。儀式モンスターは召喚こそすれば強力だが、儀式魔法が必要となる面倒くささが仇となり、そこまで使われなくなったはずだ。さらにあの『カオス・ソルジャー』や『マジシャン・オブ・ブラックカオス』の人気のお陰で、儀式モンスターは全体的にレア度が高くなっているはずだ。そんなカードを使えば、エクゾディアほどではないがブルー生徒が黙ってはいない。今回のトーナメントの為に入れたのか？

「『ライカン・スロープ』は手札かフィールドからレベルが６以上になるように生贄に捧げる事で降臨する。更にもう一枚の伏せカー

ド、装備魔法『リチュアル・ウェポン』を『ライカン・スロープ』に装備させる！　レベル６以下の儀式モンスターにのみ装備でき、攻撃力と守備力は１５００ポイントアップ！　これで攻撃力は３９００だ！　いけ『ライカン・スロープ』よ、炎の精霊に攻撃だ！　スクラッチ・クラッシュ！！」

数々の実験の所為なのか、伸び過ぎで鋭利過ぎる爪を高々と振り上げ、炎の精霊を切り裂かんとしている。その構図やまるで、美女と〇獣そのもの。

炎の精霊の攻撃力は２０００で、その差はまさに１９００だ。そんなもの喰らったら、致命傷になりかねない。だが、今はどうする事もできない。

炎の精霊は為す術も無く胸元を裂かれ、鮮血を散らしながら消滅した。ＬＩＦＥ２４００　↓　５００

「『ライカン・スロープ』の効果発動！　こいつが相手に戦闘ダメージを与えた時、墓地の通常モンスターの数掛ける２００のダメージを、相手に与えるぜ！」

は？　確か相手の墓地には……。

「俺の墓地には生贄にした『ウィップテイル・ガーゴイル』と『絵画に潜む者』、更に『手札抹殺』で捨てた『ゼミアの神』二枚、『邪剣男爵』一枚、『暗黒魔神　ナイトメア』二枚、『首なし騎士』二枚、『地縛霊（アース・バウンド・スピリット）』一枚、『プリヴェント・ラット』一枚の合計十一枚！　よって２２００のダメージを受けて貰う！　シャドウ・ダンス！！」

狼男の背後から、十一体もの残留思念らしき影が湧き出て、俺に襲い掛かろうとしている。

だが、俺は負けるわけにはいかない！

「リバースカードオープン！　速攻魔法『禁じられた聖杯』発動！　この効果で『ライカン・スロープ』の効果は無効となり、攻撃力は４００ポイントアップする！」

間一髪のところ、聖杯の効果が効いて来たのか影達は成りを潜めた。

……正直なところ、本当に危なかった。まさかこんなカードを使ってくるなんて、予想外にも程がある。

「く……。仕留め切れなかったか……。なら『ガーゴイル・パワード』でそのセットモンスターを攻撃！　パワー・スクラッチ！！」

強力な鉤爪で攻撃され、表になったモンスターは……『魂を削る死霊』。戦闘では破壊されない破壊耐性を持ったモンスターだ。

「『魂を削る死霊』（ＤＥＦ２００）は戦闘では破壊されない。危機一髪だったよ」

「くそ……本当にしぶといな……。僕は二枚をセットして、ターンエンドだ」

悪態をつきたいのはこっちだ。攻撃力３９００なんてどうやって倒せばいいんだか……。

「俺のターン、ドロー！　……俺は魔法『強欲な壺』を発動！　デッキから二枚ドローする！」

……手札は四枚。そしてこの手札は、本当に面白い。俺のやりた

い事が完璧に出来る手札なんて、そう簡単に揃うはずもないのに、何故か今回は完璧だ。

「俺は場の『魂を削る死霊』と手札の『ナイトメア・ホース』を対象に『融合』を発動！　二体を墓地に送り、融合デッキから『ナイトメアを駆る死霊』（ＡＴＫ８００）を融合召喚する！」

大きな鎌を持った死霊が、鬼火の集合体である『ナイトメア・ホース』に跨った。質量の無い怨念の馬に跨るのは本来不可能だと思うのだが、流石はアンデットといったところか。

さて、この死霊だが、攻撃力は８００の上に直接攻撃したら手札を捨てさせるという効果がある。

だがこの効果は現状では逆効果になるだけ。相手は墓地にモンスターが落ちれば落ちるほど強くなる。では何故融合召喚したのか。それは一重に”生贄召喚”のためである。

俺のデッキは基本ローレベルのモンスターで構成されており、生贄召喚の比率は高くない。ガーゼットにしても、洗脳や死者蘇生で高攻撃力モンスターを奪ってからの召喚が基本となる。

そんな相手に依存しきった生贄召喚が主流の俺のデッキの中でも、唯一存在するエースモンスター。そいつの召喚のため、生贄となってもらう。

「俺は速攻魔法『融合解除』を発動！　『ナイトメアを駆る死霊』を融合デッキに戻し、融合素材である『魂を削る死霊』（ＤＥＦ２００）と『ナイトメア・ホース』（ＤＥＦ４００）を特殊召喚する！」

「？　融合したモンスターを、何故態々解除したんだ？」

不思議そうに尋ねてくるが、それは今から分かる。

……思えば、アカデミアでこいつを召喚するのは初めてか？
……駄目だな、つい感傷的になってしまう。

「俺は二体を生贄に捧げ――」

来る前は、ちょくちょく使っていた。ただ、使うと例外なく嫌がられるから、結構自重していた。
それでも、俺はこいつを使うときが一番嬉しかった。両親が勝ってくれた最初のパックに入っていたカード。
どんな劣勢でも、召喚されればいつも俺を救ってくれた、ある意味キセキのカード。奇跡のモンスター。
フェイバリットとして使っている『逆巻く炎の精霊』も好きだが、こいつは好きだというベクトル自体が違う。いや、好き以上に、大切な”思い出”。

「――来い、『破壊竜ガンドラ』（ＡＴＫ０）！！」

漆黒のボディに夜を思わせる巨大な黒翼を広げ、雄雄しき破壊の化身が姿を現した。

『ＧＹＵＡＡＡ

ガンドラは攻撃力を持たないモンスター。ドラゴン族で、これは非常に珍しい事だ。
だが、コイツの効果は攻撃力の有無すらも呑み込む。

「……『破壊竜ガンドラ』の効果発動！　ライフを半分払う事で、こいつ以外のフィールド上に存在するカードを全て破壊し、除外する！！」ＬＩＦＥ５００　↓　２５０

「なぁ！？　じゃ、じゃあ僕の『ライカン・スロープ』達は……全滅ってことかあ！？」

この破壊竜の前で狼狽えることは、あまりに無意味。
平常を保たねば、この圧倒的過ぎる力に恐怖すらも抱きかねない。
これで俺の残りライフは僅か２５０。まあ、元が少ないからさして問題ないだろう。

「全てを破壊せよ！　デストロイ・ディストラクション！！！」

『ＧＹＡＯＯＯＯＯＯＯＯＯ！！！！！！！！！！！！！！！』

一撃の咆哮で、魔法が、罠が、そしてモンスターが全て粉砕されていく。
砕け散ったカードは復活する余地を残さぬよう、粉々になって塵芥に帰した。
残っているのは、高みからフィールドを見下ろす破壊竜のみ。

「ぐ……あぁぁぁ……！（くそ！　折角ミラーフォースを張ったのに！　ブラフごと破壊されるなんて！）」

「……ガンドラの攻撃力は、この効果で破壊したカード一枚につき、

３００ポイントアップする。フィールドに存在していたのは『ライカン・スロープ』、『ガーゴイル・パワード』、『リチュアル・ウエポン』、『凡骨の意地』、『聖なるバリア　―ミラーフォース―』、『契約の履行』の合計六枚。よってガンドラの攻撃力は、１８００までアップする！！」

最上級モンスターにしては、いささか物足りないと感じられる数値。だが、何も守る盾がないこの状況では、この低い数値ですら脅威となる。

「僕のライフは１６００……ってことは……」

「ガンドラの攻撃……」

破壊竜の口が、大きく開かれる。そこから窺えるものは、敵を破滅へと追いやる為の究極的な壊すための力。

ただ壊す。理由はいらない。壊して、壊して、壊して。ただ、壊す。

「――デストロイ・ギガ・レイズ！！！！！！！！」

「ひ……う、うわあああぁぁ！！」ＬＩＦＥ１６００　→　０

全てを砕くための、純然たる力。その輝かんばかりの力は、法も、理も、理解しうる全てのものを置き去りに突き進んだ。

『……しょ、勝者！　エントリーナンバー七番！』

今まで静観していた生徒達から、歓声が割れんばかりに上がった。

オシリスレッドがオベリスクブルー相手に接戦していたからか、

ガンドラの力を目の当たりにしたからか、理由も分からない歓声はレフェリーの教師が次の試合をコールするまで鳴り止まなかった。
リングを後にした俺が振り返ってみると、丁度ソリッドビジョンが消えるところだった。
ただ、その時に見たガンドラの瞳は、いつも以上に赫く、煌々と輝いているように見えた。

予想外だった。
破壊竜ガンドラ。名前の通り、破壊を象徴する、闇のモンスター。
私の理想を現実に近づけるためのモンスターが、まさか彼等の手の内にあるとは流石に思わなかった。
だが、これは嬉しい誤算だ。
早乙女ケイの相手をしたレッド生。あれも私が手解きをした駒の一人。あれがあそこまでの力を引き出せたというのならば、他のモノにも十分期待が出来る。
だが、油断は禁物だろう。
このトーナメントが終わり、親善試合が終わり、生徒達がばらけ始める時。その時まで油断はできない。
……。
あの闇のモンスターは利用しない手はない。早乙女ケイは気付いていないようだが、あれは確実に”特別”なカード。
あのカードに私のカードをぶつければ、爆発的なエネルギーが手に入る。
後数週間。
後数週間の辛抱だ。

収まるのだ私の腕よ。
今はまだ、期ではない。

十三／狼男と破壊　ケイサイド（後書き）

亮「ガンドラか」

うん。攻撃力０の最上級モンスター。低攻撃力が主のケイのデッキに、これほどマッチしたモンスターもそうはいないはず。

亮「それにしても、今回も分かりやすい伏線だな」

伏線はわかりやすい位が丁度いい、と思う。

【1．ここの決闘者のレベルって……】

亮「俺から見ても、正直使いづらいカードを使ってくるな」

ピンポイントメタカードは本当に使いづらい。相手が使ってこない限り、完全に腐ります。

亮「対象のカードが禁止になってしまい、使えなくなったカードも多くあるな」

サンダーボルトとかハーピィの羽箒とか……。ハーピィはこのｓｓじゃ健在ですが。

亮「知識はあってもデュエルに生かせない。それがここの決闘者のおおまかな特徴だろう」

偽者の罠なんて使いにくいカード、なんでサイコショッカーと一緒に入れてんだか……。

【2．儀式について】

基本的に儀式魔法はレアカードという設定です。原作でも使っているのは明日香くらいなもんですし。

亮「単純に考えて、手札を三枚以上消費するんだ。融合より回収しにくい上、フュージョンゲートのように召喚をサポートするカードが少ないのも使われない理由の一つだろう」

【3．ドゥーブル・パッセ！？】

原作カード、ドゥーブル・パッセです。言わずと知れた、明日香の代表的なカードですね。

亮「ダメージはスピリットバリアなどで防げる上、今回のようなカウンター攻撃にも使えるな」

なんでＯＣＧにならないのか、勝手に不思議に思っているカードでもあります。まあなったらなったで今回のような使い方がされるでしょうが……。

【４．次回予告です】

亮「次は……ん？　デュエルがない？」

正確に言えば、そのキャラ視点でのデュエルではない、ということです。

亮「次回はどうやら舞台裏の話のようだ。俺とあの二人が主だな」

次回『邁進と葛藤』。意外な事実が！？

亮「相手の心となり、勝負をリスペクトだ！」

十四／邁進と葛藤　亮＆〇〇サイド（前書き）

何を勘違いしたのかまさかの三話連続ウウウ！！

ケイ「本気でストック出し切る気か……」

後のことなんて考えません。いつもその場の勢いで生きています。

ケイ「そして後悔する事が多いはずなのに学習しない。まさに悪循環の塊だな」

自重はしません。ではまさかの本編ドーゾ！

十四／邁進と葛藤　亮＆〇〇サイド

Ｓｉｄｅ：亮

「『サイバー・ドラゴン』で攻撃！　エヴォリューション・バースト！！」

「うわあああああ！！」ＬＩＦＥ１３００→０

『勝者！　エントリーナンバー一番！』

ふう。なんとか勝てたな。このデュエルが確か準決勝だったな。これで俺はＤブロック決勝進出を決めた事になる。後一勝すれば、ブロック優勝者となり代表決定戦へ駒を進める事になる。

相手に一言礼をして、デュエルリングを降りる。決勝戦は少し休憩をとった後行われるそうで、それまではデッキを組み直したり出来る時間となっている。さて、この時間をどう使おうか。

そういえば、この間あいつらと一緒に戦術について話し合っていた時にもらったカードがあったな。先程までのデュエルは当然見られていて、対策も考えられているだろう。となると、少しデッキを組み直すか。

『『『ワーーーッ！！』』』

大歓声がモニター越しに聞こえてくる。音源を向いてみれば、そこにはタッグを組んでいるレッド生徒の姿が映されていた。

二人がデュエルディスクを構えているが、向かい合っているのではなく隣り合っている。つまり敵対しているわけではなく、協力し合っているようだ。そしてその二人の向かいにはもう一組の生徒が

デュエルディスクを構えている。どうやらタッグデュエルのトーナメントをしているようだ。

俺は知らなかったが、どうやら学年ごとの代表のほかに、友好試合でタッグデュエルも行うようだ。これはその予選なのだろう。

映されているレッド生徒に覚えはなく、おもむろに対戦相手を見てみた。

すると、意外にも、いやそこまで意外でもない組み合わせが、デュエルしているのが窺えた。

「……そういうことか」

そういえば、”アイツ”は別のトーナメントに出場すると言っていた。となると、これがそのトーナメントか。

互いのライフは５２００と６６００で、どうやら二人のライフの合計、即ち８０００からデュエルが始まっているようだ。現在のライフはややレッド生が有利。しかし場には何も出ていない。

それに引き換え”アイツら”の場には『ミラージュ・ドラゴン』と『大天使ゼラート』がおり、更に『天空の聖域』まで発動している。ボード・アドバンテージは圧倒的に勝っている。

『僕のターン、ドロー！』

レッド生がドローした。どうやら始めは優勢だったが、ゼラートとミラージュによって場を全滅させられたらしい。しかし手札は未だ四枚。どう出るつもりだ？

『僕は魔法カード『死者蘇生』を発動！　自分の墓地から『赤鬼』（ＡＴＫ２８００）を特殊召喚！　そして赤鬼を生贄に、『偉大魔獣　ガーゼット』（ＡＴＫ？）を召喚だ！』

確かガーゼットは、生贄にしたモンスターの攻撃力の倍を攻撃力とするモンスターだったはず。攻撃力は墓地に依存するため、妥協召喚のバルバロスやガンナードラゴンを生贄にすると爆発的な攻撃力を得られたはずだ。

今回は墓地にあった高攻撃力モンスターを使って召喚か。たしかに効率的だな。

『これでガーゼットの攻撃力は５６００になる！　いけガーゼット！『ミラージュ・ドラゴン』（ＡＴｋ１６００）に攻撃だあ！！』

フィールド魔法『天空の聖域』が発動している場合、天使族モンスターが受ける戦闘ダメージは０になる。ゼラートに攻撃したところでダメージを与えられず無意味だと思ったのだろう。迷うことなくドラゴン族である『ミラージュ・ドラゴン』を攻撃した。

『させない！　手札から『オネスト』を墓地に送り効果発動！　光属性モンスターの攻撃力を、戦闘モンスターの攻撃力分アップさせる！』

当然『ミラージュ・ドラゴン』は光属性。『オネスト』の効果を受け、攻撃力が１６００から７２００まで上昇した。

為す術もなく反撃を喰らい、光のブレスで浄化されるガーゼット。差分の１６００ポイントがライフから引かれた。残りは５２００対５０００で、ライフ・アドバンテージは逆転した。

『くっそぅ……。俺はカードを二枚伏せて、ターン終了だ』

手札を全て使い切り、エンド宣言をする。

恐らくはブラフ、もしくは攻撃反応型の罠だろう。赤鬼を使っていた事から、アンデットのサポートカードかもしれない。

『私のターン、ドロー！　私は、『ミラージュ・ドラゴン』を生贄に、『マテリアル・ドラゴン』（ＡＴＫ２４００）を攻撃表示で召喚です！』

また光のドラゴン。あのモンスターの効果は、確か手札を一枚捨てて破壊を免れる効果だったはずだ。

セットされたカードを警戒したのだろうか、それとも単純に攻撃力を増したかったのか。

相手の場にモンスターはいない。これで二体の直接攻撃が決まれば総計５２００で勝利となる。

『『大天使ゼラート』でプレイヤーにダイレクトアタック！　最後（ファイナル）の審判（ジャッジメント）！！』

ゼラートの周囲に無数の光り輝く槍が出現し、射出。光の筋となってプレイヤーに襲い掛かる。

『くっ、罠発動！　『炸裂装甲（リアクティブ・アーマー）』！　相手の攻撃モンスター、つまりゼラートを破壊する！』

やはり攻撃反応型だったか。しかし、破壊とは運がなかったな。

『無駄です！　『マテリアル・ドラゴン』の効果発動！　手札を一枚捨て、モンスターを破壊する効果を無効にします！』

『な、なんだってー！？　ぐわあああああ！！？』ＬＩＦＥ５０００　→　２２００

『これで終わりです！　『マテリアル・ドラゴン』で攻撃！　エナ

ジー・リフレイション！！』

光の竜の口から輝くブレスが吐き出され、相手プレイヤーに襲い掛かる。

……終わったな。

思えば、オネストによってガーゼットを跳ね除けられた瞬間、レッド生の心は折れかかっていた。

そして炸裂装甲を無効にされたことで、完全に折れてしまっただろう。始めは優勢だったのに、気がつけばいつのまにか負けていた。それはどんなに悔しい事なのだろうか。

『勝者！　藤原・竜剛院ペア！』

レフェリーを務めている教師が、高々とコールする。

タッグデュエルをしていた優介とレッド生は握手をした。

片方は悔しさの余り涙を流しているが、彼に対して相方の生徒や優介、竜剛院は必死に励ましている。

言葉は聞こえないが、口の動きからして「気にするな」や「君も強かった」、「最後は危なかった」といった類の言葉だろう。……デュエルが有利になると思って習得した読唇術だが、案外いけるかもしれないな。

彼等の試合は終わりだ。俺もそろそろ、デッキ調整をするとしよう。

Ｓｉｄｅ：優介

はぁ……。危なかった。まさか攻撃力５０００超えが出てくるなんて。オネストが無かったら負けていたのは俺達だったかもしれな

い。さっきのは二回戦だったけど、緒戦を勝ち抜いてくるだけの事はある。これから先はもっと強いだろうし、油断できない。

「大丈夫ですか？」

パートナーの真理が、心配そうに聞いてきた。

俺達の出ているトーナメントはみんなが出ている本選と違い、二人一組のペアになって出るタッグデュエルとなっている。ちなみに参加組数は三十二組。つまり五回勝てば優勝となる。

「大丈夫。ちょっと疲れただけだよ」

試合後のインターバルは、次の試合を始めるまでの間のみ。その間に、デッキの調整を済ませたり、軽食を摂ったりする。俺達もデュエルの後に戦術を攻略されないようにするために、細かく調整している。

選手控え室に戻った俺達は、早速デッキをばらして調整を始めた。なおこの控え室は四つあり、八組で共有しているわけだが、二回戦を終えた今残っているのは僅か八組。同室のもう一組は試合中なので、今いるのは真理と俺の二人だけ。デッキの内容が、他者にばれる心配もない。

「そういえば真理」

俺はデッキを見回しながら、目下気になっていることを聞いた。

「さっきのデュエル、どうして『F・G・D（ファイブ・ゴッド・ドラゴン）』を出さなかったんだ？　いや、さっきだけじゃない。ここ最近、一度たりとも出していないそうじゃないか」

「……！」

さっきのデュエル、墓地には十分ドラゴンが溜まっていた。そして手札には、ドラゴン族専用の融合カード『竜の鏡（ドラゴンズ・ミラー）』があった。ガーゼットを破壊した次のターン、召喚できたはずだ。

それなのに、召喚しなかった。それどころかマテリアルの効果のコストにしてしまっていた。確かに『炸裂装甲』があったからマテリアルを召喚した判断は正しい。しかし、どうしても納得がいかない。

最近の実技でも、ファイブゴッドは出さずに戦っていると聞く。戦績は急激に下がったりはしていないようだが、それでも芳しくは無い。

「……まだ、抵抗があるのか？」

口を真一文字に結んだまま、開こうとしない。

……失言だったな。こういうことは、本人が何とかするものなのに、俺は何を言っているんだろうか。

「ごめん。今のは忘れてくれ。それよりデッキを組もう」

あからさまな話題そらしだが、そうでもしないと互いに気が滅入ってしまう。

カードを分別しようとする俺の手に、長く細い指が添えられた。真理の手だ。

「……あれは」

固く閉じた口から、言葉が紡がれ始めた。

「あれは……嫌いとか、使いたくないとか……そういうのでは、ないんです」

そこから紡がれる話は、俺が考えていたものとは違っていた。

――確かに、まだあのカードを使うのは怖いです。でも、別に嫌いになったわけじゃないんです。寧ろ、逆です。あの力を生かすためのデッキも、確立させるための手も、何日もかけて考えました。いずれ使いこなせるように、幾度と無く悩みました。

どんなに強力なカードでも、所詮はモンスター。優介さんは、そう教えてくれましたよね？　だから私も使おうと、何度も試みました。

でも……駄目なんです。いざ使おうとすると、使っていたときに突き刺さっていた、あの冷たい視線が、軽蔑の目が、脳裏に蘇るんです！　使えば、召喚すればまた同じ日々に逆戻り……。そう思った途端、召喚をやめて、別の手を使ってしまうんです。

あのモンスターを使えば、またあの日々に逆戻り……か。

同級生からの冷たい目線、上級生からは容赦ない罵倒。たしかに、あんな事があれば使いたくなくなるのも当然だ。

それでも、あのカードを使おうと必死に努力してきている。なのに俺は、それをわからずに『大方嫌いになったんだろう』なんて浅慮な考えをしていた。俺は最低な奴だ。

「……！？」

無意識の内に、俺は真理を抱きしめていた。いや、俺が抱きしめたというより、泣きついた、というほうが正しいかもしれない。
浅慮な考えをしていた自分が情けなくなって、それを気付かれまいと、顔を見られないように抱きしめた。

「あ、の……優介……さん……？」

「……大丈夫」

真理の言葉を遮り、俺は続ける。

「……悩んでいたんだね。苦しかったんだね。俺の言葉を覚えていてくれた事は、凄くうれしかった」

所詮はモンスター。感情に任せたままに言ったあの言葉を、ちゃんと覚えていてくれた。

「……確かに、使えば周りは黙ってはいないだろう。理不尽な要求を叩きつけてくるだろう」

自分達では持ち得ない、圧倒的な強者の力。そんなものは、確かにあって欲しくは無い。
だけど。

「それでも、言ったはずだ」

実技試験の時、さっきの言葉の他に、俺は確かに言った。

「『その竜があなたの邪魔をするというのなら何度でも救い出しましょう』……僕は君を救えていなかった」

「……そんなこと……！」

腕の力を少しだけ強める。一瞬辛そうに顔を鳴咽を上げたけど、我慢して貰う。

「だから今一度誓いたい。俺が、君を苦しめるものから救う。いや、救わせてもらいたい」

「優介さん……」

抱きしめていた腕を解き、彼女の顔が見えた。

「……結構、気障ったらしいですね」

グサッ

何かが心に突き刺さった。

「……そ、そうだね……。ちょっと、いや、かなり、自分でもそう思う……」

改めて、自分で言った言葉を脳内で再生してみる。

『その竜があなたの邪魔をするというのなら何度でも救い出しましょう』

『俺が、何度でも救い出しましょう』

『だから今一度誓いたい。俺が、君を苦しめるものから救う。いや、救わせてもらいたい』

……。

駄目だ。恥ずかしすぎて死ねる。最早羞恥心で死ねる。今の俺の顔は、きっと真っ赤だろう。

「……でも」

羞恥に悶えている俺を見て、彼女は言う。

「私は、そんな貴方が好きですよ」

「……それは、不意打ちじゃないかな……」

尚も顔を背けたまま、声を振り絞ってそう言った。

……思えば、彼女の口から好きだと言われたのは、これが初めてかもしれない。

「ふふ、そうですね」

声だけでも、笑っているのがわかる。だけど、顔を見る事はできない。

このままじゃいけない、と思うも、どうしても彼女の顔を見る事

はできない。主に今直視したら、理性を抑えていられる自信がないという意味で。

そのまま、僅かばかりの静寂が訪れ、直後にデュエルリングから大歓声が響いた。

『ン～～～トレビア～ンヌ！！　学園代表決定トーナメント二年生の部、Ａブロックの優勝者が決定したノーネ！！』

そういえば、このトーナメントは各学年で行われているんだった。今まで知らなかったが、二年生の部があるのも当然だろう。

今の今まで使っていなかった、控え室のモニターを点けてみる。会場の様子が映り、クロノス教諭がマイクを握り締めていた。一本だけ小指を立てているところがちょっとアレだと思う。

「に、二年生は、ちょっと早いね」

「そ、そうですね」

ずっと黙っているのもあれだったので、この中継を渡りに船と思うことで話しかけてみた。向こうも同じようで、すぐに返事をくれた。

『ドゥエ～ハ、Ａブロック優勝者にインタビューをしたいと思いまスーノ。気持ちはどうですかシニョーラ風見ヶ丘？』

へ～。二年Ａブロックは風見ヶ丘さんが優勝したのか。ケイが聞いたらさぞかし驚くだろうな～。

若干の違和感。

俺は思考をやめ、モニターを食い入るように見た。

『いや～最高ですね！　まだ先があるとはいえ、私が優勝するなんて思ってもみなかったことですよ！』

癖のある黒髪に、首から下げられたカメラ。オベリスクブルー女子の制服を着ている彼女は、まさしく当人そのものだった。

「そういえば、絢さんって私達より一つ上だったんですよね」

俺が呆然としていると、真理がそんなことを言っていた。

思わず、振り向いて聞いてしまった。

「……マヂデ？」

この時の俺の顔は、後世に残るほど滑稽なものだったに違いない。

十四／邁進と葛藤　亮＆〇〇サイド（後書き）

吹雪「やあみんな！　愛の伝道師、ブッキーだよ！」
　ピエロは放っておいて下さい。
吹雪「はっはっは！　無理だね、今回はまたしても二人が良いムードになったからね！」
　今回は舞台裏からお届けしました。
吹雪「それにしても相手のレッド生達は災難だったねー」
　相手があの二人だしね。オネストはやっぱり鬼畜。
吹雪「愛の力さ！　その結晶こそが、あのカウンター攻撃なのだよ！」

【1．亮が読唇術？】
　彼ならやってくれる。そう妄想した結果です。
吹雪「どっちかって言うと、読心術を身につけていそうだけどね～」
　彼なら出来る。やらせないけど。読唇術に関してもこれっきりです。

【2．控え室にて】
　思わずハグする優介を妄想。そして当ｓｓではプレイボーイな彼ならこれくらい平気でやってくれるはず。
吹雪「まあその後素晴らしいカウンターをもらったけどね！」
　あんなこと言っておいて恥ずかしくならない奴はいない。きっといない。
吹雪「全く。そこで恥ずかしがらずに言い切らなきゃ！　胸キュンポイントマイナス五点だ！」

【3．絢が二年だと！？】

吹雪「……いやー驚いたねー」
　どう見ても同い年か年下にしか見えないのに先輩。さあケイはどうするのか。
吹雪「あると思います！」
　個人的にも大有り。寧ろ有り。

【4．予告しなはれ】
　というわけで、あっという間に予告です。
吹雪「次回は……おや、またケイの話だね」
　絢が出てきたからね。それを使わないと。
吹雪「それもそうか……ねえ」
　何？
吹雪「……この人、出すの？」
　……次回『動揺と再戦』！　デュエルスタンバイ！
吹雪「え、ちょっ！？　出すの？　ケイの一番相手にしたくないあいつを出すのか！？」

※２０１１／０２／１０　修正・加筆

十五／動揺と再戦　ケイサイド？（前書き）

まさかの四話連続ううう！

優介「これでストック切れだねぇ……」

全部……出し切ります……。

優介「……まあいいや。ところで再戦ってあるけど」

題名通りダヨ？　さあ誰でしょう？

優介「ケイが戦った中で再戦するような人は……」

わかった人もわからなかった人も、本編へゴー！

※若干壊れ注意

十五／動揺と再戦　ケイサイド？

「……はぁ？」

溜めに溜めて、出てきたのは疑問詞だった。

俺は自分の試合になるまで客席で観戦していたのだが、突如映ったモニターを見て唖然とした。

相変わらずの間の抜けた顔で優勝インタビューに答えているそいつは、やっぱり間の抜けた答えを返していた。

『おい。あれって新聞部の風見ヶ丘先輩じゃないか？』

周りの奴がそう言ったのを皮切りに、次々と上がる声。

『あの人強かったのか？』

『いや、聞いたこと無いな』

絢が強いのは、身をもって知っている。合計ダメージ９０００オーバーを喰らった身として、断言できる。

だからこそ俺は驚いていた。

何故今まで知らなかったのか。

予選トーナメントとはいえ、学校内でも選りすぐりの強者が出ているこの予選。その中で一ブロックとはいえ、優勝する腕前。それだけの実力があれば、誰かが噂してもおかしくない。

そして、誰かが噂しているところを、俺は終ぞ聞いたことが無い。

『それにしても、可愛いなあ風見ヶ丘さん』

ピクッ。

『お前ってああいう女がタイプだったのか？』

『だって可愛いだろ。表情（かお）がコロコロ変わるとことかさ！』

ピクピクッ。

『先輩って結構競争率高いらしいよ？』

『知ってるー！　あたしと仲の良い先輩も噂してたもん！』

ピクピクピクッ。

意識せずとも、耳が反応する。

一言一句、聞き逃すまいと全神経が集中する。

『そういえば、風見ヶ丘先輩ってアクセサリーとかするんだな』

『あ～ほんとだ。ちょっと意外かも』

アクセサリー？

依然インタビューを受けている絢をよく見てみる。

首に掛かっているカメラとは別に、首元から伸びる細いネックレスがあった。

『へ～お洒落なネックレスだね！』

『あれ？　あれに通ってるのって指輪じゃない？』

細いネックレスチェーンに通してあるのは、クリスマスのプレゼントで嵌めたあの指輪。
小さな台座の上で、申し訳程度についているエメラルドがモニターで一瞬反射した。

『もしかして彼氏からのプレゼントとか！？』

『えー！？　先輩彼氏できたの！？』

『おい嘘だろ！？　くっそ～俺狙ってたのに！』

『自惚れんな馬鹿。お前みたいなの相手にする訳ねーだろ』

周りで色々言っているが関係ない。
あれは間違いなく、俺が嵌めさせた指輪だ。いつもの感じからして、アクセサリーにそこまで興味があるとは思えない。つまりアクセサリーの類は、恐らくアレのみ。
だが、何故態々チェーンに通しているんだ？　指輪なら、普通に指に嵌めておけばいいものを。

『七番！　七番前へ！』

呼ばれた。どうやら試合のようだ。
周りの奴等に問い詰めたいが、どうしてこうタイミングが悪いんだか。
ブツクサ言いながら、デュエルリングへと上がる。さて対戦相手は……。

「また会ったな早乙女！　さあ、今一度決着をつけようか！」

……よし。

「チェンジで」

『認められません』

ちっ。頭が固いな。

「君に敗れてから、僕は来る日も来る日も特訓に明け暮れた。そして今日！　今までの特訓に終止符を打つために早乙女！　君を倒して僕は真理さんのフィアンセとなる！」

どうしてこうなった。

やたらと張り切る綾小路ミツルを前に、俺はそう叫びたくなった。

『では両者、準備はよろしいか？』

「不本意ながら」

「今日こそ君を越える！　この進化したスマッシュデッキで！」

……またテニスか。デュエルモンスターズなんだから、カードでデュエルしろってのに。

それに俺は相手をしている暇なんぞ……

（……いや）

そこまで考え、俺は頭をふった。
聞きたいこと、知りたい事はあるが、考えながら勝てるほど勝負の世界は甘くない。
今は目の前の試合のことだけを考えた方がいいだろう。
……しかし、何故相手がこいつなんだ。

『では……始め！』

「いくぞ早乙女！　デュエル！！」「デュエル……ハァ……」

ケイ　ＬＩＦＥ４０００
綾小路　ＬＩＦＥ４０００

「先攻は僕が貰おう！　ドロー！　僕はあの日から変わった……その成果を、見せてやろう！」

どうでもいい。激しくどうでもいい。
そんな俺の気持ちを無視して、綾小路は進めていく。

「手札から『勝利の女神フレイヤ』（ＤＥＦ１００→５００）を守備表示で召喚！」

よし待て。明らかにお前のデッキにシナジーしないだろうが。
あれか。ボンボン持ってるからチアリーダー的なノリか。そうなのかオイ。

「カードを二枚セットして、ターン終了だ！」

「早速萎えてきた……俺のターン、ドロー」

もうさっさと終わらそう……。これ以上付き合うと胃に穴が開く。

「俺は『人造人間７号』（ＡＴＫ５００）を攻撃表示で召喚。更に魔法カード『機械複製術』を発動。攻撃力５００以下の機械族である『人造人間７号』をデッキから二体特殊召喚する」

そういえばこいつ等は最近使ってなかったな。入学試験デュエルの時に使ったくらいか？

「たった二枚でモンスターを三体か……。やはり強いな早乙女。それでこそ僕のライバルだ！」

よしもう一度待て。誰がライバルだ。俺は認めた覚えが無いぞ。

『早乙女って実技の成績良かったよな？』

『そのライバルってことは、綾小路も強いのか？』

『この勝負、見物だな……』

観客共、その認識を改めろ。そして綾小路、得意そうにふんぞり返るのはヤメロ。叩きのめしたくなってくるじゃないか。

……ＯＫ、お望み通り叩きのめしてやる。

「手札から速攻魔法『リミッター解除』を発動。効果により攻撃力が倍になり１０００となる」

残念ながら得意の装備カードは無い。惜しかった……。

まあこれだけでも火力は十分だ。なんとかなるだろう。

「最初に召喚した7号Aで直接攻撃！」

攻撃宣言と同時に何故か右腕を外す7号A（仮）。そこに体中のエネルギーを集め凝縮。無数の気弾を作り、照準を綾小路にロック・オン。

……おい待て。まさかその技は……。

ガガガガガガガガガガガガガッ！！

「へ○ズストーム！？」

ガトリングの如き速度で気弾が爆射された。

やめろ7号！　その技は超17号だから出来たわけで、お前じゃ耐え切れない！

『……（グッ！）』

残った左手でサムズアップするなあああ！！　それはあれか！　後は任せたぜってことか！　……くそう、やってくれる。映像（ソリッド・ビジョン）なのに芸が細かすぎる。

しかし荒れ狂う気弾を見ながらも、綾小路に焦る様子は無い。

「ふふふ、ワンパターンだな早乙女！　君が直接攻撃をすることはわかっていた！　罠カード『レシーブエース』発動！　相手モンスター一体の攻撃を無効にして、相手に1500ポイントのダメージを与える！　さあドンドンいくぞ！」

突如出現した巨大ラケットをフレイヤが持ち、構える。……おい、まさか……。

『エェーーーイ！！』

バココココココココココココココ……！

自分の背より大きなラケットを持ち、気弾を全て打ち返してくるだと！？

一球一球が速く、避け切れん！

……だが運が悪かったな綾小路！　お前は俺を倒すために特訓してきたようだが、俺もただ遊んでいたわけじゃない。

お前のようにバーンカードを使ってくる相手に対する対処法も――、

「ハッハッハッハッハ！　よぉし全弾命中！！　……ってなあ！？」

ＬＩＦＥ４０００　→　２５００

ダメージを与えたと思いきや、自分のライフが減っている事に驚愕する綾小路。

――対処法も、ちゃんと用意してきたんだよ！

「どうしたんだ綾小路？」

「さ、早乙女……一体何をした！？」

俺のライフは減らず、綾小路のライフが『レシーブエース』の効果ダメージ分減っている。

悦に浸っていて注意散漫だった奴には、何が起きたのかわからないだろう。

「ふん。簡単な事だ」

だが、蓋を開けてしまえば至極簡単な事。

「何……っ！　そ、それは『痛恨の呪術』！？」

速攻魔法『痛恨の呪術』。自分が受ける効果ダメージを相手に移すカードだ。

トーナメントが始まる前、丁度第一回バトルシティを見ておいて良かった。参考になるかと思って見ていたんだが、マリクさんのカードは本当に素晴らしい。その内『万力魔神バイサー・デス』とかも入手したいな。……まあ、高いんだけどな。

「『レシーブエース』の効果でデッキトップから三枚墓地に送ってもらおう。俺がワンパターン？　お前こそワンパターンじゃないか綾小路！」

「く……だ、だが罠発動だ！　永続罠『デスカウンター』！　直接攻撃をしたモンスターは、破壊される！　さあ、攻撃できるならしてみろ！　僕は、決して暴力に屈しない！！」

……本当にこいつはオベリスクブルーなんだろうか。ここ最近、同級生相手によく思うようになってきてしまった。

確かに『デスカウンター』は、直接攻撃を主流とする俺のデッキには天敵のようなカードだ。攻撃すれば破壊される。態々破壊されるのが分かっていて、攻撃するような暴挙には出ない。

だがこいつ、完全に忘れてるな。

「なあ綾小路」

「ふっ、なんだい？　あまりに恐ろしい罠を前に、怖気づいたかい？」

劣勢にも関わらず、気障ったらしく髪を掻き揚げる。その様子を見てフレイヤがドン引きした。
それにしても、この自信は本当にどこから出て来るんだか。

「俺は『リミッター解除』を使ったよな？」

「そうだね。だけどいくら攻撃力が倍になっても、所詮元々が５０じゃ僕のライフを削りきることは」

「『リミッター解除』の効果を受けたモンスターは、エンドフェイズ時に破壊されるんだが」

「できな……い……ふぇ？」

発音が違う。とは突っ込めなかった。

「つまり攻撃しようがしまいが、破壊される」

「……つまり僕の今したことは……」

「全くの無駄。プレイングミスだ」

「またなのかあああああああ！？」

ジーザス！　と叫びながら天を仰ぐ綾小路。そういえば、前にデュエルしたときも亮に突っ込まれてたな。学習しない奴だ。
『リミッター解除』の自壊効果は、殆どそのターンの内に勝負が着く為忘れがちになることもある。しかしこれはブルー寮の寮監であるクロノス教諭を始めとする多くの機械族使いが使用するため、中々知名度は高い。

「……進めるぞ？　７号Ｂでフレイヤに攻撃、７号Ｃでダイレクトアタック！　喰らえ、ギャ○ック砲！！」

両手で集めたエネルギーが、二人に向かって放たれた。

……どこかで野菜人の王子が高笑いしている気もするが、まあいい。次は触角緑色神様の気功波でも撃ってもらおう。

「ぎゃあああ！　ディア・マイ・ドゥウタァァァーー！！」ＬＩＦＥ２５００　↓　１５００

フレイヤが破壊されると同時に、綾小路が絶叫した。

直訳は『愛しい我が娘』か？　……悪いが、どう控えめに見ても”ロリ”で始まって”コン”で終わる人種にしか見えん。

いつもの熱血感が、今日はどこか空寒いものでしかない。

「うう……フレイヤ……マイエンジェルがぁ……」

「……進めていいよな？　『デスカウンター』の効果で７号Ｃは破壊。そして俺は速攻魔法『神秘の中華鍋』を発動する。７号Ｂを墓地に送り、その攻守どちらかの数値分回復する。俺は攻撃力を選択し、１０００ポイント回復だ。カードを一枚伏せエンドフェイズに移行。残った７号Ａを『リミッター解除』の効果で破壊し、ターンエンドだ」ＬＩＦＥ４０００　↓　５０００

言っておくが、これはまだニターン目の出来事だ。なのに、何故数ターンは経ったような気がするのだろう。……まさかどこかにスーパーアー○ア人でもいるのか！？　いるわけないか。

「……よくも」

綾小路が呟きだした。

「よくも……よくも僕のマイエンジェルをおおおお！！！　僕は怒ったぞ！　早乙女えええええーーー！！」

な！？　ま、不味い！　綾小路が覚醒する！　このままでは、全身から湯気を出すパッキンの不良少年になってしまう！

頼むから髪は逆立てないでくれよ。本当に頼むから。

「僕のターン！　ドゥオルォー！！」

最早ドローに聞こえない宣言をしながら、勢いよくドローする。

「発動『サービスエース』！　効果は知ってるな！？　さあこれは何だ早乙女！！」

またあのテニスカードか。プレイヤーの選んだカードをモンスター・魔法・罠の中から当てる、だったか？　外したら１５００のダメージを受けるなんて、壊れ性能もいいところだ。『旅人の試練』が可愛く見える。

「……モンスターだ」

「ハズレだ！　魔法カード『デュース』さ！　１５００ポイントのダメージを受けてもらう！」

「はぁ……」ＬＩＦＥ５０００　→　３５００

かなり暴走してきてるな。いつもなら立場は逆のはずなんだが、

俺のテンションは相手に反比例するかの如く低い。正直、もう終わりにしたい。

「手札から魔法『二重召喚』を発動！　このターンニ回通常召喚を行える！　『メガ・サンダーボール』（ＡＴＫ７５０）を召喚！　そして生贄に『混沌球体（スフィア・オブ・カオス）』（ＡＴＫ１６００）を攻撃表示で召喚！　このモンスターの生贄召喚に成功したときデッキからレベル３のモンスターを一枚手札に加える！　僕が加えるのは『伝説のビッグサーバー』だ！」

くそっ、覚醒した超野菜人……もとい暴走した綾小路は恐ろしい勢いでデュエルを回していく。というより、また『球』か。よく探してくるなそんなカード。

「『混沌球体』でダイレクトアタック！　喰らえフレイヤの仇！」

混沌球体は文字通り球体だ。一体どうやって攻撃して来るんだ？　まさか手が生えたり、と……か……綾小路、その手に持っているラケットはなんだ？

思い切り振りかぶって……直線状には……混沌球体と俺。

「喰らえ！　波〇球ゥゥゥゥ！！！」

打ったあああああ！？　映像打（ソリッド・ビジョン）った！？　そして打たれたそいつは真っ直ぐ俺の方へ……って。

「デュエルに小道具使うな……けばぶっ！？」ＬＩＦＥ３５００　→　１９００

おもっくそ顔面を強打した。……ってこれ……。

「本物のテニスボール混じってんじゃねえか！　デュエルに小道具使うんじゃねえドアホ！」

「思い知ったか！　今のが破壊された我がマイエンジェルの痛みだ！！」

だめだこいつ日本語通じねえ。

「僕はターン終了だ！　さあ早乙女！　君のターンだ！」

……ＯＫ。もう一度完膚なきまでに叩きのめしてやろう。

「ドロー！　モンスターをセットして、ターンエンドだ！」

「僕のターン、ドロー！　『伝説のビッグサーバー』（ＡＴＫ３００）を召喚！　『混沌球体』でセットモンスターを攻撃だ！」

セットモンスターは……『大王目玉』。破壊されるが、リバース効果を発動だ。

「『大王目玉』のリバース効果発動！　自分のデッキトップ五枚をめくり、好きな順番で戻す」

めくったカードは……『レッグル』『逆巻く炎の精霊』『マジック・ストライカー』『マジック・ストライカー』『サイクロン』。

……にやり。

「『伝説のビッグサーバー』のダイレクトアタック！　一・球・入・魂！！」

今度はきちんと映像（ソリッドビジョン）だった。もう一度ぶつけてきたら、乱闘する気でいたから助かった。

……尤も、許す気はないけどな。ＬＩＦＥ１９００　↓　１６００

「ビッグサーバーの効果で、デッキから『サービスエース』をお手札に加える！　さらに相手は一枚ドローする！　そして発動！　さあ早乙女、このカードはなんだ！」

「……魔法だ」

「残念『神聖なる球体（ホーリー・シャインボール）』でモンスターだ！　１５００ダメージを受けてもらう！」

これで残りライフは１００か。……構わん。１００残っていれば十分だ。ＬＩＦＥ１６００　↓　１００

「ターン終了！　早乙女、今度こそ僕の勝ちだ！　マイエンジェルよ……僕は君の仇をとったよ……」

……これだから”ロリ”で始まって”コン”で終わる人種は。……まあいい。束の間の幸せ、噛み締めておくんだな。

「俺のターン、ドロー！」

引いたのはもちろん、デッキ操作で一番上にした、

「『逆巻く炎の精霊』（ＡＴＫ１００）を攻撃表示で召喚だ！　更に『強欲な壺』を発動して二枚ドロー！」

だがこのままでは『デスカウンター』で破壊される。
……ならば先に破壊すれば良い！

「壺の効果で引いた『サイクロン』を発動して、『デスカウンター』を破壊！　そしてダイレクトアタックだ！」

杖の先から炎が出て、モンスターの間を通り抜けて綾小路を直接燃やした。

「あちち！　だ、だけどこの程度の炎じゃ僕のライフは……」ＬＩＦＥ１５００　↓　１４００

「何言ってるんだ？」

は？　っと言うような顔をして、こちらを見てくる。
生憎だが俺のバトルフェイズは――、

「まだ終わっちゃいないぜ！　リバースカードオープン！　速攻魔法『狂戦士の魂』発動！」

「な、なにいい！？」

「ほう、その様子だと効果を知っているようだな？」

あの武藤遊戯も使った、伝説の処刑カード。……この前は不覚をとったが、今回は対策を施した。

「は、はは、ははは！　た、たとえそのカードを使っても、モンスターカードが出なきゃ意味が……」

全く。周りが見えないからそういうことになる。注意力が散漫なのは、決闘者にとって致命傷だろうに。

「綾小路。俺はお前のターンで何をしたか覚えてるか？」

「え？　えーと、確かリバースモンスターの効果を使っただ……け……」

見る見るうちに顔から血の気が引いていく。ようやく、己のしたことの重大さが認識できたようだ。

「ま、まさか……さっきの効果で……」

ああ、そうだ。
俺のデッキは、既に決まっている。
まさに、

「――計画通り」

綾小路が絶望したという表情を浮かべた。
だけどなあ、俺は止めないぜ？
デッキの上二枚は既にモンスターカードで確定されている。そして、累計ダメージが綾小路のライフを削りきれる事も。
だから……どこまで引けるかなぁ？

「さあ……お前の罪を数えろ……！　一枚目、ドロー！　『マジック・ストライカー』！　モンスターカード！」

「ぎゃあああ！！」ＬＩＦＥ１４００　↓　３００

再び炎の精霊が綾小路を焼く。但し、今度は攻撃力が上がっている。

『狂戦士の魂』は、攻撃力１５００以下のモンスターが直接攻撃に成功したときに発動できる。そしてその効果は……デッキからカードを引き、モンスターカードが出る限り追加して直接攻撃を行えるというもの。

ドローしたカードは墓地に送らなければならないが……問題はそこじゃない。

重要なのは『直接攻撃する』という点。

直接攻撃である。

対象は『逆巻く炎の精霊』だ。

炎の精霊の効果は、直接攻撃に成功したとき、攻撃力が１０００上がるというもの。

つまり。

「二枚目！　『レッグル』！　モンスターカード！」

「ゲエエェェェ！！！」ＬＩＦＥ３００　↓　－１８００

効果が適応される度、攻撃力を増していく。

そしてルールとして、カード効果が終わるまでデュエルの勝敗がつかない。

「三枚目！　モンスターカード！」

「ぎょあああああ！！！！」ＬＩＦＥ－１８００　↓　－４９００

効果が切れるまで、続くのである。

これがこのカードの恐ろしいところ。

「四枚目！　モンスターカード！　五枚目！　モンスターカード！　六枚目！　モンスターカード！　七枚目！　モンスターカード！　八枚目！　モンスターカードォ！！！」

「げぼらっ！！！！！　らいれっ！！！！！！　れごぐっ！！！！！！！　ぐごうっ！！！！！！！！　うわらばっ！！！！！！！！！」ＬＩＦＥ－４９００　↓　－９０００　↓　－１４１００　↓　－２０２００　↓　－２７３００　↓　－３５４００

これが、あの武藤遊戯すらも封印したカード。
その様相は、まさに処刑。
逆巻く炎の精霊による、リアル火炎地獄が今、デュエルアカデミアで再現されたのだった。

終わったのは実に十二枚目をドローした時。『団結の力』をドローしてようやくおさまった。
結果はマイナス６５７００。累計ダメージは実に６９７００であった。
この試合が終わった後、俺の使っていた『狂戦士の魂』は公式に禁止カード指定された。なんでも、余りにも非人道的なカードであるから、というのが理由らしい。
こうして俺が残す試合は、本選を除き後一試合だけとなった。
余談だが、このトーナメントの後数日間の間だけだが俺は奇妙な通り名で呼ばれていた。

曰く――火あぶりのケイ、と。

【おまけ】

『しょ、勝者エントリーナンバー七番！』

レフェリーの先生の宣言を聞き、早乙女はデュエルリングから降りていった。

……またか、また僕は負けたのか！

フィアンセの座を奪われ、今まで必死に努力してきた！　それなのに！

「……悔しいか。綾小路よ」

「！？」

後ろから掛けられた声に振り向いてみると、そこには全身を覆うフードを身に纏った男がいた。何故男なのかは声で判断できたが、どうして僕に話しかけてきたんだ？

戸惑っている僕を余所に、フードの男は僕の落としてしまったカードを拾い上げた。

「フレイヤか……。良いカードを持っているな」

……フレイヤのカードは、僕が必死に探し回って、漸く手に入れたマイフェイバリットカード。そして僕はこのカードをデッキに入

れる為に、ありとあらゆる情報を必死に探した。
活用法、運用するデッキ構築、そして挙句の果てには公式のキャラクター設定までも！

「……我々も、こういったカードを持っていてな」

スッと、懐に手を入れ、一枚のカードを僕に見せた。

「そ、それは……『精霊術師ドリアード』！？」

余りの人気に、製作元が生産中止を決め込んだ伝説球のレアカードじゃないか！

「我々は……苦しい思いをした」

フードの男は、語り始めた。

「我々は、自分で正しいと思うように生きてきた。そして、その成果を試す時が以前訪れた。しかし結果は惨敗だ。何が悪かったのか、どうすればいいのか？　考えても何もわからない日が延々と続いた」

僕と、同じだ……。早乙女に負けて、どうすればいいのか、どうやったら勝てるのか。そんなことばかり考えていた時があった……。

「そんな時、我々はあるカードに目が留まった。俺の場合は、このドリアードにだ。そして俺は悟った」

僕も、そんな日々の最中に、フレイヤを見つけた。
……やはりこの男は、僕と同じ道を歩んでいる。
となれば次に出る言葉は……決まっている。

「「一人の女性を愛する前に、一枚のカードを女性として愛そう」」

僕の言葉と男の言葉が重なった。

……そうだ。僕はあの日に悟り、誓った。一人の女性を、フィアンセを愛する事ができないのなら、まずは自分の持つカードを、一人の女性として愛そうではないかと。

「……気付いたようだな」

男は、唯一見えている口元を上弦に歪ませ、笑った。

……まさか、こんなことで気付かされるとはね。

そうだ。僕はフレイヤを愛すると誓ったんだ！　こんなところで、負けたことにうじうじしている場合じゃない！

僕の決心を悟ったのか、男は手を差し伸べてきた。

「この手を取るかどうかはお前次第だ。わかるな？」

その言葉を聞き、僕は迷うことなくその手を取った。

再び、男の口が開く。

「ようこそ新たな紳士よ。我々『紳士同盟』は君を歓迎する」

この日を境に、綾小路は女性相手に軟派な行動をしなくなったという。その代わりに、デュエル中のモンスターに女性型のモンスタ

ーが増えたという噂がまことしやかに流れた。
さらに後日、休日のアカデミアでは夜な夜な至る場所から男の呻き声が響くようになり、アカデミアの七不思議の一つになったとかならなかったとか。真実を知るものは、全てを語らない。

十五／動揺と再戦　ケイサイド？（後書き）

最後適当過ぎる……ｏｒｚ
優介「……これは酷い。いや非道い」
殆ど勢いで書いたようなものだからなぁ……。

【1．綾小路再登場！】
優介「彼だったのか……」
綾小路ミツル君に再登場していただきました。理由は最後のやつが書きたかっただけ。あと処刑相手。
優介「……まああんな戯言言っているような奴は、蟲野郎のように処刑されればイイヨ……？」
落ち着け優介。ダークネス化入ってるよ。
優介「なんなら僕が……はっ！？」
あ、お帰り。

【2．狂戦士再び】
またも出ました処刑カード。
優介「相手が可哀想と思えないのが不思議だ」
綾小路だし。かませだし。
優介「……ところで最後に禁止指定されてるけどなんで？」
成功パターンと失敗パターンが書けて満足した！　というわけでたった二枚でデュエルの終わるチートカードは封印です。
優介「ＯＣＧになったら絶対これやる人が増えるだろうね……」
ＰＳＰのＴＦ版だと効果ダメージなんですけどね。大王目玉もこの為だけに入れました。
優介「ハズれると本当に悲惨だからなぁ……」

【3．○○と言う名の……？】

謎の紳士登場。
優介「なんだろう。どっかで見覚えがあるような……」
特に隠す必要もないので言ってしまうと、クリスマス編で優介を拉致っていった覆面集団の一人です。
優介「ああ！　あの異端ｓ……」
そこまで！　みなまで言うの禁止！　綾小路は見事会員入りを果たしました。

【4．次回の予定は？】
未定です。
優介「ちょっとそこに正座しな」
仕方ないじゃん！　ストック全部使い切ったよ！
優介「だからって未定はないだろ！？　ストーリーの目処くらい立ってないのか！？」
……。
優介「いや反論しろよ。まさか本当に……？」
大丈夫。トーナメント中だからデュエルさせる。
優介「本当かよ……」
というわけで次回『妄信と猛進』。次は誰かな？
優介「いつになるか分からないけど、なるべく早くさせます！」

特別挿話1　バレンタイン編（前書き）

一日遅れてしまいました……。
ただただ必死に書いていたら、異常に長くなってしまったのでそれが原因でしょう。
赫鎌には短くまとめる才能がない。改めて再認識させられる特別挿話、どうぞ！

多分誤字だらけなので、気づき次第指摘お願いします！

特別挿話1　バレンタイン編

バレンタイン。男女問わずに色めきだす魅惑の日。
この日を楽しみに待つ男は人生の勝ち組と称され、呪詛を呟きながら勝ち組の男達を殺意の篭った視線で睨みつける負け犬共は、文字通り負け組と称される事となる。
そしてここデュエルアカデミアにも、この日を待ち構えた男女の壮絶な――、

『丸藤君！　受け取ってください！』

『吹雪様！　私の気持ち受け止めてー！』

『野郎共あいつらを逃がすんじゃねえぞ！』

『サーチ&デェース！！』

『呪ウ呪ウ呪ウ呪ウ呪ウ呪ウ呪ウ呪ウ呪ウ呪ウ呪ウ呪ウ呪ウ呪ウ呪ウ呪ウ呪ウ呪ウ……クケケケケケケ！！』

――『聖戦（イベント）』が既に始まっていた。

バレンタインに必要なもの。一概にこれと言えるものは無いだろうが、敢えて言うのならこれだろう。

「うーん……もうちょっと、ビターにしようかな……？」

そう。チョコである。

オベリスクブルー女子寮の食堂。その隣の厨房では、全校から集まった女子生徒で賑わっていた。理由はただ一つ、思いを伝える究極のお菓子（アイテム）を作るためである。

「でも優介さんは甘い方が好きらしいし……うーん……」

そしてここにも、悩める乙女が一人いた。

「なーにマリっぺ。藤原君にあげるの？　いいなあ彼氏持ちは！」

「べ、別に彼氏じゃないってば！」

優介に渡すチョコ――もちろん本命だ――を作っている真理の隣では、同様に溶かしたチョコを型に流し込んでいる女子生徒の姿があった。どちらも校則の制服姿ではなく、汚れても問題ないエプロン姿である。

「かっわいいなーマリっぺはぁ！　そんなテレなくても、みんな分かってるんだって！」

実技試験の後から、二人が一緒にいるのは学年を問わずによく目撃されている。本人達は否定しているが、その様子はどこからどうみても付き合っているようにしか見えない。

「だ、だったら、桜はどうなのよ！　この間一緒にいる先輩にでもあげるの？」

「……いや。あの男（ひと）には別の女（ひと）がいるから、さ」

「え……ごめん……」

しまった、と思った真理だったが。

「というわけで傷心なあたしに藤原君下さい！」

「絶対ダメッ！」

この友人の変わり身の速さに、そんなことは光速で忘れ去った。

「いいじゃんあたしにも貸してよ！　あんただけ幸せになるなんてずるい！」

「だからって何で優介さんなのよ!?　他にフリーの人はいっぱいいるじゃない！」

今の発言で、『優介は自分の彼氏だ』を言外に言っている事は承知しているのだろうか。

「だって頭が良くてカッコ良くてスポーツ出来て優しくてデュエルも強い人なんて藤原君くらいじゃん！　しかも絶対浮気しなさそうだし超優良物件でめっちゃお買い得じゃん！」

「でも優介さんだけは絶対ダメ！　他の人にして！」

型に流し込まれたチョコは、寒い二月の気温に触れ固まってきた。ある程度形が整ったら型を外し、共同で使っている冷凍庫に入れる。完全に固まった後、表面をデコレーションしていくのだ。

「でもあの四人組って、かなりレベル高いよね」

チョコを固めている間、桜が真理に言った。

「あの四人？」

「藤原君と早乙女君、それにカイザーとブッキーよ！　みんな成績は上位でルックスも抜群、デュエルも強くて非の打ち所が無いって感じ？　狙ってる子も多いって話だよ？」

優介は真理との噂が一人歩きし、それほど露骨な接点を求めてくる輩はいないがそこそこ人気があるという。吹雪に関しては元々がプレイボーイな性格をしており、顔も整っている事から女子から圧倒的な支持を得ている。亮もクリスマスイベントの際に優勝、カイザーの名を賜ってから知名度が上がり、全校からカリスマ扱いで男女共に人気が高い。ケイも見た目はいいのだが、如何せんやはり実技試験のインパクトが強力で寄り付く者は少ない。しかし遠目から意味ありげな視線を送るものはいるらしい。

一名難有りだが、まさにアカデミアのカリスマ集団。注目されない方がおかしいだろう。

「中でもブッキー！　やっぱあの人が一番の注目株ね！」

「注目株って……。それじゃ、桜も吹雪さんにあげるの？」

真理がそう聞くと、周りで同様にチョコを作っていた数人……否、ほぼ半数の視線が集中した。

「ざんねーん。あたしのは義理と友チョコだよ」

そう桜が言うと、周囲からの視線は四散した。が、同時に『負けてたまるか！』といったオーラが辺りから漂ってきた。

「さて、そろそろいいかな？」

冷凍庫からチョコを取り出す。丸い形のショコラチョコは明らかに多くの人にあげる事を目的に大量に作られており、ハート型で形作られている真理のそれとは全く違っていた。

二人は生クリームの入った袋やチョコペンを手に取り、装飾の用意をする。

「じゃあデコレーションといくか。……マリっぺは勿論『優介ＬＯＶＥ』とでも書くのかニャ？」

「書きません！」

茶々を入れる桜に、ムキになって言い返す真理。それでも手は休むことなく、自身でできる最高の物を作り出していった。

一方、厨房の隣の食堂のテーブルでもチョコ作りは行われていた。作る人数が多すぎて、全員が厨房に入りきらなかったのである。急遽作られた臨時のキッチンではカセットコンロに鍋をかけてチョコを溶かしたり、各自の部屋に添えつけられていた小型冷蔵庫を持ち寄りチョコを固めていたりしている。

真理と桜の二人から離れた食堂の臨時キッチンの一つ、絢は見るからに楽しそうにチョコを作っていた。

「……～～♪」

「……随分とご機嫌ですね。先輩」

上機嫌に鼻歌を口ずさむ絢を尻目に、カチャカチャとホイップクリームをかき混ぜる小柄な少女が呟いた。

「……先輩の癖に、男でも出来ました？」

「月夜（つくよ）ちゃん、それはどういう意味カナ？」

「言葉通りです。私に取材を押し付けて自分は男のとこに入り浸っていたこととか、折角作った新聞が綺麗さっぱり忘れ去られて張り出すのが一日遅れたこととか、取材に行こうとしたら先輩に貸したデジカメがバッテリー切れ起こしたままだったとか、そんな苦労する後輩に素敵な出会いの一つも提供しないまま自分だけが運命の出会いを果たしたことが妬ましいとかそういう意味じゃないんですよ？」

月夜と呼ばれた少女から出る不満の数々。明らかに言ったままの意味なのだが、全て絢が悪いので割愛する。

「あ、あはは……。申し訳ない……」

「……まあいいですよ。先輩が私にも本命くれるなら許しましょう」

「へ？　本命？」

「はい。本命です」

後輩の口から出る不可解な単語（ワード）。真意を測りかねる絢は聞いた。

「ええと……。これから作る本命チョコが欲しいと……？」

「ああ違いますよ。それはそれで、あげたい人にあげてください」

ただ、と続ける。

「私にも日頃の苦労を労う以上の意味で先輩の濃厚（ディープ）な愛情が欲しいという意味です」

「……つまり『たまには労わってくれ』ってことなのね」

ようやく合点がいって、余りに難解な言い回しに頭が熱を出した。おつむの高くない絢にとって、難しい言葉はＮＧなのだ。

「ああ。チョコが嫌ならベッドの上でもＯＫですよ？」

「ぶっっ！？」

ベッドの上、という単語に思わず噴出してしまった絢。幸いチョコへの被害は無かった。

「つ、月夜ちゃん！　冗談でもそういうことは言わないように！」

「まあ非道い先輩！　私決死の覚悟で言ったのにそれを冗談だなんて！　無理矢理私を部室に連れ込んだのは先輩なのに！　使うだけ使ったら後はポむぐ」

「ストップ！　分かったから！　これからはもっと労わってあげる！　後部室に連れてったのは私だけどそれは月夜ちゃんが新聞部に入りたいって言ったからだし！」

とんでもない事を口走る後輩の口を必死に押さえる。抵抗する様子は無く、どうやらふざけ半分で言っていたようだ。

なおこの時の会話の端を聞いていた一部の女子の間では『絢ちゃん鬼畜攻めの月夜ちゃん泣き受け!?』や『新しいわね。後で速攻で仕上げるわよ!』などの物凄く気になる会話があった。

抵抗しない後輩にばかり構っていられない絢は、すぐに手を離した。

「まあ冗談はこのへんにして」

「どこからが冗談なの!?　最初からよね!?」

「先輩。ホイップできましたよ。袋に入れてペンタイプの金具付けときますね」

「あ、うんありがとう……ってだからどこから冗談なの!?」

軽くスルーされそうになり、慌てて問い詰める。しかし月夜は一向に意に介さず、自身の分のチョコを溶かし始めた。

「先輩。焦げますよ?」

「……後でじっくり聞かせてもらうからね?」

「ベッドの上でなら」

「普通に話しましょう!」

周りの友人に振り回される真理と絢の二人。思う人は違うが、思

う心はどちらも同じ。二人の気持ちが届くかどうかは、天すらも分からない。

「ところでマリっぺ」「ところで先輩」

「「自分にリボン巻いて、『私がプレゼントです♪』なんてことは？」」

「「絶対しません！！」」

「なあ優介」

「なんだいケイ」

「どうしてこうなった？」

「……俺が知るかよ」

目下、俺達の下には血走った目をしたカラフルなフード集団が走り回っている。何をしているかは、言うまでもないだろう。何故下かと言うと、俺達は今木の上にいるからである。

「全く……。俺達が一体何をしたって言うんだか……」

「そんなことより、亮達が心配だよ。俺達とは別方向に逃げたらしいけど、大丈夫かな」

何故こんな事になったのかと言うと、それは約数十分前まで遡る。

俺達はいつも通りなのかどうかわからないが、俺の部屋で四人揃ってくつろいでいた時だ。俺の持ち込んだコタツで温まりながらカードの議論を交わしていると、俺達のＰＤＡに一通ずつメールが入った。

「『この日を望まぬ者は十秒以内に返信せよ』？　新手の宗教か？」

「まあ放っておくに越したことは無いだろう」

亮のその一言で無視を決め込んだのがいけなかったのだろう。きっかり十秒後、俺の部屋はフードの男によって開け放たれた。

ズカズカと入ってくるフードの集団。その数は実に二十人以上。

ドアの外入りきれなかった奴がいると考えると、恐るべき数になる。

『早乙女ケイ、丸藤亮、天上院吹雪、藤原優介！　貴様等を異端者として異端審問にかける！』

は？　と疑問に思う時間すらなかった。

先頭に立つ一際カラフルなフードの男は、後ろに控える別の男に指示を出した。

すると後ろに控えた男は、丸まった書簡のようなものを携え先頭の男の支持を待った。

『綾小路二級審問官。奴等の罪状を読み上げろ』

『ハッ。鎌瀬会長。えー、被告早乙女ケイ以下四名（以下、この者等を甲とする）は我がデュエルアカデミア本校の生徒であり、この者等は我等が教義に反した疑いがある。甲の罪状は名誉毀損及び強制猥褻未遂及び背信行為である。日時不定、甲が同アカデミアの女子生徒等複数名（以下、この者等をバレンタインの精とする）に対して強制猥褻未遂の疑いがあり、同時に我等に対して名誉毀損となる行為をした疑いがあるところ確保。現在に至る。今後、甲とバレンタインの精の関係に対して充分な調査を行った後、甲に対して然るべき対応を――』

『御託はいい。結論だけを述べたまえ』

『バレンタインチョコが貰えるのが羨ましいであります！』

『うむ。実に分かりやすい報告だ』

人の部屋に無断で入るなとか、もうその時点で不法侵入じゃねえかとか、異端審問ってなんだよとか、鎌瀬会長って誰だよとか、綾小路ってまさかあいつかとか、長ったらしい説明の割には理解できることが全く無かったじゃねえかとか、まあ色々聞きたいこと言いたいことはある訳だが……。

『異端者達よ。汝等は自らの罪を悔い改め、裁きを受け入れるか？』

神妙な声で俺達の返事を待つ鎌瀬とかいう会長。正直、関わりたくない。

「一ついいか？」

『聞いてやろう』

正直関わりたくないが、こうなった以上何らかの形で終わらせなければいつまでもまとわり付いてくるだろう。
なるべく早く、そして穏便に済ませなければならない。

「その裁きとやらはなんだ？」

『ふむ……。恐怖を煽るようなので詳しい事は言えないが――』

そこで言葉を区切り、

『――酸素ボンベの無い、ダイビングとだけ言っておこう』

言葉を聞き終わる前に俺達は窓から外へ飛び出した。穏便に済ませる？　無茶言うな。

さて窓から飛び出して外に出た俺達だが、いつまでも同じ場所に留まっているわけにはいかない。半数ずつに分かれ、ＰＤＡで適宜連絡を取り合うということで解散した。亮・吹雪ペアは校舎の方へ、俺・優介ペアは森の方へ向かったのだが。

『探せェ！！　絶対この近くにいるぞ！！』

『見つけた奴には特別報酬があるぞ！　死ぬ気で探せよテメェ等！』

『ウフフフフ……。ドコだあァい……？　出てキなよぉ……？』

『刺殺轢殺圧殺撲殺銃殺毒殺……』

今出たらただじゃ済まない気がしてならない。

「どうするかなぁ……。もう二時回ったよ？」

「あいつ等がどっか行かない限りはなぁ……」

『いたぞ！　木の上だ！』

しまった。どうしようかと模索していたところ、遂に手下の一人に見つけられてしまった。

「逃げるぞ優介！」

「いや逃げるってどこに――」

優介の声を無視し、俺はすぐに木から飛び降りた。

――下で大声をあげた、団員Ａを踏み抜いて。

『き……サ、マ……ガクッ』

……大丈夫だよな？　当たり所悪かったりしないよな？　よし、大丈夫。

勝手に自己完結し、すぐに走り出す。もちろん、後ろから優介も一緒だ。

『修一いいいいい！　よくも修一をおおお！！』

『絶対に逃がすんじゃねえぞ！　修一の仇を取るんだあああ！』

余計な事までしてしまったが、これも俺達が生き残るためだ。尊い犠牲となってくれ修一とやら。

「この後どうするんだよ！？」

無我夢中で走りながら、優介が半ば叫ぶ形で聞いてきた。

「一先ず亮達と合流する！　後の事はそれからだ！」

そう叫び返し、俺達は校舎の方へ走っていった。後ろからは未だに怒声罵声が続いており、止まったら最後命の保障は無いリアル鬼ごっこが始まったのだった。

「亮達はどこ！？」

「わからん！　電話も通じない！」

現在連中は俺達の後ろをきっちりマークし、退かず縮まずの鬼ごっこを繰り返している。なんとか二人に連絡を取ろうと先程から電話をかけているのだが、一向に繋がる気配は無い。

「このままじゃ捕まるのも時間の問題じゃないか！」

俺だってそう思う。連中は数十人いるのに対し、俺達は僅か四人。このまま不毛な追いかけっこを続けていたら間違いなく体力切れで捕まるだろう。

「だからって今は何も――――！？」

校舎の廊下を走っていると、遥か前方に人影が見えた。
あの人影は……アカデミアの長老、田中教諭の背中だ。鮫島校長よりも年上で、デュエルアカデミアの全てを知っているとまで称されている生きる歴史証人。
長老の背中を確認した瞬間、俺はこの状況を乗り切るための妙案を思いついた。
即ち――巻き込んでしまえということだ。

「こんにちは田中先生！」

俺が元気に挨拶をすると、長老が振り返った。

「ン？　ああこんにちは早乙女君、藤原君。随分と急いでるようですが、どうかしましたか？」

「追い詰めたぞ早乙女……こ、これは田中教諭！」

のんびりと挨拶を返した長老のすぐ後、フードの集団が早々に迫ってきた。が、長老の姿を確認するとすぐに先程までの殺気を抑え、至って普通に話し始めた。

「その声は三年の鎌瀬君ですね？　大勢でどうしました？」

「はい！　実はそこの早乙女君と藤原君にデュエルの相手をしていただきたかったのですが」

ちょっと待て。そんな事は微塵も聞いていない。
とはいえ、この返事も無理ないかもしれない。目の前には教師がおり、教育者相手に『異端者を抹殺します！』などと言おうものな

らば生徒指導は免れない。
しかし、だからといってこれだけ大勢で押し入りながら『デュエルの相手をしてもらいたかった』というのは無理がある気がする。

（ねえケイ）

先頭の鎌瀬会長とやらが長老相手に事情を説明していると、後ろで事を見守っていた優介が話しかけてきた。

（なんだ優介）

（今の内に逃げないか？　幸い校舎の中なら教師がいるから下手な事はできないだろ？）

確かに一理ある。このままここにいても無益だろうし、少しでも生き延びる為に逃げ回った方がいいのかもしれない。
しかしやはりそれも単なる先延ばし。いずれは捕まるだろう。

「ふむ……。話はわかりました」

これからどうするかと考えていると、話が纏まったのか長老が喋りだした。

「早乙女君、丸藤君。時間はありますかな？」

時間？

「まあ、急ぎの用もありませんが……」

「俺も無いですね」

二人でそう返事をすると、満足そうに頷き、

「では君達二人と彼等の代表者二名でタッグデュエルをしてください」

と言いやがった。

「「はい？」」

当然意味の分からない俺達は、疑問の声を上げた。長老は俺達の様子を見て、どうしてそうなったのか話し始めた。

「彼等は君達に用があるそうですね。しかし君達は彼等の用に応えたくない。ここまでは聞いた限りの事ですが、間違いありませんね？」

用というのは、間違いなく裁きのことだろう。

「はい。そうです」

「つまり互いに要望が衝突状態。どちらかが諦めなければ、収まらない状態です」

俺達が諦めることは絶対ありえないが、まあ確かに言うとおりだろう。

「そこで、敗者が要望を諦めるという形で、二対二のタッグデュエルを行ってもらいたい。というのが彼等の妥協案です」

「随分無理矢理な感じはしますが分かりました」

向こうからの提案という時点でやや不安がある。しかしこのまま追い掛け回されるよりは遥かに良い提案に、俺は二つ返事で了承した。

「俺達としても、これ以上付き纏われるのは迷惑ですからね。その勝負、受けて立ちますよ」

優介もやる気充分のようだ。

「ふむ。では着いて来てください。デュエルリングの使用を許可しますので、そこで白黒はっきりさせてください」

「ほう。一年生の中で指折りの実力者である早乙女君と藤原君、三年生の中でも屈指の強者である鎌瀬兄弟によりタッグデュエルですか」

「ええ。きっと良い勝負になると思いまして」

割と大きめなデュエルリングに向かい立つ俺達。隣には優介がおり、向かい側には同じ顔が並んでいた。

相手は三年生の双子デュエリスト鎌瀬兄弟というらしい。兄の犬太（けんた）と弟の犬次（けんじ）は三年生でトップ１０の実力者だと聞く。ちなみに、どっちがどっちだか初見の俺にはまるで区別が付かない。

ついでに校長。何故いるんだ。あんたが呼んだのか長老。

「さあ早乙女！　俺達と熱いハートフルコミュニケーションを取ろうじゃないか！」

「バレンタインという名の聖夜について、一晩中語り明かそうぜ！」

はっきりきっぱり断りたい。

「あの人達それが目的か……」

相手の目的がハッキリし、余りのアホらしさに優介が思わず呻いた。

つまりは今日この日、バレンタインに一緒に過ごす相手がいないから、彼女持ちの男子生徒拉致して惨めな思いさせてやろうぜということらしい。全く、迷惑極まりない。

「メールが入っているから何かと思えば、こんなことになっているとはな」

「絶対勝てよ二人共！　女の子のいない聖夜なんて僕には耐えられない！」

後ろの観客席では、亮と吹雪が俺達のデュエルを見守る体制に入っていた。

決まってすぐにメールを出したわけだが、二人とも元々このデュエルリングの観客席で息を潜めていたという。なんでも『利用者の少ない休日にここで騒げば目立ってガードマンがくるから』らしい。ガードマンが怖い生徒達にとって、そんなことは御免こうむりたいだろう。

まあ、ちゃっちゃと倒して、諦めて貰うとしよう。

「さあいくぞ！　共に聖夜を過ごそうぜ！」

ああ。暑苦しい。

「「「「デュエル！！」」」」

ケイ＆ａｍｐ；優介　ＬＩＦＥ８０００
犬太＆ａｍｐ；犬次　ＬＩＦＥ８０００

「先攻は年功序列だ！　ドロー！」

最初にドローしたのは兄の方らしい。デュエルリングの周囲にあるモニターで表示されたため、まず間違いないだろう。

最初にルールの確認をしておくとしよう。

まず互いのライフは８０００から。二人でライフを共有するシステムのようだ。

次にフィールド。基本的には二人分あり、互いに出せるカードは一人十枚ずつの合計二十枚。パートナーの伏せカードは発動できず、モンスターは使役可能。生贄にする事もできる。一種のバトルロワイヤル・タッグバージョンといったところか。

そして順番は、今回の場合【鎌瀬兄→優介→鎌瀬弟→俺】という順番になる。

基本的なことはこれくらいだろうか。後はやりながら確認していくとするか。

「ぬふふふふ……」

なんだ？　急に笑い出したぞ？

「早乙女。藤原。お前達は『迷宮兄弟』というお方を知っているか？」

迷宮兄弟……。かつて決闘王、武藤遊戯がペガサス島で戦った、門番デュエリストの名だったはずだ。

「あのお方は俺達に素晴らしい技術を教えてくれた」

兄の言葉を弟が引き継ぐ。

「タッグデュエルとはなにか」「互いを信頼し、強く信じあうこと」

「その真髄とはなにか」「相手の心理を掴み何をしようとしているのか読み取ること」

「そして極めた者こそが」「最強のタッグデュエリストとなるのだ」

「その極意！」「とくと見せてやろう！」

……どうでもいいがよくここまで繋げられるな。これも極意とやらの一つなのだろうか。

「俺は『ヒゲアンコウ』（ＡＴＫ１５００）を召喚！　そして魔法カード『生け贄人形』を発動する！」

生け贄人形は、場のモンスター一体を生け贄に手札のレベル７のモンスター一体を特殊召喚するカード。あまりにピンポイント狙いのカードだから、余り使われていないカードだ。そしてそのカードを使うということは、最初から全力のようだ。

「『ヒゲアンコウ』を生け贄に！　出でよ我が最強のしもべの一角！」

生け贄にされたヒゲアンコウのいた場所に、大きな棺のようなものが現れた。

そしてそれはギィィィ……と不気味な音を立てながら開いていく。

「召喚！　『水魔神ースーガ』（ＡＴＫ２５００）！」

完全に開いた棺からは、全身を水のベールで覆った骸骨のような、額に『水』と書かれた魔神が姿を現した。

「す、水魔神だと！？」

観客席で、亮が叫んだ。続くように、吹雪の声が聞こえてくる。

「す、水魔神って言えば、あの伝説のデュエリストの迷宮兄弟が使った、彼等しか持たないレアカードじゃないか！　何であの二人が持っているんだ！？」

迷宮兄弟のカードは、Ｉ２社（インダストリアル・イリュージョン）の会長であるペガサズ・Ｊ・クロフォード氏が特別に作ったと言われている。当然、一般で手に入るようなカードではない。

「このカードは我等が師より譲り受けたカード！」

「師の教えをより広めるため、このカードを賜ったのだ！」

「「そしてもちろん狙うは究極の魔神！　その目でしかと見届けよ！」」

……若干迷宮兄弟の喋り方に似てきていないか？　あのカードを使うと似るのか？

「……伝説のデュエリストが使ったカードか……。確かに恐ろしいね」

今まで静観していた優介が、デュエルが始まって以来初めて口を開いた。

「けど、高い壁ほど乗り越え甲斐がある」

そう不敵に笑う優介は、心なしか大きく見えた。

「この魔神を見て臆せぬか！　益々気に入ったぞ藤原よ！　やはり俺達と語り合おうじゃないか！」

「全力で断る！」

「冷たいな！　俺はカードを一枚伏せてターン終了だ！」

「俺のターンドロー！」

水魔神の攻撃力は２５００。最初のターンは誰も攻撃できないが、この攻撃力は後々脅威になるだろう。優介はどんな手でいくんだ？

「俺はフィールド魔法『天空の聖域』を発動！　さらに『シャインエンジェル』（ＤＥＦ７００）を守備表示で召喚してターンエンドだ！」

全身が良く鍛えられたマッチョな天使が、神々しい神殿の前に立ちはだかった。

よし。シャインエンジェルはリクルートモンスターだ。破壊されても、デッキから攻撃力１５００以下の光属性モンスターを特殊召喚できる。その際攻撃表示になってしまうが、天空の聖域がある限り天使族ならば問題ない。

「『天空の聖域』が存在する限り、天使族の戦闘によって受ける戦闘ダメージは０になる。安定した良い手だ」

亮も光属性を使う身としてシャインエンジェルの効果は知っている。それらを使ったデッキの特徴も、把握しているようだ。

「僕のターンだ！　ドロー！」

次は鎌瀬弟の番。兄の方が水魔神を召喚したから、恐らく弟のデッキにも、残りの二枚が入っているはずだ。

「僕は『カイザー・シーホース』（ＡＴＫ１７００）を召喚！　いくよ兄さん！」

「こい弟よ！」

目に見えてタイミングを合わせる二人。一体何が起こるんだろうか。

「僕は魔法カード『闇の指名者』を発動する！　モンスターカードを一つ宣言し、そのカードが相手のデッキにあれば一枚手札に加える！　もちろん指名するのは兄さんのデッキに眠る、『風魔神－ヒューガ』だ！」

指名するカードでパートナーを指名しただと？　そんなことが可能なのか？

「ふふふ、ありがたい。勿論俺のデッキに風魔神のカードはある。だが俺ばかりが貰っていては兄としてのプライドが許さん。お返しに罠カード『強欲な贈り物』を発動だ！」

またそんな使い方が出来るのか！？　強欲な贈り物は相手に二枚引かせるデメリットカード。こんな使い方が出来るなら、ただのメリットにしかならないじゃないか！

「いやいや礼には及ばないよ兄さん。僕もこのカードが発動できるんだからね。速攻魔法『サモンチェーン』発動！」

……まずい。あれは通常召喚を三回まで可能にする魔法。上級モンスターだろうが、生贄にするモンスターが揃っていればすぐに召喚されてしまう。

そして相手は既にシーホースを召喚しており、後二回召喚権が残されている。

「効果により後二回通常召喚を行う事が出来る。そして『強欲な贈り物』の効果で僕は二枚ドロー！　さらに兄さんは『風魔神ーヒューガ』を手札に加える！」

このターン魔神が揃う事は無い。仮に揃ったとしても、攻撃できなければ意味が無い。しかしこのターン中に一体召喚されてしまえば、残るパーツも既に相手の手中にある。

「僕の『カイザー・シーホース』は光属性二体分の生贄とすること

が出来る！　シーホースを生贄に――」

再び現れる大きな棺。先程は『水』と表面に書かれていたが、今度は『雷』を書かれている。

「――現れよ『雷魔神ーサンガ』（ＡＴＫ２６００）！！」

背中に雷太鼓を背負い、身体には『雷』と銘打たれた魔神が、姿を現した。

これで二体。残るは後一体のみ。

「後一体、と思っているな早乙女？」

弟の方に、ズバリ言い当てられた。

「残念だがこのターンで究極の魔神は完成だ！　魔法カード『エクスチェンジ』発動！」

……おい。まさかここでか？

「対象プレイヤーは勿論兄さん！　さあ兄さん！　ヒューガを貸してくれ！」

「いいとも弟よ！　俺は『メテオ・ストライク』を借りるぜ！」

……冗談じゃない。たったニターンで魔神の完成だと？　なんなんだこの異常な噛みあいの良さは。

どう考えても異常すぎる回り具合。まさかこの二人、普段からタッグ用のデッキを組んでいるのか？

「余所見をしている暇はないぜ！？　僕は『地雷蜘蛛』（ＡＴＫ２２００）を召喚し、『生け贄人形』を発動！」

やはり持っていたか。召喚権は既に使い果たし、通常召喚することはできない。ならば特殊召喚しかないわけだが、兄のデッキに入っていれば当然弟のデッキにも入っているか。

「『地雷蜘蛛』を生け贄に、現れよ最後の魔神！」

再三巨大な棺が現れ、蓋が開いていく。同時に、辺りを凄まじい暴風が襲いかかった。

「召喚！　『風魔神－ヒューガ』（ＡＴＫ２５００）！！」

額に『風』と書かれた、丸く緑色の魔神が姿を現した。

そして今相手のフィールド上には、三体の魔神が揃ってしまった。ならば当然来るだろう。この三体の魔神を生け贄に召喚される、究極の魔神が。

「目ん玉かっぽじって刮目しろ！　三体の魔神を生け贄に捧げ――――」

フィールドの、渦が巻き始めた。

渦は紫電を纏いながら大きくなり、やがてサンガを、そしてスーガ、ヒューガを飲み込んでいく。

大きく成長した渦はフィールドの真ん中で止まり、一際大きな渦となる。

最早暴風と化したそれは、勢いを弱めることなくゆっくりと上昇する。

中から現れる、巨大な影。

サンガの頭を持ち、ヒューガの胴体で支えられ、スーガの足で構える。

「これが究極の魔神だ！　『ゲート・ガーディアン』（ＡＴＫ３７５０）召喚！！！」

最上級モンスター三体による、究極のモンスターが姿を現した。

圧倒的な、威圧感。思わず飲み込まれそうになるそれに耐えながら、目の前の存在を睨みつける。

「残念ながらこのターンはまだ攻撃ができない。僕はこのままターン終了だ」

そしてとうとう俺の番が来た。

「俺のターン、ドロー！」

……あの巨大なモンスターを倒す方法はある。だがそれは優介の『オネスト』があってこそだ。今優介の手札にあるのか、それともこれから引けるのか。そんな希望的観測に賭けられるほど、容易いモンスターではない。

……今のままでは何も出来ない。守りに入るしかないな。

「俺は『機動砦のギア・ゴーレム』（ＤＥＦ２２００）を守備表示で召喚。カードを二枚伏せて、ターンエンドだ」

「怖気づいたのか早乙女！　かっこ悪い、かっこ悪いぞ！　そんなことでこの聖なる日を乗り越えられると思っているのかあああ！！」

そもそもお前等が邪魔したんだよ、と叫びたくなった。

「俺のターン、ドロー！　……ふむ。このターンから攻撃が出来るわけだが、『シャインエンジェル』を攻撃したところでダメージを与えられるわけでもない。かと言ってギア・ゴーレムも守備表示で同様……とでも言うと思ったか馬鹿め！」

いきなりなんなんだコイツは。

「俺は装備魔法『メテオ・ストライク』を『ゲート・ガーディアン』に装備させる！　これでゲートガーディアンは貫通効果持ちとなった！　いくら守備表示にしたところで所詮は無意味！　派手に散るが良い！！」

ギア・ゴーレムの守備力２２００に対して、ゲート・ガーディアンの攻撃力は３７５０と絶大。攻撃されたらその差１５５０が俺達のライフから引かれてしまう。

「ゆけ究極の魔神よ！　ギア・ゴーレムに攻撃するのだ！　魔神衝撃波！！」

サンガの雷撃が、ヒューガの暴風が、スーガ水流が襲い掛かる。抗う事もせず、為されるがままにギア・ゴーレムはその身を朽ちさせた。

だが、喰らうと分かっているものを、わざわざ喰らうこともない。

「罠発動『ガード・ブロック』！　ダメージを０にして、一枚ドローする！」

余波は見えない壁のようなものに阻まれ、俺に届く事はなかった。

「なんとしぶとい！　しつこい男は嫌われるぞ早乙女！」

その言葉、そのままお返ししたい。

「俺はカードを二枚伏せてターン終了だ！」

それにしても、この双子本当に鬱陶しい。ゲート・ガーディアンを召喚したのは確かに凄いが、そこからが嫌になるほどお粗末だ。

エクスチェンジでメテオ・ストライクを加えたのを見ていたのに、何の策も無しに守備表示で出すほど馬鹿じゃないということくらい分かると思うのだが。

「俺のターン、ドロー！」

優介のターンだが、すぐに動かないのは伏せカードを警戒しているからだろう。

相手の場には二枚。下手に動こうものなら、すぐに圧倒的な攻撃力の前に粉砕されてしまう。

「俺は手札から速攻魔法『手札断殺』を発動する。互いのプレイヤーは手札を二枚捨て、二枚ドローする」

今の優介の手札は四枚。手札を半分削ってしまうが、手はなかったのだろうか。

すると優介は、驚くべき手を打ってきた。

「ただこの魔法を使うのは貴方達じゃない。手札交換をする相手はパートナーのケイだ！」

手札断殺の効果適応者を、なんと俺に指名してきた。恐らく先程

の相手のやり方を見て判断したのだろう。相手も文句を言わず、納得した顔をしている。

効果によって、手札にあった『閃光の双剣ートライス』と『レッグル』を捨てる。今重要なのは連続攻撃でも、攻撃力の低い直接攻撃でもない。必要なのは、面白半分で入れた『あの二枚』。最初は冗談のつもりで入れてみたが、使ってみれば案外使えない事も無いということがわかった。ただ、あまりに相手に依存しすぎるため、使う相手を選ばなければならない。だが今現在、この二人のモンスター相手になら最高の結果を出してくれるだろう。

引いたカードは『強欲な壺』と……その一枚。

効果使用対象、使用カード、シチェーション。全てが出来すぎている気もするが関係ない。

後一枚。後一枚で、伝説を打ち破れる。

「僕は『シャインエンジェル』を攻撃表示に変更！（ＤＥＦ７００→ＡＴＫ１４００）そして『シャインエンジェル』で、『ゲート・ガーディアン』を攻撃する！」

「なにい！？　自爆特攻だと！？」

「待つんだ兄さん！　『天空の聖域』のある今、天使族である『シャインエンジェル』はダメージを受けない！」

「そうか！　そして奴のしもべはリクルートモンスター！　ここで自爆特攻して、新たなしもべを呼ぶつもりだな！」

とても丁寧な解説ご苦労と言いたい。しかし優介の狙い通り、シャインエンジェルは三色の衝撃波に飲み込まれ、一枚の羽根を残すことなく消滅した。

「『シャインエンジェル』の効果発動！　デッキから攻撃力１５００以下の光属性モンスターを攻撃表示で特殊召喚する！　現れろ『オネスト』（ＡＴＫ１１００）！」

「出たね優介のエースカード！」

「オネストの召喚で、形勢がかなり変わったと言えるだろう」

吹雪と亮も静観を破り、それぞれの考えを述べる。

「『オネスト』は一ターンに一度、自分を手札に戻す事が出来る効果を持っている。つまり優介はオネストの効果が使える！」

「しかもこのターン優介は通常召喚を行っていない。効果適応モンスターを召喚することも容易だろう」

このまま優介が新たなモンスターを呼んだ場合、オネストを手札に戻し効果を使うため相手からの攻撃を待つだろう。

しかし。

「俺は『オネスト』の効果で、こいつを手札に戻す。そしてカードを二枚伏せて、ターンエンドだ！」

「えええええっ！？　モンスターを召喚しない！？」

吹雪が大声をあげて驚いているが、無理も無い。折角オネストを手札に戻しても、対象のモンスターがいなければ使えない。

一体何を考えているんだ？

「僕のターン、ドロー！」

再び鎌瀬弟の番が来た。弟の方は前のターンにカードを使いきり、手札が０の状態からドローした。たかが一枚のドローで戦局が揺れることはないと思うが……。

「ヌハハハハ！　いくら策を施そうと無意味なのさ！　魔法『大嵐』発動！　全ての魔法・罠を破壊せよォ！」

……揺れる事は無い、と思っていたんだが……そんなことはなかった。

容赦なく荒れ狂う嵐に巻き込まれる伏せカード。だがそれにチェーンする形で、カードが発動されていった。

「破壊されることは、元より承知の上だ！　罠カード『和睦の使者』を発動！　このターン、相手から受ける戦闘ダメージは０になる！」

暴風の中、俺達の周りに薄く輝く膜のようなものが張られた。フリーチェーンのこのカードなら相手がなにをしようとも発動できる。これでこのターンのダメージの心配はなくなった。

しかし発動したのは所詮一枚。もう一枚の伏せカード『体力増強剤スーパーZ』はあっけ無く破壊され、フィールド魔法『天空の聖域』も終焉の時を迎えた。そして鎌瀬兄のカードも、二枚とも破壊された。

「フハハハハ！　よくやったぞ弟よ！　この瞬間破壊された罠『コーリング・マジック』の効果発動！　このカードが破壊されたとき、デッキから速攻魔法を一枚セットできる！　そして破壊された『コーリング・マジック』は二枚！　よってデッキから『サイクロン』と『収縮』をセットする！」

自分達のカードも巻き添えにするくらいだ。コレくらいは当然だろう。

……だが、これで本当に迂闊な手は取れなくなった。なんらかの罠を仕掛けようものなら『サイクロン』、かといって中途半端な攻撃力で特攻しても『収縮』で阻まれる。俺のデッキのモンスターは殆どが攻撃力の低いやつらばかりだ。収縮を使われたら、ひとたまりも無い。

「僕のターンは終了だ！　さあ精々足掻け！　そして諦めて、今日という日を共に過ごそう！」

……思えば、なんでこんなデュエルをしているんだ？

俺達は別に奴等に恨みを売った覚えは無い。特に非難されるような事も……最近はしていない、はずだ。実技試験の時はともかく。

なのに今絡まれている。そして、共に過ごそう？　どういう意味だ？

「ケイ。悩んでいるようだね」

わけが分からない、といった俺の様子を感じ取ったのか、優介が話しかけてきた。

「……正直悩んでいる」

「だったら簡単だよ。倒せば良い」

……は？　それはどういう意味だ？

「悩んでいる事があるなら、まず目の前にいる敵を倒してからだ。

それから考えても、遅くない」

あまりにも極論過ぎる結論を述べる優介。要するに、さっさと倒してしまおうということだ。

……いや、確かにそれは正しいかもしれないな。

考えても答えが出ない疑問なら、こんな切羽詰った状況ではなく、後でじっくりと考えた方が良い。

……よし。だったら、倒させて貰おう。

そう頭を切り替え、決着をつけるためのドローをする。

「俺のターン、ドロー！」

引いたのは……『残りの一枚』。

だが、ダメだ。今相手の場には『サイクロン』が伏せられている。あれがある限り、このカードは使えない。

ならばどうするか。答えは簡単だ。さっさと使わせてしまえば良い。

「手札から装備魔法『疫病』を発動！　戦士・獣戦士・魔法使い族にのみ装備でき、攻撃力を０にする！　『ゲート・ガーディアン』は戦士族！　よって攻撃力は０だ！」

「やった！　これで射程圏内に入った！」

「いやダメだ。奴等は『サイクロン』を伏せている！」

その通り。この装備魔法はサイクロンを無駄打ちさせるためのもの。

「残念だったな早乙女！　『サイクロン』を発動して『疫病』を破

壊だ！」

使わせさえすれば、俺の勝利への方程式が完成する。

「手札から『強欲な壺』を発動！　カードを二枚ドローする！」

引いたのは……『サイクロン』。今来るなよと思いたいが、この際関係ない。

出来れば、本当に出来れば後一枚早く来てもらいたかった。ついでに二枚目のカードも。

「俺も『サイクロン』を発動！　『収縮』を破壊だ！」

「これで相手の伏せカードはなくなったね……」

「このターンで破壊、もしくは対策を立てなければ、かなり厳しくなる。どうするんだケイ」

これで舞台は整った。邪魔するカードは何も無く、あるのは勝利への道（ロード）のみ。

ならば、この道を駆け抜けることが、今の俺に出来ること。

「俺は、『モノマネ幻想師』（ＡＴＫ０）を攻撃表示で召喚だ！」

現れたのは身体の細い、なんとも頼りないピエロのような、不思議なモンスター。顔にあたる部分には鏡をあてており、後ろにある素顔を決して見せようとはしない。

「攻撃力０のモンスターを」「攻撃表示で召喚だと？」

「噂には聞いていたが」「まさか本当にやるとはな！」

いちいちハモって、耳障りだ。

相手の声を無視して、俺はさらに続ける。

「『ものマネ幻想師』の攻撃力は、相手の場のモンスター一体の元々の攻撃力と同じになる！　お前達の場には『ゲート・ガーディアン』のみ！　よって幻想師の攻撃力は３７５０にアップする！」

幻想師の持つ鏡に、ゲート・ガーディアンの姿が映し出された。

これで戦闘破壊ができる。だが、俺はこれで終わらすことはしない。

「さらに装備魔法『ニトロユニット』を発動！　『ゲート・ガーディアン』に装備する！」

時限爆弾のようなものが現れ、ゲート・ガーディアンにまとわり付く。外そうともがいているが、一切外れる様子は無い。

「そしてオマケだ！　魔法カード『フォース』を発動！　『ゲート・ガーディアン』（ＡＴＫ３７５０→１８７５）の攻撃力を半分にし『ものマネ幻想師』（ＡＴＫ３７５０→５６２５）の攻撃力に加える！」

「こ、攻撃力が……」

「５０００を超えただとおお！！？」

元々の攻撃力の高さもあり、数値があまりお目にかかれないものとなった。だがこいつらは忘れている。この数値が、さらに化ける

事を。

「いくぞ！　『ものマネ幻想師』の攻撃！　『ゲート・ガーディアン』を粉砕せよ！　幻想（イリュージョン）・衝撃波ァァァ！！」

敵の姿を映し出す鏡から放たれたのは、雷撃、暴風、水流が反転し光り輝く衝撃となったものだった。

光の衝撃波を遮るものは何も無く、ゲート・ガーディアンを問答無用で飲み込む。その最中、突如として輝かんばかりの金色の羽根が、フィールドを舞った。

「……『オネスト』の効果だ。相手のモンスターの攻撃力分だけ、自分の光属性モンスターの攻撃力を上げる。これにより幻想師の攻撃力は……」

――攻撃力９３７５

余りに強大な力は、究極の魔神すらも壊す。

衝撃波の嵐が止み、フィールド上にあったのは、満身創痍の魔神だけだった。

その胴体には、最後の一撃を決める最終兵器が付けられていた。

「ま、まさか俺達のしもべが……」

「破られるなんて……」ＬＩＦＥ８０００　↓　２３７５

「……『ニトロユニット』の効果発動。戦闘破壊された装備モンスターのコントローラーは、装備モンスターの攻撃力分のダメージを受ける」

罅の入った体から、欠片が零れだし――、

「……崩壊しろ！」

――最期は、眩い光と共に爆発した。

「そ、んな……」

「馬鹿な……ありえない……」ＬＩＦＥ２３７５　→　０

……終わった。

「……やったな、ケイ」

「……ああ。最後、助かったぞ優介」

最後の攻撃は、優介の手札にオネストがあるという確信があったからこそできた攻撃だ。

シャインエンジェルの効果で召喚し、自身の効果で手札に加わったからこそ出来たコンビネーション。おそらく、もう出来ないだろう。

「やったね二人共！」

「ご苦労だったな」

吹雪も亮も、観客席から降りてきて労いの言葉をかけてきた。

何はともあれ、これで全部終わりだ。こちが勝ったんだから、もう連中は追っては――、

『会長！　大丈夫ですか会長オオォ！！』

『クソ野郎共が……！　よくも我等の会長と副会長を……！』

『全員構えろ！　弔い合戦だアァァ！！』

――くるようだな。

俺はちらりと連中を見てから、三人に向き直った。

「よし。逃げるぞ」

その言葉と同時に、俺達は走った。

地獄の鬼ごっこ。第二ラウンド開始だ。

「……いってぇ」

タッグデュエルで勝ったに関わらず、連中が諦めずに追いかけてきた事により、俺達は極度の筋肉痛を強いられる事となった。

何とか撒いたのだが、現在時刻は既に夜の十時。陽もどっぷりと沈み、殆どの生徒が寝ている時間帯だ。我ながら、よくこんな時間まで逃げ切れたなと思う。

……もしかしたら、連中はこれが原因だったのかもしれない。一日中追いかけっこをして、バレンタインデーの思い出を作らせないことが。そう思いながら、俺は一人自室へと繋がる廊下を歩いていた。

そういえば急いで飛び出したから、窓が開けっ放しだ。恐らく部屋のカギもかかっていないだろう。空き巣が入る、なんてことはないとは思うが、一応確認しておいた方が良いな。

最後の角を曲がると、俺の部屋の扉が見えてきた。扉は閉められており、別段変わった様子は扉にはない。違和感は、その下にあった。

置かれているのは、小奇麗にラッピングがされた薄い箱。その下には、一枚の真っ白な紙が置かれている。

なんとなしにその紙を持ってみる。表面には何も書かれておらず、裏返してみた。

『To Kei Saotome
St. Valentine's Day
From Aya Kazamigaoka』

丁寧なローマ字で、そう書かれていた。

「『早乙女ケイへ　聖バレンタインデー　風見ヶ丘絢より』か……」

……気にならなかった、と言えば嘘になる。俺だって男だ。こういう日があれば、少しばかり、本当にすこしばかり期待してしまう自分がいる。

しかし、今まで貰えなかったことから、『どうせ今年も』という半ば諦観していたということもある。

そんな中見つけた、一つの驚き。

何時までも廊下にいるわけにはいかないので、ノブに手をかけ中へ入る。

部屋の窓は閉まっており、備え付けのエアコンによる暖房も付いていた。

筋肉痛であることも忘れ、テーブルにメセージカードを置き、丁寧なラッピングの施された箱のリボンを解いていく。

僅かに震える手で開けると、そこにはハートの形に象られたチョコが一枚あった。ベタに『ＬＯＶＥ』などのデコレーションは無い。

ただシンプルに、何の飾り気も無い一枚のチョコ。
箱に収められていたそれを手に取り口元へ運び、一口齧る。
カリッ、と軽く音を立てた後、口の中に広がる仄かな甘味と苦味。
人生で初めてもらったバレンタインチョコは、ビターで大人の味がした。

「全く、先輩は詰めが甘いですね」

女子寮の一室で、呟かれた。

「ただ置いたままじゃ、勘違いされるか無視されるのが関の山だというのに」

そう呟く少女のポケットには、何の用途に使われたのか分からないボールペンが一本入っていた。

「まあ私にもチョコをくれたわけですし」

一人そう言いながら、星型に象られたチョコを齧る。
口の中に、甘くほろ苦い味が広がっていく。

「本気みたいですし、邪魔だけはしないであげましょうか」

少女はそう言いながらも、少しずつチョコを齧っていく。
手に持ったチョコが全て口の中に入る頃には、少女の独り言も消えていた。

「あ。絢さんおはようございます」

「あややや。真理さんおはようございます！」

「昨日はチョコ渡せたんですか」

「それが……急に恥ずかしくなって部屋の前に……。ま、真理さんはどうなんですか？」

「え、じ、実は私も……直接って、凄く勇気要りますよね……」

「そうですね……」

『吹雪君！　昨日は渡しそびれちゃったけど、受け取って貰える？』

『ブッキー様―！　アタシの愛受け取ってー！』

『吹雪様！　これ受け取ってください！』

『ありがとうみんな！　大切に食べさせて貰うよ！』

「……はっきり言えるって、羨ましいですね」

「……そうですね」

翌日の少女達の会話は、自らを一層精進させようと決意させるものだった。

特別挿話1　バレンタイン編（後書き）

最後は適当投げっぱなしフリースロー！　意味分かりませんね。
展開が強引過ぎたかなぁと思わなくもありませんが、間に合わせようとした結果がこれです。
今回はバカテス要素を組み込んでみたくなりましたが活かし切れず、結局最後は（作者的に）甘くなってしまいました０冂―
もっと精進したいです。

十六／妄信と猛進　吹雪サイド？（前書き）

ふぅ……。
ケイ「いきなりどうした」
いや……最近色々あって疲れた……。
ケイ「絶対に途中で投げ出すなよ。逃げた場合は『真紅眼の産声』を飲ませる」
ヤメロ！　確実に死ぬ！
ケイ「俺は無事だった！」
黙れ人外！　一般人に飲ませるな！
ケイ「最後まで続ければ良いだけだ！」
わかってらぁ！　というわけで吹雪サイド？どうぞ！

十六／妄信と猛進　吹雪サイド？

Ｓｉｄｅ：吹雪

さてさて、順当に勝ちあがってきたけど、そろそろ厳しくなってきたかな。

僕のエントリーしているＡブロックはこれから決勝戦が始まる。もちろん出るのは僕。途中危ないところもあったけど、ようやく報われるね。

一回戦でかなりトリッキーな相手と戦ったけど、その後は至って普通。ただただ攻撃力の高いモンスターで、馬鹿正直に突っ込んでくるだけだったから凄くやりやすかった。ただ相手がブルーだったからだけかもしれないけど。

強い生徒が勝ち上がってくるということは、必然的に成績下位の者はふるい落とされる。残るのは当然実力のあるもので、その大半はオベリスクブルー。イエローもそこそこいたけど、レッドなんて本当に一人や二人だった。

何故かブルーには強いモンスター＝攻撃力の高いモンスターという単純な考えがあって、デメリットも考えずに『パンサー・ウォリアー』や『味方殺しの女剣士』を出して自滅したり、『電動刃虫（チェーンソー・インセクト）』を出してドロー補助してくれたりと本当に色々あった。まあ中にはケイみたいに攻撃力の低いモンスターを使う生徒もいたけど、防御面ばかり考えていて火力が低かったりして台無しだった。

イエローもレッドも、中々酷い内容だった。色々コンボを考えてデッキを作ったけど回しきれなかったり、防御無視の特攻を繰り返すだけっていうのもあった。中でも酷かった、いや非道かったのは、デッキ丸ごとアイドルカードで構成されたがあった。『精霊術師（エレメントマスター）ドリアード』なんて、属性系のカードを混ぜれば絶対使えるのに、関連するカードが一枚も入れられていなかった。あれじゃ使われる

モンスターも可哀想だ。
……デッキコンセプトなんて、人の数だけある。だからそれをダメだとか言うつもりは無い。だけど、僕にはどうしても我慢ならない事が起きた。
これだけ多くの生徒が参加しているのに、これだけ色んな試合を見てきたのに。

（……どうして……どうして、どうして女子生徒が参加していないんだァ！！？）

これは由々しき事態だ。ああもうそりゃ人類絶滅レベルのエマージェンシーだ！
今回参加している人数は十六掛ける四ブロックの六十四人。なのにその中にただの一人も女性がいない！　いるのはさっき映った優介の出ているタッグトーナメントだけだ！　しかもパートナーの竜剛院さんを入れて九人も！
何故だ！　愛の伝道師たるこの僕が、このまま野郎とデュエルしただけで終わってしまっていいのか！？　否！　断じて否だ！　僕は、僕は絶対に認めない！

『エントリーナンバー一番！　早く降りてきなさい！』

……グラサン先生から叱咤が入った。
全く。女子生徒がいないトーナメントに出たって、僕はちっとも楽しくない！　このまま灰色の優勝を飾ったって、見てくれる女の子がいなければ意味ないじゃないか！
そもそもこのトーナメントだってノース校との親善試合に出る生徒を決めるわけだし、僕がやらなくても……。
そこまで考えて、僕は本能的に感じ取った。
それは今までに培ってきた経験則からか、はたまた神のお告げか。

思考すること僅か一秒未満。僕は結論に至った。

――――勝てば目立つ！

そう。ノース校との親善試合は毎年行われ、全校生徒が注目するとても大きなイベントだと聞く。つまり出場するとなれば当然目立つ。嫌でも目立つ。多くの生徒に、教師に、女子生徒達に見てもらえる！

（これだ……！　僕の目指していたのは、これだったんだ！）

『一番。そこでニヤニヤしている一番。早く降りてきなさい。失格にしますよ』

はっ！？　しまった。自分の考えに酔いしれて、一瞬トリップしかけた。

流石にこれ以上待たせて失格にされては困る。主に僕の華々しいスター計画が泡沫と消える。

一つ返事をして、急いでデュエルリングに上がり構える。相対する相手はここまで勝ちあがってきたブルー生徒。名前は覚えていない。

『ようやく来ましたか。ではこれよりＡブロック決勝戦を始める！』

既に構えている僕の前で、対戦相手のブルー生徒は悠々とデュエルディスクを構えた。

「おい天上院」

「ん？」

これから始まるという時になって、相手が口を開いた。正直こんな野郎に名前を覚えられても嬉しくないけど、無視は僕の沽券に関わる。

「お前等、一年生の中じゃ指折りの実力者とか言われてるようだけどな……」

今初めて知ったよ。ところで、『お前等』って他に誰がカテゴライズされてるのかな？

「あまり調子に乗ってると……蹴落とすぜ？　この優男がっ」

落とされる、ではなく落とす。つまり目の前の男は、僕を倒すと宣言した。

あまりの物言いに、一瞬だけ、本当に一瞬だけだがビキッとこめかみ辺りが音を鳴らした。だけど誤魔化すように笑顔を作る。モニターを通じて女の子に見られているかもしれないからね。無様な姿は見せられない。

「……随分な言い様だね。青二才が」

僕の発言に、目の前の男が顔を歪ませた。

「……ッハ！　容赦なく潰してやるぜ……！　俺は猪狩狂兎（いかりきょうと）だ。今からテメェを潰す名だ、覚えとけッ！」

「御丁寧にどうも。改めて天上院吹雪だ。すり潰してあげるよ！」

『両者構え……始め！』

「「デュエル！！」」

吹雪　ＬＩＦＥ４０００
狂兎　ＬＩＦＥ４０００

「先攻は貰うぜ！　ドローだ！　俺は『ゴブリンエリート部隊』（ＡＴＫ２２００）を攻撃表示で召喚だ！」

現れたのは全身を銀色に輝く鎧で覆ったゴブリン達。その手には鈍色（にびいろ）に光るレイピアを持っていた。

なるほど。潰すとだけあって攻撃力の高いモンスターを使うとは、実に的確だ。より攻撃力の高い『ゴブリン突撃部隊』でも『不屈闘士レイレイ』でもなく、守備力も充分に兼ね備えているエリート部隊をチョイスするところも中々だ。ここまで勝ち上がってきただけある。

「更に俺は装備魔法『デーモンの斧』をエリート部隊に装備させる！　この効果でエリート部隊の攻撃力は１０００アップだぜ！（ＡＴＫ２２００　→　３０００）」

ゴブリン達の手に持つレイピアが、禍々しい斧へと変貌した。それに伴い、心なしかゴブリン達の目が赫く輝いている気がする。

「カードを一枚セットして、ターンエンドだ！」

ギャラリーがざわつき始めた。『さすがブルーだ』とか『最初から攻撃力３０００超えだと……！？』とか、果てには『これは決まったな』なんてほざく輩まで出始めた。

……まあ、所々で聞こえる『吹雪様―！』や『頑張ってー！』な

んていう声援もあるから、見っとも無く喚き散らさないけどね！

「僕のターン、ドロー！」

さぁて、手札は上々。あんなモンスター一匹、倒すのなんて容易い。

とは言っても、ただ倒すだけじゃつまらない。女の子が見ているとわかった以上、このデュエルはエンターテイメントにしなきゃね！　幸い新しいカードも入れたことだしね。

「僕は『幻獣ワイルドホーン』（ＡＴＫ１７００）を攻撃表示で召喚する！　さらにカードを二枚伏せて、ターンエンドだ！」

明らかに攻撃力の低いモンスターを攻撃表示で召喚したことに、目に見えて動揺するギャラリー。『勝負を捨てたな』とか『ヤケクソじゃねえの』とか、まあそんな言葉が飛び交った。

「テメェ……ふざけてのか！」

この様子に対戦者の猪狩が声を荒げた。

「フフフ。明らかに罠だと分かるこの状況だ。踏み込んでくる勇気が君にあるのかなぁ？」

そう。これは挑発を兼ねた布陣。攻撃してくればそれで良し。してこなければそれも良し。どう転んでも、決して振りには働かない。

そこで僕は敢えて口に出して挑発した。先程も言ったが、僕はこのデュエルをエンターテイメントなデュエルにするつもりだ。その為には、消極的な防衛策なんて邪魔なだけだ。

そして案の定、挑発された彼は見事に頭にきていた。

「……クソ野郎がッ！　俺のターンドロー！　行けエリート部隊！　そのふざけた野郎をぶちのめせ！！」

それぞれ斧を振り上げて襲い掛かってくるゴブリン達。しかしまあ、こうも簡単に挑発に乗ってくれるとなんだか拍子抜けだね。

というわけで、大人しく罠にかかってもらうとしよう。

「速攻魔法『移り気な仕立て屋』発動！　装備カード一枚を、別のモンスターに移す！」

毎度毎度装備カードを使ってくるケイに対して新しく入れたカードだけど、意外とこれが普通のデュエルでも使える。使用頻度の高い『デーモンの斧』に使う事はもちろんだけど、装備カードとなる罠、例えば僕の使う『幻獣の角』等の装備罠にも使える事はあまり知られていない。

『デーモンの斧』は僕のワイルドホーンに装備され攻撃力を１００上昇させ、当然エリート部隊の攻撃力は１０００下がる。現在の攻撃力は２７００対２０００となりワイルドホーンが有利となった。

「反撃しろイルドホーン！　ストロングホーン！！」

二本足で立っていたワイルドホーンが手（前足？）を地につけ四足姿勢になり、向かってくるゴブリン達を見据えた。

足（後ろ足？）に力を溜め、加速をつける為に地を擦っている様は闘牛を髣髴させる。

止まらなくなったゴブリン達はそれぞれの得物をワイルドホーンに叩きつけるように攻撃し、その瞬間ワイルドホーンが突進した。

――話は変わるが、交通事故を見たことはあるだろうか。テレビ

の衝撃映像でもなんでもいい。かなりのスピードで車が人に突っ込んで、人がまるでゴム人形のように吹っ飛ぶ感じを想像して貰いたい。

丁度それが、今目の前で再現された。

「ちッ！　使えねえモンスターだ！」ＬＩＦＥ４０００　→　３５００

今度はギャラリーからは別の驚きの声が上がった。

『あんなカードがあったのか！』とか『誰だヤケクソとか言った奴』とか騒いでいるけど、掴みは上々のようだ。

「だったら俺はモンスターをセットだ！　そしてカードを一枚伏せて、ターンエンドだ！」

「僕のターンドロー！」

さて、次の手は……と。

「僕は速攻魔法『手札抹殺』を発動！　互いに手札を全て捨て、同じ枚数ドローする！　僕の手札は三枚！　よって三枚ドローだ！」

「チッ。俺は二枚ドローだ」

隠さず舌打ちをした。ということは、なにか重要なカードでもあったのか？

ドローしたカードを見て、密かにほくそえむ。少し足りないけど、手は充分整った。けど、まだこれからだ。

「『天使の施し』を発動！　カードを三枚ドローして二枚捨てる！

更に魔法カード『トレード・イン』を発動！　手札のレベル８のモンスター『神獣王バルバロス』を捨て、二枚ドロー！」

これで都合八枚のドロー。だがまだだ、まだ終わらんよ！

「この瞬間罠カード『堕天使の施し』を発動！　このターン手札から捨てたカードを全て手札に戻す！」

捨てたのは『手札抹殺』で三枚、『天使の施し』で二枚、『トレード・イン』でバルバロスの計六枚。これが全て手札になり、総計九枚。これだけドローすれば、ギャラリーも少しは騒ぐだろう。

……と思ったら、意外にもそこまで騒がしくならない。あれ？

『すげえな。手札が一気に九枚だぜ』

『でもＢブロックの奴も手札十枚越えたぜ？』

『そういやあったな。てことは天上院もライカン・スロープ狙いか？』

……なん……だと？　僕以上にドローした強者（つわもの）がいるというのか！？

しまった。ケイの試合は自分の試合と重なって見られなかったんだった。まさか手がかぶるなんて、本当にやっちまっただよ。

……仕方ない。ここから先は路線変更といくか。『天使の施し』で墓地にいったこのカード、できれば『トレード・イン』の時に来てもらいたかったたね。

「『手札断殺』を発動！　互いに手札を二枚捨て、同じ枚数ド……？」

効果の途中、僕は相手の様子がおかしいのに気がついた。
なにやら、堪えているような、笑いを耐えているような、そんな震え方をしている。
そしてその理由はすぐに分かった。
相手の墓地から立ち上る黒い影。始めは煙のようなそれは、固まって暗闇となりプレイヤーの後ろに控えた。
そして次の瞬間、影から腕が生え、目が、口が、果てには頭上に触角のようなものが出現した。

「……ッハッハハハハ！！　ギアッハッハッハッハッハ！！！　いやぁありがとよ天上院！　お陰でコイツのお披露目となったぜえ！！」

そのモンスターは、『闇より出でし絶望』。攻撃力２８００に守備力３０００を持つ最上級モンスター。
通常では出しにくい最上級モンスターだが、このモンスターは一際奇抜な効果を持っていた。
即ち――相手のカードによって、手札かデッキから墓地に送られた場合、特殊召喚できる。
手札断殺が、偶然にも条件を満たしてしまったようだ。

「クックックッ……！　だぁかぁらぁ言ったロォ？　……調子に乗ってると、蹴落とすってよおォ！！」

醜悪に哂う猪狩の姿は、余りに禍々しく見えた。ギャラリーも、いきなりの最上級モンスターに驚きを隠せないでいる。
……とはいえ、これは素晴らしい『演出』だ。この召喚劇のお陰で、ギャラリーの意識は完全にこのデュエルに向いた。これでいい。
魅せるデュエル、楽しませるデュエル。そして何よりも――自分

自身が楽しむデュエル！

今僕は、このデュエルを猛烈に楽しんでいる！　だからこそ、みんなにも感じてもらいたい！　この興奮を、この緊張を、この臨場感（リアル）を！

「『手札断殺』により墓地にいった『幻獣クロスウィング』の効果で、場の幻獣の攻撃力は３００ポイントアップする！　二枚墓地に置かれた事で６００アップし、ワイルドホーンの攻撃力は３３００！　つまり絶望の攻撃力を上回った！」

「……ホォォウ？　だからなんだってんだぁ？」

……癇に障る喋り方だ。この上なく不愉快極まりない。

「……厄介なモンスターには、早々に御退場願おう。ワイルドホーンの攻撃！　絶望を打ち砕け、ストロング・ホーン！！」

実体化した闇に突進するワイルドホーン。愚直なまでのその攻撃は、

「……バァァカがぁ！！」

実体を持たない霊により防がれた。

「なに！？　どうして攻撃が通らない！？」

当然止みより出でし絶望は無傷。遥か頭上から、こちらを嘲笑うかのごとく醜悪な笑みを浮かべたままだった。

「テメェの攻撃宣言時、墓地のこいつの効果を使わせてもらったぜ

ぇ……！」

見せられたカードは『ネクロ・ガードナー』だった。墓地から除外する事で、攻撃を一度だけ無効にするカードか。だったら、攻撃が通用しなかったのも頷ける。

だとしたら、墓地に送ったのは『手札断殺』、もしくは『手札抹殺』の時か。絶望といいガードナーといい、悉く僕の戦略を逆手に取ってくる奴だね。

「折角防いだところ申し訳ないけど、この戦況が変わるとは思えないよ。僕はモンスターを一枚、カードを二枚伏せて、ターンエンドだ」

手札制限により、七枚以上の手札がエンドフェイズ時に残っている場合六枚になるよう墓地に送らなければならない。三枚伏せたことで、ギリギリ免れたけどね。

「俺のターン、ドローだ！　……ヘッ。俺は魔法カード『強欲な壺』を発動！　二枚ドローだ！」

へぇ。ここで壺を引くとはね。たいした執念だよ。

相手の場には『闇より出でし絶望』とセットモンスター、そして伏せカードが一枚と『デーモンの斧』がある。『デーモンの斧』はワイルドホーンに装備されているため、戦況は圧倒的に僕が有利だ。

何が来ようと、そう易々と変わるはずが無い。

「……ッキハ。クキキ、キ……キィハハハハハハ！！　いるんだなぁ勝利の女神って奴はよう！！」

急に笑い出したかと思ったら、そんな妄言を吐いていた。

何か引いたようだが、余程のものなのだろうか。けど、本当に勝利の女神がいるなら是非お目にかかりたいね。

「テメェが何を企んでいようと無駄だ！　魔法『大嵐』発動！　全ての魔法・罠を破壊しろォ！！」

「なぁ！？　うわあああ！！？」

フィールド上に暴風が吹き荒れ、次々とカードが吹き飛ばされていく。

セットしていたのは『命の綱』『幻獣の角』だったが、全て一瞬の内に水泡と帰してしまった。

もちろん『大嵐』の効果範囲はプレイヤー自身にも行き渡るため、相手のカードも破壊されていく。といっても、特に痛手があるようには見えない。当然だろう、斧は僕のモンスターが装備していたし、実質被害は伏せカード一枚だけだった。

「俺の伏せカードは『最終突撃命令』だったが……まあ痛くも痒くもねえな。そしてお前のモンスターは『デーモンの斧』がフィールドを離れた事により、攻撃力が１０００下がるわけだ」

……これでワイルドホーンの攻撃力は２３００となり、絶望の攻撃力を下回ってしまった。攻撃されたら、多かれ少なかれダメージを喰らう事になる。

「おっと……そういえば忘れてたぜ」

わざとらしく呟いてくる。

「『デーモンの斧』の効果発動！　こいつが場から墓地に送られた

時、モンスター一体を生け贄に手札に戻す事が出来る。俺はセットしていた『黒き森のウィッチ』（ＤＥＦ１１００）を生け贄に手札に戻すぜ！」

ぐっ……本当に不味い。これで間違いなく斧を装備して攻撃力を上げてくるだろう。そうなったら大ダメージは必死だ。

しかも相手はまだ通常召喚をしていない。攻撃力の高いモンスターが来る事は、どうしても避けられない。

「更にウィッチの効果発動だ！　こいつが場から墓地に送られた時、デッキから守備力１５００以下のモンスター一体を手札に加える！　俺が加えるのは守備力０の『ゴブリン突撃部隊』！　そしてこいつを攻撃表示で召喚だ！」

しまった。完全に失念していた！　エリート部隊があるようなデッキなんだから、当然突撃部隊があることなんて簡単に予想がつくのに！

「そして『デーモンの斧』を再び発動！　『闇より出でし絶望』の攻撃力を１０００上げるぜ！（ＡＴＫ２８００　→　３８００）更に装備魔法『ビッグバン・シュート』をゴブリンに装備！　攻撃力が４００上がり、貫通効果を持ったぜ！（ＡＴＫ２３００　→　２７００）」

……攻撃力が４０００弱だって！？　冗談じゃない、こんなのを喰らったら、僕の残りライフは僅かになるじゃないか！　しかも片方は貫通持ち、守備表示を攻撃されても、問答無用でダメージだ！　だけど今の僕には何も出来ない。耐えるしかないってのかよ……！

「行け『闇より出でし絶望』！　クソ生意気な牛を破壊しろ！　デ

ッドエンド！！」

巨大な影から伸びてきた腕はワイルドホーンを掴み、掴んだ腕は見る見る内に大きく肥大化する。

幻獣が見えなくなるほど巨大になった闇の固まりは、ゆっくり、ゆっくりと地面に溶け込んでいく。

全て沈み込んだ時、そこに幻獣の姿は無かった。

「くそっ……攻撃の要が……！」ＬＩＦＥ４０００　→　２５００

ワイルドホーンが破壊されてしまい、ライフが大幅に削られた。

既に残りライフは相手の射程圏内。これでゴブリンの攻撃力を上げられでもしたら、本当にゲームオーバーになってしまう！

……負けるのか？　僕は、みんなとの約束を果たせないまま無残にも負けるのか？

亮はカイザーなんて称号を貰って、事実上アカデミアのトップに君臨している。ケイや優介も、彼女が出来たりして充実した青春を送っている。

僕も女の子達と遊んだりしているけど、あくまでそれは友人としてのお付き合いだ。彼女と呼べるような人は一人としていない。

――……嫌だ。このまま、ただ負けるなんて嫌だ！

負けたくない。勝ちたい。どうしても、どうしたって勝ちたい！

勝ってみんなと戦いたい！

後一ターン……後一ターンだけ持ちこたえられれば！

『――……ふむ。中々強欲な主人だ』

――……？

不意に聞こえた声。どこからしたのかと思い辺りを見回すが、いるのは僕と猪狩、それとギャラリーの生徒のみ。

……気のせいか？

『気のせいなものか。主人、前を見よ』

今度ははっきりと聞こえた。それも、僕に向かって話しかけてくる声が。

どこか鈍重そうな、それでいて芯はぶっとい、長い年月を生きてきたような声が。

どこだ？　どこにいる？

「行けゴブリン共！　セットモンスターに攻撃だぁ！！」

注意を疎かにしていると、猪狩が攻撃してきた。

ゴブリン達はそれぞれの得物を振りかぶり、裏側守備表示となっていたモンスターに殴りかかった。

当然攻撃力２７００ものモンスターに勝てる守備力のモンスターではないため、あっさりと破壊される。

破壊される瞬間に見えたのは、全身真っ黒の猫。首には洒落た首飾り（ネックレス）を掛けていた、丸々とした猫だった。

『諦めの悪い主人だ。だが、足掻く事をやめればそこで終わりだ』

墓地に送られる間際に聞こえた声。それは、手元にあるカードから聞こえてきた。

……まさか、ね。

でも、諦めの悪い、か。確かにそうかもしれないね。

強欲な、か。勝利を求めない決闘者（デュエリスト）がどこにいるって言うんだい？

足掻く事もやめない。最後の一瞬まで足掻き続けて、その結果駄目だったらそれまでだ。

「『不幸を告げる黒猫』（ＤＥＦ３００）の効果発動！　このモンスターがリバースしたとき、デッキから罠カードを一枚選び、デッキトップに置く！　僕が選ぶのは、『威嚇する咆哮』だ！」ＬＩＦＥ２５００　↓　１００

「チッ……僅かに残ったか。だがテメェに何が出来るんだ？　確かに次のターンは攻撃出来ねぇが、それでもテメェの寿命が一ターン延びただけだ。さっさと引けよ、天上院ン！！」

「言われなくても……ドロー！　僕はモンスターをセット！　更に『迷える子羊』を発動！　僕の場に『子羊トークン』（ＤＥＦ０）を二体特殊召喚する！　そして一枚セットして、ターンエンドだ！」

　これが今僕に出来る最善の手。これが通用しなかったら、僕の負けだ。

「俺のターン、ドロー！」

「この瞬間『威嚇する咆哮』発動！　このターン攻撃宣言をすることは出来ない！」

「……クソがッ。分かってても、やっぱウゼェな」

　僕の一手に悪態をついてくる。仕方がないさ、これしか手が無いんだからね。

「俺はさっさとテメェ等に勝って、アカデミアのナンバー１に、王（キング）になるんだよ！　そこらに転がってるゴミ風情が、粋がってんじゃねえ！！」

路程の石扱いか。確かに遥か高みを目指している人にとっては、そう見えるかもしれない。
けど、それ故に見落としている事がいくつもある。

「俺はこのままターンエンドだ。さあ、テメエのラストターンだ！　さっさと引きやがれ！！」

ラストターン、確かにラストターンだろう。だから僕はカードを引く前に、聞いておきたかった。

「どうして、そこまでトップにこだわるんだい？　別に今ならなくても、ゆっくりと勝ちあがっていけば、いずれなれるじゃないか？」

「……なぁ～に良い子ちゃんぶってんだテメェはぁ？　俺はな、トップじゃないといけねえんだよ。トップになる為にここにいるんだよ！」

「……どういうことだい？」

トップになる。口では簡単に言えるが、そうそうなれるものではない。
どうして、ここまでトップに拘る？　プロになるにしても、一番でなくとも成績が良ければなれないこともない。

「俺はいずれこの世界を引っ張っていく男になるんだよ！　その為には常にトップじゃねえといけねえ！　だがテメェ等が邪魔をしている。だから俺はテメェ等を堕とす！　潰す！　壊す！　そして王（キング）になるんだよお！！！」

魂からの叫び、というのが一番表現として正しいだろう。この男

の頂点（トップ）への拘りは相当なものだ。ちゃんと目的を持って動いているのがよくわかる。

だけだお、いや、だからこそ僕は負けたくなくなった。

勝ちたい。勝って、僕は僕である事を証明したい。

……そこで気付いた。僕が僕である、そのことを証明する最高の方法。

「残念だけど、君は王にはなれないよ。ドロー！」

引いたカードは、何でも構わない。全てのパーツは、僕の手の内にある。

「僕は、三体のモンスターを生け贄に、神の座に最も近い王を呼び覚ます！」

「王……だとォ……？」

二体の羊トークン、セットした『激昂するミノタウルス』を生け贄に捧げ、手札の最高のモンスターを呼ぶ。

時にはただの八つ星モンスター。時には妥協の効くデメリットモンスター。しかしその実体はそんなものではない。

僕が呼ぶのは最高の相棒。今この瞬間を制覇する、獣人の覇者。

「――来い！　『神獣王バルバロス』（ＡＴＫ３０００）！！」

金色（こんじき）の鬣を靡かせ、威風堂々とした立ち振る舞い。神の座に最も近い、全ての獣の王が降臨した。

「……ハ、ハハハハハッハハハハ！！！　ギハハハハハハ！！！　何かと思えば、ただの攻撃力３０００のモンスターかよ

！！　そんナもんジゃ、俺のモンスターには勝てヤシねエンだよ！！」

余りの叫びに、言葉がややおかしくなってきている。だが晒いたければ晒えば良いさ。

こいつが君に、引導を渡してくれる。

「バルバロスの効果発動！　断罪の雷（ライトニング・ジャッジメント）！！！」

掲げた槍の先から紫電が走り、上空へと解き放たれる。やがて集まった電撃は空気中で雷雲となり、溜め込まれた電気は全て開いてフィールドへと降り注がれた。

闇と化した絶望を、狂気に溺れた怪物（ゴブリン）を、その全てを破壊した。

「……なんだよ、なんなんだよ！？　テメェ一体何しやがったんだよォォォ！！！」

一瞬で更地とされた自分の場を見て、一瞬呆けるもすぐに叫びだす。

だが、そんなことではモンスターは戻ってこない。無駄だと分かってか分からずか、無意味な叫びを続けている。

「バルバロスが三体の生け贄で生け贄召喚に成功したとき、相手フィールド上のカードを全て破壊する。そこに、いかなるカードも関係ない！　更に魔法カード『野性解放』を発動！　獣人族であるバルバロスの守備力を攻撃力に加算する！（ＡＴＫ３０００　→　４２００）」

神の断罪、即ち神罰。バルバロスが打ち出した雷は、まさしく天空からの怒りそのものだった。

「さあ。これで邪魔はなくなった」

「ヒィッ！　く、来るな、来るなアアァァア！！！」

「王になるのは君じゃない！　バルバロスの攻撃！　閃光弾（クラッグ・ショット）オオォ！！！！！」

充填された雷光は、寸分違わず猪狩に向かって射出される。

無様に逃げようとする背中は、収束された電撃により打ちぬかれた。

「ば……カ、なァ……」ＬＩＦＥ３５００　→　０

「君は王にはなれない。何故なら――」

既に立つ気力の無い相手に向かい、僕は宣言する。

「王者（キング）はただ一人！！　この僕だ！！」

§ｌオマケｌ§

「……ふぅ」

控え室に戻った僕は、さっきのデュエルを振り返った。

……あまりにも感情的になりすぎて、反省する点がありまくりだよ。全く、僕はなにやってんだろうね。

それでも、最後の発言は後悔していない。

キングになるという宣言。あれはモニターを通して全校に知れ渡っただろう。そうなると、明日から大変だ。一年が生意気だ、と上級生から睨まれる事もあるだろうし、コイツを倒せば俺がキングだ！　なんて考える挑戦者も現れるだろう。それを全部やり過ごさなければならないと考えると、カイザーの名を未だ返上していない亮は凄いと、心からそう思えてくる。

……キングか。

カイザーと並ぶキング。帝王と王者。アカデミアの二枚看板を飾るみたいで、凄くカッコイイな。どうせなら優介とケイも混ぜて四天王、なんてのもいいかもしれない。確か風見ヶ丘さんは新聞部だったっけ。ちょっと頼んで、新聞部から二人の二つ名を募集するのも面白いかも。

よし、明日から忙しくなりそうだ！　キングとしても、吹雪としてもね！

『マンマミーア！　なんということなノーネ！　一年生Bブロックではこれまで全くダメージを受ケーズ、まさに完全決闘（パーフェクトデュエル）で優勝者が決まったノーネ！！』

丁度良いタイミングでBブロックの優勝者が決まったようだ。ということは、後は亮とケイのブロックが残ったわけか。あの二人のことだし、きっと勝ち残ってくるだろうね。

さてさて、気になるBブロックの優勝者はだれかな、と……。

『どいつもこいつもまるでダメだ。はっきり言って弱すぎるね』

……少なくとも、決勝戦は仲良しデュエルで済むような相手じゃないようだ。出来る限り、当たらないよう祈りたいもんだね。

「……さて、デッキ調整でもするかね」

今までのデュエルで、僕の手の内は大分明らかになってきた。ここいらで大幅にデッキ内容を変えないと、あっさりやられてしまいそうだ。

「……そういえば、あの声はなんだったんだろう？」

デュエル中に聞こえてきた、謎の声。あの場にいたのは僕と猪狩だけ。

気になったのは黒猫が喋りかけてきた事くらいだけど。

「……いやいや。猫が喋るわけないって。アハハハハ！」

「ふむ。そうでもないぞ？」

……Ｗｈａｔ？

十六／妄信と猛進　吹雪サイド？（後書き）

最後投げっぱなしスローイン！
月「最悪ですね」
いきなりダメ出し！？　そして何時の間に来た月夜！
月「特別編からの新キャラ、薬田月夜です。以後よろしく」

【1．だれだアイツ】
ただのモブです。
月「名前の読み方を変えると気温が三度ほど下がります」
それは寒くてか？　冬だからか？
月「え、自覚あるの？」
貴様そこに正座しろ！
月「命令……主従プレイですか？　私先輩以外は興味ないんですが」
分かった。お前もう黙れ。
月「縛りですか？　どちらかといえば縛る方が好きですが」
シャラップ！　次いくよ次！

【2．堕天使の施しって？】
アニメで十代君が使ってました。
月「効果も使った通り。捨てた分補給できるので多分速攻禁止ですね」
アニメは禁止レベルのカード多いなぁ……。狂戦士の魂しかり、幻魔の扉しかり。
月「それにしてもこのカード、絶対天使の施しとのコンボカードですよね」
名前からしてそうだろうね。ただこんな悪用もできる。まさに堕天使。まさに悪魔。
月「厳密には悪魔と堕天使は違いますがね」

【3．時代を先取り！？】
後悔なんてしていない！
月「ねえよ。と言いたいところを黙っていましょう」
うん優しいね月夜ちゃん。もう言ってるけど。
月「これでフブキング誕生ですね。さて後は藤原さんだけですか」
ケイも火あぶりの名がついちゃったしね。すぐに消えるけど。
月「王が目覚めたので黒竜フラグですか？　畳めない風呂敷は広げるもんじゃありませんが」
……まだ、先かな……。
月「駄作者、いや堕作者め」
すごく久々な呼ばれ方！？　そして酷くなってる！？

【4．最初の精霊が……】
月「……黒猫、ですか」
……うん。
月「バルバロさんとか、激昂牛さんとか、色々いたのに初見の黒猫ですか」
……反省してる。
月「……ここまで、堕ちましたか」
……だ、大丈夫！　黒猫が精霊になったのにはちゃんと意味があるから！
月「本当に？」
本当と書いてマジで！

【5．次回こそ……！】
月「帰っていいですか？」
帰宅宣言！？　もうちょっといてよ。
月「嫌です。早く帰って先輩のベッドに侵入する計画を立てなければいけないんです。帰して下さい」

なおさら帰すか！！　いいからさっさと次回予告！

月「えー……めんどくさい……。えーと、次回は遂にタッグデュエル決勝戦です。藤原さんと竜剛院さんの相手は勝ち残ってきた強敵。果たして愛の力で乗り切るのか？」

次回『逆鱗と妄想』。今、物語が進化……できない！

月「まだまだ幼年期１ですよ。せめて成長期くらいにはなってもらいたいものです」

十七／逆鱗と妄想　優介サイド＋α（前書き）

さて投稿感覚が広くなってきました。
ケイ「狂戦士とガンドラ、どっちがいい」
開始前から死刑宣告はやめてくれないか？
ケイ「まあ地震があったり試験があったりで、ドタバタしてたからな」
地震は嫌ですね……歴史上四番目に大きいとか冗談じゃないですよ。
ケイ「最近は落ち着いてきたものの、被害の爪痕は大きいな……」
私の住んでいる県は震度5で済みました。生きている素晴らしさを学びながら書いた十七話、どうぞ。

ケイ「ちなみに遅れたのはなんでだ？」
難産だったから。何回も書いて消してを繰り返したから。
ケイ「で？　納得のいくものは書けたのか？」
……強制脱出装置、発動！

十七／逆鱗と妄想　優介サイド＋α

Ｓｉｄｅ：優介

「……吹雪が勝ったのか」

モニターを通して見た試合は、中々の接戦だった。吹雪の残りライフを１００まで削った相手も凄いし、そこから逆転した吹雪もまた流石としかいえない。

これで現在のブロック優勝者は一年で二人、二年で三人、三年は残念ながら目を通していないからわからない。しかし、クロノス教諭の優勝者インタビューが無いからまだ決まっていないのだろう。

そして、次は俺達の番だ。

「……」

決勝を行うデュエルリングに向かう途中の廊下。隣を歩く真理は無言だった。

風見ヶ丘先輩が二年生だったという驚愕の真実の後、俺達は再びデッキ調整を始めた。その途中、真理の手が止まった。

『Ｆ・Ｇ・Ｄ（ファイブ・ゴッド・ドラゴン）』、真理の持つ最強のドラゴンにして、最後の切り札。出しさえすればまず負けることはないあのカードは、未だ真理の心を迷わせていた。

出すためのコンボを考えたと言っていたが、恐らく使われる事は無いだろう。少なくとも、今はまだ。

あれをたかが一枚のカードと割り切る事が出来なければ、これから先はずっと悩まされる。だが、たかが一枚のカードと割り切ってもらいたくない俺がいる。

どんなカードであろうと、なにかしらの力が宿っていると俺は考

えている。勿論、ＦＧＤや俺の持つオネストにもだ。だから、たかが、と割り切られてしまったら、それはそのカードに宿っている力が失われてしまう。そう俺は考えている。

矛盾している。使ってもらいたい為に割り切らなくてはならないのに、割り切られたら使えない。矛盾だらけだ。

「優介さん」

あれこれと考えていると、隣を歩く真理が初めて声をかけてきた。

「やめた方がいいんでしょうか」

その声はとても弱弱しく、触れれば折れてしまいそうなくらいか細いものだった。

真理は続ける。

「あのカードは私の手の内にあってはならないもの……。そう思えてならないんです」

違う。そんなことはない。

たったそれだけの言葉が、俺は伝えられなかった。

何故？　決まっている。わからないからだ。

あれを持つだけで、周りから批難されてきた真理がそう思うのは無理も無い。だけど、持っているだけで中傷される謂れもない。俺はそう考える。

けれど、周りはそうもいかない。人間は、自分より優れた力を持つ者を恐れる生き物だ。うわべではどうあれ、内心ではその力に怯えている。自分たちが優れていると考えている上級生やプライドの高い生徒からしてみれば、まさに真理はその対象となる。

だからこそ、真理はこう考えた。カードを手放そうと。

震えない声帯に鞭を入れ、何とか応えた。

「……無理する、必要はないんじゃないかな」

「……そう、ですね」

少し逡巡した後、真理はそう応えた。

「……もうすぐ会場ですね」

その声に、俺は我に返った。

目の前を見れば、３６０度に広がる観戦席。その中央に鎮座するデュエルリング。

話しながら歩いているうちに、会場へ着いたようだ。

リング上ではサングラスをかけた教師が、口上を述べていた。

『ではこれより、アカデミア本校代表決定トーナメントタッグデュエル部門決勝戦を行う！』

随分長い。タイトルマッチかよ、と俺はやや場違いな感想を抱いた。

『ではここまで勝ち上がってきたタッグを紹介する！　まずは一年生タッグでありながら、属性を生かしたコンボで上級生すらも翻弄してきた新入生！　藤原優介、アーンド竜剛院真理だー！！』

俺達が入ってきたのと同時に、沸き立つ観衆生徒。

なんだろう。この教師はプロレスでも見ているのだろうか。

『続いては、最上級生の意地を貫いてきた二人！　圧倒的な力で持

って並居る強敵を往なしてきた三年生！　原星華、アーンドメイ・喜多姫だー！！』

「先生、セクハラですよ？」

「倫理委員会に訴える必要があるな」

『名前を呼んだだけで！？』

俺達の出てきたゲートと反対側のゲートから出てきたのは、最上級生のタッグだった。

片方は厳格な雰囲気があるが、もう片方は温和な雰囲気をだしている。

『で、では気を取り直して、ルール説明だ！　互いの初期ライフは８０００で、ターンチェンジは各タッグで交互に執り行う！　そして最初のターンは誰も攻撃できない！』

審判である教師が、ルール説明を始めた。

今回の場合だとターンチェンジは、原先輩、俺、喜多姫先輩、真理となる。そして攻撃できるのは次の原先輩のターンからだ。

『フィールド、墓地、除外ゾーンはパートナーで共通！　デッキ、手札はそれぞれ各プレイヤーのものだ！』

簡単に言えばデッキが二つあるだけ、といった感じだ。だけど墓地が共通であるわけだから、『カオス・ネクロマンサー』などの墓地によって能力の上がるカードは利用価値がグンと上がる。

『今回のタッグデュエルでは『手札抹殺』や『メタモルポット』の

ようなプレイヤーに関係するカードは、原則として一つ前のターンのプレイヤーを相手として指名する！　つまり、今回は原星華が使った場合は竜剛院真理、メイ・喜多姫が使った場合は藤原優介に適応されるということだ！』

プレイヤーへの全体効果は二人だけに適応される。ということは、以前のタッグデュエルのように『闇の指名者』や『手札断殺』でパートナーを選べなくなったということ。考えようによってはパートナーに余計な被害を与えずに済むと考えるか、コンボが出来ないと嘆くかは個人の判断だ。

『では互いに向かい合って！』

もう教師のプロレスノリは無視しよう。あいつらみたいに諦めれば楽になれる。

「藤原優介……！　早乙女ケイといい、天上院吹雪といい……お前達はそこまで私を怒らせたいのか……！」

向かい合ってデュエルディスクをセットすると、何故か対面の原先輩が怒りのオーラを纏いながら睨みつけてきた。

その隣ではタッグパートナーであろうメイ・喜多姫先輩がニコニコと微笑みながら立っている。見ているくらいなら止めていただきたい。

「あの……何をそんなに」

「怒っているか……だろ？」

俺の言いたい事を予知していたかのごとく遮って言う原先輩。隣

では相変わらず喜多姫先輩が微笑を崩さないまま立っている。

「貴様等は……そこまで風紀を乱したいか……！　学園の行事に、男女で出るとは何事だ！！」

何事もなにも、個人の自由ではないだろうか。

そういえば以前、ケイに聞かされた事があった事を思い出す。女子寮に近づく男子生徒を駆除して回る、鉄の女子生徒（アイアン・メイデン）がいることを。

聞いた話では、どんな些細な男女交友も許さず、一緒に話しているところを見るだけで規則違反だと迫ってくるような人……らしい。

若干誇張も入っているだろうが、今目にした感じではなるほどと納得できる。フィールドの関係上、俺と真理の間はかなり開いている。この様子を見ただけでも突っかかってくるとなると、ケイの話も誇張がないのかもしれない。

「星華。そこまで厳しく見なくてもよろしいんじゃなくて」

「ダメだ。規律だからこそ、キッチリと分別しなければ調子に乗る輩が出てくる！」

この様子に初めて喜多姫先輩が口を挟んだが、一蹴された。

原先輩の様子に、お手上げだと言わんばかりに首を振る。どうやら原先輩の男女関係潔癖症（今命名）はいつものことらしい。

「藤原！　竜剛院！　貴様等のような連中をのさばらしておく事は出来ん！　アカデミア風紀委員長である私自らが、直々に処罰してくれる！」

「男女交際ぐらいで、処罰は出来ませんわよ」

そう思っているなら助けていただきたい。

「あのー……」

今まで静観していた真理が声をかけてきた。

「……始めませんか？」

Ｓｉｄｅ：吹雪

「……」

「……？」

「……」

なんだろう。凄く気まずい。

ここは選手控え室。僕の目の前には黒猫。うん、意味が分からない。

僕は決勝戦を終えて控え室に戻ってきた。うん、ここまでＯＫだ。

モニターで優勝者を見てたら、後ろに黒猫がいた。……うん、どこからか迷い込んだんだろう。ギリギリセーフ。

その黒猫が喋った。

「はいアウト！！」

「どうした主人よ」

夢だと信じたかった。そう思っていた時期が僕にもありました。
……いやいやいやいや、現実逃避なんてしている場合じゃないよ。

「……えーと、まず、君は誰？」

猫相手に誰かなんておかしな言い方だと思う。けど他になんと言えと？

「吾輩は『不幸を告げる黒猫』である。名前はまだ無い」

「狙っただろ？　今絶対狙っただろ！？」

「？　先程から言動の可笑しな主人だ。カルシウムは摂っておるか？」

「毎日牛乳を欠かさず飲んでるよ！　ってそうじゃなくて！」

ダメだ。ペースが乱される。

「そうでないならば何を話せと言うのだ？　吾輩は『不幸を告げる黒猫』だ。厳密には精霊と呼ばれるものだがな」

昔、誰かに聞いたことがあった。
カードには一枚一枚精霊と言うのが宿っていて、それは目に見えず選ばれた者にしか確認する事が出来ないって。
その精霊？　今目の前にいる喋る猫が？

「そう呆けた顔をするでない。吾輩とて、主人に不幸を呼ぶわけではあるまいからな」

『不幸を告げる黒猫』の効果は、デッキの中の罠を一枚デッキトップに置くリバース効果。確かに不幸になるのは僕じゃない。もっぱら相手だ。

……いやいや、だから今はそういう話じゃないっての。

「ま、まあ君が精霊云々というのは置いといて、だ……。どうして、ここにいるのかな？」

「知らぬ。気が付いた時には呼ばれておった。主人こそどうして吾輩を呼んだのだ」

だめだ。さっぱり分からない。

「……呼んだ？」

黒猫の言葉の中に、妙なワードが入っているのに気がついた。

「左様。精霊と主は、一方が一方を呼びかけねば呼応しないのが基本。大抵は精霊が主を求める故、主が精霊を求めるのは極めて稀なのだ。今一度問おう。何故吾輩を呼んだのだ？」

「……さぁ？」

器用に四本足でずっこけた。まんまるな体が横に転がる。

「……さ、さぁ、とな？」

どうしてそんな意外そうな顔をするんだろう。謎だ。

「……つまり主人は、吾輩を呼びかけた覚えは無い、と？」

「いや～そういうことになるかな？」

そもそも僕は精霊と言う存在が噂されている事すら忘れていた。
そんな僕が精霊を求めるとかありえない。

「……解せぬ。何故このような人間が吾輩の主なのだ……？」

それにしてもこの黒猫。やたらと古めかしい言葉ばかり使ってくる。僕の事を「主人」なんて呼んでくるし。
……黒猫って言うのもあれだよなぁ……。なんか勝手に主従関係？　っぽいやつ結ばれたみたいだし名前とか必要だよね？

「ねえ。名前とかないと不便じゃないかい？」

「ブツブツ……ん、む？　名前とな？」

まだブツブツ言っていた。案外めんどくさい性格をしているのかもしれない。僕とは正反対だね。

「無くとも困らずものだったが、人間の世界では必要なものであったな」

精霊の世界じゃ必要ないのだろうか。同じ種類のモンスターが出たら何て呼ぶんだろう。

「そうか……では何か付けていただきたい」

さて……名前をつけるとは言ったもののなんて名づけるか。

「丸いからタマ」

「ペットの様で好かん」

「じゃあクロ」

「安直だ」

「シャミs「それは言ってはならん気がする」むぅ……」

案外いちゃもんが多い。めんどくさい性格というのも当たっているかもしれない。

しかし困ったな。そうなったらなんて名前にするか……。見た目は猫でも風格があるしなぁ……。一人称も吾輩だし……。

吾輩……。猫……。

「漱石」

「ソーセキ？」

しまった。口に出ていたか。

「ふむ。ソーセキ、ソーセキか……」

じっくり馴染ませるかのように、漱石の文字を呟く黒猫。見ていると実にシュールだ。

「……ふむ。気に入った。吾輩は今仕方からソーセキを名乗ろう」

気に入ったようだ。

「……ああ、うん。じゃあ漱石。さっそくだけど『デュエルスタート！』……おや？」

デュエル開始の合図が入ったモニターを覗いてみる。
対戦しているのは四人。その中には、僕のよく見知った顔も含まれていた。

「……優介達、始まったのか」

すぐに会場番号を確認し、出していたデッキをケースに仕舞う。

「何処に行くのだ主人よ」

足元から漱石が声を掛けてきた。

「僕は吹雪だよ。友人のデュエルを見に、ね。一緒に行くかい？」

「……ふむ。では吹雪よ、同伴させていただこう」

漱石は四本の足を巧みに使い、まんまるな体にある重量感を感じさせない動きで僕の頭の上に乗った。

……なんで頭の上？

「では行こう吹雪よ」

「ああ、うん」

……まあ、いいか。

Ｓｉｄｅ：優介

『では両者準備はいいかー！？』

「はい！」「万全です」

「問題ない」「こちらも」

『では……デュエルスタート！！』

「「「「デュエル！！」」」」

優介＆真理　ＬＩＦＥ８０００
原星華＆メイ・喜多姫　ＬＩＦＥ８０００

「先攻は私からだったな。ドロー！　私は手札から『サンダー・ドラゴン』の効果を発動！　このカードを墓地に送り、デッキから二体の『サンダー・ドラゴン』を手札に加える！」

　原先輩のデッキは雷族か。間違えそうになるけど、カミナリ族じゃない、イカズチ族だ。だけど雷仙人とかあるくらいなんだから、いっそカミナリ族でもいいと思う。

　っと、考えが逸れた。原先輩の使った『サンダー・ドラゴン』。レベル５の割に攻撃力が１６００と低い中途半端なモンスターだ。けどこのカードの真価はそこじゃない。

「さらに手札から魔法『融合賢者』を発動！　デッキから『融合』を手札に加える！　そして手札の『サンダー・ドラゴン』二枚を融

合！」

そう。このカードの真価は融合。一体一体は弱くても、集まれば凄まじい力になる。流れる電気は低くても、直列並列に繋げば高くなるのと同じ。即ち雷族デッキの狙いは――結束力！

「轟け雷鳴よ！　『双頭の雷龍（そうとうのサンダー・ドラゴン）』（ＡＴＫ２８００）、召喚！！」

全身緑青の鱗に覆われたサンダー・ドラゴンは二匹とも天高く上り雷雲を作り出す。

幕放電の激しい黒雲の隙間から、電流が時折零れるのが見て取れる。異常な量の電気が、雲の中を暴れている。

やがて放電の収まった黒雲から、頭と背中に口を持つ、双頭の龍が姿を現した。

その身体に鱗は無く、しかし皮膚と言うわけではない。全身を覆うのは目に見えないほど透き通った透明の膜。鼻の先から伸びる一角は鋭利に尖り、全身の雷を全身に張り巡らせていた。

双頭の雷龍、雷族最強の融合モンスターが、早々に舞台へ躍り出た。

「私はカードを一枚伏せる。これでターンエンドだ」

早々に攻撃力２８００のモンスター……。正直恐れいった。早くもこんなに強力なモンスターを出せるのは流石三年といったところか。

だけど俺達も伊達に勝ち抜いてきたわけじゃない。

「俺のターン、ドロー！　俺はフィールド魔法『天空の聖域』を発動します！」

辺りに雲海広がる天空に聳え立つ神殿。穢れを嫌う天使達の聖域がソリッドビジョンによって再現された。

しかし、今回はいつもとは違う。神殿前に広がる広場の真ん中に、大きな像で四方を固められた泉が出現した。

「さらに永続魔法『天空の泉』を発動！　このカードは自分の光属性モンスターが戦闘破壊され墓地に送られた時に発動されます。そして俺は『コーリング・ノヴァ』（ＤＥＦ７００）を守備表示で召喚！　ターンエンドです」

羽の付いたクリスマスリースのような天使が現れる。しかし雷龍の圧倒的な威圧感の前では、いつも以上に小さく見える。

「わたくしのターン、ドロー！　……全く星華ったら、こんなに早く大物召喚しちゃって……」

原先輩の召喚に文句を言う喜多姫先輩。一体原先輩のプレイの何がいけなかったのだろうか。傍目から見ても、邪魔するカードが何も無い一ターン目に最上級モンスターを召喚したのは最優良手だ。

「……わたくしも出さざるをえないじゃない」

そうボソッと呟いた喜多姫先輩の顔は、とても愉しそうだった。

Ｓｉｄｅ：吹雪

「はぁ……ふぅ……やっと着いた……」

漱石を頭に乗せたまま走ってきたものだから、かなり息が上がった。なにせこいつ、見た目から分かる通りかなり重い。そりゃもう猫ボリック……いやメタボリックな感じで。

「精霊化をすれば重量を無視できたがしなくて良かったのか？」

「それを早く言え！？」

今までの苦労台無しじゃないか！？　落とすまいと必死にバランスを取りながら走ってきたのに！

精霊化した漱石は他の人には見えず、質量も無くなるらしい。たまに声を聞ける人がいるらしいけど、それも極々小数。アカデミアにいるとは思えない。つまり、完全に僕にしか見えない幽霊のような存在となる。

もう一度言いたい。それを早く言えと。

……もういいや。早くどこか座ろう。そういえば戦況はどうなっているかなっと。

なんとなしに見たモニター画面で、僕は目を疑った。

藤原優介＆竜剛院真理タッグ　ＬＩＦＥ１９００
原星華＆メイ・喜多姫タッグ　ＬＩＦＥ８０００

モニターで開始宣言を受け走ってきたこの数分の間に、既に二人のライフは実に四分の三も削られていた。

「……なんだこりゃあ……！」

意味が分からない。僕がここに来るまで実に僅か数分。プレイヤーが一巡する位の時間しかなかったはずだ。つまり、それだけの時間で二人のライフがここまで削られたということなのか？

「あやや。おーい吹雪さーん」

余りの衝撃に頭が混乱していると、どこからか声を掛けられた。

「こっちですよー」

声のした方を向いてみると、風見ヶ丘さん……先輩がいた。どうやらフリーのようだ。

「いやー奇遇ですねこんなところで会うなんて。隣どーぞ」

「本当に奇遇ですね。二年生はもうフリーですか？　隣はケイに怒られそうなので遠慮させてもらいますね」

そう言って一つ空けて座る。彼女の隣はケイのポジションだ。流石に他人の彼女を口説く気にはなれないさ。

「本選は昼過ぎのようなのでそれまではそうですね～。ああ上級生だからって固くならなくていいですよ」

「ん～そう？　それじゃあそうさせてもらおうかな」

敬語ってやたらと疲れるんだよね。

色々と聞きたいことがあるけど、今一番知りたいのは決まってる。

「風見ヶ丘さんいつからここに？」

「このデュエルが始まった時にはいましたよ」

そう言って視線を向ける先には、デュエルをしている四人の姿。
片方のフィールドには『天空の聖域』と『天空の泉』の二枚のみ。一方その相手となるフィールドにはモンスターが並んでいる。
『双頭の雷龍』と『充電池メン』、『電池メン一単三型』に『カオスマジシャン』がズラリといる。ターンカウントは現在五。つまり丁度一周したということだ。

「……現状の説明、お願いできる？」

「それが記者の仕事ですから」

風見ヶ丘さんの説明は実に分かりやすかった。
最初のターンに原先輩――ちょっときつそうな人――が『双頭の雷龍』を召喚。カードを伏せてターンエンド。
続く優介のターンで天空のカード二枚を発動して『コーリング・ノヴァ』を召喚でターンエンド。ここまでは何も問題なかった。しかし、問題は喜多姫先輩のターン。
喜多姫先輩は『黒き森のウィッチ』を召喚して、手札から『ディメンション・マジック』を発動した。これは自分の魔法使い族がいるときにしか発動できないけど、モンスター一体を生け贄に手札の魔法使いを召喚できる速攻魔法。さらに成功したとき、相手のモンスター一体を破壊できる効果も持っている。
当然効果で『コーリング・ノヴァ』を破壊。効果破壊だから自身の効果も『天空の泉』の効果も使えない。そして『ディメンション・マジック』で召喚されたのは『カオスマジシャン』。攻撃力２４００の上級魔法使いだ。さらにウィッチの効果で守備力１５００以下のモンスターを手札に加えられた。
喜多姫先輩はカードを一枚伏せてターン終了。この時点でボードアドバンテージは完全に三年生コンビに傾いた。
四番手の竜剛院さんの番。彼女は戦闘ダメージを受けないよう、

道連れ効果のある『ボマー・ドラゴン』を守備表示で召喚。さらにカードを三枚伏せてターン終了した。

しかし最後、原先輩のターンでドラゴン族か機械族を洗脳できる『エレクトリック・ワーム』を手札から捨て効果発動。『ボマー・ドラゴン』は奪われそのまま生け贄に。生け贄召喚されたのは『充電地メン』で、召喚されたことで効果が発動。デッキから『電池メン一単三型』を特殊召喚された。

この時点で攻撃力の合計が、『双頭の雷龍』が２８００、『カオスマジシャン』が２４００、効果で攻撃力の上がった『充電池メン』が２７００、『電池メン一単三型』が１０００、総計実に８６００だったという。

「今ライフが残っているのは真理さんのお陰ですね」

風見ヶ丘さんがフィールドを見据えながら呟く。

「真理さんの『ガード・ブロック』が無かったら、『双頭の雷龍』のダメージを０にしていなかったら、今頃決着がついていました」

雷龍の２８００を無効にし、受けたダメージは５８００になる。つまり残りライフは２２００となり、今に至る。

「……僅か一巡で、ここまで大きく動くんだね」

僕は三年生コンビの二人の実力に嘆息した。

「……私は以前、あの二人にインタビューしたことがあります」

その時のインタビューがたまたまデュエルに関することでしてね、と続ける。

「二人にデュエルしてもらい、実戦の臨場感を出して貰ったんですよ」

「……結果は？」

頭の中で警報が鳴り響いている。

聞くな。聞くんじゃない。耳を塞げ。後悔するぞ。

そんな声を、全力で無視して、聞いた。

「……あの二人はデュエルアカデミアでは現在、いえ――」

一言区切り、

「――恐らく、アカデミア史上五指に入る実力者ですよ」

Ｓｉｄｅ：真理

「フフフ……最高よ星華、素晴らしいわ」

目の前の相手、喜多姫さんはとても愉快そうに言った。

僅か一ターンで、私達は完全に相手のペースに飲まれてしまった。

ボードアドバンテージも、ライフアドバンテージも全て。

「からかうなメイ。仕留められなかったのは、リバースカードの警戒を怠った私の落ち度だ」

「そんなことは些細な問題。貴女のタクティクスは一分の狂いも無く完璧よ」

「ふん……」

面白く無さそうに鼻を鳴らす原さん。でも、面白くないのはこっちだ。

私達は手札にある中で、常に最善の一手を出している。無駄を省き、可能な限りシャープな一手。必要なパーツ以外手札に温存し、次の一手を打つために。

しかし、相手はそれを悉く利用してきた。モンスターがいれば破壊、そして洗脳。場に上級モンスターを残しつつ相手の場を乱すその在り方は、はっきり言って次元が違った。

隣に立つ優介さんも、同様のことを思っているらしい。苦渋を飲まされたかのような、苦々しい顔をしている。

私達の場にモンスターはいない。対して相手の場には強力なモンスターが四体。

次の優介さんのターンになんらかの手を打てなければ、それだけで勝負がつく。

「まだ私のターンだったな。私は手札から『死者転生』を発動。手札の『電池メン一単一型』を捨て、墓地の『エレクトリック・ワーム』を手札に加えてターンエンドだ」

手札入れ替えカードを使われ、再び『エレクトリック・ワーム』が手札に加えられてしまった。

あのカードは私にとって天敵そのもの。いくら強力なドラゴンであろうと、コントロールを奪われてしまえばなす術は無い。つまり、私の行動は制限されたも同然。

「……俺の、ターン！　ドロー！」

二度目の優介さんの番が回ってきた。

カードを手札に加えた途端、気難しい顔になった気がした。でもそれは微微たるもので、他の人にわかったかどうか、という位小さな変化。

「俺は……」

手が止まる。この状況を打破できるカードはないかと、探しているようにも見える。

……パートナーが困っているのに、何も出来ない自分がどうしようもなく悔しい。今まですっと、助けられてきたのに。こんな時に役に立たない自分が、本当に嫌いになる。

「……失望したぞ藤原！」

突如、原さんの叱咤が入った。

悩んでいた優介さんは突然の怒号に驚き、顔を上げた。

「私は三年間アカデミアに在籍してきたが、貴様のような軟弱な男は未だかつて見たことが無い！！」

「んなっ……！　い、今はそんなこと関係ないでしょう！？」

当然と言えば当然、原先輩の侮蔑の言葉に優介さんが反論した。

「大有りだ！　貴様の今にも泣きそうな面を見ていると、そのナヨナヨした面を見ているとイライラしてくる！！　そんなにデュエル

が嫌なら、今すぐやめてしまえ！！」

「……！　言わせて置けば好き勝手を……！」

羞恥に染まった顔に、今度は怒りの色が表れる。

今までに見たことの無いような表情に私が困惑していると、原先輩は小馬鹿にするように言う。

「違うのか？　ビクビクしながら相手をされても私達は不愉快なだけだ。いっそ辞めてくれるとありがたいがな」

「この……！！」

『私語は慎みなさい！　今は対戦中だ！』

今にも掴みかかろうかという剣幕の優介さんを止めたのは、今まで黙っていたレフェリーの教師だった。

二人は互いに謝罪しようともせず、改めてデュエルディスクを構えなおした。

「……絶対負けない……俺は、手札から『トレード・イン』を発動！　手札からレベル８の『大天使クリスティア』を捨て二枚ドロー！　そして『ゼラの戦士』（ＡＴＫ１６００）を召喚！　さらにこいつを生け贄に、『大天使ゼラート』（ＡＴＫ２８００）を特殊召喚する！！」

怒涛の勢いで現れたのは以前召喚された大天使。しかし、今はあの時には無かった光を纏っていた。

「『大天使ゼラート』の効果発動！　手札の光属性モンスター一枚

を墓地に送る事で、相手フィールド上のモンスターを全て破壊する！　全てを浄化しろ、ヘブンス・ジャッジメント！！」

放たれる光はフィールド上のモンスターを包み込むかと思われた。しかしそれは叶えられず、一撃の雷がゼラートの身を焼き尽くした。あまりの光景に唖然とする優介さん。対する原さんは、余裕の態度で悠然と構えていた。

「逆上したまま襲い掛かってくるとは、甘く見られたものだ」

そういう原さんの前に映し出される一枚のカード。描かれている絵は、天より落ちた雷を一身に受けるキャノン・ソルジャーの図。そのカード名は、『天罰』だった。

「このカードを発動して、貴様のモンスター効果は無効になり破壊だ」

「……カードを伏せ、ターンエンドです」

渾身の一撃を軽くいなされ、意気消沈する。だがその様子を目にしながらも、喜多姫さんは依然微笑を浮かべながらカードを引いた。

「星華、少し言いすぎでは？」

「私は思ったことを言ったまでだ」

「……ま、気持ちは分からなくもありませんが。私は『ウジャト眼を持つ男』（ＡＴＫ１６００）を召喚しますわ。この子は召喚された時、相手の伏せカードを一枚透視できますのよ。さあ藤原君、貴方の伏せカードは何かしら？」

優介さんの場のカードが表になり、その存在が明かされる。
表になったのは、『聖なるバリア―ミラー・フォース―』

「へぇ……。中々粋な罠を張りますのね」

「ちっ……」

「では厄介になる前に取り除かせていただきますわ。手札より『サイクロン』を発動。当然破壊するのはミラーフォースですわ」

鋭い大きな木枯らしが吹き、伏せカードが破壊される。これで優介さんの場には、守る手段が失われた。

「……全く。もっと冷静に考え、視野を広げれば負けることも無かったでしょうに」

まあもっとも、と喜多姫さんは続ける。

「気付けたところで、勝てるものではありませんが、ね」

高く上げられた手が振り下ろされると同時に、屈強なるモンスターが一斉に私たちに襲い掛かった。

十七／逆鱗と妄想　優介サイド＋α（後書き）

ぐ、グダグダだ……。しかし、二人は出せた！

月「再登場の三年生コンビですね」

一発屋で終わらせたくなかった故の登場です。しかも続く。

月「何気に初めてですね。一話で完結しないデュエルは」

たまにはいいかなと思って……。

月「本音は？」

こうすれば書かざるを得まい……。

月「ザ・背水の陣ってやつですね」

【1．優介と真理が】

二人とも色々考えています。特に妄想娘が。

月「ＦＧＤ出せば勝てますからね。この時代だと」

勝てなくとも、相手が苦戦する事間違いなし。除去を考えないビートダウンの考えが主流のＧＸでは面倒くさい相手です。

月「現実だと超悪用されます。未来融合から青眼とか、真紅眼とか」

……お触れがあったから奈落使えないし、青眼は融合されるし…

…あれは本当にトラウマだった。

【2．タッグのルールが……】

仕様です。特別話の時のようにしたら確実に大暴れします。

月「主にウィクトーリアが。ボマードラゴンが再利用とか悪夢ですね」

ＰＳＰのＴＦルールだと考えて下されば簡単です。

月「どうでもいいですけど、これ絶対ネクロ出てきたらやばいですね」

そだね。攻撃力軽く４０００くらい行くかな？

月「そういう感じの相手は考えなかったんですか？」

自爆特攻の嫌われている時代だからパスした。ついでに言うと決着手が思いつかなかった。

月「所詮作者の低脳じゃこれが限界ですね」

月夜ちゃん、ちょっと向こうで話し合わないか？

【3．吹雪ェ……】

命名ソーセキ。それでいいのか黒猫よ。

月「無知ってのは罪ですね」

シャミの時電波が入ったようです。

月「そういえば、無口な宇宙人の見つけた猫も吾輩口調でしたね」

イメージとしてはそれ。但しこっちのは、黒くてまん丸なあんちくしょう（ビジュアル系）です。もふり度が段違いです。

月「ビジュアル系の元ネタ分かる人何人いるんですか」

……さぁ？

月「……これだから知識幅の狭い引き篭もりは」

貴様！　それは自宅警備員に対する偏見だぞ！

月「黙りなさいオタニート。社会に出て少しは役に立て」

……一応春から学生だから、ニートじゃないもん……。

【4．三年生コンビが！？】

メイ・喜多姫、ドS説浮上。

月「やばいですね。女王様系ですか」

一応案としてはあった。まさか使う日が来るとは思ってなかったけど。

月「それにしても強いですね。アカデミア史上五指に入るとか……その設定いるんですか？」

正直不明。とりあえず強いって知ってもらえればいいかと。

月「ところで早乙女さんは原先輩には勝っているんですよね。そこら辺の力関係はどうなんですか？」

あの時は運が強く働いたから勝てた。あのデッキに普通ワンダー

クローバーは入れないって。
月「そういえば、クローバーといいウジャト眼の男といい、普通入れないようなカードが出てきますね？」
　デュエルシーンは大まかな設定はありますが、殆どはその場のノリです！　なんか演出上格好良いんじゃね？　ってカードを使ったらこうなりました。
月「要するに適当だと」
　……あ、いや、一応普段使われ無さそうなカードを使うって自分ルールに則ってます。知名度が低いとか、使いどころの難しいカードとか。
月「メジャーなカードって使われないですね」
　ガチカードの試合を見て楽しいか？
月「召喚、奈落、魔宮の賄賂、神宣。ライボル、大嵐、攻撃、ミラフォ……やばいですね。結果が見えた試合ほどつまらないものは無いですね。ミラフォは破壊されるもの」
　意外なカードが活躍する。それが遊戯王の面白いところ。ガチなスタダやブリュ、攻撃力インフレなゴヨウとかお呼びじゃないのだよ。
月「でもクローバーは無しでしょう」
　あれは反省してる。もっと上手いやり方があったはずなのに……。

【5．次回は？？】

　さて次回予告です。
月「窮地に追いやられた二人。果たして逆転の目はあるのでしょうか」
　次回、『激情と勝敗』。お前の魂（カード）、いただ……いちゃダメ！？
月「死神と鎌職人は出てきません。念のため」

２０１１／０４／１４　修正

十八／激情と勝敗　優介サイド？（前書き）

自重なんてしないいいいい！
ケイ「もしもし……ええ、レスキューキューロイドを一台。それからメンタルカウンセラーリリーの手配を……」
人を危ない人みたいに扱うな！
ケイ「……え？」
なにその「え？」は。
ケイ「いきなり叫ぶとか痛い人以外の何者でも無いと思うのだが」
……前半シリアス風味で後半暴走します！　自重なんてしません！
ケイ「補足するとこの小説のコンセプトのひとつは『暴走』です。主に作者の頭の」
やかましい。てなわけで『シリアスかと思ったらギャグ入ってんじゃねーか！』と感じられるかと思いますが、御容赦ください。ではどーぞ！
吹雪「シリアスなんて投げ捨てるもの！」
でしゃばるなブッキー。

十八／激情と勝敗　優介サイド？

Ｓｉｄｅ：優介

迫り来る攻撃の中、僕は考えていた。
どこで間違えたんだろう、と。
手は完璧だった。自分の手札の中で、繰り出せる最高の一手を打った。これ以上他のカードを使ったとしても、蛇足にしかなり得ないほどだった。
なのに。

――負ける。

眼前を白く染める、モンスターの攻撃に対し、俺はなす術も無かった。俺のフィールドに、モンスターは存在しない。防ぐ罠だって、無い。
何故だ。
どうして。
なんなんだ。
わからない。答えは見つからない。
ここまで勝ち上がってきたのに、ここで、最後で負けるのか？

「――リバースカード、発動！」

膨張するエネルギーの塊が、一声の下発動されたカードによって塞き止められた。
否、塞き止めた、ではなく、邪魔が入り着弾した、といった方が正しい。
そのモンスターは、俺もよく知っているモンスターだったから。

「――永続罠『血の代償』を発動し、『仮面竜』（ＤＥＦ７００）を召喚させてもらいました。これにより『双頭の雷龍』（ＡＴＫ２８００）の攻撃は仮面竜に着弾。破壊され、新たな仮面竜がデッキから特殊召喚されます」ＬＩＦＥ１９００　↓　１４００

以前の実技試験で真理の召喚したリクルートドラゴン。それが俺達の前で壁となっていた。

「ふぅん……。しぶといですわね。残り僅かなライフまで払って、献身的なことですわ」

喜多姫先輩は何がおかしいのか、愉悦に満ちた声で言った。召喚した真理は喜多姫先輩を睨みつけるだけで、何かを言う気配は無い。

「だんまり、ね……。まあいいわ。バトル再開よ」

攻撃の終わった雷龍は一歩下がり、攻撃の残っているモンスターは一歩前へ出る。

残っているモンスターは実に四体。それを全て、このターンで捌けるというのか。

「『電池メン一単三型』（ＡＴＫ１０００）で攻撃よ。もちろん対象は仮面竜――まあそれしかいませんが」

皮肉めいた言葉と同時に電撃がドラゴンを直撃する。しかし、また同じ姿で召喚された。

「……戦闘破壊されたことで、三体目の仮面竜を特殊召喚です」

「『ウジャト眼を持つ男』（ＡＴＫ１６００）で攻撃よ。消えなさい」

フードの男の額に描かれている眼が光り、仮面竜が苦しみだした。おの苦しみはやがて絶頂に達したのか、苦悶の声を上げながら破壊された。

「……っ、効果で、『軍隊竜（アーミー・ドラゴン）』（ＤＥＦ８００）を特殊召喚します！」

「本当、次から次へと厄介ね。『カオス・マジシャン』（ＡＴＫ２４００）、消しなさい」

杖の先から念導力によって生み出されたエネルギーが球状になり、軍隊竜を破壊した。

「う……ぐっ、あ、『軍隊竜』が戦闘破壊されたとき、デッキから『軍隊竜』を特殊召喚します！」

「いい加減鬱陶しいわ。攻撃なさい『充電池メン』（ＡＴＫ２４００）」

相手の最後のモンスター、充電池メンの攻撃により、軍隊竜は呆気なく破壊された。

「ぐ……ぁ……。こ、効果で、『軍隊竜』を特殊召喚します……」

「……こちらは終わりね。カードを一枚伏せて、ターンエンドよ」

……凌いだ？　あの攻撃を？

暫し、突然の出来事に思考を奪われる。だが、回復するまで長い時間は要しなかった。

「藤原！」

原先輩が呼んだからだ。

「今のをよく見たか」

「……はい」

呆然としながら、生返事を返す。しかし先輩はそんな俺の返答に満足したのか、大きく頷いた。

「今のを忘れるな。絶対にだ」

Ｓｉｄｅ：吹雪

「……凄いね彼女は。二枚で全部防いだよ」

「ドラゴン族は重いカードが多いですからね。事故を防ぐための措置でしょうが、こんなところで使うとは思っていなかったでしょうね」

「特殊召喚を巧みに使った上手い戦術だね」

ライフがあれから５００減ったものの、それすらも些細な問題。大事なのは、再び竜剛院さんの番が回ってきたという事だ。

「けど流石に厳しいんじゃないかな。相手は五体、対して二人の場には一体。残ったモン歌―を生け贄に上級モンスターを召喚できたとしても、不利な事には違いない」

「……いえ、まだ分かりません。真理さんにはあのカードがありますから」

「あのカード？」

「……『龍の鏡（ドラゴンズ・ミラー）』ですよ」

「……なるほどね」

墓地のモンスターを素材にドラゴン族モンスターを融合召喚する、ドラゴン専用の融合。確かにそれがあれば、この危機的状況をひっくり返すことが出来るかもしれない。

だけど、僕は不安だった。

「状況を一転させるためには、あのモンスターしかいない。けれど、彼女がそれを使うかな……」

「……こんなときです。使わなければ、負けますよ」

周りの人間が悉く忌み嫌った竜、『F・G・D（ファイブ・ゴッド・ドラゴン）』。彼女が今までのことを乗り越え、召喚できるかどうか、それがこのデュエルの鍵になってくる。

しかし、問題はそれだけじゃない。

「風見ヶ丘さん。喜多姫先輩の伏せカード、気にならない？」

「ええ。さっきから使う気配がありませんね」

優介がゼラートを召喚したときにも、発動する素振りを見せなかった。ということは召喚時に発動されるものじゃないことは分かる。残るのは特殊な状況下において効果を発揮するタイプ、それか攻撃時に効果を発揮するタイプ。もし二枚の伏せのうち、どちらかでも破壊系だったら、たとえ最強の竜を出しても場を好転させることは出来ない。

「あれがミラーフォースとかだったら、本格的にやばいね」

「はい。藤原さんの様子がおかしい今、確実に負けるでしょう」

……全く、女の子に任せっきりなんて、男の風上にも置けないな。

「ですが」

「うん？」

「真理さんは、勝負を諦めていません」

その言葉に、竜剛院さんを見る。その瞳には、今なお消えることのない炎が宿っているように見えた。

なるほど、これは……。

「ひょっとしたら」

「ひょっとします、ね」

そして場は動き出す。眠っていた魔獣が、大きく咆哮するときを待っていた。

Ｓｉｄｅ：優介

「私のターン、ドロー！」

……わからない。何故なんだ。

何故真理はこんな状況なのに、こんなに――、

「私は『強欲な壺』を発動！　デッキから二枚ドローします！」

――こんなに、楽しそうなんだ。

「優介さん」

新たにカードを引いた真理が、俺の方を向いた。その顔は、笑っていた。

「私、使います」

その言葉に、俺はどんな反応をしたのだろう。

笑った？　怒った？　泣いた？　驚いた？　――否、ただなにも出来ず、呆然としていた。

「……どういう、こと？」

停止する思考の中、苦しくも紡いだ言葉はそれ。意味の分からな

い言葉に――この時点で、とっくに理解していたのに――説明を求めた。
それでも真理は、笑顔だった。
「もし私が溺れたり、迷ったりしても、絶対に助けてくれるんでしょう？」
真理は相手と相対し直し、宣言した。
「魔法カード『龍の鏡』を発動します！」
Ｓｉｄｅ：絢
「魔法カード『龍の鏡』を発動します！」
私達が思ったとおり、真理さんは融合カードを発動した。しかしその顔に、苦悩する色はない。
「墓地に存在する融合素材となるモンスターを除外し、ドラゴン族の融合モンスターを特殊召喚します！　私の墓地には『仮面竜』三体と『軍隊竜』二体がいます。これらを除外して――、」
フィールドに現れては、現れた大きな鏡の中へ吸い込まれるように消えていくドラゴン達。
一体目が入ると、鏡は大きく波紋を残した。
二体目が入ると、大きく揺れ。
三体目が入ると、歪にゆがみ。
四体目が入ると、鼓動を始めた。

ドクン、ドクンと鳴り響く心音の中、最後の一体が入る。
鳴り響いていた鼓動は静まり、刹那の静寂が招かれる。
しかし、それはすぐに訪れた。
空間が割れるんじゃないか、と思えるほどの振動が鏡を中心に起こり、徐々に大きくなっていく。
鏡面には罅が入り、吸い込まれた五体のドラゴンが、罅の数だけ増殖する。
やがてひび割れた鏡は存在する事が危ぶまれ、崩壊を始める。
叩きつけたような、甲高い音が鳴ると同時。
「――降臨せよ！　『Ｆ・Ｇ・Ｄ』（ファイブ・ゴッド・ドラゴン）（ＡＴＫ５０００）！！」
封印されし魔竜が、その身を大きく震わせた。
『ＧＩＩＩ「ＩＩｉ：ｉｉ［ｉｉａａａ〔ａａａ〈ａａａａａａ』ａａａａａ」ａａａ」ａＡＡＡＡ」ＡＡＡＡ！！！！！！！！！！！！〉
不気味な不協和音を奏で、再臨した事に歓喜の咆哮を上げる。
王者のみが放つ、本物の威圧感。それが今、目の前に存在した。
「……怖いね」
「あやや。王（キング）ともあろう方が、尻込みですか？」
茶化してはいるものの、私もそう思った。
五本の首には、デュエルモンスターズの六属性の内の五属性が揃っている。
何事をも焼き尽くす、火。
あらゆる物を粉砕する、地。

あまねく力を受け流す、水。
邪魔立てる全てを吹き飛ばす、風。
そして、世界すらも飲み込む、闇。
倒せるのは、その全てを等しく照らす、光のみ。
正真正銘の化け物。それを目の前にして、怖くないはずがない。

「……ついに出たか。貴様等の最強のしもべが」

「ええ。『Ｆ・Ｇ・Ｄ（ファイブ・ゴッド・ドラゴン）』の攻撃力は５０００、どんなモンスターであろうと、そう易々と太刀打ち出来ません」

「……しかも星華は『天罰』のコストとして、『エレクトリック・ワーム』を墓地に落としてしまっていますわ。次のターンに奪われる心配も無し、ですか」

先程のターン、やむなしと言えどあのカードを手放したのは、こちら側からしてみれば僥倖だった。でなければ次のターン、確実に奪われ、負けていただろう。

「……まだです。私は『軍隊竜』を生け贄に、『マテリアルドラゴン』〈ＡＴＫ２４００〉を攻撃表示で召喚します！」

最上の素材の名を冠するドラゴン。その効果は、あらゆる破壊から身を守るもの。これで相手の伏せカードがどんなものであろうと、臆することなく攻撃できる。

「へえ。上手い対処法だ。これなら殆どのカードが封殺できる」

「ええ。それにあのドラゴンは、効果ダメージを回復に変える効果もあります。万が一バーンカードでも、恐れる事はありません」

以前の取材では、そんなカードなかったんですが、ね。
これで対策はほぼ万全。あとは攻撃するのみ。
たとえなにがあったとしても、私達にできるのは、ただ見守る事だけなのだから。

Ｓｉｄｅ：優介

真理が覚悟を決めて召喚したというのに、俺はまだ呆然としていた。
この心境を象っているものは、たったの二文字。

なぜ。

なぜ、召喚できたのか。
なぜ、あんなことを言ったのか。
なぜ、――笑っていられるのか。

「……いきます！　対象は『ウジャト眼を持つ男』（ＡＴＫ１６００）！　『Ｆ・Ｇ・Ｄ（ファイブ・ゴッド・ドラゴン）』（ＡＴＫ５０００）の攻撃！」

五頭を持つ巨大な竜は大きく口を開き、力を蓄え始める。
やがてそれは大きな光となり、小さな獲物へと放たれた。

「――アブソリュート・パワーフォース！！」

収束された熱は寸分違わず、非力な身体を蒸発させた。

「……ふぅん。ようやくまともになってきましたわね」ＬＩＦＥ８

０００　↓　４６００

ライフの半分を削られたというのに、それでも愉しそうに喜多姫先輩は笑った。

「……メイ。その笑い方はよせ」

「あら酷い。これもわたくしのアイデンティティというものですのに」

「おかしな奴だ」

横目で批難する原先輩だが、その顔には本当の批難の色はない。

「『マテリアルドラゴン』（ＡＴＫ２４００）で、『電池メン一単三型』（ＡＴＫ１０００）に攻撃！」

「……かすり傷ですわね」ＬＩＦＥ４６００　↓　３２００

「……私はこのまま、ターンエンドです」

このターン、俺達が、いや真理が優位に立ったのは間違いない。ＦＧＤによる暴力的な力、マテリアルドラゴンによる破壊封じ。どちらをとっても、場を優勢にするだけの力がある。

「私のターンドロー！　……藤原。今一度言うが、私はお前ほど軟弱な男は見たことがない」

「……！　まだ、言いますか……！」

再度吐かれた言葉に、脳が沸くのが分かる。だけど、自分でも止められない。いや、自分だからこそ止められない。

「だが、これは私の主観だ」

「どういうことですか」

「それはお前が気づく事だ。だが、そうだな。年長らしくアドバイスでもしてやろう」

相変わらずの上からの物言い。沸騰する頭を必死に抑え付け、原先輩の言葉を待った。

「なに、難しい事じゃない。ただメイの言った事をよく考えろ。それだけだ」

「……喜多姫先輩の、言った事？」

「……私は、場のモンスター全てを守備表示に変更！　ターンエンドだ！」

話は終わったとばかりに宣言する原先輩。威嚇の如く攻撃態勢をとっていたモンスター達が、一斉にそのなりを潜めた。しかし、最強の暴竜の前に萎縮した様子は見られない。

原先輩のエンド宣言から暫く、俺は先輩の言った言葉を思い返していた。

（喜多姫先輩の言った事……。言ったのは『自分も出さざるをえない』『原星華のタクティクスに一分の狂いもなく完璧』……いや違う。俺達、俺に関係する事……。となれば、『彼女のアイデンティ

ティ』……いや、『ようやくまとも』？　……違う、それより前になにか……）

俺は一体、どれくらいの時間考えているんだろう。一時間？　二時間？　もしかしたら、数秒にも満たないかもしれない。ほんの一瞬かもしれないし、悠久の時を費やしたかもしれない。

考えに没頭する俺に対し、ギャラリーにいた生徒達が騒ぎ出した。

『いつまでそうやってんだよ！』

『早くしろ！　待ちくたびれたんだよ！』

『さっさとサレンダーしちまえ！　この臆病者！』

口々に騒ぎ立てる生徒達。だけど、俺の耳には入ってこない。語調は荒く、エスカレートする。

『どうせ勝てないんだ！　さっさとヤメロ！』

『そうだ！　諦めて負けちまえ！』

『見てて鬱陶しいんだよ！　さっさと消えろ！！』

何も言い返せない。言い返さない。

喜多姫先輩はなんと言った？　自分達に、自分に向かって何を言った？

……考える……冷静……視野を、広げる……。

「黙らんか貴様等ァ！！！！」

まとまりそうな意識の中、突然響いた大音量で強制的に現世へと呼び戻された。

以前聞いたことのある懐かしさ、そして既視感が頭の中でフラッシュバックした。

「さっきから好き勝手言っているが、負けろ！？　ヤメロ！？　ふざけるのも大概にしろ！　もう終わるのではない、これから始まるのだ！！　その第一歩を、当事者でもない貴様等が愚弄するんじゃない！！！」

騒ぎ立てていた観衆は、原先輩の言葉で並一つ立たぬ湖面のように静まり返った。

さながら以前の実技試験をより身近に感じたような静けさ。

……ひょっとしたら、ケイは原先輩の従姉弟かなにかで、この異様な迫力が先祖代々から受け継がれているのかもしれない。

だけど、先輩の怒号でばらばらになりかけたアドバイスが一つに固まった。

「……その顔は、気付いたようだな」

いつのまにか向かい直した原先輩が、笑っていた。

……女性の癖に、どこまでも男らしい人だな。

そう思ったのは、俺だけの秘密だ。

「気づかせた事、後悔しても知りませんよ？」

「誰がするか。後輩を正しい道に連れ戻すことも、先輩としての役目だ」

喜多姫先輩が言っていたこと。それは『視野を広く持て』ということ。

視野というのは、自分のフィールド・手札のみならず、相手・パートナーを含む全てを見るということ。

そして俺達の場には、ＦＧＤにマテリアルドラゴン、そして真理の残してくれた血の代償に伏せカードが一枚。

自分だけに頼ったら絶対に無理なこの状況。だけど俺は今、一人じゃない。パートナーが、真理がいる。

二人が言いたいこと。それは、なんとなくだけど伝わった。

「俺の、ターン！　……ドロー！！」

引いたカードは、最高の一手。いや、至高ともいえる。

全てはこの引きに懸かる。

「『強欲な壺』を発動！　カードを二枚ドロー！」

正真正銘最後の引き。俺の手が引いたのは、ニ体のモンスターだった。

「俺は、『阿修羅（アスラ）』（ＡＴＫ１７００）を攻撃表示で召喚！」

三つの顔に六本の腕。六道の一つの名を冠する天使が舞い降りた。

悲哀の相。楽観の相。憤怒の相。それが今は全て、笑って見える。

そして今、修羅は大蛇の力を得る。

「今こそ使う！　リバースカードオープン！　『受け継がれる力』

発動！　自分の場のモンスター一体を生け贄に、その力を別のモンスターに継承する！」

「ほう……？　ここまでしたんだ。今更間違えることはあるまいな？」

不遜な態度で原先輩が問いかける。もちろん、今更考えを覆す気はない。ないけど、俺は聞かなければいけないことがある。

「真理」

「……はい」

阿修羅を引いたままではいい。だが、他のカードは全て真理のものだ。

否定されれば、それだけで全て崩れる。そして俺は、否定されればその通りにしようとも思っている。

それでも、俺は聞いた。

「力を、貸してくれ」

「……はい！」

力強く、頷き返してくれる真理。

これでようやく、いや改めて、俺の腹は決まった。

「……修羅の名を持つ天使よ！　暴虐の竜の魂を、その身に宿らせよ！　アビリティ・インハート！！」

荒れ狂う暴君の魂は昇華し、仏の道を守護せしめる修羅へと宿る。

荒々しい闘志を身に宿らせた武神は、開放の時を待つのみだった。

「……ちょっと不味いかしら？」

「これも貴女方のお陰です。諦めてください」

阿修羅にＦＧＤの攻撃力が加算され、その数値は実に６７００となった。

さらに阿修羅は、ただの天使ではない。

「行きます！　『阿修羅』の攻撃！」

六本の腕をゆっくりと動かし、円を作るように回す。

やがて型が決まったところで動きは止まり、また、動き出す。

「――受けよ、修羅道百烈拳！！」

全ての敵に肉薄した阿修羅は、その腕を止めることなくまさしく修羅の如く奮い続けた。

殴り、殴り、殴り、殴り、殴り、殴り、殴り、殴る。

止まる事を知らなかった腕は、数秒後にようやく止まった。

そして阿修羅が振り返るとともに、一言発す。

『お前たちは既に、死んでいる』

僅かな揺れとともに、モンスターは全て爆散した。

これが阿修羅の能力。全ての敵に攻撃する、まさに鬼神に相応しい力だった。

「へぇ……。たった一ターンで、全滅させたか」

「これで障害はもうない！　『マテリアルドラゴン』（ＡＴＫ２４００）のダイレクトアタックだ！」

光り輝くブレスを放ち、直線で相手プレイヤーへ向かう。

そこで、喜多姫先輩が動いた。

「……本当なら使いたくないのですが。ただやられるだけ、というのも嫌ですわね。罠カード『魔法の筒（マジック・シリンダー）』を発動しますわ」

突然現れた二つの筒。その片方にブレスは吸い込まれ、もう片方からは入ったブレスが射出された。

しかしそれは俺に当たる前に、マテリアルドラゴンから発せられたオーラによって浄化の光へと変わる。

「相手の攻撃を無効にして、その分のダメージを与えるカード。しかし……」

「ええ。『マテリアルドラゴン』はアンチバーンモンスター。効果ダメージであるなら、なんでも回復に変わってしまう。よって攻撃力分の２４００のライフを回復してもらいますわ」

どう考えてもデメリットしかないはずなのに、喜多姫先輩は余裕の笑みを浮かべながら効果を受け流した。ＬＩＦＥ１４００　↓　３８００

「俺は……これ以上、なにも出来ません。スピリットモンスターの『阿修羅』を手札に戻し、ターンエンドです」

「ならばその時に『奇跡の残照』を発動しますわ。このターン戦闘

によって破壊されたモンスターを一体、即ち『カオス・マジシャン』を蘇生よ」

墓地より蘇ったのは、マテリアルドラゴンと同じ力を持つ魔術師。だが、蘇生させるなら何故攻撃力の高い『双頭の雷龍』にしなかったんだろう。

その理由は、すぐに知ることになった。

「わたくしのターン、ドロー。……藤原君、真理さん。よく頑張りましたね」

突然離し始める喜多姫先輩。その表情には、慈愛が表れていた。

「努力に免じ、わたくしの切り札でお相手しますわよ。墓地に眠る光と闇、『サンダー・ドラゴン』と『黒き森のウィッチ』をゲームから除外。『カオス・ソーサラー』を特殊召喚します！」

「あ……」

真理の口から、空気が漏れるように声が零れた。

カオス・ソーサラー。その力は聞き及んでいる。

「効果は……その様子だと知っていますわね。表側表示のモンスター一体を、問答無用で次元の壁に閉じ込める力を」

マテリアルドラゴンは破壊にこそ万能の力を持っている。しかし、それはあくまで破壊。直接除外するソーサラーには、あまりにも非力だ。

「消えなさい、『マテリアルドラゴン』」

カオスソーサラーが何かを唱え、次元の裂け目が現れる。
それは徐々に引力を増していき、抗う竜を容赦なく吸い込んで閉じた。

「更にわたくしは『ヂェミナイ・エルフ』（ＡＴＫ１９００）を召喚。これで攻撃すればわたくし達の勝ち。……しかしそれはわたくしの望むところではありませんわ」

勝負は決したにも関わらず、喜多姫先輩は続ける。

「わたくし、言いましたよね？　切り札でお相手すると」

妖美な笑みを浮かべる喜多姫先輩。今までに見た愉しそうな顔に比べると、年相応の可愛らしさが垣間見えた気がした。

「レベル６の『カオス・マジシャン』、同じくレベル６の『カオス・ソーサラー』。この二体を生け贄とし――」

二人の魔術師が光渦巻くのエネルギーへと変わり、フィールドに混沌（カオス）が出現した。やがてエネルギーは飽和の時を迎え、徐々に形を形成していった。

「――現れなさい。最高位魔術師、『一黒の魔法神官《マジック・ハイエロファント・オブ・ブラック》』（ＡＴＫ３２００）！」

フィールドに降り立った漆黒の魔法使い。神官の出で立ちを髣髴させる気高さが、全身からオーラとしてにじみ出ていた。

「――お行きなさい、モンスターで総攻撃。黒・魔・導・烈・波（セレスティアル・ブラック・バーニング）！

！」

……力は出し切った。それでも敵わずに、負けてしまった。

圧倒的な力の前に、なす術もなく倒される。

なるほど。こんな負け方も、たまにはいいかもしれない。

なによりも、――――こんなに気持ちの良いデュエルは、初めてかもしれない。ＬＩＦＥ３８００　↓　６００　↓　０

……負けた、か。

無理もないだろう。相手をした三年生の二人はアカデミア屈指の実力者だ。勝てば重畳だったが、負けたところでこれだけのデュエルをしてくれればさしたる問題はない。

これで天上院、藤原は決まった。残るは早乙女と丸藤だが……既に私の手引きした生徒は、両者のブロックには残っていない。あの二人の実力ならば、本選まで勝ち残るだろう。

「いやぁ。実に素晴らしい試合でしたね」

「……ええ。互いに全力を出した、実に見応えのあるものでした」

鮫島校長は未だに私の計画には気付いていない。いや、とっくに気付いているかもしれないが、なにも干渉してこないところをみると暫くは問題ないだろう。

……だが油断はできない。計画は最後の結果を見るまでが勝負だ。これだけ多くのデュエリストが戦ったのだから、溜まったデュエルエナジーも多大なものになるに違いない。

私の計画は一気に縮まった。失敗は許されない。

「この度の提案は、実に手ごたえのあるものとなりましたね田中先生」

「ええ。こんな老いぼれですが、役に立てたようで何よりです」

「老いぼれなんてとんでもない。創立当初の若輩の私を導いてくれたのは先生ではありませんか。自分をもっと上げてください」

「そう言って頂けると嬉しいですな。ホッホッホ」

……。

数奇な運命を巡る輪は、少しずつ歪に欠け始める。

誰も気付かないほど、ゆっくり、ゆっくりと。

十八／激情と勝敗　優介サイド？（後書き）

さあ黒幕の正体明らかになりました。
月「やっぱりグダグダですね」
最近ラスト近くを書くと勢いに任せる気がしないでもない……。
月「飽きられないように精々足掻きやがってくださいよ」

【1．負けたか……】
月「負けてしまいましたね」
アカデミア史上五指に入る実力者二人に勝てるとか、そんな幻想はなかった。
月「決まるまで視点がコロコロ変わって読みにくかったんじゃないですか？」
でも心理描写とか鍛えないとだし……。こうでもしないと二人が空気に……。
月「さりげなく出す技術持たないでなにが作者ですか。そんなんだから作者は赫鎌なんですよ」
月夜ちゃん。そりゃどういうことカナ？　カナ？

【2．長老ー！？】
笑顔の裏にはどす黒い陰謀が。
月「人を見かけで判断してはいけないということですね」
学校にもいたよ。イケメンなのに絵が超独創的な人が。
月「人は中身って言いますからね。というわけで私はちょっと用事を思い出したのでこれで……」
待てぃ。残念ながら女子寮は鍵がかかっておるぞ？
月「そんな！？　それじゃあ先輩のベッドに潜り込んで夜中寝静まったところを襲う計画が立てられないじゃないですか！」
こういう奴がいるから閉まってんの！　自覚しなさい！

【3．FGD解禁！】
　トラウマ克服。
月「安直過ぎませんか？」
　……大丈夫！　きっと！
月「大体受け継がれる力なんてよくまあ都合よく……」
　それはパワー補完用に。一体じゃ倒せないけどって状況がよくあるし。
月「パワー60000オーバーの全体攻撃って鬼畜ですね」
　キメラテックさんに謝れ。あの御方は単体で二万を越すぞ！？
月「リアルで使ってるように？」
　え、ああ、うん。魔法再生でリミッター解除使えばマジデヤバイヨ。貫通あれば鬼。

【4．さあ懺悔の時間だ】
　完全なギャグパートだったら「ホアタタタタ！」ってやらせたかった……。
月「何気に阿修羅さん喋ってますね」
　海馬コーポレーションの技術ならコレくらいやってくれるはず。
そうでなくともみんなの心の中にはこの台詞が呟かれたはず。
月「まあ所詮は作者の妄想ですね」
　うっさい。世紀末覇者はロマンだ！

【5．次回予告だべー】
　次回は……どうしよ。甘い話が書きたいー。でもプロットがー。
月「ストックも無しとは余裕ブチかましやがりますね」
　いや、あの！　そう！　次回は久しぶりに主人公出す！　ケイの話にする！
月「丸藤さんも出てませんが」
　……亮も出す！　いっそのことみんな出しちゃう！

月「だから畳めない風呂敷は」

　では次回『不安と衝動』！　明日に向かって全速全進ＤＡ☆

月「……こんな作者（馬鹿）ですが見捨てずに見守っていただけたら幸いです」

※２０１１／０５／１７　修正

十九／不安と衝動　ケイサイド＋α（前書き）

だいぶ遅れて申し訳ございませんでした！
月「……読者のみなさんに説明しなさい」
はい！　新学期始まってまともな授業が始まり課題も出て時間的余裕がなくなり果てには近所の祭りの手伝いに駆り出されるなど実に多忙で……。
月「簡潔に」
モチベーションが上がりませんでした！　申し訳ございません！
月「遅れた分、他の作品を見て回ってたのでクオリティに期待できるかどうかはわかりません！　でもインスピレーションは結構受けたので、多少は良くなったと……思いたい。
月「断言してください。では何度も消した第十九話、どうぞ」

十九／不安と衝動　ケイサイド＋α

「デュエルは精神論の一種だと思うんだ」

「そうか」

「感情が高ぶると同時に頭の回転数が上がり、手札、デッキ、墓地、除外、相手の全ての手を瞬間的に把握し、持ち得る最高の手を打つんだと考えている。例えるなら、回転数が８００ｒｐｍｓだったところが３６００ｒｐｍｓになるということだな」

「つまり？」

「感情の高まりにより多量の脳内麻薬の分泌、それによって恐怖や不安の感情を一時的に失い――」

「本音は？」

「代わってくれ」

「ダメだ」

亮に内心「前置きが長い」と思われようがなんと思われようが、俺は避けたい。次の試合をなんとしてでも。

さて、俺こと早乙女ケイがどうしてここまで必死になっているかと言うと、代表決定予選の決勝戦の相手が非常に厄介であるからだ。

なにが厄介かと聞かれれば多数ある。

まず、引きの強さ。

ほとんどの確率でここ一番のカードを引き当てる。それはもうコ

イツ仕込んでいるんじゃないか？　そうじゃなかったら予知能力でもあるのか、と言いたくなるほど絶妙なタイミングでカードを切ってくるのだ。バカだが。

次に、タクティクス。

別に超ドローとか超鉄壁だとか、そんなトリッキーなものじゃない。ただ純粋な、パワー勝負。ただそれが元々のパワーではなく、あらゆる手を駆使しての得た力だから、簡単に崩すことができない。バカだが。

最後に、どこまでも直進的な精神。

亮がよく「相手をリスペクトする決闘」と言っているが、それに似たものがある。誰が相手でも、どんな相手でも全力でぶつかる様子は感動すら覚えるかもしれない。本当にバカだが。

結論を言おう。それはとっても簡単なものだ。なによりもわかりやすい言葉で例えるなら、そう。

「めんどくさいんだ！」

「知らないな」

一蹴された。

いや、決闘が面倒くさいんじゃない。相手が面倒くさいだけだ。なにが面倒くさいかといわれると、言葉にできない。

『これよりBブロック決勝を始める。出場者はデュエルリングへ上がるように』

「呼んでいるぞ？」

「代わってくれ！」

「さっさと行け」

足蹴にされた。背中を軽く蹴られた俺はよろめいてしまい、その勢いでデュエルリングへ上がってしまった。

恨めしく思いながら、怨念の籠った目で亮を見る。当の本人は既に観客席に座っており、我関せず、というより面白いものが見られるというような顔でこちらを見ていた。

上がってしまった以上、覚悟を決めるしかないだろう。非常に嫌だが、やるしかない。

俺は諦めて、相手の顔を確認した。

「よう早乙女！　ひっさしぶりやなぁ！　中学以来やったかのぅ！」

即座に目を逸らした。

しかし相手はそれに気づかず、話続けてくる。

「なんやお前もここにはいっとったんやなぁ！　黙っとるなんて薄情なやっちゃなぁ。そや、レイちゃんは元気か!?　あの子はもぅちっこい頃から別嬪になると確信しとったけどなぁ……」

「よし殺す。今決めたぶち殺す。レイの名を気安く呼んだ貴様を塵芥と化すまですり潰しサメの餌にしてやろう」

目の前のバカの言葉で、俺のリミッターは容易く解除された。なんというか、もう、あれだ。

「おぅおぅケチなやっちゃなぁ。ええやないかそんくらい。で、どうなんや実際？　大きぃなったか色んなトコ♪」

「遺言はそれだけか。ならば遠慮なくすり潰してやろう」

『そこの二人。そろそろ始めるから構えなさい』

チッ。殺りそこねた。大人しく構えると、相手も同様に構えた。

『では互いに用意はいいな？　――試合開始！』

「「デュエル！！」」

早乙女ケイ　ＬＩＦＥ４０００
根脇情二　ＬＩＦＥ４０００

「先攻はワテが貰うで。ドロー！」

嗚呼、始まってしまった。勢いで乗せられたが、激しく後悔させられる。

この根脇という男、先に言った通りバカだがデュエルの腕は良い。本当にバカだが。バカだが！

はてさて、どうして俺がここまでコイツをバカ呼ばわりするのか。それは。

「いよっし行くで！　ワテは『超熱血球児』（ＡＴＫ５００）を攻撃表示で召喚や！」

真っ赤な野球のユニフォームに帽子。バットを持って立っている姿は、強スラッガーの面影すらある。

このモンスターが出てきたことで、周囲の生徒は根脇のデッキを理解しただろう。

「さらにフィールド魔法『バーニングブラッド』を発動や！」

辺りが活火山のふもとに変わった。奴の背後に見える巨大火山にはマグマが吹き零れている。

「このフィールドは、炎属性のモンスターの攻撃力が５００アップするんや！　見てみぃ熱血球児の目ぇを！　根性漲ってきたでぇ！！」

そう。こいつのデッキは炎デッキ。とことん攻撃力を上げて、殴りかかる。一見すればただそれだけだが、ローパワーが主流の俺からしてみれば脅威に他ならない。

だが、そんなものはどうでもいい。俺が戦いたくない直接的な要因にはなり得ない。

俺が嫌がるのは、他にある。

「さらに一枚伏せてターンエンドや！　さぁ早乙女！　もっと熱くなるんやぁ！！」

この暑苦しい根性が、大っ嫌いなんだ！

なにかと言えば根性根性熱くなれだのなんだの……。この暑苦しさが鬱陶しい。本当に鬱陶しい。しかも諦めるということを知らないから余計に質が悪い。というか、うざい。

「俺のターン、ドロー！　……さっさと終わらせてしまおうか。『逆巻く炎の精霊』（ＡＴＫ１００　↓　６００）召喚！」

毎度お馴染みの切り込み隊長が現れた。但しこいつも炎属性。即ち、攻撃力が５００アップする。

「上手いこと絡ませよったなぁ。せやけど、熱血球児はフィールド

の炎属性の数だけ攻撃力が１０００アップするんや！　炎の精霊は当然炎属性！　よって熱血球児の攻撃力は２０００や！（ＡＴＫ１０００　↓　２０００）」

「いくら攻撃力が上がろうが、使えるものならなんでも使わせてもらおう。魔法カード『ダブルアタック』を発動！　自分のモンスター一体のレベル以上のモンスターカードを手札から墓地に捨て、このターン二回攻撃の権利を得る！　俺はレベル６の『偉大魔獣ガーゼット』を捨て、『逆巻く炎の精霊』（ＡＴＫ６００）はこのターン二回の攻撃が可能となる！」

「ほっほぅ、えらい厄介やなぁ。やけど、中学の頃はそいつに散々苦汁を飲まされたさかい、対策は万全や！　かかってこんかい！」

相変わらず一直線で暑苦しい。しかしこいつは理解しているのだろうか。自分で墓穴を掘っているということが。

「ああ存分に攻撃してやるとも。だが、その前に――その伏せカード、邪魔だな」

「へ？」

「『サイクロン』発動。その伏せカードを破壊してもらおうか」

つむじ風が吹き荒れ、伏せられていたカードがめくれ上がる。

……罠カード『立ちはだかる強敵』。俺は知らないが、こいつが直接攻撃型の俺に対してピンポイントで張ってくる程だ。おそらく戦闘誘発型の罠なのだろう。

もっとも、今回ばかりはその読みの鋭さが仇となったがな。

「根脇。認めたくないが、非常に認めたくないが、お前と何年の付き合いになると思っている」

実のところこいつとの付き合いは長い。小学校入学時から付きまとってくるものだから、かれこれ九年以上の付き合いだろう。絶対に認めたくないが。

「お前の読みが恐ろしいほど当たるのを俺は身をもって知っている。だからこそ、俺もお前の手が読める。わかるか？　お前が俺の急所を突けば突くほど、俺もお前に対しての対策が組みやすいというわけだ」

「……おお！」

合点がいったとばかりに手を叩く根脇。しかし理解は……していないだろうな。今この状況、自分が負けるということを。

「俺はさらに墓地の『サイクロン』を除外して『マジック・ストライカー』（ＡＴＫ６００）を特殊召喚。そして『団結の力』を装備させる」

「へ？　えーと、炎の精霊が１００から６００なって、ストライカーが６００の団結で８００の掛ける２がプラスんなってあーしてこーして……ありゃ？」

「出来ないのかダメージ計算」

俺が散々こいつをバカと言ってきた理由の一つ。それはダメージ計算が恐ろしく下手くそだということだ。

単純に一つ一つやっていけば何とかなるものの、今回のように合

計で何ダメージ受けるか、という計算は極めて苦手だ。もう一度言うが、こいつのデッキは一撃に重さを置いたビートダウンデッキ。量より質を重点に置いた超戦闘型のデッキだ。細かな計算など、無視できるほどの。

「……バカでバカでバカなお前のために、式を作ってやろう。炎の精霊で６００ダメージ、もう一度攻撃で１６００ダメージ、ストライカーは団結の力で攻撃力が上がって合計２２００ダメージ。さて、６００足す１６００足す２２００の答えはなんだ？」

「えーと、せやなぁ……そうか、４４００や！　なんや簡単やないか、アッハッハッハッハ……なんやてぇぇぇっ！！？」

「黙れ似非関西人。わかりやすいノリ突込みなんてするんじゃない。三十点だ」

「似非やない、似非やないで！　ってそないなことはどうでもええ！　お前それやと……」

「モンスターで一斉攻撃」

「最後まで言わせて頂戴いいいいぃっっ！！」ＬＩＦＥ４０００　↓　３４００　↓　１８００　↓　０

最後までやつの台詞を聞くことなく、モンスター達の容赦ない一斉攻撃で根脇のライフは０になった。

『……え、えー、勝者、エントリーナンバー七番！　よってＢブロック優勝は、早乙女ケイ！』

……しまった。ノリで倒してしまったが、意図せずワンキルしてしまった！

……一応去る前に声をかけた方がいいだろうか。いかにバカで嫌いな相手でも、デュエリストとしてのマナーでもある。

気は乗らないが……長年の付き合いもあるし、一応。

「……大丈夫か、根脇」

「うぅぅ、あんた鬼や。ほんまもんの鬼や。悪魔に違いないで……」

わざとらしさもあるが、涙を流しながら這いつくばる根脇。鬼と言われようが、反論できない。あまりにも一方的にやり過ぎた。ここまで勝ち上がってきて一瞬で負ける虚しさに何も感じないほど、俺は無責任じゃない。

「なんというか……悪かったな」

「……ほんまに、そう思っとるか？」

「ああ」

「なら、ほんなら……」

溢れんばかりの涙を流していた目元を擦り、無理やり涙を止めた。そして意を決したような顔をして三つ指をつき頭を下げ――、

「レイちゃん嫁にくださいお兄様！」

「慟哭のローリングソバットォ！！！」

「ゴホァッ！」

『体の中心を軸に右回転し、勢いのまま飛び跳ね蹴り飛ばす……しかも膝を伸ばしきって衝撃を逃がすことを忘れない……！　完璧だ、完璧なソバットだ！！』

『お前プロレスオタクだっけ？』

『え、常識じゃねえの？』

『え？』

『え』

……ギャラリーはほっとこう。

それにしても、やはりバカなことをのたまいやがった。分かってはいたが、こいつはバカだ。どうしようも無いほどのバカだ。こんなやつと知り合いだという事実に、思わず涙が出てきた。

「うぅ……いけずやなぁ……お兄様……」

「……」

ガスガスガスガスガスガスガス

「グ、ホ……ッ！　ちょ、待て。むご、んで……ストンピング、は止め……」

目の前のバカが何か言っているようだが聞こえない。もとい聞こ

えない振りをしてガスガスガスガスガスガスガス。
しかしなんというバカなのだろう。こんなバカの心配をしていた数刻前の自分にアイアンクローをかけてやりたい。

「それで……何故そんな寝言を口走ったのか聞かせてもらおうか？遺言吐くなら今だぞ」

「墓入り前提！？　ちっとは抒情酌量の余地あるやろって痛い！無言でヤクザキックは勘弁してな！　ちょっ、まじ痛てっ！　ちょ、ちょっとしたジョークやないか！」

怒りより早く殺意が沸いた。

「ジョークであいつを嫁に貰うだと？」

「あれ、黒い気が増した！？」

「ＯＫ理解した。貴様の首は刻んで畜生の蓄えとしてやろう」

「しもた！　これが噂の暴走特急早乙女号かい！」

絞め技をかけてやろうと近づくが寸でのところで避けられた。だが、行き先は見える。見えてさえいれば、どこまでも追いかけられる。

「……中学の頃だったよな、根脇。最初にお前がレイを嫁にくれって言い出したのは」

「え、ああ。あのことか？」

「そうそのことだ」

こいつが先の言葉を放ったのは、今回が初めてのことではない。
中学二年の時、小学校に入ったばかりの俺の妹は、友達と仲良く登校していた。たまたまそれを見ていたこいつは、レイが俺の妹だと知った直後に申し立てに来た。

『お兄様と呼ばせてくれ！』と。

光の速度で断った。
だが、根脇はその後も性懲りもなくすがり続けてきた。
ある時は登校途中で。
ある時はトイレで。
ある時は休み時間に。
そしてついには家におしかけるようにまでなった。
これは不味いと思った俺は速攻で捻じ伏せてその時は事なきを得たが、まさか未だにしつこくすがってくるとは思わなかった。

「思い起こせば……あの時始末しておけば……！」

「ストオォップ！　流石にパイルドライバーは洒落にならへん！」

気づいたら根脇の頭を両手でつかんでいた。成程、後は叩き落として胴体を抱えて堕とすだけか。実に都合がいい。

「冗談で娶るような奴はこの場で贖罪を……！」

「止めておけ」

直後、亮に腕をつかまれていた。

「止めるな亮。害虫は見つけた瞬間に駆除しないと後三十匹はいると言われているんだ！」

「ワテは台所のG扱いかい！？」

何をいまさら。

結局亮に止められてしまい、この場でGを潰すことはできなかった。全く、千載一遇のチャンスが……。

「いや、ホンマすまんかった！　あとそっちの亮さん、助かったわぁ！　おおきに！」

「いや、俺は何も……」

「謙遜しなさんな！　あっはっはっは！」

根脇のテンションの高さに、亮は軽く引いていた。それもそうだろう、亮は今までこんなにテンションの高い奴に関わったことがないのだろうから。

亮との会話で気分がさらにハイになったのか、意気揚々とデュエルリングを後にした。

二度とくるな。主に妹関係では絶対にくるな。

「……大変だな」

「わかってくれるか……」

あいつの厄介さを思い知った亮が、同情の視線で見てきた。

今度、またあの温泉に行こう。ストレス解消に、絶対に行こう。

「ところでケイ」

「なんだ」

「そのレイって子は……」

「歯を食いしばれ」

「待て！　俺はただ純粋な好奇心で聞いただけであり恋愛感情は無い！」

「……それもそうか」

あったこともない女に対して、どうこう思える方がおかしい。その点では亮は普通か。

「……レイは妹だ。七つ下のな」

「七つ……ということは、小学三年生くらいか？」

「ああ。母親似で可愛くてな、デュエルも学年で一番強いらしい」

事実初めて出た町内のデュエル大会では、クラスメイトを差し置いてベスト4になったのだ。デュエルに関してはかなり光るものがあると断言していいだろう。

「自慢の妹なんだな」

「ああ。……言っておくが、手を出したりしたら……」

「絶対に出さない事を誓う。だからその黒いモノをまき散らすな」

Ｓｉｄｅ：Ｎｏ　Ｓｉｄｅ

「はっはっはぁ！　いやー良い奴やったなぁあの亮って奴！　巷じゃカイザーとか言われとるからどんな奴かと思っとったけど」

デュエルリングを後にした根脇は、意気揚々と廊下を進んでいた。
よほど馬の合う相手が見つかったのが嬉しかったのだろう。
しかし彼の進む数歩先の曲がり角、待ち構える人物がいた。
根脇もその人物を目にとらえ、話しかけた。

「田中センセ、どないしたんや？」

田中教諭は根脇を見据えたまま聞いた。

「根脇君。君は早乙女君と仲が良いようですね」

客観的に見れば、彼らは互いに遠慮なくぶつかり合える仲に見えたのだろう。事実、田中教諭もそう思った。
実情はどうあれ、自分は小学校からの付き合い、早乙女ともそれなりに仲が良いと判断した根脇は迷いなく肯定した。

「せやね、かなり仲ええで！　心の友と書いて心友と読むくらいやで！」

「そうですか。それは結構」

満足そうに頷く田中教諭。不意に彼は懐へ手を入れ、何かを取り出した。

出したのは、カードの束。厚さからして、おそらくはデッキだろう。

「なんやコレ？」

差し出されるようにデッキを根脇の前に持っていった田中教諭から、根脇が思うがままにデッキに手を伸ばした。

「――――……あ？」

電流。

そう言った方がいいだろう。

根脇の感じた感覚は、丁度体の中を電気が駆け巡ったようなものなのだから。

体の中を、得体の知れない何かが走り暴れる。

神経を乱さんとばかりに。

血管を汚さんとばかりに。

脳を掻き毟らんばかりに。

体の中のありとあらゆる神経が、器官が、臓器が、果てには精神すらドス黒い電流に汚染されていく。

この時、すでに根脇の意識はなかった。

あるのは、自分の中で何かが起きていると、感じる事だけ。

ただ、感じている。

自分の中が蹂躙されていることを。

「……では根脇君」

田中教諭が名前を呼んだ瞬間、硬直していた根脇の体の力が抜け、俯くような姿勢になった。デッキに伸ばしていた手は体の横にぶら下がるようになり、手は異常な力でデッキを握っていた。

「私が合図を出したら」

握りしめる手は赤を通り越し紫色に変色している。それでも手の中にあるデッキには、皺ひとつ付くことがない。

「早乙女君を呼び出し、そのデッキで殺しなさい」

宿題を出すように、何でもなく言い放つ田中教諭。その表情にはいつも通りの笑みが浮かんでいる。

「――はいな。任せときぃや！」

先ほどまでの様子とは打って変わり、いつもの調子の良さで返事をする根脇。どんとこいとばかりに、握ったデッキごと胸を叩いた。

しかし田中教諭は、その様子に僅かに口端を釣り上げた。

今の根脇にはあまりにも不釣り合いな、黒洞々たる目を見据えながら。

十九／不安と衝動　ケイサイド＋α（後書き）

月「黒幕行動開始ですね」
　ついに動きますよ！　と言っても、自分で言っている通り後数週間は平和です。
月「親善試合が終わった後が勝負ですか？」
　それは言えない。ネタバレになってしまう。
月「……っち」
　君、最近ヤサグレキャラがついてきたよ。

【1．誰だあいつ】
　新キャラ、というよりモブキャラ登場。
月「モブの説明なんてほっとけばいいものを……」
　コラソコ！　一応今後も出るフラグ立ってんだから説明するぞ！
月「はいはい……えーと、根脇情二、オシリスレッド一年生。以上」
　クォラァ！？　しゃきっとしろ！？
月「めんどいです。後説明してください」
　なんでこんな子に……。まったく。
月「早くしやがれコノヤローですよ」
　丁寧に暴言吐くな。えーこの根脇君、気づいてる方多々かもしれませんが、”根”脇と”情”二で『根性』です。名前はここから決めました。
月「暑苦しいキャラを出したいという作者の妄言から生まれましたね」
　やかましい。筆記は最悪だが神がかりなデュエルの腕でぎりぎりオシリスレッド、という原作主人公みたいなキャラになりました。
月「で、暑苦しいから炎属性。また安直な……」
　シンプルイズベスト。まぁ一瞬でやられましたが。

【2．妹（名前だけ）登場】
　ついに出た！　原作メインヒロイン！
月「メインは天上院明日香じゃないんですか？」
　……作者の頭ではレイがヒロインです。ただ覚えていてもらいたい。明日香も大好きだと。
月「原作だとカイザーにべた惚れになる予定ですけど……」
　……どうしようかなぁ……。

【3．知らないカード？】
月「さらっと流しましたけど、早乙女さんの知らないカードが登場しましたね」
　『立ちはだかる強敵』ね。あれについては次回のネタです。
月「ということはまだ話せないと？」
　そゆこと。次回をお楽しみに！
月「いつになるんだか」
　……なるべく……早くは。

【4．長老ー！？　ツー！】
　迫る暗躍の足音！
月「まあどうせ失敗するんですけどね」
　Σちょっ！？　それ暗黙のルール！？
月「どう失敗するんでしょうねえ」
　お前もう黙れよ！　全アニメ漫画小説敵に回す気かよ！？

【5．ささっと次回予告】
　さて、予選が全て終わりました。
月「カイザーがまだですけど」
　とっくに終わってるよ？
月「早っ」
　いやぁ、本選のカイザーばっかり思いついて、予選の様子が圧勝

しか思いつかないんだよねぇ。
月「……否定できないとこがカイザーですねぇ」
さぁさぁ予告するよ。
月「はいはい。えー次回は……デュエルなし？」
うん。
月「デュエルしないで何が遊戯王ですか。あんた遊戯王なめてんですか？　社長ディスってんですかぁ？」
キャラ若干崩れてるよ？
月「ハッ！　……コホン。では次回はデュエルなしの、本選までの閑話、という方向で……」
次回『疑心と心配』。とぅーびーこんてぃにゅー？
月「最近作者が気づいたようですが、タイトルの付け方がバクマン。に似ているようです」

※２０１１／０８／１０　加筆・修正

二十／疑心と心配　正午のひととき（前書き）

はい、ようやく二十話突破です。
ケイ「一年経ってようやく二十話か……」
やかましい。今回は宣言通りデュエルなしです。
ケイ「そしてやはりキャラ崩壊が少々……」
オリキャラだから別に問題なし！　元がないんだから崩壊もなにもあったもんじゃない！
ケイ「帰っていいか？」
Σ月夜と同レベルのスルーすんじゃない！　なにはともあれ、第二十話どうぞ！

二十／疑心と心配　正午のひととき

「……腹がへったな」

「見ろ、もう十二時だ」

あちこちに設置された時計は、すでに正午を指していた。

決勝の後教師から、本選は昼を挟んだ午後からと聞かされた。つまり、ここで一旦休憩となり各自昼休みを過ごすこととなる。

「昼飯は……購買にでもいくか……」

「ドローパンか？」

「安上がりだしな」

「それよりも、まず他の皆と合流した方がいいだろう」

ふむ、と亮の言葉に促される。

午前はモニターを通して各自の様子がわかったが、それ以降はさっぱりわからないでいる。となれば、まずは互いの報告を兼ねて一度会うのがいいのだろう。

「それじゃドローパン買ったら、食堂にでも行ってみるか。向こうも昼飯だろう」

「そうだな」

なお、亮は俺のひとつ前の試合の間に優勝を決めたらしい。相変

わらずスピーディなデュエルをするやつだ。

「おぉ居た居た」

「あ、ケイ！　亮もいっしょじゃないか」

「あやや、お二人とも少し振りですね」

数袋のドローパンを抱え食堂へ来た俺達は、早速吹雪達を見つけた。四人全員一緒で、実にわかりやすい。それと絢、少し振りとは言うが会ったのは昨日だぞ？　……久しぶり、というほどでもないから、昨日は少しなのだろうか？

「お前たちも早速昼飯か」

「ああ。……ケイ、それ全部食べるの？」

優介が疑問に思うのは無理ないだろう。俺の手の中には五袋ものドローパンがあるのだから。だがかなり――特に決勝で――動いたのだから、これ位食べないと後がもたないと思う。

若干引き攣った優介の手元には、実に可愛らしい弁当箱が鎮座している。おそらくはまた竜剛院が作ったのだろう。その内背中を刺されないよう忠告しておくべきだろうか。

「勿論食べる。というか腹が減った」

「……どうしてそんなに食べるのに体型が変わらないんでしょう……？」

俺の言葉に竜剛院がわずかに反応した。そんな彼女の昼は、優介より一回り小さい弁当。中身はおそろいのようだ。

「動くからだろうな。特にケイは暴走特急なんてあだ名が付くくらいよく動く」

「……頼むから忘れてくれ」

「なんて羨ましい……！」

「それより暴走特急ってなんの話だい？」

竜剛院が軽く嫉妬してきた。といっても、ことあるごとに追いかけてくるフード集団に比べれば微々たるものだが。優介、彼氏として立派に慰めてやれ。あと吹雪、身を乗り出して聞くな。

適当に吹雪の疑問を受け流しつつ席に着く。そして改めて各自の昼食を見る。

優介、竜剛院はおそろいの弁当、吹雪は多種多様な弁当数個。おそらくファンの女子生徒にでも貰ったのだろう。絢は食堂の月見うどん、そして亮は俺と同じでドローパン。ただし数は少ないが。

一つ開けて、早速かぶりつく。

「……～っ！？」

「ど、どうしたんですかケイさん？」

「……った」

「え？」

「……幻の……唐辛子パンだった……」

味を言えと言われたら、百人中九十八人が辛いと言うだろう。
残りの一人は辛党、もう一人は気絶して口がきけないやつだ。

「……ご愁傷様……ックク……！」

吹雪、堪えるくらいならいっそ笑えこの野郎。その他数名、というか全員堪えてんじゃねえ。
気を取り直して――というより覚悟を決めて――もう一度かぶりつく。
……やっぱり辛かった。

「そういえば皆さん」

俺が幻の辛さに耐えながら闘(たべて)っていると、絢が全員に聞いた。

「この大会、何かおかしいと思いませんか？」

「おかしい？」

一番に反応したのは亮だった。
それに続くのは、二つ目の弁当に手を伸ばした吹雪。

「何がおかしいんだい、風見ヶ丘さん？」

「具体的にはですね……『ないものがある』、ということですね」

ないものがある？

曖昧な答えすぎて、とても具体的とは言えない。

「『高等儀式術』、って知ってますよね？」

「儀式モンスター専用のサポートカード、でしたっけ？」

確か、儀式召喚に必要な生贄をデッキから選べるカードだったか。

基本儀式召喚とは最低でも三枚のカードを消費する、実に燃費の悪い召喚方法である。場に出しているモンスターを使ったり、相手のモンスターを『洗脳―ブレインコントロール』などで奪ってコストにする等の方法で生贄を確保する方法はあるが、非効率的であるのは確かだ。

しかし『高等儀式術』はそれらの生贄を、デッキ内の通常モンスターで賄ってしまうという大変画期的なカードである。レベルが丁度にならなければならないという制限はつくものの、全ての儀式モンスターに使えるという点を考えれば些細な問題に過ぎない。

「でもまだ発売されてなかったんじゃないかな？」

そう、優介の言うとおり、このカードはまだ世に出回っていない。来週くらいに一般発売されるパックに収録されているため、持っている人はほとんどいない。Ｉ２社より先行発売（インダストリアル・イリュージョン）されることもあったが、それでも手に入れた人は１００名前後。もちろん、アカデミア内部にそんなイベントに行った生徒はいない。

「三積みされてました」

「「「は？」」」

絢を除く五人全員が疑問の声を上げた。

「まだ発売されてないカードを三積み？　んなバカな」

「いや、考えられなくもない。以前の先行発売の際に手に入れた人から譲ってもらうなどすれば、揃えることはできる」

吹雪の信じられないという発言を聞き、亮が考えを述べた。

たしかにその方法なら何とか入手できる。しかし、『高等儀式術』はレアカード。そうそう簡単に手放すとは思えない。

「まあそれだけなら、私もおかしいだなんて言い出しませんよ」

ただ、と付け加える絢。

「――『カオス・ソルジャー』が入っていると言ったら？」

「……ふむ、中々興味深いところだな」

『不幸を告げる黒猫』の漱石は、吹雪と離れ一人（一匹？）校内散策へと洒落込んでいた。デュエルリングをいくつも保有し、総生徒数が三ケタの後半に届くほど大規模なアカデミアは猫の体からしてみれば一つの都市と言ってもいい。その都市の廊下（みち）を悠然と歩く漱石を、すれ違う生徒は見向きもしない。

ただ一人を除いて。

「……む？」

漱石の歩く先、やけに丸く茶色い何かが置かれていた。

漱石が近づくと、しっぽが生える。
さらに近づくと、ようやくその全貌があらわになった。

「――ほぁら」

アカデミア名物、レッド寮の寮長――。

「こーら、ファラオ。勝手にいなくなっちゃダメですにゃ」

――ではなく、寮長大徳寺の飼い猫、ファラオであった。
猫のくせにやけにでっぷりとしており、年がら年中気ままに歩いては自由に過ごしている。そしてなによりも、特徴的な鳴き声がアカデミアの生徒には受けている、らしい。

「……おや？　珍しい猫ちゃんがいますにゃー」

その光景をぼぅっと見ていた漱石は、大徳寺がこちらに気づいたことでようやく我に返った。
ファラオを抱えたままの大徳寺が近づいてくる。
それに伴い、なぜか漱石は同じ歩幅分下がった。

（……何事だ？　吾輩が、引くだと？）

漱石は自分のことを過大評価していない。
かといって、決して過小評価もしていない。
自分はデュエルモンスターズの精霊だ。それも、それなりに古くの時代から生きる、古参のベテランと言ってもいい。
ほかの新参者の精霊とは一線を引く、由緒ある存在。それが自己による、他者から見た評価だった。
その自分が、数々の凶悪な存在を目の当たりにしてきた自分が恐

れている。
漱石が疑問を抱くには、十分すぎる理由だった。
「ほーら、怖くないですにゃー。ちーちっち」
困惑する漱石とは裏腹に、大徳寺は実に楽しそうにしている。腕の中に抱えられている漱石も、心なしか居心地がよさそうである。
中々近寄らない漱石に業を煮やしたのか、大徳寺がより一層近づいた。
しかし。
「ほーら猫ちゃ」
『マスタあああああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！』
「ぶぎに〝ゃ！？」
『どこですかマスタあああ！！？　私を、私を置いていかないでくだされえええええ！！！』
突風が、通った。
大徳寺が吹き飛ばされる一瞬の間に漱石が見たものは、虹色の羽を生やした、逞しい筋肉を持った男が、滝のごとく涙を流して飛び去る姿だった。
「……解せぬ」
漱石は、気絶する大徳寺を無視し一人呟いた。

「……絢、それは確かか？」

今しがた聞いたことが信じられなかった。

『カオス・ソルジャー』といえば、初代決闘王の武藤遊戯が使用した伝説の騎士。当然レアリティもそれに比例して上がり、今では一般人が手に入れるなど不可能に近い。ましてや、一生徒が持っていることなどありえない。

「ええ。私が戦ったわけではありませんが、間一髪のところで阻止されました。しかし召喚されていれば、間違いなく問題になったと思われます」

「……」

絢の言葉に全員が黙る。未発売のカードに、伝説のカードの存在。あまりにも唐突すぎる話。全員が難しい顔をしているうえ、吹雪に至っては煙を出して……出して……煙？

「……ぷしゅぅ」

「まずい！　吹雪が処理落ちした！」

「え、あれ？　今って結構シリアスな場面じゃないですか！？」

「しっかりするんだ！　衛生兵、衛生兵―！！」

「……シリアスになれという方が、無理だと思うがな」

わーわーぎゃーぎゃーの阿鼻驚嘆。結局重苦しい空気は霧散し、いつもの感じが漂い始めた。

「……放っておけばもどるだろう。……ほぅ、今回のディスティニーパンは当たりか」

「食ってないで手伝え！！」

「で、だ。絢が言いたいのは、なぜか見知らぬ、もしくは未発売のカードがこの大会で出回っている、ということで間違いないか？」

一通り騒動が落ち着いた後、簡単に話をまとめて絢に聞いた。

「概ねその通りですね」

「……確かに俺の対戦相手にも、見慣れないカードを使ったやつがいたな。他はどうだ？」

俺の場合、『立ちはだかる強敵』を使われた。あれは今までに見たことのないカードだったが、未発売のものなのだろうか。

最初に答えたのは、優介&竜剛院のペア。

「俺達の相手でも、既に絶版になった『禁止令』を使ってきた相手がいたんだ。その時は『オネスト』を封じられたんだけど――」

「だけど？」

「……試合前の調整で、控室に忘れてしまって、ね」

「……なにやってんだ」

『禁止令』は確か、宣言したカードをプレイできなくする永続魔法だったはず。発動、召喚、セットなどあらゆる使用を封じ、他のカードのコストにするくらいしか使えなくするピンポイントなカードだ。当然相手のカードを知っていなければ使えないため、丁度優介対策に入れていたのだろう。

だが優介の言うとおり既に絶版になっている。まあこれは、昔から持っていた、と考えればさほどおかしくはない。

次に反応したのは吹雪。

「僕の相手では、『最終突撃命令』を使ってきた奴がいたよ。あれって確か、世界でも百枚ほどしかないレアカードじゃなかったかな？」

「そこまでおかしい話でもないんじゃないか？　意外なレアカードを持っている奴はたまにいる」

『最終突撃命令』は、全モンスターを表側攻撃表示にする永続罠。ゴブリン系のデメリットを回避したり、リバース効果をすぐに発動させられたりと悪用方が多いことから百枚足らずで生産中止になったカードだ。

最後に反応したのは亮だった。

「俺の相手は別段おかしなカードを使ってきたわけではないんだが……」

若干言いづらそうにしている。何があったのだろうか。

「完全にアンチデッキを組んできたやつがいたんだ」

「アンチデッキだと？」

アンチ自体は悪いことではない。立派な戦略である以上、亮がそのことで非難することはまずないだろう。

「ああ。それが、初戦からずっとだ」

「「「ずっと！？」」」

亮の話を聞き、全員驚いた。なんでも、一回戦目はそこまで明確なアンチではなかったという。ただ『落とし穴』や『地割れ』を使ってくるだけで、完全なアンチではない。しかし回を重ねるごとに『電磁蚊（モスキート・マグネ）』や『システム・ダウン』、挙句の果てには『電磁ミノ虫（ザックトレーガー・マグネ）』とかいう生産終了のカードまで使われたという。

「亮、君どうやって勝ったんだよ……」

吹雪の言葉に全面的に賛同したい。アンチデッキに対して常勝するとか、もはや学生の域ではない。

「長引くと厄介だから、パワーボンドとサイバー・エンドで……」

「「「１キル連打かよ！！」」」

お前もうプロでいいよ、と言いたくなるのをぐっと堪える。なぜか言ったら負けな気がして。

「なにはともあれ、だ！」

これ以上話していても、成果は上がらないだろう。今まで言ったカードは絢が自前のパソコンで調べてくれるらしい。次回発売のパックまで調べられるのかと聞きたいが、聞いてはいけない気がする。

「注意するにこしたことはない。幸いこの後は本選で、一年で四人の内三人は俺達だ」

「ですね。二年生の方は私にお任せあれ！」

絢が自分の胸を叩いて主張する。実力は真っ先に予選を勝ち抜いたほどだ。そう簡単に負けはしないだろう。

「俺達は負けたから、応援に徹するよ。みんな頑張ってね」

「頑張ってくださいね皆さん！」

「……では諸君、健闘を祈る！」

「「「おー！！」」」

最後の掛け声を合図に、俺達はそれぞれの調整をするべく別れていった。

……ところでなんで俺が仕切っていたんだろうか。絢が話し始めたはずなのに、おかしな話だ。

「……お」

そういえばと思い、自分のポケットを探る。すると、思った通りに出てくるものがあった。

袋に密閉されているカードが数枚。これはドローパンの中に入っていたものだ。以前竜剛院がＦＧＤを当てたように、ドローパンの中にはこうしてカードが入っている。そしてそれは、開けてみるまで中身はわからない。

「なーにっかななーにかな、と……」

鼻歌気味に開けてみる。ちなみに最初に開けたのは、あの忌々しき幻の唐辛子パンに入っていたカードだ。あれだけ酷い思いをしたんだから、少しは良いカードが入っていてもらいたいものだ。

「……お？」

五枚一束になっているカードを見ていくと、五枚目に面白いカードがあった。レベルは2、攻撃力も『？』になっていて、効果も実に俺好みだ。

確か部屋の使っていないカードの中に、あれがあったはずだ。組み合わせて使うと、面白いことになるかもしれない。

そう思い立った俺は、残り少ない時間で調整すべく急いで自室へ向かう。本選は、やや違うテイストを試してみるのも悪くないな。

「全く、あいつらのあの不甲斐ない結果はなんだ！」

アカデミアの中庭で、原星華は憤っていた。主に、今回のトーナメントの三年生の結果についてだ。

一年生のデュエルが早々に片付いた反面、三年生のデュエルは未だ決着がついていない。現在決勝戦が行われているのだが、星華が見たときには既に二十ターン。あまりにも長すぎるデュエルだった。

というのもそれは対戦者同士のデッキの相性にも原因がある。片やロック中心で攻めてに欠け、片やライフキュア中心でダメージを与える手段自体少ない。結果互いに手をこまねきあっているだけで、無意味に十数ターンが過ぎたのだ。

「上級生が手本にならなければいけないというのに、あれでは下級生に示しがつかん！」

「そうですわねぇ。確かにすっきりしない結果でしたわね」

星華の隣を歩くメイも、同様に感じていた。

自分と星華のデュエルは既に終わり、これから昼食を摂るため女子寮へ向かうところ。周囲には、三年らしき人物の影も形もない。

もともと三年生はこのトーナメントで良い成績を残し、進路に少しでも優位になろうという考えのもと参加しているのがほとんどだ。その考えからか、容易に負けないデッキを組んだ生徒が多い。しかしそれが裏目に出てしまい、中々決着のつかない不毛なデュエルを長々と続ける結果になってしまった。これでは本末転倒である。

「やはり私が出れば良かったかもしれんな」

「あら。星華が出ていればすぐに終わったとでも仰るの？」

「自惚れるつもりはないが、アイツがいない今は私かお前が頂点だろう」

「ふふ。嬉しいこと言ってくれるじゃない」

「客観的に見た結果だ……待て、その手はなんだ。ドコを触っている！」

「あら、わたくしは星華の成長を確かめて差し上げようと」

「するな！　早く手をどけろ！　体をこっちに傾けるな！」

「あらぁ？　星華の慎ましいところも少しは大きく……」

「いい加減にしろぉ！！」

メイが星華のある部分――上半身の女性的なふくらみ――を愛でるように撫でると、当の本人は必死に体を突き放そうとしていた。しかし語勢に対し、星華の突き放す力は弱い。

「相変わらず非力ねぇ。少しくらい鍛えたらどうですの？」

「わ、私だって少しは成長している！　この間より、重いものに挑戦できるようになったからな！」

「へぇ、何キロですの？」

「十キロだ！」

「……星華、バーベルでそれは自慢になりませんのよ？　やはりここはわたくしが手取り足取り腰取りと……」

「いらん！　余計なお世話だ！　というかさっさと離れろ！」

星華の非力さに呆れるが、メイはかたくなに離れようとしない。そしてその手は依然として、星華の女性的なふくらみを中心に愛で回している。見る人が見れば、実に素晴らしい光景だろう。

「ねえ星華、結婚しましょ？」

「寝ぼけるな！　いい加減目を覚ませ！」

「あら、わたくしは正気ですわよ？　それに今はｉＳＰ細胞とかいうもので、同性同士でも子供が作れるようですし」

「この上なく必要ない情報だな！？　だ、だから私にその気は――ひあっ！？」

「あら可愛い声♪　やはり愛すべきは可愛いものですわねぇ」

「は、離せえ！　お、お前早乙女に気があるんじゃなかったのか！？　前にそんな視線で見ていただろ！？」

前、というのはおそらく、絢が風邪を引いて見舞いにきた時のことを言っているのだろう。あの時メイは、確かに意味ありげな視線で見ていたが、どうやら星華にはお熱だったように見えたらしい。

「ああ、あのことですの？　それは別問題ですわ」

「だ、だったらあれはなん――」

「ねえ星華、早乙女君は誰と合うんでしょうね？　絢さんの相手も良いですけど、個人的には『早乙女×丸藤』も捨てがたいんですのよ」

「――――は？」

言っていることが理解できないといった顔で、星華が硬直した。
いつのまにか、メイの撫でまわす手も止まっている。

「『早乙女×天上院』というのもありですけど、『早乙女×藤原』の王道パターンもありですわね。早乙女君に限らなかったら『丸藤×藤原』も捨てきれませんわ！　でもやはり一番は天上院君総うー―」

「チェストォ！！」

「ぎゃんっ？――きゅぅ……」

暴走しだした者は並みの手段では止まらない。武力的だが、物理的に黙ってもらった星華であった。

「はぁ……はぁ……！　ま、全く！　一体なにを口走るんだか……」

悪態をつく星華の顔には僅かな朱が入っていた。彼女は非常に堅物なうえ、それ以上に初心であった。しかしメイが隣で歩く以上、その朱が別の朱に交わるのも時間の問題だろう。

「（……出ていきづらいですね）」

そしてその二人のやりとりを見ている影があったが、この微妙な雰囲気、どうにも出ていくには勇気が必要であり、結局タイミングを逃したとかなんとか。

「（……まだ時間はありますし、焦らず確実にいくとしましょう）」

二十／疑心と心配　正午のひととき（後書き）

月「わっかりやすい伏線ですね……」
　回収しやすいでしょ？
月「作家志望としてそれはどうなんですか？」
　……地道に勉強していきます。

【1．食いすぎじゃね？】
　よく動いた後は腹が減るものです。
月「それにしたって五袋ですか」
　ケイならそれくらい余裕です。多分六人の中で一番動くので。
月「ほかのメンバーは小食ですか？」
　優介・真理は大体同程度。吹雪は弁当もらうので結構食べます。
絢は並、亮は日によります。
月「いまさらですが、すごくどうでもいい情報ですね」
　うっさい。

【2．オネストおおお！？】
月「忘れ去られた筋肉天使の大疾走」
　筋肉言うな！　優介に忘れられてから必死に校内を飛び回っております。
月「見つかったらどうするんでしょうね。というか大徳寺先生目回ってますけど」
　大徳寺先生に南無。（一人一）
月「どあほぅ。そういえば先生って精霊見えるんでしたっけ？」
　原作見た人はわかると思いますが、本来は見えません。本来その素質があり、漱石の精霊としての存在が濃すぎるため見えた、みたいな裏設定が……。
月「超無駄ですね」

うるせいやい。

【3．シリアス（笑）】

月「シリアスぽかったのどこいった」

シリアスなんて投げ捨てるもの！　やっぱギャグ書きやすいわー。

月「やはり駄作者でしたか」

月夜ちゃん。どういうことかな？

月「今回の話が前回の伏線部分ですね」

スルーされた！？　……まぁ、うん。

月「しかし調べてみると、本当に機械族のアンチやメタって多いですね」

多くのユーザーに使われてるからね。実際に使ってるし。

月「相手がいないんですがね」

なんで地方に飛んじまうんだよおおお！　友人どものバカー！！

【4．Σメイさーん！？】

レズっ娘腐女子誕生！

月「これですか。これがやりたいがために伏線張ってたんですか？」

その通りさ！

月「なるほど。腐っているのはメイさんではなく作者の頭でしたか」

おーい暴言吐くなー。言葉のぼーりょくはんたーい。

月「しかし見事に弄られてますね星華先輩」

だねー。後半は筆が乗って止まらなかった。もとい若干暴走した。

月「なんども言いますがこの小説のコンセプトは暴走です」

イエス。自重しません。

月「ところで最後のは誰ですか」

黒幕です。空気読みました。

【5．さあ次回予告だ】

月「暑くなってきましたねー……」

逃避してないで手伝って。
月「って言っても、次回はどうせ本選の一回戦でしょう？」
いや、まぁそうなんだけど……。
月「本選入ります。以上」
はしょり過ぎじゃね！？　ていうか自由過ぎない！？
月「いいんですよ。細かく言ってもどうせ拾いきれないのが作者なんですから」
グサッ！　こ、心に直接攻撃……！　じ、次回、『再戦と挑戦』！　また見てくださいね。ジャーン、ケーン、グー！！
月「まさかのゴクウ！？」

二十一／再戦と挑戦　可能性の竜（前書き）

さて、お久しぶりです！　そしてすみませんでした！
月「早々に謝ったのは無視して、遅れたワケは？」
ちょ、ひどっ！　えー、課題が特盛でして……。
月「時間がなかったと？」
はい！　その通りです！
月「……もういいです。完結させる気があるならなにもいいません」
え、あれ…今回なんか優しい……？
月「強いて言うなら月最低２度は更新してもらいたいとか、１話に１度はデュエルを入れてもらいたいとか、もっとクオリティ上げろとか……まあそれくらいですから」
Σ十分言ってるー！？　と、とにかく！　遅くなりましたが二十一話どうぞ！

二十一／再戦と挑戦　可能性の竜

『ンン、アーアーテステスなノーネ……ビルラ、マデーラ、マルサーラ……』

今日も今日とて絶好調のクロノス節で教諭がマイクテストをしている。

時刻は正午過ぎの子の刻。太陽がギンギラギンと過度過ぎるくらい働いている時間に、学園の生徒は普段は密閉されているくせにこういう時は天井が開いてお天道様のご来光の眩しい体育館に集められている。多くの生徒はダウン寸前のボクサーの如くグロッキーになっているが、その同数程の生徒の目もギンギラギンとしている。

その目的は言うまでもなく。

『お待たせしたノーネ！　ただ今ヨーリ、ノース校親善試合代表決定トーナメント本選を始まるノーネ！！』

『『『ウオオォォォーーー！！！』』』

言葉と同時に沸き立つ歓声。大きく開いた天井からは、何百人もの声が震撼した。

この生徒達の目的は代表決定戦の本選。つまりは優勝者、ひいてはアカデミア代表を一目見ようと思っていることにある。

『デーハ、簡単に大会のルゥールを説明するノーネ』

モニターを通じて、デュエルリング上でマイクを握っているクロノス教諭の話を要約するとこうなる。

一つ、デュエルのルールは予選と同じ。

一つ、最初は一年の対戦から行い、決勝は最後にまとめて行う。
一年が終わり次第二年、二年が終わり次第三年と続く。
一つ、あくまで代表を決めるのが目的のため、準優勝、三位決定はしない。

「となると、やはり対戦カードが重要になってくるな……」

本選の出場者は、予選を勝ち抜いたブロック優勝者である。順当に考えれば、Aブロック優勝者の相手はBブロック、CブロックはDブロックの優勝者との対戦だろう。
もしそうなったら俺はAブロック優勝者である亮とやる事になる。それだけは断固拒否願いたい。
俺の葛藤を知ってか知らずか、クロノス教諭は説明を続けていた。

『ここまでが主なルゥールでスーノ。それでゅエーハ、全デュエルの対戦カードを発表するノーネ！』

巨大なモニターに映し出されるのは、AからDまで書かれた札。四枚しかないところを見ると、どうやらこれで全学年の対戦者を決めるようだ。
並んでいた札が無秩序に動き出す。上下左右に暴れだし、止まる気配がない。
体育館中の生徒、教員が見守る中、札は横一列にようやく止まった。
そして映し出されるトーナメント表。各対戦表の下には四つの空き枠があり、そこに札が順番通りはめられていく。
決まった順番は、A・D・B・C。

『でーはこれヨーリ、Dブロック優勝者ヴィーエス！　Cブロック優勝者のデュエル、始めますノーネ！！』

再度沸き立つ生徒達。その歓声は先ほどよりも大きい。
これだけの大歓声。会場のボルテージは最高潮に達している。それだけに、どれだけの人数がこのデュエルを楽しみにしているかがよくわかる。
今回の対戦カードは、吹雪と亮。なら俺が出るべきではない。だから……。

「……さて」

いい加減、会場に向かうとしよう。
モニターから目を離し、歩を進める。
本選開始まで、後二分。確実に、遅刻である。

本選の初戦は、僕と亮か。僕等以外の残り一人を期待していたんだけど、確率では三分の一。対戦できる方が低いか。
それにしても。

「まったく、ケイったらこんな時に遅れるなんてね」

さっき携帯端末からメールが届き、デッキを作っていたら遅れそうだという旨の文が届いた。本当にデュエルのことになると、周りが見えなくなるんだから困ったものだ。

「それだけ真剣なのだろう。デッキは己の分身といっても、過言ではないからな」

そう言うのは亮。僕等は本選のデュエルリングで相対している。

実を言えば、僕等はアカデミアにくる以前にも何度も戦ったことがある。というのも、僕と亮はアカデミア中等部からの進学生。当時から腕を競い合って、ことあるごとに対戦してきた。

だけど、ここに来てからはほとんど対戦することもなくなった。授業も男女混合で、自らをプレイボーイとして名乗っている僕としては女性を優先することが多い。というか、ほぼ毎回だけど。

亮は比較的いろんな人と戦う。それこそブルーからレッドまで幅広く。お陰で僕等はほとんどデュエルディスクを交えることがなかった。……あれ？　もしかして、一度もない？

……まぁ、とにかく。今回は観衆の見ている中とはいえ、亮と久しぶりに戦えるチャンス。中等部では五分五分だったけど、ここでは僕が勝ち越させてもらう。

『それデーハ、両者互いに向かいあってくださイーノ』

互いにデュエルディスクを構え、一歩歩み寄る。

今の亮の腕に、黒決闘盤（ブラックデュエルディスク）はない。さすがにこういった公の場では、指定のものを使うらしい。校長先生直々のイベントで手に入れたんだから、許可はおりているはずなんだけどネ。

「中等部では着かなかった決着、今着けようじゃないか」

「ほう……。いいだろう、来い！」

『ではでは両者ステンバーイ……デュエル、スタートでスーノォォォ！』

「「デュエル！！」」

天上院吹雪　ＬＩＦＥ４０００

丸藤亮　ＬＩＦＥ４０００

「先攻は僕がもらうよ、ドロー！」

亮はサイバー・ドラゴンを主軸とした後攻型のデッキ。必然的に先手を譲ることの方が安全だ。だけど今回の僕のデッキは、昔から愛用し続け、今でもなお全力全開の時に使うマイフェイバリットデッキ。普段の獣族デッキも愛用しているけど、今回はこっちのデッキを使う。

「僕は『仮面竜（マスクド・ドラゴン）』（ＤＥＦ１１００）を守備表示で召喚する！」

盾を持った、赤い刺青の竜が現れる。同時に、観客の反応も動揺に彩られた。

『おい、天上院って獣族じゃなかったのか？』

『オレ中等部で一緒だったけど、いつもあれ使ってたぜ？』

さすがに一緒に通っていた人は分かるらしい。まぁ、ここにきてからは一度も使っていなかったし、知られていないのも当然か。

「ドラゴン族……。そうか、それを使うんだな」

そしてこのデッキを知っている亮は、嬉しそうに笑った。

「あんまり驚かないんだネ？」

「ああ。決着を着けるには、やはりそのデッキが相手でないとな」

さすが我が宿敵（ライバル）。よく分かっている。

「さらにカードを一枚伏せて、ターンエンド！」

「俺のターン、ドロー！　このカードは相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、特殊召喚できる。俺は『サイバー・ドラゴン』（ＡＴＫ２１００）を特殊召喚！」

……出た！

亮のフェイバリットカードにして、絶対の信頼をおくカード。鈍色に輝く流線型の巨体をくねらせながら、フィールドに姿を現す。

「更に俺は『サイバー・フェニックス』（ＡＴＫ１２００）を召喚し、永続魔法『マシン・デベロッパー』を発動！　このカードが存在する限り、全ての機械族モンスターの攻撃力は２００ポイントアップする！」

でべろっぱー？　最近出たパックに入っていた、新しいカードだったか？　しかし亮が使うということは、ただの攻撃力増強カードではない、はずだ。きっと、おそらく、多分。

「行け『サイバー・ドラゴン』！（ＡＴＫ２１００　→　２３００）エヴォリューション・バースト！！」

摂氏数千度を超える熱線が仮面竜を飲み込む。しかしそれは予想通りの攻撃、必然に僕も次の手を打つ！

「『仮面竜』が破壊された時、デッキから攻撃力１５００以下のドラゴンを一体場に呼び出すことができる！　僕は……攻撃力４００

の『ミンゲイドラゴン』を守備表で特殊召喚だ！」

「ミンゲイドラゴンだと？　……ということは、くるか」

さすがに亮は、分かったみたいだ。『ミンゲイドラゴン』はドラゴン族を生け贄召喚する場合、一体で二体分の生け贄にすることができる。わかっているならば当然、次のターンに備え手を打ってくるだろう。だけど、僕はその一歩先を行かせてもらう。

「『サイバー・フェニックス』でこう……」

「この瞬間、リバースカードオープン！　永続罠『血の代償』を発動！　自分のメインフェイズと相手のバトルフェイズ中、ライフを５００払うことで通常召喚を行う！」ＬＩＦＥ　４０００　→　３５００

次のターンに、なんて悠長なことはしていられない。ここで使わなければ、サイバー・フェニックスにあっさり倒されてしまう。

「来るか……！」

思わず亮も身構える。そう、これから出すのは、僕等が中等部で激戦を繰り広げた英雄の一角。若かりし青春の一枚……いや、今でも十分若いんだ、敢えて青臭かったと言っておこう。

とにかく、この勝負では使わざるを得ない僕の切り札。

「行くぞ亮！」

「来い吹雪！」

「『ミンゲイドラゴン』を生け贄に、現れろ！　『真紅眼の黒竜』（レッドアイズ・ブラックドラゴン）（ＡＴＫ２４００）！！」

途端、火山口にでもいるのかと思うほどの蒸気で、デュエルリングが真っ白に染まった。

その中からはっきり見える、黒恫々たる身体に灼熱を思わせる瞳。

『ガアアアアァァァァ』

世界でも数枚しか存在しない伝説級のモンスター、真紅眼の黒竜が降臨せしめた。

久しぶりに見るその姿もさることながら、最上級モンスター特有の何とも形容しがたい威圧感がフィールドを圧迫した。

「ふむ……」

ここまでの流れを整理しよう。

俺は確かに部屋を出る前に、吹雪に遅れる旨を伝えた。

そしてすぐに部屋を飛び出し、デュエルリングへ向かった、はず。

なのに俺はなぜ――。

――ニャァ

「なぜ……猫と戯れているんだろうか」

自問自答してみる。いや、理由はわかりきっているのだが。

ここへ来る以前、俺はそこそこに都会化した田舎に両親、妹と一緒に住んでいた。都会化したといっても本当に微々たるもので、ち

ょっとデパートができたとか、駅が便利になった程度のものだ。つまりは本当に田舎で、野生化した犬や猫を見かけることも多々あった。

それは必然として、動物と触れ合う機会が多いというのも意味している。

――ニャァァ

「……」

前足を持ち上げて裏を見る。

そこには見事なピンク色をした肉球があり、触るたびにプニプニという触感が俺の指を弾く。

正直に言おう。俺は猫が大好きだ。カレーの次点くらいに大好きだ。

そんな俺の目の前にオニキスのような毛並みをしたちょっと丸い黒猫がいたら、どうなると思う。

答えは今、ここにある。

「……これは、遅刻だな」

もう少し、もう少しだけ、この感触を味わっていたい。

背中を撫でるとゴロゴロと喉を鳴らしてくる。

……正直、癒される。

「ああ……いいなぁ、黒猫。不幸を呼ぶとか誰が言い出したんだか。ヨーロッパでは幸運を運んでくると言われているのに、どうして日本ではその良さが理解されないんだか……」

正確にはヨーロッパでは黒猫が横切ったとき何かが起こる、と言

われている。それが良いことか悪いことかはわからないが、悪いことの部分だけ日本に伝わったのだろうと俺は思っている。

――ニャァ

「あ……」

いつの間にか抱きしめていた黒猫が、突然走り出して行ってしまった。

あまりにも突然で、しかも見かけに反して素早かった黒猫は、すぐに見えなくなってしまった。

……名残惜しいが、行ってしまったものは仕方ない。

しゃがんでいた体を起こし、再びデュエルリングのある体育館へと歩を進め始めた。

この時、久しぶりの感覚に浮かれていたからだろう。

袖に付いた数本の毛に気づかなかったのは。

そしてそれが、本来の光り方とは異なっているのに気付けなかったのは。

「『真紅眼の黒竜（レッドアイズ・ブラックドラゴン）』……」

黒竜の誕生により、亮が呟く。彼にとっても、このドラゴンは感慨深いものだろう。

かつては亮のサイバー・ドラゴンと共に、中等部でそれなりに暴れたカード。

それが今、目の前で蘇っているのだから。

「どうかな？　久々に見る僕の真紅眼（レッドアイズ）は」

「そうだな……怖さのあまり、身体が震えてきた」

「嬉しい限りだね。ただそれが武者震いにしか見えないのは、僕の気のせいかい？」

「フッ、さぁそれはどうかな」

亮のデュエルディスクが、僅かに震えているのがわかる。それを押さえようともしない亮の顔に、恐れの色は無い。笑みすら浮かんでいる。それは十中八九、武者震いだった。

「俺はカードを一枚伏せて、ターンエンドだ」

伏せられた一枚のカード。あれはおそらく、真紅眼（レッドアイズ）に対抗するためのカードだろう。

亮はこのカードの真の価値を知っている。知り尽くしている。それは僕がことあるごとに、このカードで勝負し続けた結果なのかもしれない。だからこそ、対策も練られる。

だったら、それすらも真紅眼（レッドアイズ）は飲み込んでしまう。それを知らしめてしまえばいい！

「僕のターン、ドロー！　星5以上のドラゴンがはばたく時、場の魔法・罠カードは全て破壊される！　魔法カード『巨竜のはばたき』を発動！　飛翔せよ、真紅眼の黒竜（レッドアイズ・ブラックドラゴン）！！」

真紅眼（レッドアイズ）は翼を大きく広げ、一つ、羽ばたいた。風が崩れ、波が起こる。

二つ羽ばたき、咆哮した。雄叫びとも、遠吠えともつかないそれは、このデュエルリングに響いた。

三つ羽ばたき、身体が宙を舞う。同時に、全ての魔法・罠は粉々

に粉砕された。

「役目を終えたドラゴンは、僕の手札へと戻ってくる。これで……！」

おかしい。確かに伏せられていたカード諸共、全てを吹き飛ばしたはず。それなのに。

なぜ亮の場には、あるはずのない瓶があるのだろう。

「悪いが、それは予想の範疇だ」

僕の混乱を他所に、亮は淡々と話し始めた。

「お前が罠を警戒し、破壊してくるのは予想できた。そしてその手は、以前俺が嵌まった場面に酷似していた。同じ轍は踏まん。俺は『強欲な瓶』の効果で、一枚ドローする」

強欲な顔がイメージされた瓶から、一枚のカードが浮き上がる。

それは亮の手中に収められ、用を果たした瓶は砕け散った。

これは、決して悪い手ではなかったはずだ。罠を警戒しての除去。教科書に載っているほどポピュラーと言ってもいい。ただ、相手が悪すぎた。

僕の思考を読み取った上でのカウンター。真紅眼（レッドアイズ）を使ってまで放った一撃は、僅かに互いのカードを一枚ずつ破壊するだけにとどまった。

「……読まれていたとは、ちょっと凹むね」

「悪い手ではない。だだ、俺はお前を知り過ぎた」

「亮、それ捉えようによっては誤解を招くからね？」

何を言っているんだろう、この天然ジゴロは。はい観衆達、『やっぱりデキてたのか』とか言わない。やっぱりってなんだやっぱりって。

僕は男だ。男からあんな言葉を言われても寒気しかしない。言われるなら、どうせなら女の子が良かったよ！

「……ま、まぁ、手札に戻ったところで問題は無い！　デベロッパーが破壊されたことで、君のモンスターの攻撃力は元に戻る」

結局どんな効果かわからずじまいだが、余計な不安がなくなったと思えばいいか。

「僕の真紅眼（レッドアイズ）は何度だって蘇る！　手札から『黒竜の雛』を召喚する！」

真紅眼（レッドアイズ）を幼くしたような雛が登場し、ひとつ産声を上げた。

「そして『黒竜の雛』の効果！　このモンスターを生贄に、再び『真紅眼の黒竜（レッドアイズ・ブラックドラゴン）』（ＡＴＫ２４００）を特殊召喚する！」

『グオオォォォ……』

消えても、すぐに現れる。真紅眼（レッドアイズ）を中心にした豊富な召喚手段こそ、このデッキの根幹を支えていると言ってもいい。

『すげえ……最上級モンスターを、手足のように操ってやがる』

『天上院って女誑しなだけかと思ってたけど、実は結構強いのか？』

二人目、後で校舎裏で待ってな。

「さあて！　『真紅眼の黒竜（レッドアイズ・ブラックドラゴン）』の攻撃！　ダーク・メガ・フレア！！」

恫々たる黒い身体から吐き出される、煌々とした黒い炎。それの狙う先は、もちろんサイバー・ドラゴン。

エヴォリューション・バーストで応戦するも熱線は黒炎に飲み込まれ、勢いの増した業火は機械仕掛けの竜を包み込み、やがて爆散した。亮ＬＩＦＥ４０００　→　３７００

「よし！　僕はカードを一枚伏せて、速攻魔法『超再生能力』を発動！　このターン生け贄となったドラゴンの数、一枚をドローしてターンエンドだ！」

油断はできないけど、亮の切り札の一角を倒した。この調子で、自慢のパワーで押し切る！

「俺のターン、ドロー！　俺は『天使の施し』を発動！　デッキから三枚ドローし、手札から二枚捨てる」

ただの手札交換、とは思いたくない。常に相手をリスペクトしたデュエルをする亮ならば、これは次に繋げるための布石。

なるほど、流石に一角を破壊したくらいじゃ、巨大な氷山は崩れたりしないか。

「手札から魔法カード『タイムカプセル』を発動する」

ゴゴゴ、という地鳴りとともに、古代エジプトの棺のようなもの

が出現した。
　棺のフタが開き、カードが一枚納められると、地中へと消えていく。

「このカードはデッキのカード一枚を封印し、二ターン先の未来へと送るカード。タイムカプセルのカード自体は場に残るため、破壊されてしまえばその限りではないがな」

　つまり、次の僕のターン、その次のターンで対処できなければ、亮はキーカードを手にしてしまうということ。厄介だ。

「……少々強引だが、活路を開かせてもらう。『サイバー・フェニックス』（ＡＴＫ１２００）で『真紅眼の黒竜（レッドアイズ・ブラックドラゴン）』（ＡＴＫ２４００）を攻撃！」

　な！？　サイバー・フェニックスの攻撃力は真紅眼（レッドアイズ）に及ばない！
　自爆する気か！？

「速攻魔法『リミッター解除』発動！　『サイバー・フェニックス』の攻撃力は倍となり、真紅眼（レッドアイズ）に拮抗する！（ＡＴＫ１２００　→　２４００）」

　真紅眼（レッドアイズ）と同じ攻撃力だと……！　くそ、防げない！

「粉砕しろ、『サイバー・フェニックス』！」

「迎え撃て、『真紅眼の黒竜（レッドアイズ・ブラックドラゴン）』！」

　迫り来る機械の不死鳥を、荒れ狂う炎が押し返すが、それすらも纏った特攻真紅眼（レッドアイズ）へと到達し、内部のオイルに引火したのか爆散し

た。

「く……だが真紅眼（レッドアイズ）はそう易々と地に落ちない！　罠カード『正当なる血統』を発動！　墓地の通常モンスター一体を攻撃表示で復活させる！　蘇れ、真紅眼の黒竜（レッドアイズ・ブラックドラゴン）！！」

『グオオォォォ……！』

再三フィールドに舞い戻る真紅眼（レッドアイズ）。長い間共に戦ってきたんだ、ここで終わる程柔じゃない。

「やはりか……だが『サイバー・フェニックス』の効果を発動。戦闘によって破壊され墓地に送られた時、デッキから一枚ドローする」

げ。本当に、いつになく強引な方法で無理矢理押してきた。

さすがは亮。相手をリスペクトした上で、その場で最高の手を打ってくる。当然、これも彼にとって最高の手なのだろう。

「これで俺の場はガラ空きだが、問題ない。『サイバー・ヴァリー』（ＡＴＫ０）を召喚し、カードを一枚セット。ターンエンドだ」

サイバー・ヴァリー。前に見たことがある。確か攻撃した時その攻撃を無効にしてカードを一枚ドロー、その後バトルを終了させる効果を持っていたはず。

なら、あの伏せカードはおそらく攻撃に対する罠ではないはず。だったら、対処すべきはやはりタイムカプセル。

「僕のターン、ドロー！　手札から魔法カード『スタンピング・クラッシュ』を発動！　自分の場にドラゴンがいるとき相手の魔法・罠ゾーンのカード、すなわち『タイムカプセル』を破壊する！」

宣言すると真紅眼（レッドアイズ）が大きく足を持ち上げ、タイムカプセルを踏みつぶした。
これで、除外されたカードが手札に加わることは無い。

「そしてカードを破壊した後、相手に５００ポイントのダメージを与える！　ドラゴンスタンプ！」

「ぐ……！」亮ＬＩＦＥ３７００　→　３２００

少しずつだけど、確実にこちらが押している。この流れを、止めたくはない。

「『真紅眼の黒竜（レッドアイズ・ブラックドラゴン）』で攻撃……といきたいところだけど、『サイバー・ヴァリー』は戦闘を無効にしバトルを終了させる効果を持っている。ならばバトルはせず、僕は魔法カード『黒炎弾』を発動する！」

僕の声に反応し、真紅眼の黒竜（レッドアイズ・ブラックドラゴン）はその大きな口を開ける。

「自分の『真紅眼の黒竜（レッドアイズ・ブラックドラゴン）』が場にいるとき、相手に２４００ポイントのダメージを与える！　ゆけ真紅眼の黒竜（レッドアイズ・ブラックドラゴン）！　黒・炎・弾！」

「ぐおおぉぉ！」亮ＬＩＦＥ３２００　→　８００

黒炎弾が直撃し、亮に大きなダメージが追加される。
これで合計３２００のライフアドバンテージ。戦局は明らかに僕に傾いている！

「このターン、僕の『真紅眼の黒竜（レッドアイズ・ブラックドラゴン）』は攻撃できない。カードを一

枚伏せて、ターンエンド！」

「俺のターン、ドロー！　この瞬間、除外されたカードの効果を発動！」

「な、なにぃ！？」

タイムカプセルは破壊した。除外されたカードが使われることはないはずだ。

「ここまでビハインドを食らうとは誤算だったが……それでも、俺の手が止まることはない！　『タイムカプセル』によって除外された『異次元からの宝札』は自分のスタンバイフェイズに手札に戻ることで、互いのプレイヤーはカードを二枚ドローする！」

ということは、破壊してもしなくても、結果的に変わらなかったということ……。つまり、亮の手の上で踊らされていた……？

「……っ！　あーもう！　してやられた！」

「悪いな。お前が相手となると、生半可な戦術ではすぐにやられてしまうからな」

冗談めかして言う亮の顔は、どこか笑っている。圧倒的なライフ差なんて、そこにはないかのように。

「さぁ、カードをドローしろ、吹雪」

「く……！　だけど、君のライフは８００、それに対し僕のライフは無傷の４０００。それに僕の場には攻撃力２４００の『真紅眼の黒竜（レッドアイズ・ブラックドラゴン）

黒竜』がいる。いくら君でも、この状況は厳しいだろう？」

ついでに、僕の伏せカードは『リビングデッドの呼び声』。万が一破壊されたとしても、すぐに蘇生できる。

「……俺を甘く見るな、吹雪！」

「なんだと？」

「俺の場の『サイバー・ヴァリー』には、三つの効果がある。第一に相手の攻撃を無効にし、カードをドローする効果。第二に場のカードと自身を除外しカードを二枚ドローする効果。そして俺は、『サイバー・ヴァリー』の第三の効果を発動する！」

「効果が三つあるモンスターだって？」

以前ケイとのデュエルで第一の効果を使ったのは見ていた。故に僕はそれに注意し、攻撃をしなかった。しかし相手は亮。その手が吉と出るか、凶と出るか……。

「第三の効果。それは『サイバー・ヴァリー』と手札のカードを除外することで、墓地のカードをデッキのトップに戻す効果。俺は手札の『異次元からの宝札』を除外することで、墓地の『サイバー・ドラゴン』をデッキに戻す！」

サイバー・ドラゴンがデッキに戻った。だけど、デッキにいるだけでは攻撃力の高いサイバー・ドラゴンはリクルートされることはない。ならば、何を狙っているんだ？

「俺は魔法カード『強欲な壺』を発動！　二枚ドロー！　そして『

サイバー・ドラゴン』（ＡＴＫ２１００）を特殊召喚する！」

なるほど、デッキの一番上に戻されたということは、ドローすれば確実に引くことができる。だけど、これだけで終わるはずがない。あの伏せられたカードはまだ使われていない。

「俺は永続罠『リビングデッドの呼び声』を発動！　この効果で、墓地のモンスターを攻撃表示で特殊召喚する！　俺が選ぶのは、『プロト・サイバー・ドラゴン』（ＡＴＫ１１００）！」

「なんだって？　君の墓地にあるのは『サイバー・フェニックス』だけのはず……。そんなカードいつの間にっ」

「あっただろう？　一度だけ、俺がカードを墓地に送るチャンスがな」

墓地に送るチャンス……コスト？　だけど、使ったカードなんて……っ！

「『天使の施し』か……」

「正解だ。蘇れ、『プロト・サイバー・ドラゴン』！」

なるほど、これなら殆どのモンスターを召喚できる。手札にさえ来ていれば、墓地に送って『リビングデッドの呼び声』でいつでも蘇生できるからね。

しかしまさか……僕と同じカードを伏せていたとは。

「だけどそのモンスターじゃ、僕のモンスターを倒せないよ」

「わかっているさ。俺がこいつを呼んだのは、なにもバトルするためじゃない」

「なに？」

「俺は『アーマード・サイバーン』（ＡＴＫ０）を召喚！　そして、場の『プロト・サイバー・ドラゴン』にユニオン！　現れろ、アーマード・プロトサイバー！！」

コードが繋がれている身体に、さらに金色の装甲が、鈍色の砲台が装着されていく。

ユニオンしたその姿は、伝説のデュエリストの一人、海馬瀬人が使う『ＸＹＺ－ドラゴン・キャノン』に似ているようにも見えた。

「このカードは『サイバー・ドラゴン』もしくは『サイバー・ドラゴン』を融合素材とするモンスターにのみ装備できる。そして『プロト・サイバー・ドラゴン』は場にいるとき『サイバー・ドラゴン』として扱われる。さらに『アーマード・サイバーン』の効果発動！　装備モンスターの攻撃力を１０００ポイント下げることで、相手のモンスターを破壊する！（ＡＴＫ１１００　→　１００）」

「な、なんだって！？」

「照準、真紅眼（レッドアイズ）！　サイバーキャノン、ファイア！！」

対の砲台から、エネルギー波が発射された。

二つのエネルギーは軌道上で混じり一つになり、その威力を増幅させながら真紅眼の黒竜（レッドアイズ・ブラックドラゴン）を貫いた。当たったところから、真紅眼の黒竜（レッドアイズ・ブラックドラゴン）はデータの粒子となり、消滅した。

この様子をもしもケイが見ていたのなら、必ず言っていただろう。

これ、なんて荷電粒子砲？　と。

「く、だけど、永続罠『リビングデッドの呼び声』を発動！　蘇れ『真紅眼の黒竜（レッドアイズ・ブラックドラゴン）』！」

意外な手だったけど、これでプロト・サイバー・ドラゴンの攻撃力は僅か１００、しかも通常召喚をしているから、これ以上モンスターが増えることは……。

そこまで考えて、違和感を感じた。そうも、このデュエルはおかしい。

なんというべきか、亮らしくない。サイバー・ドラゴンは使ってくるし、デッキ・墓地・フィールドと、あらゆる手を使ってくるのも相変わらずだ。

だけど、いや、だからこそ言える。

亮の本気は、まだこれからだと。

「俺の狙いモンスターの破壊じゃない、装備魔法『機械複製術』を発動！　攻撃力５００以下の機械族の装備モンスターの同名モンスターを、デッキから二体特殊召喚する！　俺が選択するのは、『プロト・サイバー・ドラゴン』、すなわち『サイバー・ドラゴンは』を二体特殊召喚する！」

「サイバー・ドラゴンが……三体並んだ！」

そうだ、これだ。これが亮だ。デュエルアカデミアの帝王。

僕の予想が正しければ、いや亮がするならば、おそらく次の手はサイバー・ドラゴンはの……。

「吹雪、お前は強い。だからこそ、この俺の全身全霊を以てして、倒す！」

……来る！

「手札から、魔法カード『パワー・ボンド』を発動する！」

やっぱり、サイバー・ドラゴンの三体融合！　しかもパワー・ボンドまで使うとは……！

「これは機械族専用の融合カード。場の三体の『サイバー・ドラゴン』を融合素材に、最強のサイバーモンスター、『サイバー・エンド・ドラゴン』を融合召喚する！！　出でよ、『サイバー・エンド・ドラゴン』（ＡＴＫ４０００）！！」

三体のサイバー・ドラゴンは、パワー・ボンドによって発生した次元の歪みに飲み込まれ、その身体を歪めていく。

やがて開かれる次元の裂け目。そこから現れるのは、三つの首を持つ最強のサイバー。

圧倒的な威圧、あの『Ｆ・Ｇ・Ｄ（ファイブ・ゴッド・ドラゴン）』と比肩する程の迫力をもつサイバー・ドラゴン最終形態が姿を現した。

『『『ギャオオォォォ……！！！』』』

「……ッハ！　参ったねこれは……」

「『パワー・ボンド』によって融合されたモンスターは、その攻撃力を二倍にする。よってサイバー・エンドの攻撃力は４０００の倍だ！（ＡＴＫ４０００　↓　８０００）」

攻撃力８０００のモンスター。ついさっき見たＦ・Ｇ・Ｄ（ファイブ・ゴッド・ドラゴン）でも、ここまでの威力はなかった。

「……今回も、黒星か」

サイバー・エンドを召喚した亮には、僕は勝てたことがない。それは中学から、いや会って最初のデュエルから勝てたためしがない。だけど残念とは思えない。このモンスターこそ、亮の全力。それを相手に負けるんだから、悔いはない。

……ま！　次は勝たせてもらうけどね！

「さあ来い！　亮！」

「『サイバー・エンド・ドラゴン』（ＡＴＫ８０００）の攻撃！エターナル・エヴォリューション・バァァーストォォ！！！」

三つの首から放たれたエヴォリューション・バーストは、真紅眼（レッドアイズ・ブラックドラゴン）の黒竜を跡形もなく飲み込み、そして全てを飲み込んだ。吹雪ＬＩＦＥ４０００　→　０

『勝者！　シニョール丸藤なノーネ！！』

『『『ウオオォォォーー！！』』』

湧き上がる生徒達。その歓声は留まるところを知らない。

最後の衝撃に吹き飛んだ身体を起こすと、亮が近づいてくるのが見えた。

「大丈夫か？」

「ああ。完敗だよ、亮」

「言ってくれるな。俺だってギリギリだったさ」

亮が言うには、パワー・ボンドを使った後ダメージを無効にする手段がなかったらしい。つまり、文字通り決死の一撃だったというわけだ。

「なんにせよ、おめでとう亮。もう一試合勝てば、代表入りだね」

「ああ。油断はできないが、きっと勝って見せるさ」

手を拳の形にしてぶつけ合う。ホント、良い奴だよね。

さて、これで僕の出番は終わりか。まあ良いデュエルできたし、まずまずの結果かな。

しかし何か忘れているような気が……。

「よう」

「ん？　ぬおわ!?」

「人の顔を見て悲鳴あげるとは……何か付いているのか？」

「だったらまずそのお面を取ってくれないかな!?」

いきなり出て何を見せるんだコイツは!?

僕が悲鳴を上げてしまったのは他でもない。遅刻すると言っていたケイがいきなり現れて、しかも『ツタン仮面』を顔に付けているもんだから本当に心臓に悪い！　てかどこから見つけてきたそんなもの！

「ケイ……お前、何してきたんだ……」

「デッキを作りに」

「……そうか」

亮もかなり呆れていた。

「ところで二人が終わったということは、次は俺だな？」

「まぁ、そうだな」

「よし、行ってくる」

そう言って踵を返すケイ。いきなり現れたと思ったらすぐに試合。忙しいなあ。

ただそのケイを、亮が止めた。

「ケイ」

「なんだ」

「行くなら、仮面は外していけ」

「……おっと」

このまま出る気だったのか！？

「……はぁ。全く、何考えているんだか……」

「……同感だ」

僕と亮は二人揃って、ケイの行動に呆れていた。
ただまあ、これがいつものケイ。この調子なら、次のデュエルはきっと勝ってくれるだろう。
でもそうなると、どっちを応援すればいいんだろう？

二十一／再戦と挑戦　可能性の竜（後書き）

【1.　一回戦です】

月「よ・う・や・く・始まりましたね」

言葉に棘が……！　ま、まあやっと本選です。

月「それにしても最初は帝王と王、カイザーとキングですか」

二人は一年次から仲が良かったっぽいし、中等部からの知り合いだと“でっち上げ”ました。

月「捏造なのでお間違えないようにお願いします」

……公式にはない、よね？

【2.　ケイ、お前なにしてんの……】

デッキ作りに夢中になって遅刻しました。

月「らしいと言えばらしいですけどね……」

そして作ったデッキは次回お披露目です。

月「予測されていますが、まぁ、概ねその通りです」

ちょっ、喋っちゃだめぇ！（´；ω；`）

【3.　モフモフ……】

猫可愛いよ猫。

月「小動物苦手なくせに何言ってんだか……」

見るだけはいいんだよ！　襲い掛かってこないから！

月「……ところで、ものっそいわかりやすい伏線ですね」

前も言ったけど伏線はわかりやすいくらいが。

月「はいはい。まあこれがどこで拾われるかなんて考えちゃいないんでしょう？」

え、考えてるよ？

月「……え？」

え？

【４．　次回予告ナリ】

次回はようやく主人公のデュエルです。

月「ついでに謎の四人目が登場です」

どんなデッキなのかは登場してからのお楽しみ。ただ親善試合編のみの登場なので少しバランスブレイクするかもしれません。

月「果たして主人公はどう戦うんでしょうかね」

次回、『知略と計算』！　さあ暴走するよ！？

月「いつものことでしょ、それは」

※デュエルがない回があるとのご指摘を受けたので、作者なりに考えてみました。

今回以後デュエルの無い回を入れる場合は、その数時間後にデュエル回を入れるようにします。

これは文字数の関係上、どうしても長くなってしまうのを防ぐためです。

やや読みにくくなるかもしれませんが、あらかじめご了承ください。

※２０１１／１０／１９　加筆・修正

二十二／知略と計算　相手を尊敬する、それこそリスペクト！（前書き）

お待たせしましたあああああ！！（スライディング土下座）

月「初っぱなから土下座とは良い覚悟ですね。歯を食いしばりなさい」

え、あの、せめて言い訳を！

月「問答無用です」

～しばらくお待ちください～

月「えー、では長らく時間をあけてしまった二十二話。どうぞ」

……。

月「返事が無い。ただの屍のようだ」

……はっ！？　二十二話、どうぞ！

月「遅い上に二番煎じですね」

二十二／知略と計算　相手を尊敬する、それこそリスペクト！

周囲が生徒の話し声で騒音を立てやがっている中、俺は調整したデッキとともにデュエルリングに上がる。

これから始まるのはここ、デュエルアカデミアの姉妹校であるノース校との友好デュエルをするための代表を決める戦いの本選第二戦。あれほどの規模の予選もあったのだから、当然相手も相応の実力を持ったやつが出るのだろう。

とは言っても、負ける気はさらさらない。

既に亮が吹雪と戦い、決勝戦への切符を手に入れている。現在亮に負け越しの俺としては、この代表決定戦でリベンジを図りたいところである。

「（……ふぅ）」

意図せずに、ため息が出る。緊張しているのか、心なしか動悸が激しい。

負けたら終わりのトーナメント戦。勝ち上がるしかないというプレッシャーが、今頃になってのしかかってきたのかもしれない。

こんな時はアレだ。掌に「人」を書いて飲み込むおまじないだ。おそらく世間で最もポピュラーであろうおまじないには、科学的な根拠はない。どこかの社長、もとい会長なら「そんなオカルトには興味はない」とバッサリ切り捨てるだろう。しかしそれは圧倒的な自信があるからこその言葉。そんなものを備えていない俺は、対戦相手がデュエルリングに上がってくるまで件のおまじないをして、自分を落ち着かせるために素数を数えていた。

孤独な数字、素数がようやく大台の五桁に到達しようかというところで、対戦相手の生徒が来た。

相手はイエローの制服を着ており、ずいぶんと鋭い目つきをして

いる。目の下の隈が、どこか不健康な感じを見せている。

『ア、アー。デーハ、選手が揃ったとこローデ、二回戦を始めるノーネ！』

絶好調のクロノス節を聞き流していく。話している内容はいずれも一回戦で聞いた注意事項だらけで、聞いている生徒はほぼ皆無である。気づかないクロノス教諭は喋りつづけている。

待っている間に互いにデュエルリングの中央まで足を運び、互いにデッキをシャッフルする。公平なデュエルを行うために必要なことではあるが、専ら無視する人は後を絶たない。こちらから何も言わずともデッキ交換をしたこの生徒は、今までの相手よりも公平なやつなのかもしれない。

デッキシャッフルが終わり、互いにデッキを返す。デュエルディスクにセットし、空いた手を前に出す。試合前の握手だ。

「よろしく」

「……」

相手からの反応はない。

「……」

「……」

なおも反応はない。

「……」

「……」

「……」

「……」

頼むから、何か反応してくれ。この差し出したままの腕の行き先は、どうしたらいいんだ。

「……ふん」

鼻を鳴らすと、ようやく握手を返してくれた。よかった、このまま放置プレイをされるのだけは避けたかったから本当に良かった。

……と思ったのもつかの間。俺の手の骨が悲鳴を上げ始めた。

「……っ」

「……よろしく、なっ」

語尾を強めて言われ、同時に手の握力も上がっていく。

……なるほど、いい根性していやがる。

「……っ？」

「どうも御丁寧、にっ」

目には目を、という言葉がある。元はどこかの文明の法だったという話だが、先人は良い言葉を残してくれたものだ。

俺の握力は、スチール缶を握りつぶす程度には鍛えてあるんだ。

「……いや、どういたしまし、てっ」

「っ！　……お互い頑張ろう、ぜっ」

「……っ！　ああ、もちろん、だっ！」

「んぐっ……楽しみだな、あ！」

「「……！（ガンのくれ合い）」」

断言する。こいつとは仲良くなれないと。

『ン～～～スプレンッディ～～ド！！　流石はオベリスクブルーとラーイエローの強者！　お互いの健闘を称えるための握手を進んでするなンーテ、素晴らしい心意気なノーネ！』

意地の張り合いだとは何人が見抜けただろうか。

クロノス教諭の挨拶と同時に手を離す。その前に離してもよかったんだが、それはそれで嫌だった。なんというか、負けた気がして。

そして、審判の時―（？）はやってきた。

『デ～ハ、早乙女ケイ、ヴィ～エス、闇野静治郎（あんのせいじろう）。お互い向かい合いましテーノ……デュエル、スタートゥオォ～～！！』

「「デュエル！！」」

ケイ　ＬＩＦＥ　４０００

闇野　ＬＩＦＥ　４０００

さあもう後には引けない。この手の痛みの恨み、存分に晴らさせ

てもらおうか！

「……ねえ亮。あのケイの顔、絶対くだらないこと考えてるよね」

「自覚がないんだろう。言ってやるな」

何かひどいことが言われている気がしないでもないが、敢えて無視する。

さて、どうやって倒してやろうかな……と言っても、今回は調整したばかりのデッキ。勝利のためのロジックを組み上げる必要がある。

手札に目を通し、即座に判断。この場合、後攻の方がやりやすいか。

「オレのターン、ドロー！　オレは『クリッター』（ＡＴＫ１０００）を召喚！」

クリッターか。

今やほとんどのデッキで使用される程、汎用性に富んだ下級モンスターカード。最初の一手としては普通だろう。

「更に魔法カード『二重召喚（デュアルサモン）』を発動！　このターン、俺は二回の通常召喚を行える！　俺は『クリッター』を生け贄に捧げ、来い！『マインド・オン・エア』（ＤＥＦ１６００）！！」

クリッターを生け贄にして、上級モンスターの召喚。これほど理想的なパターンもそうそうないだろう。

クリッターにはフィールドから墓地に送られた時、デッキから攻撃力１５００以下のモンスターを手札に加える効果が備わっている。当然、生け贄召喚に使われたとしてもそれは有効だ。

そしてそれによって召喚されたマインド・オン・エアは……
どんな効果だったかな。

「墓地に送られた『クリッター』の効果で、デッキから攻撃力１０００の『疫病狼』を手札に加える。そして『マインド・オン・エア』の効果発動！　マインド・ハック！」

「何を……！？」

なんだ、この感覚は。
モンスターの眼が怪しく光ると同時に、脳髄を誰かに見られているような感覚が俺を襲った。
その悪寒が止まることはなく、しばらくして俺の手札がソリッド・ビジョンによって映し出された。

「こいつの効果は相手の手札を全て見抜く。お前はこの状態でデュエルをしなくてはならない！」

「（……これまた、厄介な効果だな）」

敵の手札の把握。これはデュエルにおける最大のアドバンテージと捉える研究者もいる。
手札がわかれば対処法も容易に思いつくだろう。そしてあらゆる手を考えた上でのデュエルができる。
優介の使うオネストなんかも、この手のカードは天敵だろう。手札から使えるという奇襲性も、事前に分かればい意味が無い。

「ピーピング能力か……」

「え、りょ、亮？　どうしたんだい、そんな怖い顔して……」

「いや、なに……。ピーピングはあまりにもリスペクト精神とかけ離れているのに、少々思うところがあるだけ」

亮の言うリスペクト精神について、後日じっくりと話し合う必要がありそうだ。

あの伝説のデュエリストの一角、海馬瀬人の影響からか、ピーピングにはあまり良い印象はもたれていない。というか嫌われている比率の方が圧倒的に高い。

ピーピング能力の真髄はただ手札の視認ができるだけでなく、むしろ他のカードと合わさることで発揮される。

例えば手札にある状態で表向きにしてライフを５００回復する『黄金天道虫』、表にする手札を公開する、という行動が既になされているので効果を使うことができなくなる。このように特定のカードにのみ被害が及ぶのなら安いものだが、カード名を宣言して捨てさせる『マインド・クラッシュ』などを使われた日には目も当てられない。落とすべきカードが見えているのだから、間違えるはずもないのである。

『テメェ！　ピーピングなんて汚ねえぞ！』

『まともに勝負しろー！』

そして世間の認知と寸分違わぬ感覚を持つアカデミア生徒。やはりピーピングに対する風当たりは強く、多くの生徒が今の状況の批判に回っている。

「（……しっかしなぁ）」

毎度そうだが、今回も疑問に思ってしまう。なぜここまで批判さ

れるのかと。
　確かにピーピングは手札を覗き見るという実に悪趣味極まりない戦術であるが、戦術であるのには変わりない。それは立派な手段であり、デュエルをする以上決してなくならない戦法である。それを批判、非難する趣味は俺には無い。亮もそれがわかっている以上、思うところがあってもそれ以上は言わないでいる。

「（むしろ文句を言うくらいなら、どう抗うかを考えるべきだと思うが……）」

「……どいつもこいつも、文句言いやがって……」

　思考に時間を費やしている中、渦中の人物である闇野は忌々しそうに顔を歪めて毒づいた。周囲の罵倒を一身に受ける身としては、面白くないのは事実だろう。
　とは言ったものの、いつまでも気にしている訳にもいかない。手札が「……オイ」知られているのならこちらの手もほとんど読まれるということ。それを「オイッ」かいくぐって裏をかくというのは中々難しいとは思うが、かといって愚直に正攻法で挑んで「オイッッ！」もってアレ？

「なんだ？　何か用か？」

「お前のターンだ！　早くしやがれ！」

……ふむ。考え過ぎたか。

「……ったく。どうせお前も軽蔑してんだろ、こんな手使いやがってってよぅ」

……は？

「わかってんだよ、これが嫌われてることくらい」

「いや、俺は別に……」

「けどよ、仕方ねえんだよ。他に組むほどカードがねえんだ。デッキはこれしかねえんだからよ」

「だから俺は……」

「ああ？　さっきからなんだよ、何か文句あんのかよ？　いや、文句しかねえか？」

皮肉気味に笑う闇野だが、俺にはその笑いがもの悲しいものに見えた。

しかしよく喋るものだ。たまには人の話を聞くくらいの余裕を持たないと身体が保たない……と、今はそれはどうでもいいか。

「闇野。俺は別にお前のやり方に注文をつけてるつもりはないぞ？」

「……はぁ？」

こいつ馬鹿か？　みたいな顔をするのはやめてくれ。地味に傷つくから。

「なんだお前は？　あれか、マゾなのか？　自分で認めるのも嫌だが、こんなえげつない方法が嫌じゃないとか、実はホンモノなのか？」

「その認識については後でじっくり話し合うとして、俺はその戦法もありだとは思っている」

俺に対する認識は置いといて、これは紛うことなき俺の本心である。先にも言ったが、ピーピングは立派な戦術であり、戦法である。人によっては嫌悪するべきものかもしれないが、少なくとも俺はそんなことはない。むしろ推奨すらしたい。

ここまで戦ってきてわかったことだが、現在のアカデミアのデュエルパターンは力押しのパワーゲームとなっている。実技最高責任者のクロノス教諭を始めとして、ほとんどのオベリスクブルー、ラーイエローの生徒が高攻撃力のモンスターカードを使っている。サポートカードも、弱体化ではなくパワー強化がほとんどである。

集団心理とは恐ろしいもので、一種の洗脳と言ってもいいかもしれない。みんながするから、みんなが使っているからと、意図しようとしまいと自然に周りと考え方が近くなる。独裁政治なんかが良い例だ。九人が独裁者を讃えれば、十人目も周りに倣い讃え始める。そしていずれそれに違和感を覚えることがなくなる。九十九人がすれば百人目も、九百九十九人がすれば千人目も同じことになる。それが今のアカデミアでも起きている。

デュエルアカデミアではデュエリストの個性を尊重しているが、この現状を打破するためにも個を持ったデッキ使いというのは必要だと思っている。

「俺だって直接攻撃（ダイレクトアタック）なんて、まるっきりモンスターを無視したデッキを組んでいるんだ。お前が何を使ったって、別に構いやしない」

「……いや、だけど」

「五月蝿い黙れアホ」

「あんだとテメェ！！」

いい感じに怒り心頭な彼であるが、俺としては自己否定などせずに己の道を邁進してもらいたい。先も述べたが、この学園の方針はやや固まりつつある。それを打破――とまではいかなくとも、緩和するためにも、周囲のブーイングに負けてもらっては困る。

……と言うのが建前である。

「正直なところ、アカデミアには似たようなタイプのデュエリストしかいないからな。お前みたいに特殊なデッキ相手なのは腕が鳴る」

「……マゾじゃなくて戦闘狂（バトルジャンキー）かよ」

大きなお世話だ。

「ケイってぶれないね……デュエルに関しては」

「……そう、だな」

やや不本意な会話が聞こえてくるが、全てシャットアウトする。なんというか、聞いていたらキリがないという意味で。

「こうなったらもう容赦はしねえ。カードを二枚伏せて、ターンエンドだ！」

「俺のターン、ドロー！」

引いたカードは俺のデッキの特攻隊長『逆巻く炎の精霊』。手札は『マインド・オン・エア』によって曝け出されているので、下手に策を仕込んだところで無意味だろう。

ならばここはいつも通りのパターンを貫き通すしかない。

「罠発動『マインド・クラッシュ』！　カード名を宣言し、相手の手札から該当するカードを墓地に送る！」

……と思ったが、貫くまでもなかった。

『マインド・クラッシュ』も『マインド・オン・エア』も、単体では大した脅威ではない。手札が晒されたところで対抗手段が無ければ意味をなさない、手札から捨てさせるにしても対象のカードがわからなければ誤爆する確率の方が高い。

しかしそれはあくまで単体で機能した場合。真に恐ろしいのは、この二つの効果が組まれたとき。

「俺が指定するのは、当然今引いたお前のデッキのエース、『逆巻く炎の精霊』だ！」

――まさに今である。

「チッ……なら俺は『機動砦のギア・ゴーレム』（ＤＥＦ２２００）を守備表示で召喚。カードを二枚伏せて、ターンを終了する」

「この瞬間、罠カード『砂塵の大竜巻』を発動。右のカードを破壊してもらうぞ」

今しがた伏せたカードは、呆気なく竜巻に飲み込まれてしまった。

伏せていたカードは『攻撃の無力化』と『リミット・リバース』。奇襲性のある罠も知っていれば、種の割れた手品も同じ。

「そして俺は間抜けなピエロか……」

「何の話だ」

だがこれで攻撃を防ぐ手立てはモンスターのみ。どこまでライフを保てるかが問題となってしまった。

「オレは『砂塵の大竜巻』第二の効果で、手札から魔法・罠を一枚セットする。そしてオレのターン、ドロー！」

相手の手札は今引いたもので二枚。そして内一枚は『クリッター』の効果で手札に加えた『疫病狼』。もう一枚と伏せカード次第ではひょっとするかもしれないが、座して待つしか出来ぬ身。相手が動くのを待つしかない。

「手札から『強欲な壺』を発動し二枚ドロー。そして『疫病狼』（ＡＴＫ１０００）を攻撃表示で召喚する」

『餓飢飢飢……』

身体中からおかしな液が漏れているいかにも不健康そうな狼がこちらを睨みつけてくる。その様子はさながらハイエナのようであり、眼光はライオンのそれと似ている。

「『疫病狼』の効果発動！　こいつの元々の攻撃力を倍にする！」

「……だが倍になった『疫病狼』の攻撃力は２０００、ギア・ゴーレムの守備力には届かない」

手札が割れていた以上、それを考えない相手ではないだろうが。

「ふん、そんなことは百も承知だ。魔法カード『おろかな埋葬』を発動。デッキからモンスターを一枚墓地に送る」

「自分から墓地に送るだと？」

だから亮、いきなり喋るな。

「墓地にあることで効果を出すカードも、微量ながら存在するからね。そこまでおかしな一手ではないと思うけど？」

「だがこの場面で墓地に送るカードは……いや、だがこれは……」

――ゾクリ。

背中に冷水を流されたような悪寒。

発動されたカードはあまり使われなくとも、極平凡にある普通の魔法カード。それなのにこの一瞬で氷水を浴びせられたようなこの感じはなんだろうか。

俺が得体の知れない感覚に襲われていると、ギア・ゴーレムの背後にぼんやりと影が現れた。

「まさか、本当にあのカードなのか？」

「え、ねぇ亮、あのカードって？」

「墓地に送られることで効果を発揮するモンスターの代表格、あの伝説のデュエリスト、武藤遊戯も使った伝説のレアカード、『暗黒魔族ギルファー・デーモン』……！　しかしそれは、今では武藤遊戯のデッキにしか入っていないはず……」

――違う。

頭の中でダレカが叫ぶ。

これは、ソンナモノじゃない。もっと違うものだと。

その考えが肯定されるかのように、現れた影が徐々に形を作っていった。

「オレが墓地に送ったのは『ＡＤチェンジャー』。墓地にあるこのカードを除外することで、フィールド上のモンスターの表示形式を変更する。当然俺が選んだのは『機動砦のギア・ゴーレム』だ」

また知らないカード名が出た。

これで知っている限りで二回。他にも亮や吹雪、優介に竜剛院に絢、全員の証言を元に考えると、既に二桁近く複数の面で謎のカードが出てきている。

これだけでも既におかしい。だが、俺にはさらに明確にわかる。

この『ＡＤチェンジャー』というモンスター。影となって現れても、なおも濃く残る黒い瘴気のようなもの。

それを視認した途端、背筋に走る寒いものが強くなった。

「この効果によりギア・ゴレームは攻撃表示に変更。これで守備力の壁はない！　行け『疫病狼』（ＡＴＫ２０００）！　ギア・ゴーレムを噛み砕け！」

圧倒的に低い打力で抵抗できるはずも無く、ゴーレムは一瞬の拮抗も無くスクラップとなった。ケイＬＩＦＥ４０００　→　２８００

「さらに『マインド・オン・エア』で直接攻撃（ダイレクトアタック）だ！」

罠が知られている以上、隠す必要は無い。出来る限りダメージを減らすことが、唯一の道といったところか。

「永続罠『リミット・リバース』発動！　ギア・ゴーレムを蘇生させる！」

再び強固なガードを無防備に下げた状態で、敵モンスターに立ちはだかるゴーレム。
また成すすべも無く破壊される。その結末を思い描いたところで、変化は起きた。

「早乙女。『疫病狼』の効果はな、元々の攻撃力が倍になる、単純でわかりやすい効果だ」

自慢の金属の身体が、毒々しい紫色に変色していく。表面はボロボロとはがれ落ち、中まで浸透しているのが見て取れる。

「強い効果なのは、それ相応のリスクがあるからだ。こいつは自分の効果を使ったら、エンドフェイズに破壊される。もったいねえと思わないか？」

「……なにが言いたい」

「つまりこういうことさ！　罠発動『魔のデッキ破壊ウイルス』！！」

デッキ破壊ウイルス。かつて伝説のデュエリストである海馬瀬人が使った非常に希少なウイルスカード。
その効果は、このデッキに対して天敵そのものである。

「効果は……知ってるよなぁ？」

「……ああ。相手の攻撃力１５００以下のモンスターを手札、フィールドから全て破壊する。更に三ターンの間ドローした攻撃力１５００以下のモンスターも破壊される。だが発動には、特定条件のモ

ンスターを生け贄にしなければならない」

鬼門であるこのカードを、俺は知らないはずがなかった。元の攻撃力が１０００を超えない俺のデッキでは、モンスターは引かれた瞬間に破壊が確定してしまう。

俺の言葉を繋いだのは、意外にも吹雪だった。

「そうか、『魔のデッキ破壊ウイルス』を発動させるには、闇属性で攻撃力２０００以上のモンスターをコストにする必要がある。しかもそれはフィールド上に存在している時の数値で、『疫病狼』は全ての条件を満たしている。しかもエンドフェイズに破壊されるから、生け贄にした方が有効だ。すごい、プレイングに全く無駄がない！」

更に言うのであれば、『クリッター』を使うことで確実に生け贄モンスターを確保、『砂塵の大竜巻』の効果でウイルスカードをセットすることで破壊される確率を下げる。緻密なまでに考え抜かれた運用法には、敬意すら覚える。

「ウイルスの効果で攻撃力８００のギア・ゴーレムは破壊！　そして、『マインド・オン・エア』の直接攻撃（ダイレクトアタック）だ！」

「グ、アァ！」ケイＬＩＦＥ２８００　→　１２００

様々な策を弄しても攻撃を止められず、僅か一ターンの間に大幅に削られてしまった。

この流れは、非常にまずい。

「オレはターンエンドだ！」

一度頭を振って、雑念を振り払う。
今はデュエル中だ。気になることではあるが、全ては後に回す。
大事なのは、このデュエルに勝つこと。

「俺のターン、ドロー！　ドローしたカードは『強欲な壺』、魔法カードだ」

モンスター効果とウイルスの効果により、俺の手札は全て分かりきっている。これだけでも相当のディスアドバンテージだ。一度すべてをリセットしたいが、そのためにはまずピーピング能力を持つ『マインド・オン・エア』を除去する必要がある。ばれてこそいるものの、幸い手が無い訳ではない。しかも相手は手札を使い切り、フィールドにはモンスターが一体のみ。伏せカードもない。状況を覆すには、このターンしかない。
必要なのは、一枚のカード。

「俺は『強欲な壺』を発動！　デッキから二枚ドロー！」

ドローカードは『リロード』、そしてモンスターカード。
このデッキのモンスターカードは総じて打点が低い。当然、このカードの攻撃力も１５００には届かない。

「……おい」

「なんだ？」

「なんだじゃねえ！　お前のデッキに１５００を超えるモンスターはない！　なのになんで破壊されねえ！」

いつまで経っても効果が発揮されないウイルスに疑問を覚えたの

か、闇野が吠え立てる。
　散々言ってきたが俺のデッキには１５００以下のモンスターはいない。だが、その中には攻撃力を持たないカードも存在する。
「俺の引いたモンスターは『グリード・クエーサー』。こいつの攻撃力は未知数。よってデッキ破壊ウイルスの対象外となり、破壊を免れる！」
「うまい！　攻撃力不明ならウイルスには汚染されない！」
「早とちりをするな吹雪。『グリード・クエーサー』は七ツ星モンスター、フィールドにモンスターのいないケイには召喚は難しい」
「あ、そうか……」
「だが……出来ないことはないな」
「え？」
　手札は揃った。やや足りないが、なんとかするには十分だろう。
「魔法カード『浅すぎた墓穴』を発動。互いに墓地からモンスターを一体セットする。俺は『機動砦のギア・ゴーレム』を選択しセットする」
「ならオレは『クリッター』だ」
　『クリッター』がいれば手札にモンスターを加えることができる。妥当な選択だろう。
　もっとも、大して関係ないことだが。

「手札から『クロス・ソウル』を発動！　このターン、生け贄召喚に必要なモンスター一体を相手のモンスターで代用できる！　俺が選ぶのは、そこの邪魔な『マインド・オン・エア』だ！」

「チッ、さっきはモンスターでなく、『クロス・ソウル』を選ぶべきだったか」

思わずといった風で舌打ちする闇野。なまじ全ての手札が見えるだけに、その場で一番厄介な炎の精霊を破壊したのは失敗だったようだ。俺から見れば、あの場では十分な手である。ここでこのモンスターを引くなんて、その時には分からなかったのだからな。

「二体のモンスターの星（いのち）を食らい、召喚せよ！　『グリード・クエーサー』（ＡＴＫ？）！」

あらわれたのは異星人（エイリアン）とも侵略者（インベーダー）ともつかない、身体が顔になっている異形の怪物。

顔が身体に付いているからといって、決してデス○シーンではない。

「『グリード・クエーサー』の攻撃力は、自分のレベルの３００倍となる。このモンスターはレベル７。よって攻撃力は２１００だ」

低ステータスばかりのモンスターの中から現れた、２０００オーバーの攻撃力。しかしあくまで上級モンスターの基準点なだけで、そこまで高いことはない。

「『クロス・ソウル』を使ったターン、攻撃は行えない。カードを一枚セットし、ターンエンドだ」

「オレのターン、ドロー！　……チッ、カードをセットしてターンエンド！」

「俺のターン、ドロー！」

「ウイルスの効果でドローしたカードを確認する。見せろ！」

「……『偉大魔獣ガーゼット』。攻撃力は０、よって破壊される」

生け贄にしたモンスターの攻撃力で自身の攻撃力が決まるのだから、攻撃力不明でもいいのにと何度思ったことか。しかし攻撃力が０となっているお陰で『クリッター』の効果でサーチができるので、文句は言えない。

「『グリード・クエーサー』（ＡＴＫ２１００）！　『クリッター』を食らい尽くせ！　ライフ・グリード！！」

裏側になっている『クリッター』のもとまで巨体をゆっくりと動かしていき、顔のような身体から生えている手で器用に敵を持ち上げると。

突然だが、第一回バトルシティの二回戦を知っているだろうか。あの伝説のデュエリスト、城之内克哉のデュエルだ。

彼の相手はマリク・イシュタール、本名リシドと言う男だったのだが、リシドが扱うモンスターの中には神の眠る祭壇を守る、協力な守護獣がいた。

そのモンスターの名はセルケトといい、テキストには聖獣と書かれてはいたものの、姿形は巨大なサソリ。巨大な虫だった。

ここまで聞いて、聡明な者なら気付くだろう。俺が何を言いたい

のか。

　このセルケトというモンスターの攻撃方法は、口で相手モンスターを吸収するというものだった。しかしサソリに吸引などという相手に優しい吸収方法は持ち得ていない。

　ではどうやって行ったのか？　答えは――目の前にある。

『グリード・クエーサー』の手がモンスターを捉える。すると。

『『『キャアアァーーー！！！？』』』

　――ガブリ、と食らいついた。

　突如として上がる女子生徒達の悲鳴。モンスターによるモンスターの補食シーンなど、見ていて気持ちのいいものではない。

　しかしそんなこと知ったこっちゃないとばかりに地球外生命体は餌（クリッター）を食べ終えていた。口の周りに滴る赤い液体がなんなのか、口に出せる者はいない。

「ウェッ……く、クエーサーの効果発動。こいつが倒したモンスターのレベル分、レベルをアップする。『クリッター』のレベルは３、よってレベルは１０になり、レベルが上がったことにより攻撃力も上昇する（ＡＴＫ２１００　↓　３０００）」

　思わず昼食を戻しそうになるのを堪える。気持ちはみんな同じなんだ、と自分に言い聞かせなんとか持ち直した。途中デュエルリングから出て行った人がいたようだが気のせいだろう。

「攻撃力３０００とか、マジかよ……。オレは『クリッター』の効果で、攻撃力１４００の『キラー・トマト』を手札に加える」

「俺はターンエンドだ。そしてこの瞬間、三ターン経過した『魔のデッキ破壊ウイルス』の効果は消える」

いくら変わったデッキを推すといっても、流石にピーピングされっぱなしというのは良い気はしない。効果が消えたことにより条件はほぼ五分。モンスターがいる分、俺の方が有利と言っていいだろう。

「オレのターン、ドロー！　『強欲な壺』を発動し、二枚ドローする。そして『キラー・トマト』（ＡＴＫ１１００）を守備表示で召喚して、さらにカードを一枚伏せる。ターンエンドだ」

『キラー・トマト』を言えば、竜剛院や他数名が使う『仮面竜』と同じリクルートモンスター。こちらにはモンスターはクエーサー一匹しかいないし、次に繋げるには適したモンスターだろう。

「俺のターン、ドロー！　俺は『天よりの宝札』を発動。互いのプレイヤーは手札が六枚になるようにドローする」

相手に引かせてしまうのは悪手だが、俺の手札も少ない。これで少しでも手を進められれば……。

「（……て、このカードは）」

手札に来たのは、つい先ほどドローパンで手に入れたカード。自室にあったカードを組み合わせると面白いと思い、急遽入れたものだ。

しかもフィールドには、思い描いていた場面が整っている。なるほど、これは使わない手はないだろう。

「いくぞ、これが遅刻してまで作ったこのデッキの第二のエース！　これこそが、俺のデッキの最強のモンスターだ！」

「呆れてものも言えないな……」

「いや、本人はすごく楽しそうだよ？」

＾状況は相手のカードは三枚。『キラー・トマト』と伏せカード二枚だ。だがそれは大した問題ではない。

重要なのは、このモンスターがいること。

「今こそ力を解き放て！　召喚、『ザ・カリキュレーター』（ＡＴＫ？）！！」

細い機械の身体に　頭は液晶パネル。

パネルに３００という文字を表示させた電子戦士が姿を現した。

「また、攻撃力不明のモンスター……！」

「そう、こいつの攻撃力は決まっていない。なぜならこいつの攻撃力は、自分フィールド上のモンスターの合計レベルの三百倍だ！！」

３００という数値がめまぐるしく回転していく。

スロットのように激しく回り続けていた数値はやがて減速し、このデュエル中最高の攻撃力を表示して停止した。

「攻撃力……３６００、だと……？」

「これで驚いてもらっては困る。本当に面白いのはここからなんだからな」

「なに？」

俺の言葉に反応する闇野。
だがこれは始まりに過ぎない。本当の勝負は、ここからだ。

「気付かないか？　この二体の並んだ意味が」

『グリード・クエーサー』と『サ・カリキュレーター』。どちらも普通は見かけないカードだろう。癖が強く使いにくい上、元々の攻撃力も低いためレアリティも低い。
だからこそ気付かない。この二体の並んだ時の恐ろしさに。

「『グリード・クエーサー』は自分のレベルの数だけ攻撃力が上がり、さらに相手モンスターを倒すことでレベルを上げることができる。そして『ザ・カリキュレーター』は合計レベルの分攻撃力が上がる」

「レベル……攻撃力……上がる……倒して……ッ！　まさか！？」

「そう、クエーサーが敵を倒し続ける限り、二体の攻撃力は底なしに上がっていく！　まさに貪欲、まさに強欲（グリード）！！　これこそがこのデッキのモンスターコンボ、パワーグリードだ！！」

型に嵌まったこのカード達を生きながらえさせさえすれば、どこまで上がっていく。気がついたときには、あの神のカードの攻撃力すら超すだろう。

「ケイの奴、まさかこんな手を考えていたとは……！」

「低攻撃力モンスターを使わせたら敵無しだねー……」

「行くぞ！　食らい尽くせ『グリード・クエーサー』（ＡＴＫ３０００）！　ライフ・グリード！！」

再び食事を開始するクエーサー。今度は周囲の生徒も惨劇を見る前に目を覆ったり顔を背けたりすることで、二次被害を回避できたようだ。

当の本人（グリード・クエーサー）は食事が終わったようで、呑気に口の周りの食べかすを舌で舐めている。やけに赤かったり薄かったりする汁が気になる。

「この攻撃でクエーサーのレベルは上がり、攻撃力も跳ね上がる！（ＡＴＫ３０００　↓　４２００）」

あの神のカード、『オベリスクの巨神兵』の攻撃力を上回ったことで、にわかにざわついていた生徒達も本格的にざわめきだしていた。普段のデュエルでも、こんな攻撃力は亮の『サイバー・エンド・ドラゴン』くらいでしか見たことがないだろう。

「こんの化け物が……俺は『キラー・トマト』も効果で、再び『キラー・トマト』（ＡＴＫ１４００）を特殊召喚する！」

「ならば追撃だ！　行け『ザ・カリキュレーター』（ＡＴＫ４８００）！」

全身から流れるように漏電させ、『キラー・トマト』に突進する。電磁エネルギーを集中させたであろう右手を大きく振りかぶり、トマトは破片を残さず爆散した。

「ぬがあああああ！！？」闇野ＬＩＦＥ４０００　↓　６００

カリキュレーターの攻撃で、互いのライフアドバンテージは逆転

した。油断はできないしするつもりもないが、この流れを途切らせるわけにはいかない。

「ぐぉ……だ、だが！　『キラー・トマト』の効果で『疫病狼』（ＡＴＫ１０００）を特殊召喚する！」

「俺は四枚のカードをセットして、ターンエンドだ！」

「オレの、ターン！　ドロー！」

相手のフィールドには、まだ使われていない伏せカードが二枚。モンスターは『疫病狼』のみ。手札は『天よりの宝札』で補充されているが、どう出てくるか。

「……早乙女」

「なんだ」

「オレはお前と決勝で戦うと知ってから、お前のデッキを研究し尽くした」

「……ほう？」

決勝で戦うことを知ってから、ということは、俺が素数を数えて落ちつこうとしていた時までずっと調べていたということか。

「そしてお前のデッキには、魔法・罠に関する無効化カードが入っていないことを突き止めた！　このデュエル、俺の勝ちだ！」

「随分大口叩くな。このデッキのエース二体を相手に、どう勝つと

いうんだ？」

方法はある。それこそ六枚も手札があれば何パターンでも対処できるだろう。

しかしそんなカードが都合良く来るだろうか？

そう思いたい俺だが、理解している。『天よりの宝札』を発動した時点で、負けるだろうという感覚はあったのだから。

「俺はモンスターをセットし、罠発動！　『死のデッキ破壊ウイルス』！！」

「「「なにいいい！？」」」

俺及び周囲の人間の悲痛な叫び――ではなく、驚きの声が響く。

一枚使ってきた時点で予想していなかったわけではないが、実際使われると……。

「効果は知ってるよな？　『疫病狼』を餌に、攻撃力１５００以上のテメェのモンスター、全破壊だ！！」

「させるか！　罠発動『亜空間物質転送装置』！　エンドフェイズまで『グリード・クエーサー』を除外する！」

浸食してくるウイルスを避け、次元の裂け目へと逃げ込むクエーサー。同時にカリキュレーターの攻撃力が、一気に低迷する。

「俺の場の合計レベルが下がったため、カリキュレーターの攻撃力も下がる――（ＡＴＫ４８００　↓　６００）。これでウイルスの効果は受けない！」

「チッ。若干の計算狂いはあったが、お前の手札は見せてもらう」

表示される手札は二枚。『魂を削る死霊』と『ギブ&テイク』。どちらも攻撃力１５００以上のモンスターカードではない以上、確認するだけに終わる。

「……ま、手札はオマケ程度だしな。俺は『死者蘇生』を発動。墓地から『疫病狼』（ＡＴＫ１０００）を蘇生させる。そして効果を発動し、攻撃力は倍の２０００だ！」

再三に渡りフィールドに現れる血色の悪い狼。若干いつもより呼吸が荒く思えるのは気のせいだろうか。

ダメージ計算としては、カリキュレーター６００に対して疫病狼の２０００で、その差は１４００となる。このまま受ければ、間違いなく負けるだろう。

だが俺には三枚の伏せカードが残っている。これを使えばこのターンは凌げるだろう。

「（……問題は、だ）」

あの残っている一枚の伏せカード。他の人には見えていないようだが、俺にははっきりと見えている。カードから立ち上る、黒い靄のようなものが。

先ほどから『死のデッキ破壊ウイルス』、『魔のデッキ破壊ウイルス』にも見えていたが、それはてっきりウイルスカードだからそういう仕様なのだろうと思っていた。だが、墓地で発動した『ＡＤチェンジャー』にもそれが見えていた。ということはウイルスカードの特長ではなく、もっと別のつながりを持ったカードであるという説が、もっとも有力だ。

そしてこのカード、凄まじく嫌な予感がする。

「いくぜえ！　食いちぎれ『疫病狼』（ＡＴＫ２０００）！！」

この攻撃を食らえば即負け。迷っている暇は、ない。

「ええいどうにでもなれ！　罠発動『メタル・リフレクト・スライム』！！」

開かれた罠から銀色の、チェスの兵士（ポーン）のような形をしたスライムが現れる。

「このスライムは守備力３０００の盾となり、俺の場に召喚される！　そしてこいつのレベルは１０！　よってカリキュレーターの攻撃力は３０００アップするだ！（ＡＴＫ６００　→　３６００）」

周囲の生徒たちから「おお……！」だの「流石ブルー……」だのといろんな声が聞こえる。

だが、まだ終わりじゃない。この際出し惜しみはするべきじゃない。

「さらに二枚の『メタル・リフレクト・スライム』をオープン！　追加召喚されたことにより、攻撃力がさらに上昇する！」

表示される数値が瞬く間に上がり、９６００を表示してようやく停止した。

だが、闇野は焦らない。余裕の笑みすら見える。

「言っただろう？　早乙女」

ゆっくりとデュエルディスクに手を伸ばし、最後の伏せカードを発動させる。

「俺の勝ちだってな！　最後の罠、『闇のデッキ破壊ウイルス』を発動させる！！」

「「「はあああぁぁぁ！！？」」」

何人もの声が重なる。それはレッド、イエロー、ブルーを問わず、平等に上がった。

「亮。僕の記憶が正しければ、あのカードの発動条件は攻撃力２５００以上の闇属性モンスターを生け贄にすることだったと思うんだけど……」

「今の闇野の場には、対象とするモンスターがいない。そう言いたいのだろうが……」

発動と同時に、裏側表示のモンスターがゆっくりと表側になる。長い首に角張った身体。無機質な目と背中の巨大砲台が特徴的な、機械の竜。

「……生け贄とするモンスターは、裏表を問わない。そして、『可変機獣ガンナードラゴン』は、このカードと抜群のシナジーを誇る」

「シナジー？」

訝しげに吹雪が聞くが、言葉を引き継いだのは目の前の対戦相手、闇野だった。

「『可変機獣ガンナードラゴン』は妥協召喚できる代わりに、その攻撃力と守備力が半分に鳴るでメリットを持っている。けどなぁ、

裏側でセットしたガンナードラゴンの攻撃力は半減する前の、２８００を保ったまま。つまり、デッキ破壊ウイルスの基準を満たしているってわけだ！」

丁寧に解説をしてくれるのはありがたいが、それで現状が変わる訳でもなく、浸食したウイルスはスライム達を容赦なく破壊した。

「このウイルスの効果は魔法か罠のどちらかを選択し、全て破壊する。俺が選ぶのは当然罠。そしてスライムは罠モンスター。そいつらは全て消滅し、カリキュレーターの攻撃力も底辺まで下がる！これで最後だ！　食いつぶせ、イービルファング！！」

盾であったスライム達は全て消え、カリキュレーターへの道が拓ける。

迷うこと無く一直線に電子戦士へと向かった狼は、病魔に苛まれながらもなお強靭なアゴで一息に噛み砕いた。

「……ふぅ、参った」ケイＬＩＦＥ１２００　→　０

『勝者！　ラーイエローの闇野静治郎～ゥ！　健闘し合ったセニョ～ル達～ニ、盛大な拍手を送るノーネ！！』

一斉に沸き立つ観客の生徒達。最後はあっさりと負けてしまったが、それでも俺は満足だった。

自分で考えたデッキで、考えたコンボを遺憾なく発揮できたことに、悔いは無かった。

ふと前を見てみると、闇野がデュエルリングを降りようとしているのが見えた。

「（……そうだ、カードのこと）」

デュエル中に見た、あの謎の黒いカード。先に上げたもの以外にも、何枚か同様のカードがあった。間違いなく、正規の方法で手に入れたものではないだろう。

この大会の中で見た、数々の違和感を覚えるカード。その出所を知る手がかりになるやもしれない。

まだ対戦順のこない絢が調べると言っていたが、こちらもでも少しは調べるべきだろう。

「（……て、何一人で意気込んでいるんだ、俺は）」

一息ついて冷静になる。誰がどこでどのカードを手に入れようと、大した問題ではないというのに。

「残念だったね、ケイ」

不意に後ろから、吹雪の声がした。振り向くと案の定二人がおり、何故か缶ジュースを何本か持っていた。

「はい、ケイの分」

「ああ、サンキュ」

「しかし惜しかったな、特に最後の一ターンは」

缶コーヒーを受け取り、亮の残念がる声を聞きながらデュエルリングを降りて行く。

予定としては、この後二年の本選があり、亮の決勝は三年の後になる。それまで時間が空いてしまうが、まあなんとでもなるだろう。

「そういえば、優介達はどうした？」

「あの二人なら聞き込みらしい。どうやら謎のカードを持っていた生徒達に、手当り次第に聞き回っているようだ」

「熱心だよねぇ。お互いに恋人の前だし、ポイント稼ぎかな？」

「そう思えるお前を凄いと思う」

しかし、と考える。

優介、竜剛院の二人は生徒に聞き込み回っているというが、どこまで成果が上がるだろうか。

絢も、もうすぐ二年の本選ということで、これ以上調べることはできないだろう。

そして、俺はあの謎の黒いカードのことを知っている。亮と吹雪は同じものを見ていても気付かないのに、だ。いや、気付いているかもしれないが、口に出さないだけかもしれない。

いずれにせよ、あのカードを気にかけているのは俺だけだろう。

動かしていた、足がおもむろに止まる。

「……どうした、ケイ」

「悪い、亮、吹雪。用事を思い出した」

飲み干した缶コーヒーをゴミ箱に投げ入れる。ガランと耳障りな音を立て、その音を聞く間もなく俺はもと来た道を引き返し始める。

「ちょ、ちょっとケイ？」

「先に優介達と合流でもしててくれ。後で行く」

二人の返事を余所に、足の歩みは早まっていく。
今なら、まだ間に合う。間に合わせてみせる。
自然と早くなる歩みに身を任せながら、俺の頭は大変な回転をしていた。

Ｓｉｄｅ：闇野

早乙女ケイ。あいつは変なやつだった。
オレがここデュエルアカデミアに入学してから、いろんなやつとデュエルしてきたが、反応は全て同じ、『不快』だった。
オレだって、みんなと楽しくデュエルしたいし、できれば仲良くなりたいとすら思ってる。だけど、オレとデュエルしたやつらは皆、オレのことを『邪道デュエリスト め』という目で見てきた。
わかっている。わかっていた。
苦労して出したモンスター、出そうとしていたモンスターを、直前で水の泡にされる苛立ち。それはなにごとにも変えがたいものなのだろう。
今までが今までだった。だから、これ以上そんなやつが増えないようにと、自分から距離を取ろうとした。
それでもデュエルがしたくて、この大会に参加した。理由なんて、気まぐれの他にない。
だからわかった。早乙女ケイは、変なやつだってことが。
皆が皆嫌ってきたこのデッキを、この戦術を貶すどころか、有りだとさえ言ってきやがった。
今までそんなやつはいなかった。いや、全くのゼロじゃない。その前にも一人いたが、それは教師だ。生徒であんなことを言ったのは、あいつが初めてだった。

「……ああっ、クソッ」

デュエルディスクからデッキを外して、何枚かのカードを引き抜く。

本選が始まる前に、ある教師に渡されたカード達。この大会で優勝したら、ブルーに昇格させるとまで言ってきた、権力のある人から渡された。

確かにこのカードのお陰でさっきの試合は勝てたが、どうしても腑に落ちない。

どうして、俺なんかにこんなレアカードを渡した？　いろんな生徒から嫌われている俺なんかに。

前も向かずに、カードばかり見ていたからだろうか。目の前に人がいるのに気付かず、案の定オレはぶつかってしまった。ついでに持っていたカードをバラまきながら。

「あ、すいませ……」

「見事でしたよ、闇野君」

背筋がぞわっとした。何故かなんてわからない。

それでもこの声を聞いた途端、俺の背筋に冷たいものが当てられたような感覚を覚えた。

「どうしましたかな？」

「え……あ、いえ、何でもありません。田中先生」

白いヒゲを整えた、色の抜けたサンタのような教師の田中先生だった。

ぶつかったのが先ほどまで頭の中にいた人物というだけあって、当然慌てた。

「す、すみません。今片付けます」

「ああ、その前に少しいいですかな？」

「はい？」

散らばったカードを拾おうとすると、それを制してくる。
そして懐から、なにやらカードの束、おそらくはデッキを取り出した。

「実は君には、次のデュエルではこのデッキを使ってもらいたいのです。よろしいかな？」

「え、あ、はぁ……」

急な要望に、気の抜けた返事を返してしまう。
いつまでも出させておくわけにもいかず、そのデッキを手に取り、確認する。
ふと、一枚のカードを見て、俺の手は止まった。

「（……？　この、カードは……）」

瞬間。世界が真っ白に染まった。
白い世界の中で走る稲光。めまぐるしく変わる周囲の風景。
矛盾する視界の中、オレの頭の中に語りかけてくる声があった。

「（……なんだ？　何を言っているんだ？）」

莫大なノイズのかかったそれは到底聞き取れるものではなく、ただオレの理性を削っていく。
朦朧とする視界の中、最後に映ったのは。

「ゆっくり休みなさい、闇野君。ゆっくりと、ゆっくりとね」

目を細めながら醜悪に嗤う、田中教諭の姿だった。

二十二／知略と計算　相手を尊敬する、それこそリスペクト！（後書き）

月「長い！」
　開口一番それですか！？
月「ワードで２５ページとか、長い以外の言葉で表せられますか？」
　……すいません。

【１．さて、主人公戦です】
月「見事に負けましたね」
　まぁ主人公勢がみんな勝ったら面白くないかなぁと思って。
月「誰が？」
　私だ。
月「どこのエセ神ですか」
　それはともかく、元々負けさせる予定だったからね、このデュエルは。
月「全力を出して負けたって感じですね」
　全力全開でも勝てない相手はいる。それを乗り越えた時が一番楽しいんだよ！
月「ちなみに作者はＴＦのＢＦを倒した時が一番盛り上がるそうです」
　特に除外！　除外でね！
月「だからリアル世界でデュエルしてくれる人がいなくなるんですよ」

【２．伏線のカード】
月「伏線になっていませんがね」
　何度でも言おう。伏線は分かりやすいくらいが丁度いい。
月「しかし最後攻撃力が異常なことになりましたね」

スライムを使えばあれくらいは普通じゃない？
月「クエーサーと合わせると無限上昇……うぷっ」
まさにみんなのトラウマ。今後クエーサーが出るたびにみんな思い出すことでしょう。
月「なんであんなカード作ったんですかペガサス氏は……」

【3．またもや暗躍の影……】
さすが長老！　最後を持っていくその姿に痺れない憧れないィ！
月「これでまた手駒が増えましたね」
今後彼等を待ち受ける悲痛な運命とは！？
月「はい、嘘ですよ。あと運命さんはもっと先ですからね」

【4．さあ、次回予告の時間だぜェ】
月「次回は……予告なし？」
その通り！　複数の道を辿れるように書いてみたよ！
月「今あるルートは……あーめんどい。さっさと絢先輩出しなさい」
それ君の願望でしょ！？
月「うるせーです。野郎はどうでもいいのでさっさと花を出しやがってください」
……まぁ、次回まで待ちなさいって。
月「チッ……」

二十三／陰謀と計略　見えざる手に招かれて（上）（前書き）

どうもお久しぶりです！　最近いつもにまして更新の遅くなった赫鎌です！

月「安定の前・後書き担当、月夜です」

……すいませんでした！！

月「そろそろ定型文になりつつありますね」

いえ、ほんとすいません……遅いですよね、反省します。

月「それより、なんですかタイトルの（上）って」

あー、うん。前デュエルパートと会話パートで分けるとか話したよね？

月「長くなるのを防ぐため、でしたっけ」

うん。今回がまさにそれ。ひとまずテストがてら、ね。

月「……ま、話が進めば文句ありません。私は、ですが」

グハ……で、では、二十三話どうぞ！

月「（下）は正午あたりに更新されますので、合わせてどうぞ」

二十三／陰謀と計略　見えざる手に招かれて（上）

ケイが闇野を追いかけ走り回っているときと同時刻、優介と真理はこれまでの対戦者に会えないことを疑問に思っていた。

各々が最初に決闘（デュエル）した生徒は既に帰ってしまったかとも思っていたが、直後に決闘した相手、たとえばケイの相手であった根脇などはまだ残っているのではないかと高をくくっていた。

だのにその彼等と一度も会うこと無く、ただ徒に時間だけが過ぎていった。

「優介さん。いくらなんでも、これはおかしくないですか？」

最初に異を唱えたのは真理だった。

「そうだね。いくら自分の出番が終わったからといっても、これだけ早々に帰ってしまうのは薄情すぎる」

彼等自身の感覚では、他のデュエリストの試合を見て学習しようという意欲がある。全ての生徒が彼等とは違うとしても、デュエリストである以上少なからず同様の意識は持つものである。

しかし、全てはその予想に反していた。

解散した直後から参加者を探し始め、食堂、観戦席、中庭、廊下、その他思い当たる限りの場所を回ってみても、誰もいなかった。

「とにかく、そろそろ二年生の本選が始まる時間だ。風見ヶ丘先輩が調べたことも聞きたいし、一度会場に戻ろう」

優介の言葉に真理は異論を唱えることもなく、二人はデュエルリ

ングへと向かい歩き始めた。
その遥か後方、複数の視線が二人の背を突き刺しているとも知らずに。

少しの時が流れ、デュエルリングでは生徒達により大いなる盛り上がりを見せていた。
というのも、現在彼等の目の前で行われているのはここデュエルアカデミアでも日常的となっている決闘（デュエル）、それも実力があったとはいえ実績の薄かった一年生とは違い、確かな実績をもった二年生による試合であったのだから盛り上がり方も桁違いだった。

「『ハーピィ・レディ三姉妹』（ＡＴＫ１９５０　↓　２７００）で『エビルナイト・ドラゴン』（ＡＴＫ２２５０）を攻撃！　トライアングル・Ｘ（エクスタシー）・スパーク！」

「く……、罠カード発動！」

「私はこのターン、『ハーピィ・レディ三姉妹』専用魔法カード、『トライアングル・Ｘ（エクスタシー）・スパーク』を発動しています。このカードは三姉妹の攻撃力を２７００にし、このターン相手の罠を無効とします！」

「なに！？　うわぁぁ！」ＬＩＦＥ２２００　↓　１７５０

「終わりです。『ハーピィズ・ペット竜』（２０００　↓　２３００）の攻撃！　ハーピィズ・ドラゴンブレス！！」

「わあぁぁぁぁ！！」ＬＩＦＥ　１７５０　↓　０

『勝者、シニョーラ風見ヶ丘！　健闘し合った互いの選手？ニ、拍手するノーネ！』

興奮冷めやらぬといった様子の拍手の中、絢は相手だった生徒に「ありがとうございました」と一言入れ、デュエルリングを降りた。降りた先には、優介と真理の姿があった。

「お疲れさまです。絢さん」

「ええ。中々危ないところでしたけどね」

飄々と返す絢を見て苦笑する真理の隣で、優介は難しい顔をしていた。

その様子に気付いたのか、絢も緩んだ顔を引き締めた。

「何か、わかってんですか？」

「……いえ、少し気になるところがあるだけです」

「気になるところ？」

疑問を上げる絢に、優介に代わり真理はこれまでの経緯の説明をした。対戦者に直接話を聞こうと考えたこと。対戦者を探していること。そして、その一人として見つからないこと。

話を聞き終えた絢は、しばしの逡巡の後口を開いた。

「ここで燻っていても埒があきませんね。私達だけで考えるよりも、一先ずみなさんと会いましょう」

情報の共有を欠いてはいけないという絢の考えから、三人はデュエルリングを後にして歩き出した。しかし、数分もしないうちに変化は訪れた。

ピピピピピ、と真理のＰＤＡが鳴った。電話だ。

映し出されたディスプレイからは、探し求めていた対戦者の一人、メイ・喜多姫の番号が映し出されていた。

全く足取りの掴めなかった対戦相手が直接電話をかけてきた。これを好機と取った真理はすぐにＰＤＡを開き通話ボタンを押した。

『真理さん？　ごきげんよう』

「喜多姫さん？　あの、今どこですか？」

『あら、わたくし達を探していたの？　奇遇ね、わたくしも貴女達を探していましたのよ』

この言葉に真理は、一瞬だけ困惑した。しかしそれもあくまで一瞬。すぐに頭を切り替えた。

「私達を探していたのなら丁度いいです。今から会えませんか？」

『構わなくてよ。そうね、今手が離せないから、女子寮まできていただける？　ああ、それと貴女の他に誰かいるかしら？』

「ゆ……藤原さんと、風見ヶ丘さんがいます」

思わずいつもの呼び方で読んでしまいそうになるのを改め、二人がいることを伝える。それを聞いた喜多姫はくすっ、と笑った。

『では二人にもご同行願いますわ。特に藤原さんには手伝っていた

だきたいことがありますの』

「……全く、やけに足の速いやつだな」

闇野を追っていたケイは思わず呟いた。

彼の者を追いかけて早数分。ケイが走っていることを考慮しても、とっくに追いついていなければならない。相手が走っていなければ、の話だが。

「……疲れた」

人間が全力疾走で走り続けられる時間はそう長くない。一刻も早く、と思い走り続けていたケイは軽く倦怠感を覚えていた。

そんな彼の前に、ベンチが見えた。日頃ならこのベンチに座り昼食を摂ったり軽くデュエルしたり、カードの交換なんかも行われていただろう。

しかし今のケイはダルい身体を動かしている。そんな人間の前にアカデミア特注の適度な弾力がセールスポイントな革ベンチがあれば、どうなるか。

「……ふー……」

結果は、ご覧通りである。

消耗した分、とまではいかずとも、再び走り回れるほどまで体力を回復させるつもりで、ベンチに座り込む。額からは一筋の汗が流れた。

「はー……ふー……」

火照った身体がポンプのように、肺から空気を押し出していく。新鮮な空気を胸一杯に吸い込み、ようやくケイは一息ついた。

「あいつ、本当にどこ行ったんだか……」

ケイの足は決して遅くはない。日頃から、優介を追いかける覆面集団との鬼ごっこを逃げ切っているあたり、むしろ速い方だと言えるだろう。

その足をもってしても追いつかない。これには、いい加減おかしいだろう。と冷えた頭が考えだした。

ふと、身体の体重を前の方に置いたはずみ。斜め向かいに見える脇道に積み上げられた段ボールの山が目に入った。

ガムテープがフタを固定しているあたり、人が入るには苦労するだろうな、などとおかしな事を考えて見ていると、その下に一枚のカードが見えた。

色からしてモンスターカードのようだ。未だ休息を求める身体を無理なく起こし、カードを拾った。埃をかぶっていないし、汚れてもいない。となれば、このカードは落とされたばかりなのだろう。

そのモンスターカードの絵柄を見ると、たちまちケイの表情に変化が訪れた。

「……『マインド・オン・エア』？」

それは先ほど、自分を苦しめたカード。まさしく自分の探していた、闇野のカードだった。

カードのほとんどは、伝説のレアカードなどの一部を除き量産されている。このカードも古代エジプトに眠りし神の力を持つカード、

というわけでもなく、ごくごく平凡なノーマルカードだ。当然、使用しているのは闇野だけではない。しかしその効果ゆえ、使うものはこのデュエルアカデミアでも闇野ただ一人である。

無論ケイはそんなことを知るはずも無く、しかしこれは闇野のカードであると断定した。

理由なんて無い。考えるだけの余裕も無い。

しかしケイには、なぜかその答えを絶対だと感じていた。

「こんなところに、なぜ……」

歩きながらデッキを持っていたりしない限り、デッキからカードがこぼれることはそうそうあることではない。アカデミアの制服にはデッキ専用ポーチが付属されているため、普通はそこに入れて持ち運ぶ。固定するための金具もあるので、風で吹き飛んだり雨に晒されることもなく、こうしてカードがこぼれるということもない。

カードから顔を上げて、あたりを見回す。自分が先ほど座っていたベンチ以外には、隠れられそうな場所はない。段ボールの山もきちんと整理されているあたり、ついさっき動かして元通りにした、という可能性は低い。

「と、なれば……」

ケイの視線の先。そこには誰もおらず、錆びた鉄の扉があった。

カードをポケットに入れ、鉄の扉のノブに手をかける。

冷たく、鉄特有の質感に、全身の神経に微弱な電流が走る。

本当なら、この扉は開けてはいけないのかもしれない。普段自分たちが使っている、教室の全自動の扉とは違うこれは、開けること自体が間違いなのかもしれない。

しかし、とケイは思う。

そもそも、教室や購買から遠く離れたここに、闇野のカードがあ

ること自体変なのだ。今更、という気持ちもある。

「……よし」

ガチャン、という音ともに、ドアノブが回される。

長いこと使われていないような風貌の扉は、鍵がかかっていることも無ければ錆び付いていることもなく、実にスムーズにケイを迎え入れた。

ゆっくりと、中をうかがうように扉を開けていく。

「……」

何もアクションは起こらない。台所に潜む黒い流星Gが出てくることもなければ、食料を探し求めて迷い込んだネズミなどの動物も出てこない。

このままでは埒があかない。そう考えたケイは、一息に扉を開放した。

「……ここで、合っているんですよ、ね……？」

やや時は過ぎた頃、真理は優介、絢と共に指定された場所まできていた。女子寮というだけあって、優介はやや居心地悪そうに呟いた。

「先輩、何の用だろうね」

指定場所に着いたはいいものの、全く人の気配がしない。話し声も、動いてる音もない。風だけが無意味に、三人の髪を弄んでいた。

「……あら、本当に来てくださったのね」

三人の後ろ、たった今きた道から声がした。

「喜多姫さん。あの、それで用事というのは一体……」

「ふふふ。ねぇ、真理さん。こんな話を知っているかしら」

真理の問答に耳をかさず、現れた生徒、喜多姫は聞いた。

「全は一、一は全。これすなわち、等価交換の原則なり、という話を」

まるで小さい子にものを教えるように、喜多姫は真理に問いかけた。否、真理だけでなく、傍にいる優介、絢にも聞いているような口ぶりだ。

答えたのは、傍で聞いていた優介だった。

「大徳寺先生の授業で聞いた、錬金術におけるルールの一つ、ですね」

レッド量の寮監、大徳寺は変わった人物で、アカデミアで錬金術を講義していた。

一年生は全員が必修であり、例外無く優介達も講義を受けていた。もっとも受けるだけで、吹雪など寝ている生徒の方が大半であったが。

「その通りですわ。でもね、話はここからですの」

三人の疑問符を浮かべた顔を見渡しながら、喜多姫は謳うように語り始めた。

「全は一、一は全。その意味をわたくしはずっと理解できなかった。どうして個である一が全てで、全てのはずの全が個であるのか。大徳寺先生に教鞭を振るわれていた時は、デッキは全でカードは一と教えられましたわ。一であるカードが無ければ、全は存在しない。でもこの例えには矛盾がある。それは何か、お分かりかしら？」

「……一であるカードがなければ全であるデッキは存在しない。しかし、全であるデッキが存在しなくとも、一であるカードは存在する。そういうことですか？」

再び、優介が答える。

その答えに喜多姫は飛び跳ねんばかりに喜んだ。

「素晴らしい！　まさにその通りですわ！　そう、デッキは存在しなくともカードは存在する。ならば、このデッキの、全の意味とはなにか。それがわたくしにはずっと分からなかったの」

「……妙な言い回しですね。はっきりと言って頂きたいですが」

ずっと静観していた絢が、初めて口を開いた。

「……急くのね。慌てるなんとかは貰いが少ないという言葉を知っておられます？」

「生憎この後試合があるので、無駄な時間は割けないんですよ」

「あらあら、怖い顔して……。では、本題に入りましょう」

そういうと喜多姫はおもむろに右手を鳴らした。

すると寮の影から、草影から、あらゆるところから見慣れた生徒たちが集まりだした。

集まった生徒たちは全員、このトーナメントに参加していた対戦者だった。

ただ、誰一人としてその目は笑っていなかったが。

「……喜多姫先輩、これはどういうことですか」

自分たちを取り囲んだ周囲を見回して、優介が問いた。

その質問に対し、喜多姫は花の咲くような笑みで答える。

「はい。貴方達には、死んで頂きますわ」

二十三／陰謀と計略　見えざる手に招かれて（上）（後書き）

月「ｊｕ－８７の急降下爆撃もビックリの超展開ですね」
　いや、誰が分かるのそのネタ？
月「ヒントは政治。これで分かったら作者とは気が合いますね。合っても困るでしょうけど」
　あの重い機体で何百と爆撃するとか、それなんて胸熱。

【１．三人のターン！】
　しばらくスポットの当たっていなかった三人がスタートを切りました。
月「ああ、先輩……華麗に、苛烈に攻める姿もまた……」
　……このレズ娘め。
月「それにしても、何かに感づいている様子ですね」
　まあ、そうね。このメンツの中では一番の情報屋なわけだし。
月「次回、先輩の華麗なるデュエルが！」
　ありません。まだ先です。

【２．おや？　ケイのようすが……】
月「開けたらそこには過去のトラウマが……」
　千年パズルの迷宮じゃねーか！　てか城の上で命をかけたゲームする社長ぱねぇっす。
月「カードに人生かけてますからね、あの人は」
　結局社長の話しかしてないし……。

【３．え、ちょ、喜多姫さん？】
月「何戯れ言ぶっちゃけてんですかあの艶女（アデージョ）は」
　女の子がそんな言葉使っちゃいけません！？
月「というか先輩達何気にピンチじゃないですか」

いつの間にか囲まれてるとか王道だよね。異論は認める。
月「それにしても、随分と見覚えのある言葉が……」
ハガレンは最高のダークファンタジー。これも異論は認める。

【4．続きのないようについて】
まあ大体は今回の続きでデュエル回です。
月「まあどこまで期待できるか、なんて高が知れてますがね」
……本当にそうかな？
月「なんｄねすかその意味ありげな発言は」
次回の下編は、遊戯王ＳＳ界に（多分）波乱が起こる！
月「……多分とか言ってる時点で期待できませんね」

※お昼に続きが更新されます！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2402n/

遊戯王ＧＸ　†青い４人のアカデミア物語†

2011年12月13日05時52分発行